

もしあの英霊がカルデアに召喚されたら

ジョキングマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未だに人理修復に呼ばれていないサーヴァントが、もしカルデアに呼ばれていたら。そんなゆる〜く曖昧なお話。

目次

ライダー (Fake)	1
黒のキャスター	11
アルターエゴS	23
旧アーチャー	34
赤のライダー	42
キャスター (Fake)	52
番外：キャプテン・アルゴ	63
セイバー (Fake)	76
帝都キャスター	98
無所属のキャスター	119
アルターエゴM	141
旧ライダー	154
赤のアサシン	173
番外：鉄の黒騎士	195
帝都ランサー	218
黒のアーチャー	238
真アーチャー (fake)	257

ライダー (Fake)

——轟音が響く。

標高六千メートルを超える、人知れず並ぶ山脈の内部に造られた『人理継続保障機関カルデア』。最重要秘匿レベルに指定されているそこは科学的、魔術的防壁によって外来からの攻撃は概ね受けつけない。

もつとも、カルデアの外側にいた人類種が焼却された現状では、カルデアを襲撃する存在など見当たるはずがない。その元凶であるソロモンもまた、慢心か否か攻撃を仕掛けてくる気配すら見せない。

——ではこの轟音の出所は？

簡単な話だ。外からの攻撃でなければ、中からの攻撃だったということ。

「待て、ナイチンゲール！ これ以上暴れてはロマンの胃が捻れてしまう！」

アパッチ族の英雄、呪術師ジェロニモ。本来の名はまた別にあるが、死して英霊に昇華された彼は自らをそう名乗っている。

極めて私の強い、クセの塊みたいなサーヴァント達の中では飛び抜けて常識人として慕われるジェロニモ。そんな彼は今、褐色の顔色を青ざめさせ、アメリカの荒野で鍛えられた俊足をもって廊下を駆ける。

「待てません。あれは私にとっての生涯の天敵。命に代えても根絶すべき災厄の権化。例えマスターの命令に背こうとも、私はあれを滅却しなければならぬ！」

「君がマスターの命令を聞く時の方が珍しいだろうに……」

返答虚しく、早足持ちのジェロニモのさらに先を突つ走るバーサーカー、ナイチンゲールは片手に携えた拳銃を強く握りしめ、壁や天井に銃弾や拳を撃ち込む。

『狂化・EX』を保有する彼女は、カルデアに所属するサーヴァントの中でも一際強い私の強さと恐怖を振りまく天使の悪魔。昼間から酒をガバ飲みする輩には肝臓に悪いと銃弾を撃ち込み、風呂の概念が

ない時代の英霊には不潔と銃弾を撃ち込み、自らを母ちゃんと呼び畏怖する金髪親子をアルコール消毒液たっぷりのバケツへ突っ込ませる。

自身が様々な意味で敬遠されていることは、当人は知ったことではないし知るつもりもない。

そして知っても止めない。バーサーカーだし。

「ここには潜んでいないようですね」

「確認作業で備品を破壊して回るのはやめないか」

「おつ、ジェロニモの旦那。それと……うわっ、アンタかあ」

忌々しげに吐き捨てるナイチンゲールと嘆息するジェロニモの正面から、緑衣のアーチャー——義賊の弓兵ロビンフットが姿を見せ、ナイチンゲールの顔を見た途端に苦虫を噛み潰したような表情で立ち止まる。

高潔な精神や騎士道といったものとは真逆の、知謀を巡らし罠に落とし毒で弱らせる森の暗殺者。実際アサシンとしての適性も併せ持つが此度は省略。

なんとなしにこの組み合わせで現状を察知したロビンフットは、散らばった廊下の破片を避けながらジェロニモに囁きかける。

「まーたトンデモヘヴィな貴婦人に出くわしちまったなあ。そんで、ジェロニモの旦那がストッパーかけてたつてところですかい」

「見ての通り全く止められていないがね。これくらいのこと成し遂げられない己が不甲斐ない」

「いや、あんたは悪くねえよ。あんな暴走特急止められるのなんて、それこそ同じ暴走特急ぶつけるぐらいしか思いつかねえや」

「そこの緑の方。ちょうどよかった。悔しいことに人手が足りないのです。人類を救うために今すぐ手を貸しなさい。その前にしっかりと手を消毒して。その衣も放置しておけば菌の苗床になります。私に貸しなさい。殺菌します」

「いや、これ宝具ですから。勝手に剥ぎ取られても困るし洗濯されるとかシユールすぎるから！」

横からずいっと身を寄せてまくし立てるナイチンゲールに、ロビン

フットは後ずさりしながら『ノーフェイス・メイキング顔のない王』を庇う。

綺麗に整った顔立ちの彼女に迫られたら、普通ならば役得とも喜べよう。が、言葉に滲み出る狂気と有無を言わさぬ圧力が、その美貌を鋼鉄の般若と見紛うほどの威圧感と本能的な恐怖へと変える。

「ちなみに、一応聞けどよ」

「何でしょう。時間は有限です。今この瞬間にも病は侵行し、繁殖し、患者を蝕み続けるのです。一分一秒足りとも無駄にできません。ですので簡潔にお願いします」

「分かったからそれを向けるなつて」

ナイチンゲールは冷徹な表情のまま銃口を向ける。狂った彼女の判断基準では今すぐに撃鉄が落としかねない。

こりやかなわん、とロビンフットは慌てて言葉を続ける。

「あんたが今追っているのはなんなん——」

——瞬間、銃声。

「何でだよー」

「愚問に過ぎるわ。そんなことで時間を使わせないでくださいと言ったばかりです」

「せめて威嚇射撃にするとかな……」

アーチャー特有の目の良さがなければ、今頃ロビンフットの額には見事な鉛の黒子がめり込んでいただろう。ジエロニモがますますげんなりとした表情になる。

抗議の声をあげるロビンフットへ聞く耳持たず、硝煙を放つ銃口を吹き消しながらナイチンゲールは断固として言い放つ。

「——私が追いかけるべきものなど、無理をして出歩く患者と病以外に何があるというの？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼は——いや、彼女は——いや、それはあらゆるものに「乗って」き

た。

水に、風に、虫に、鼠に、鳥に、人に。太古の、それこそ生命という概念が生まれる瞬間にそれは誕生し、常に生命という存在を脅かし続けてきた。

それはどんな英霊よりも認知され、それはどんな反英霊よりも命を奪い、それはどんな存在よりも嫌悪されてきた。

無慈悲に、無秩序に、無差別に。その意思とは関係なく、そもそもその意思などなく、全ての命に対して等価値に「死」をもたらす死神。

ある時は「黒死病」と呼ばれた。ある時は「スペイン風邪」と呼ばれた。ある時は「不治の病」と呼ばれた。ある時は「災厄」と呼ばれた。

全ての「病」を一択に集め、それに無理矢理知識を与え、サーヴァントという殻に閉じ込めた存在。それがそれだった。

そののクラスはライダー。そのの名は、ペイルライダー。

英霊でも人でも、ましてや生命体や靈魂と定義できるかすら疑念を抱く存在。「死」そのものとされる疫病の騎兵という枠を押し付けられたそれは、まさに名前に違わぬ最凶のサーヴァントとして世界に顕現した。

「ギギ……ギ……」

——そう、少なくともカルデアにさえ召喚されなければ、ペイルライダーはあらゆる聖杯戦争で猛威を振るっていただろう。

しかしここは絶対英霊戦線^カ。そして、よりによって滞在するのは「病」の根絶を謳うナイチンゲール。

出会って（0.）2秒で即殺菌。「死」という明確な終わりが訪れないペイルライダーでさえ、ナイチンゲールとばったり出くわした時は機械的に、尚且つ迅速に姿をくらました。

——あれはまずい

結果、遠くから鳴り響く銃声と廊下が碎ける音。そして暴れ狂うナイチンゲールを取り抑えようと、何人かのサーヴァントが慌ただしく走り回る音がカルデアによく反響した。

「よう。そんな隅っこでじっとしてないで、こっちに来ないか？」

部屋の隅に広がる『暗がり』。一目でそう表せるペイルライダーは、円形の体を揺さぶって声のかけられた方へと向き直る。

簡素な、それでいてしつかりとした作りと柔らかなベッドに腰掛けるサーヴァント。凶骨の余りをナイフで削り、弓に仕立て上げている青年——逃げるペイルライダーを匿った部屋の主、アーラシユは快活な笑顔で手招きする。

「ソレハ、サキニ、マスターへ、ツカエテイタ、サーヴァント、トシテノ、メイレイカ」

複数の蟲が互いにせめぎ合うような、奇怪な音に近い声でペイルライダーは言葉を返す。

アーラシユは心外だとばかりに眉を顰めた。

「おいおい、サーヴァントに上も下もあるかよ。俺もお前も、今は等しくマスターのサーヴァントなんだ。そんな堅苦しいこと考えなくていいんだぜ」

「ジャア、イラナイ、アノ、サーヴァントカラ、スガタヲ、カクスタメ、ワタシヲ、マネキイレタ、アナタトハ、ソレダケ」

「そうか。んじゃ、無理に強いることでもないな。気がすむまでのんびりしていきな」

無機質に答え、ペイルライダーは染みのように部屋の隅に居座る。アーラシユもまた、人懐こい笑みと共にそれを受け入れた。

骨が削る音が、しばらく部屋を支配する。

「——アナタハ」

不意に、ペイルライダーが言葉を紡いだ。手に持っていたナイフを止め、アーラシユは視線を蠢く黒影に向ける。

「アナタハ、ワタシヲ、キラワナイ、シカシ、ワタシハ、アナタガ、ニガテダ、アノサーヴァントトハ、チガウ、ケド、ニガテ」

ペイルライダーは、全ての生命体から本質的に憎悪されるべき存在。身体を縛り、心を削り、命を蝕む災厄を誰が愛するというのだろうか。

ナイチンゲールがまさにその極例だろう。全て人間のために身を

粉にし、心を砕き、命を燃やしてまで医療学に光をもたらした彼女は、ペイルライダーとはどこをとっても正反対の関係と言える。

同時に、ペイルライダーはアーラシユに対しても似たような拒否反応を覚えていた。

聖杯から知識を与えられただけの「災厄」ペイルライダーは自我というものを持たない。誰からも好かれる好漢であろうと、誰もが戦慄する稀代の殺人鬼であろうと、ペイルライダーの前では等しく一個の生命体という判断基準で認識される。

そこに人格や趣向は考慮されず、故にそこから好意や拒絶を感じることはない。

ナイチンゲールに拒否反応を示したのは、彼女のその生きざまがそのままペイルライダーの存在否定に繋がるからである。決して彼女の凶暴な一面を嫌っていたわけではなく、彼女自体を「天敵」と判断したのためにペイルライダーは撤退したのだ。

「――アナタハ、ワタシニ、トラワレナイ」

つまり、アーラシユも彼女と同じく、ペイルライダーに対して何らかの「天敵」に近い素質を秘めているということを表していた。

「んー、こりやまいったな。出会って早々苦手と言われちゃ、俺としては何とも言えないしなあ」

困った顔を浮かべて顎をさするアーラシユ。不快感こそ抱いてないが、いきなり面と向かって苦手と告げられればさしもの兄貴肌も対応には難儀するだろう。

やがて、アーラシユは手にしていた作りかけの弓とナイフをベッドに置いてペイルライダーへと向き直る。

「ペイルライダー、だっけか。確かにお前さんは俺のことが苦手かもな。俺はアーラシユ・カマンガー。傷も負うことも病にかかることもなく散った男だ」

『頑健・EX』。それはアーラシユが傷を負わず、病で伏したことのない逸話から得たスキル。

故にアーラシユもまた、ペイルライダーとの相性は絶望的に悪かった。アーラシユの保有する規格外のスキルが、ペイルライダーの存在

そのものを寄せ付けないのだから。

「でも、俺もお前もマスターの力になりたいと思って契約を結んでい
る。その気持ちは一緒だろ？ 俺はこの弓で、お前はその力で。そこ
が違えることがない限り、俺はお前のことを仲間だと思っているぜ」
「……」

そして——だからこそ、アーラシユは最大限にペイルライダーと相
性が良かった。

災厄を振りまくペイルライダーに対して、隣人のような気兼ねなさ
で話しかけられるサーヴァントなど、アーラシユをおいて他に適任が
いようか。

「それに、ここに居住してるサーヴァント達が全員仲良しでハッ
ピーってわけじゃないしな！ いつもどこかで誰かと誰かがいざこ
ざ起こしてる。そんなのここじゃ、日常みたいなものだ」

マスターとロマンの胃は擦り切れてるだろうな、とアーラシユは悪
戯っぽく笑う。

「ワタシハ、マスターノ、ネガイデ、ウゴク、マスターガ、ソウアレト、
ノゾメバ、ワタシハ、ソレヲ、ジツコウスルダケ」
何をいまさらと、ペイルライダーは切り捨てる。

ペイルライダーには感情が搭載されていない。

向けられる嫌悪も不要。憐れみも不要。友愛も不要。

孤独を嘆きはしない。喜びに跳び上がることもしない。怒りに震
えることもない。淡々と、召喚したマスターに従うロボットのよう
な行動理念で動くだけだ。

気を利かせた大英雄アーラシユの寛容な言葉でさえ、ペイルライ
ダーにとっては何の意味ももたない。

しかし、とペイルライダーは続ける。

「アナタト、マスターガ、ワタシニ、ムケルソレ、ワタシハ、ソレヲ、
ドコカデ、シツテイル、キガスル」

知識を植え付けられただけの概念。

自己を持たない従僕。

存在するだけでイレギュラー。

他の聖杯戦争では呼ばれることすら怪しいこのサーヴァントは、知識という漆黒の海の中で淡く輝く一筋の光を想起する。

それは与えられた知識には載っていないかったもの。どこか、遠いどこかで知識の深海に迷い込んできた、か細い小魚のようなもの。

知識ではない違う何かに、それはこびりついている。自分に向けていたような気がするその光は弱く、柔らかで、しかし確かにペイルライダーという曖昧な存在を確固たるものとして成立させていた。

「なあ、ペイルライダー」

病とは無縁だった男。

だが彼自身は病にかからなくても、彼の知り合いは、親族は、何人かはきつと「病」によって命を落としているのだろう。

それでも、アーラシユは憎しみの感情を「病」に向けることなく、生まれたての赤ん坊に語り掛けるような穏やかな表情を浮かべる。

「お前は、自分は人間から嫌われてもいいとか、たぶんそんな感情すら沸き起こってないのかもしれない」

「……」

「でもマスターの、人理焼却の危機にこうして召喚に応じたってことはさ。」

お前は、少なくとも誰かのことを——」

「——近いですね。この部屋から漏れ出す空気からあれの気配を感じるような気がします」

短く放たれた言葉と共に、金属で構成された自動ドアが枯れ枝のように吹き飛ばされ、アーラシユの頬を掠める。

「えっ——」

「失礼します。緊急を要するのでこのような入室手段をとらせていただきました。ですが、人類史に新たな希望をもたらすためと思ってください。それと、今の一撃であなたに傷を負わせたこと、深く謝罪いたします。しかし、これも治療のため。あなたの命に代えてもあなた達を救いますので、しばしお待ちを」

冷徹に、鋼鉄にまくしたてながら姿を現す赤い看護師。引きずるよ
うに連れているのは紛れもなくサーヴァント。

右手にジェロニモ、左手にロビンフッド。攻守を逆転させたりはし
ないがずつと攻撃表示のデストロイナース。

サーヴァントが暴れても多少のことなら凹むことはない、と得意げ
に語っていたロマンの姿が脳裏に浮かぶ。彼ご自慢の耐物理防御ド
アは、中心をハンマーで叩きつけられたアルミホイル紙のような無残
な姿へと変わり果てていた。

「——!!」

隅っこにいたペイルライダーが、スライムのようにぐにやぐにやと
姿を激しくよじらせる。例えるならそう、漫画などでよく使用される
ギザギザした吹き出しのような形になっていた。

ペイルライダーには感情が搭載されていない。

……されていないはずなのだが。

「——病理発見、摘出開始!」

「!!!!」

「ちよ!・ここで暴れるな! 部屋がぶっこわ——あーっ! せつか
く作ってた弓がアー!!」

人理継続保障機関カルデア。

今日もマスターとロマンの胃に厳しい一日が始まる。

クラス：ライダー

真名：ペイルライダー

キャラクター紹介

風に乗り、水に乗り、鳥に乗り、人に乗り——。

それこそ世界を制覇したといってもいいその存在は、確かにライ
ダーのクラスに相応しいとも思えた。

だが、それよりも何よりも——。

人々がその『災厄』に与えた二つ名。疑似的な人格こそが——彼を
ライダーとして顕現させた最大の理由になるかもしれない。

パラメーター

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

小見出しマテリアル

実はペイルライダーに抵抗できるサーヴァントは探せば割といたりする。

アーラシユの他には、疫病としての側面を持つ「吸血鬼」と化した狂ヴラド三世。

病とは無縁の存在である鬼、酒吞童子&茨木童子。神や架空の存在にも効き目が弱まるか。

反英霊に堕ち、真正正銘の怪物となったメドゥーサ。しかもその血は万病を治し、死者をも蘇らせる効能付き。

(*個人の感想です)

黒のキャスター

語るまでもなく、カルデアは万年資源不足に陥っている。カルデア以外の世界が焼却されてしまった現状では、外部から資源の補給など期待できるはずがない。

この圧倒的な資源の供給不足を解消する苦肉の策として、カルデア最後のマスターとサーヴァント達があらゆる時代にレイシフトを敢行。レイシフト先の時代から必要な資源を回収するという方法で凌ぐことで難を逃れ続けている。

科学技術、魔術研究共に最新鋭を謳うカルデア。必然、要求される物資も最新に近いものが割合を占める。そのため、資源も技術も豊富な傾向にある近年へとレイシフトすることが多い。

とはいえ、それはあくまでカルデア単体としての必要資源のみを数える場合になる。ここへカルデアに滞在するサーヴァント達からの要求物資を加算すると、飛ぶ先の年代が戦乱の世から王政の世、果ては紀元前とあらゆる時代へのレイシフトを行わなければならない。

飾り気のないの仮面と青いマントで全身を隠した魔術師——アヴィケブロンもまた、そうした「あらゆる資源」を要求するサーヴァントの一人。

何せ、彼は哲学者であり魔術師。そして何より、ゴーレム製作に長けた魔術師だからだ。

「ゴーレムとは、ただの土人形などではない。むしろ僕の作るゴーレムは、『生』を得るために必ず『死ぬ』。ゴーレムとはすなわち、生命の創造である」

指を走らせ、緻密かつ複雑怪奇な術式を驚くべき早さで材料に刻み込んで行く。

ローマから掘り起こした濃度の高い魔力を含む土、オケアノスから汲み上げた新鮮な海水。歴史の中で焼却された名もなき羊皮紙。大気中の魔力を蓄えた天然の宝石。

現代では入手不可能な希少な資源が混ぜ込まれた人型の土人形に、

アヴィケブロンは一矢の躊躇いなく術式を書き込む。

「そもそも、僕は人手を欲してゴーレムを製作しているわけではない。質を落とした大量生産という行いは、生命に対する冒瀆に他ならないからだ」

刻まれた術式が怪しげに光を放ち、全く異なる材料で象られた土くれ全体を駆け巡る。

染み込むように術式が溶け込んだ瞬間、無機物だけで構成された指がピクリと動く。次いで足を、腰を、胸を、肩を、最後に首を稼働させ、ここにまた一つ、新たなゴーレムが誕生した。

「僕の目指す先は、ゴーレム製作の終着点——生命の創造の起源。すなわち、原初デナムの人間の模倣。失われた世界が復興した暁には、僕はそれで世界を楽園へと導かせてみせる」

ところで、とアヴィケブロンは振り向かず言葉が続ける。

「どうだい。借入した資料を元に造形を凝らしたが、第三者兼資料提供者である君の意見を聞きたい」

問われた男は、答えとばかりに不満げに鼻を鳴らした。

「——ああ、至極真つ当な返答だ。これで満足な出来栄え、と賛辞を投げられていたら君を絞め落とすところだった。僕はか弱いからゴーレムが、だけど」

「ハッ——。俺の方こそ、自分の作ったゴーレムだぞ文句あるか、などといらねエ傲慢張られたらその足をブチ抜こうと思ってたぜ。てめエ、魔術師にしちやア随分と謙遜的な野郎だな」

背後から返された言葉は嘲笑と脅迫。そりが合わなければ手を切る、と堂々と男は言つてのけた。

「まさか。僕が作ったゴーレムは絶対だ」

一転してアヴィケブロンは、己が積み重ねてきた生涯より満たされる自負をもって弁舌する。

「僕は常に、絶対という意識の元にゴーレムを手がける。しかし嘆かわしいことに、誕生したゴーレムは必ず何かしらの粗を抱えて生まれる」

今し方作成したゴーレムに焦点を当てる。ゴーレム魔術に精通し

た魔術師ならば、それがどれほど高度で精密に製造されたゴーレムなのか一目で理解し、驚嘆に目を見開くだろう。

しかし到達者であるアヴィケブロンからすれば、これは欠点を多く内包した「原初アダムの人間の模倣の模倣」の段階に過ぎない。

「だがそれが面白い。僕が作り出すゴーレムには、まだまだ先の段階へと進める余力と無駄が残されているという事実^にに他ならないからね」

カバラという魔術基盤を確立させ、魔術世界に大きな影響を与えた魔術師アヴィケブロン。

その本質は実に「魔術師らしい魔術師」と表現できる。一般的な魔術師が魔術の研鑽を生涯に費やすように、彼はカバラに——ゴーレム魔術にその生涯を費やした。

その過程で必要なことは文字通り何でもやってきた。例えそれが人道に反していたとしても、完璧なゴーレムを生み出すためならば一切の躊躇なしにそれを切り捨ててきたのだ。

「その粗が生まれる理由を分析し、さらに先の絶対を手がける。粗を、無駄を削り切り、絶対のその先——『完璧なる一』を降誕させる。原初の人間を目指すというのは、そういうことだ」

「なるほど、性根は確かに陰湿でくだらねエことに精を捧ぐ根暗どもと同じらしい」

男は嘲笑する。

アヴィケブロン的人生は男にはまるで関係のない話であり、そもそも魔術師の精神理論を理解できない者からすれば、それが狂人の戯言であることに変わりはない。

ただ一つ、アヴィケブロンに臨むもの。その依頼オーダーさえ実行してみせられるかどうか、男とアヴィケブロンを繋ぐ唯一の関係だった。

「じゃあ聞くがよ。俺がそのゴーレムの一番許せない部分を当ててみやがれ」

だから問い直す。ある一点において、自分とアヴィケブロンの意見が合致するのかわ。

「そんなこと決まっているだろう。」

——左睫毛だ」

しん、と空気が静まり返る。

男が戦慄く。震える左手は血管が浮かぶほど握り、勢いよくアヴィケブロンに突き出して——

「——さっすがアヴィケブロン氏——拙者と同じ場所に目をつけていたとは、いやはや御見逸れいたした！先生、いや、ドールマスターの名は伊達ではありませんな！」

耳をつんざくような喧しい笑い声をあげながら、気持ち悪い動きでアヴィケブロンと肩を組もうと擦り寄ってきた。

そんな気持ち悪いサーヴァント——『黒ひげ』エドワード・ティーチ——の腕を、アヴィケブロンはするりと躲して一步距離をとる。

口調が悪ぶってた理由？ そんなのカッコよく気取るために決まっているじゃない。

「僕は魔術師だ。別のキャスターに着せ替え人形趣味がいたはずだが。そいつにむかって呼んでやるといい」

「えー、だってBBAだし。それにああいうリカちゃん的な人形ごっこは拙者の趣味と合わないっていうか。勿論、着せ替えられてる側の金髪碧眼の美少女つ子であれば、拙者はモーマンタイですぞwww」
「そんなことより、君が目付いた修正点はそこだけか？」

「んー、拙者的には？ もちつと髪の毛のポリウム足しても許されると思うのですが？ あと頬骨を削ったりとかー、太もものあたりをキュツと引き締めたりとかー」

「……非常に不愉快な話だが、この手の類での君の鑑識眼は賞賛に値する。この僕と目に付いた箇所が同じというのが本当に嫌悪を抱くが」

「デユフフフフwwwもつと褒めてくだちいwwwあれ、でも今ナチュラリーに拙者デイスられてない？」

アヴィケブロンは、黒ひげから提供された参考資料——二次元美少女フィギュアと、それに瓜二つの作成したばかりのゴーレムの双方を交互に見比べる。

「等身大の人間型ゴーレムを造るのはそもそも尺度が違う、というのが実にキモだ。より美しさ、愛らしさを際立てるための多少の『盛り』は理解しているが」

「そこはツッコんではいけませんぞ先生。三次元のBBAが二次元を指して整形なぞすれば、見るに堪えないグレイが生まれてしまう次第」

「こういった特有の造形は一度正確に尺度を計測した方がいいな。顎のライン、妙にデカイ目、不自然な頭身のバランス。極めて非人間的な作りをしているにも関わらず、美を共存させているのが実に面白い」

「おうふ…なんだか現実を突きつけられる気分でござるなあ。萌えアニメを見ている横からむさいオツさん達が死にそうな顔で原画描いてる製作現場を見せられた気分というか」

生前アヴィケブロンは、当時では珍しい女性型ゴーレムを製造して身の回りの家事を任せていたことがあった。

別段彼がゴーレムに情欲を抱く特殊性癖というわけでない。人間嫌いだった彼が家事全般を任せるために戯れに製造したというだけの話だった。

それでも、せつかくなのだから美人な顔立ちにしてやろうという気は起きなくもない。日常で幾度と顔を合わせるならば、醜悪な面よりは美しく整った羨顔の方が心地よいというもの。

それが何の因果か全方位キモヲタ^黒と出会ってしまった——超大真面目に美少女型ゴーレムについて語り合う二人が出来上がった。しまった。

そんな折、開けっ放しだった部屋の入口から新たな声が響いた。

「失礼するわよー。先生いる？——って、何よこれ!？」

部屋を訪ねてきたのはアヴィケブロンと同じキャスタークラスのサーヴァント、真名エレナ・ヴラヴァツキー。

彼女は何故か開いていた部屋の扉に疑問を浮かべながら部屋を覗き込み、そして鎮座する美少女型ゴーレムに素っ頓狂な声をあげる。

「おほおーエレナ氏ではありませんせぬかwwww今ここにあるは、拙者と

先生の奇跡の合作。名付けて！『リアルにようこそマジ☆マリちゃんドール』作戦なりー!!」

「エレナか。今、非人間的な造形ながら愛らしさを生み出すこれに興味を持っていてね。すまないが、ゲマトリアの話はまた今度にしてくれないか」

一人勝手に盛り上がる黒ひげをよそに淡々と説明するアヴィケブロン。愕然とするエレナはそれにハツと我に返り、青ざめた顔でアヴィケブロンに詰め寄った。

「先生！ 貴方、あの悪性サーヴァントに何かされてしまったの!？」

「エ、エレナ氏？ まるで悪性腫瘍みたいな言い方をされるとさしもの拙者もブロークンマイハートなんですが？」

「悪性も何も、アンタとパラケルススとカエサルは問題しか起こさない三大トラブルメーカーじゃない！」

「失敬な！ あの二人と一緒にされるのは業腹ですぞ！ 拙者はいつも『良かれと思つて〜』という意志を秘めた上での行動。あ、でも漫画の方のトラブルなら拙者は大歓迎ですなwwww」

「自分が良かれと、が頭についての行動でしょ！」

イベントと称して常に何かやらかす、というか何か起きたらとりあえずこの三人に出頭を命じれば大体原因というオチトリオを知らないものなどカルデアに住む者はいない。

職員だって忘れない。エジソンは偉いライオンなんてことよりもそんなの常識。

ふと、アヴィケブロンがまじまじとエレナを見つめていた。観察されるような目線に気付いたエレナは困惑して言葉をかけようとする。

「ちようどいい、エレナ」

「――？」

「君、なかなか整った顔だろ？ 次の試作品のモデルになってくれないか」

「えっ」

唐突に、真面目な学者語りのままアヴィケブロンからさらなる爆弾が投げ込まれた。

「人形サイズのをゴーレムに合わせて寸法を測るよりは、こうして等身大を元にすれば効率的に修正が行える」

「ちよ、先生？」

「霊基を弄る他に身体が伸びる心配もない。その都度計測がブレることもないな。サーヴァントというのは手間が省けて助かる」

「その、モデルって、あの変なゴーレムの？」

「ああ、動かないでくれエレナ。これから君の身長や各種体毛の長さ、顔のバランスや手足の比率等を測る」

「エレナ氏の一分の一スケールフィギュア……ゴクリ」

「ゴクリじゃないわよ変態！ 先生も嬉々としてメジャー持ち出さなさいわー」

よくつてよ！ とは流石に言わずエレナは黒ひげの頭を本の角で殴る。

美少女に 殴られ昇天 ご褒美です、と辞世の句を残して床に転がった黒ひげのことは誰も気にかけない。

「何、別に溶かした蠟に浸して型をとるというわけじゃない」

「自分と同じ姿をしたゴーレムが量産されていくなんて気味が悪いでしよ」

「ここには同じ姿どころか本人が複数居住している。今更不思議に思わない」

「あー、それとこれとはまた違うような気がするんだけど……。ていうか最近また増えたわよね。全身血塗れ鎧とかすごい格好した剣士とかになつてたけど」

バーサーカーよりバーサーカーらしい風貌の串刺し公や隠せてない鎧のドラゴン娘とかが召喚されたことは記憶に新しい。

それを除いても英霊召喚のシステム上、同じ人間の別側面や「IF」の存在が複数人滞在していることはカルデアにとって珍しくもない光景。

むしろ、なんで本人達の間で仲良くできないことの方が不思議だが。胸の大ききの張り合いとかで円卓が割れるような事態など、史実よりも笑えない。

「とにもかくにも私は嫌。モデル依頼なら別の人にしてちょうだい。そんなの探せばいくらでもいるでしょ」

「僕が工房からわざわざ足を運んでまで他人を探すと思うのか？」
「堂々と言ったところでそれってどうなのよ……」

魔術師としては正論であるものの、あっけからんとした引きこもり宣言にエレナは嘆息する。

「失礼します」

その時、一声と共に新たなサーヴァントが現れる。思わぬ珍客にエレナとアヴィケブロンは目を丸くした。

「あら、貴女はナイチンゲール？ どうしたの、ばい菌ならそこに転がってるけど」

「床で睡眠をとるとは何事ですか。体が冷えれば体内の内臓器官の働きが弱くなり、冷え性などを発生させやすくなります。今すぐ起き上がりなさい」

珍客、ナイチンゲールは入室するや否や床に横たわる黒ひげに目をつけ、拳銃を引き抜いて彼のこめかみにグリグリ押し付ける。心なしか黒ひげの額に冷や汗が見えないこともない。

「あまり僕の部屋で乱暴ごことを起こして欲しくないのだが」

「黙りなさい。そもそも何ですかこの部屋は。雑多に置かれた土や水に鉄。古ぼけた紙きれの束。埃もたまっていますね。放置しておくところらは菌の温床になります。こちらでも消毒が必要のようですね。処置しましょう」

「それよりも、貴方が先生のところに来るなんて珍しいわね。何か用事？」

段々とズレていくナイチンゲールの暴走をエレナはさりげなくレールに戻す。ナイチンゲールも用事を思い出したらしく、強制殺菌コースを一旦打ち切る。

「そうでした。この近くをあのサーヴァントが通りませんでしたか？

全ての病の詰め合わせという私に対しての挑戦状のようなふざけた存在のサーヴァントです。一刻も早くあれを滅ぼさなければ、人類に明日はありません」

「ペイルライダーのことかしら。それだったら向こう側にすっごいスピードで駆けていったけど。でもマスターが召喚したサーヴァントを勝手に消滅させるのって……」

「知りません。マスターは私が説得します。では、私はこれで——」
一礼し、足早に立ち去ろうとするナイチンゲール。しかし、意外にもこれをアヴィケブロンが呼び止めた。

「——待ちたまえ」

ギョツと目を見開くエレナ。ギクリと体を震わせる黒ひげ。

煩わしそうにナイチンゲールは振り向く。その顔は不機嫌を全面に押し出した表情だ。

「何ですか。私はこれから治療に赴かねばなりません。先程誰かにも申しあげましたが、一分一秒たりとも無駄にできないのです。用があるなら手短にお願います」

撃鉄に指をかけて凄むナイチンゲール。彼女の引き金は軽い。返答次第では、とうとうか多分すぐにでも引き金を引くだろう。実際さつき通りすがりの無貌ぶぼうの王びんが餌食になった。

今にも爆発しそうな不発弾を前に、アヴィケブロンは悠然とした態度を崩さずに告げた。

「ふむ、良い。性格はさておき、君もまた美麗な顔立ちをしている。試作品のモデルとしての素質は十分に検討できるな」

「……貴方ねえ」

誰でもありか、とエレナは深く嘆息する。

意味がわからない、と眉を顰めるナイチンゲールに彼女はこれまでの経緯を説明した。

「——と、まあこんな感じなんだけど」

「私の等身大ゴーレム、ですか」

「そういうこと。同じ顔をした自分を見るのって変な感じするし、別に断つてもいいと思うけ——」

「承りましょう」

「ど——はい?」

耳がおかしくなったか、とエレナは思わず耳を疑う。

対してナイチンゲールは凜とした姿勢のまま、アヴィケブロンに向けていた銃をホルダーに戻した。

「私は具体的に何をすれば？ 断っておきますが、不衛生な方法を使用するのであれば賛同しかねます。その際は、先にきっちり洗浄させていただきます」

「君のサイズを測るだけだ。髪の毛の長さや睫毛、虹彩、爪の伸び具合と多少細かくチェックリストを作成することになるが」

「細かいことは面倒だ、などとは決して思いません。清潔な環境は徹底した気配りから。爪の先まで石鹸で洗うことを細かいと罵る馬鹿は、私が正すわ」

会話になっっているような、なっていないような。

それよりも、あのナイチンゲールがなぜこんなアホらしい企画に付き合う気を見せたのか。エレナとしては何よりもそこが気にかかった。

「ねえ、ナイチンゲール。その、結構乗り気だけど、なんで受けたの？

言っちゃあなんだけど、ただ自分と同じ姿のゴーレムを造られるだけなのよ？」

「貴方こそ何を言っているの？」

「えっ？」

「医療の現場とは常に人手が足りないもの。まして医療に携わる人間一人一人への負担は重大。そういう環境で誰か一人でも倒れば、それだけで何十人も患者が命を落とすわ。であるならば、こうして『私』という人員を増やすことができれば、今まで手の届かなかった治療にも迅速に駆け付けられることができるようになる。それはなんて素晴らしいことなのだろう、と思わない？」

その言葉を聞き、彼女の伝えたいことを咀嚼して理解し。

エレナは恐る恐る、整理した事実を口に出した。

「——それって、これからナイチンゲールが二人、三人と次々増えにくってこと？」

「人格の再現か？ ある程度ならば可能だ。彼女のように一点に思考が固定されたものならば、より容易く——」

その後、エレナと死に真似を解いた黒ひげ。

二人の英雄による必死の説得の結果『ナイチンゲールゴーレム量産化計画』という清潔地獄絵図は、せめてゴーレムを一体だけにすると
いう形でなんとか落ち着かせることに成功した。

こうして、密かにカルデアに忍び寄った最大の危機は、世界最強の
海賊によって人知れず救われたのであった。まる。

「自分の手柄みたいにされても困るんだけど？」

「おほっ!? 第四の壁の破壊は拙者だけに許された特権のはずでは
!？」

「マハトマの前には第四の壁など無力よー」

ちなみにこの後ナイチンゲールがペイルライダーを捕捉、大英雄を
巻き込みながらひと悶着を起こしていたことは言うまでもない。

クラス：キヤスター

真名：アヴィケブロン

キャラクター紹介

またの名を「ソロモン・イブン・ガビーロール」。

「ルネッサンス」の起点となった哲学者の一人にして、「ゴーレム魔
術」の頂点に立つ稀代の魔術師。

彼がヘブライ語の「受け取る」という単語から生み出した「カバラ」
という魔術基盤は、現代魔術の世界にも今尚深く浸透している。

世界の表にも裏にも多大な影響を与えた彼は、しかし虚弱体質であ
り極度の人間嫌いであったという。

パラメーター

筋力：E

耐久：E

敏捷：D

魔力：A

幸運：B

宝具：A+

小見出しマテリアル

ルネッサンス運動に携わった「哲学者」としての功績、カバラの創始者である「魔術師」としての功績、冷徹で自己完結気味ながら説明が達人な「詩人」としての顔。

気づけば「先生」と呼ばれ始めた。人間嫌いである当人からすれば迷惑極まりないだろうが。

カバラについて興味津々のエレナ他数名のキャスターや、美少女型ゴーレム作成同盟の黒ひげ。

ルネッサンス関連からマリーらフランス陣営と実に多種多様。知識人枠としても幾人かの英霊から興味を惹いている。

腕の立つ人形作りと勘違いされておかしな注文を送り付けられることも。頭が痛い。

アルターエゴS

「お待ちになって……愛しい人。ああ、シグルド！」

通路の天井が擦れる音が通過する。巨体を有するバーサーカー達への配慮も兼ねて以前より高く、広く改良したはずの通路の天井に何かがぶつかっているという事自体が既に異常事態を示している。

だが、次いで聞こえてきた柔らかかな、しかし物騒な一声で察しがつく者が多いだろう。

今頃、人類最後のマスターかネーデルラントの大英雄あたりが必死の形相で逃走しているに違いない。

ただ皆が皆、その一連の流れだけで理解できるとは限らない。当たり前の話だが、最近召喚されたばかりのサーヴァントはそれが顕著に浮き出る。

「何、今の？」

食堂で暇を潰そうと座していたメルトリリスもまた、そういった召喚されたばかりのサーヴァントだった。

ガリガリと硬質な何か削られる音が食堂入り口から轟き、通り過ぎる嵐のごとく遠ざかる轟音に視線を向ける。

「あー、あれだ。お嬢ちゃんは関わんない方がいい案件だな。愛は時に憎しみってな」

メルトリリスの疑問に答えたのは、向かい側の椅子に座るオリオン。無論その姿は、可愛いようで微妙に可愛くないぬいぐるみのクマのまま。

「馬鹿馬鹿しい。愛なんて、一方的に注いであげるだけのものでしょう？ 『愛』の代価として『愛』を求めること自体美しくないわ」

「うーん、俺からしたらそれもどうかと思うがなあ」

「あら、安心して。オリベえは見た目もまあまあイケるし、なんとなく気に入ってるから愛してあげてもいいわよ？」

「そりゃ嬉しいね、と普通なら喜ぶんだが……。なんでか、アンタと恋するのがすっげえ怖え。どこかの誰かさんと本質的に似てるつつう

か」

二人の出会いはいつい先刻。

時間を持って余していたメルトリリスが何気なく立ち寄った食堂で、美人に目が無いオリオンが軽い気持ちでナンパをかけたところから始まった。

だが、会話を交わしていくうちに「なんかやべえ」とクマ的な野生の本能が警鐘を鳴らしたのか、必要以上にメルトリリスに踏み込むことはせず、今に至る。名前も今は「オリベえ」で通すことにしている。「そうそう、聞いて。私ね、ついに念願のアレを見つけることに成功したの」

「念願つつつても、俺とアンタは今さつき会ったばかりの関係だろ？

でも気になるね。何を見つけたんだい？」

交わした言葉こそまだ足りないものの、メルトリリスというサーヴァントは基本的に冷静、しかし傲慢で加虐的な性格だということ多数の女性と交際を重ねてきたオリオンは見抜いていた。

そんな女が念願、と枕詞につけるほど欲していたものだ。

凡そ碌なものではないだろうと当たりをつけ、メルトリリスの次の言葉を待つ。

「フフ、聞いて驚きなさい。——人形技師よ！」

「——ワオ」

頭の中で予想していた、戦慄的なワードとは遥かにかげ離れたメルヘンチックな一言。

オリオンは思わず小豆のような目をさらに丸くする。あまり可愛くない獣のような瞳が丸見えになるほど。

そんな彼の心境を察知することもせず、メルトリリスは精錬された美しさを纏う顔立ちをくしやりと歪ませる。

「ここは娯楽が少なすぎるわ。書斎だのトレーニングルームだの召喚施設だの工房だの、『遊び』が全く見受けられない。馬鹿みたいに人理焼却に命張りすぎじゃない？ おまけに、暇だからどこの施設に顔出してみても、大抵変態が居座ってるんだもの」

「人理焼却に命張らなきゃいつ命張るんだよ。というか、流石に変

態って言い方はないんじゃないかな?」

「変態は変態よ。書齋にいけば『そこのお嬢さん！ 私の隣で睡眠不足で倒れ込んだアンデルセンを見て怪訝な顔を浮かべましたが、その心境をお聞かせください!』とか言ってきてイラつくのがいたり、トレーニングルームなんか扉を横切るだけで『アッセイ!』とか『筋肉!』とか『ゴールデン!』とか声から熱気出てるのが複数集まってる!」

「——変態とは言わんが、そりや同情するわ。強烈な奴ばつかにエンカウントするのは」

「でもねでもね、そんな堅苦しい世界の中で見つけたのよ。私のためだけの、人形に精通したサーヴァントを!」

「だから人形技師ってか。アンタ人形好きなんだな。結構可愛いところあるんじゃない?」

「ええ。だって人形ならば、いくら私が愛しても何も求めないもの。貴方も見てくれだけは人形っぽいし、十分アリだから」

「お、おう」

今まで愛してきた人形たちのことを脳裏に浮かべていたのか、頬は紅潮し蕩けた表情になるメルトリリス。

対して、とんだ捻くれラブを語られた上で自分も対象内と告げられたので内心冷や汗ドバドバのオリオン。

そのある意味一途と言える偏好地味な愛は、嫉妬に駆られて音もなく詰め寄ってくる恐ろしいものをやはり想起させる。

「そいつ、この前も日本製の繊細なフィギュアを土塊だけで見事にリアルスケールに仕立てあげてたわ。細かいところの粗がまだ目立つけど、これからの期待の新人人形技師よ」

「へえ、リアルスケール美少女フィギュアねえ。……ちよつと気になつてきた。今度俺にも紹介してくれよ」

「あら、貴方もフィギュアが好きなのね。いいわ、今度作ってもらいたいフィギュアの詳細を書きまとめたリストがあるからその時に連れてってあげる」

「サンキューー! グッフ、リアルスケールでの美少女フィギュアとき

たら、勿論あれやこれもリアルスケールで……」

どこかの人形技師改めてカバラの生みの親が背筋に寒気を覚えていたちようどその時、食堂入り口から新たなサーヴァントが姿を見せた。

「ん？ ああ、アタランテちゃんか」

「アタランテ？」

オリオンが口にした名前にメルトリリスもそのサーヴァントへ視線を移す。

自然が衣服として具現したような翠の衣、野生の動物特有の鋭い視線。時折ピクリと動く尾と獣耳は決して作り物ではないということを理解させる。

しかし、外見よりもその名前にメルトリリスは興味を持った。

アタランテ。そう呼ばれたサーヴァントの名が伝承に伝わるそれと一緒にならば――

「――ふふん」

「どうしたよ。いきなり勝ち誇ったような顔して。慎ましさで言えばアンタの方が――」

「無駄な贅肉を排した極限の造形美と言いなさい。それにそんなことで笑ったわけではないのよ？」

「あいででででで！ 出ちやう！ ワタ的な何かが出ちやう！」

一瞬にして柔らかかぬいぐるみを地面に叩き落とし、そのまま足の装甲でゴリゴリ摩り下ろしながらもメルトリリスは笑みを崩さない。

面白い玩具を見つけた。三日月のようにつり上がった口元は、嗜虐を隠しきれていない獰猛なそれだった。

奇声を上げてジタバタするオリオンから足先を引き抜き、メルトリリスは攻撃的な笑みのまま一言あげた。

「ねえ、その貴女」

キッチンから林檎を一つ手にとっていたアタランテは、突然かけられた声に反応して振り向く。

「何だ。見ない顔だが、最近呼ばれたサーヴァントか」

「ええ、そうなの。私の名前はメルトリリス」

「メルトリリス？ 悪いが初めて聞いた名前だ。私の名は——」

「——さつき聞いたわ。貴女、純潔の狩人アタランテなんですってね」
メルトリリスの表情は変わらない。いや、より一層愉悦に歪んで
いつている。

その不気味な光景にアタランテは思わず弓に手が伸びる。そのま
ま片指が弦に触れかけた時、その顔をますます困惑に染めた。

「——汝、何者だ？ いや、以前どこかであつたか？ 汝の気風に覚え
がある」

じつとメルトリリスの顔を見つめ、記憶の底を浚い洗う。

控えめに言つて「アブない」格好のメルトリリスの姿は、印象はど
うあれ記憶には残りやすい。それでもやはり、目の前の半痴女の顔は
記憶のどこを探しても該当しなかつた。

それでは同時に感じる、親愛に近い感情の出所が分からない。純潔
を誓うアタランテからすれば、むしろメルトリリスの格好は好ましく
ないもの。

「ええ。私も貴女は初対面よ。はじめまして。でもね、私の核はそう
ではないと告げている」

「——核？」

愉悦に微笑んでいたメルトリリスは高らかに宣告する。

己が一介のサーヴァント風情とは比にもならない、女神の神核を有
したハイ・サーヴァントたる自負を持つて。

「私はメルトリリス。私は女神アルターエゴ。レヴィアタン、サラス
ヴァティー。そして——アルテミスの神格が融け合ったハ
イ・サーヴァント」

故に、と間髪入れずに続けた。

「アタランテ！ 女神アルテミスの加護を受けし貴女は、私の庇護下
にあるということ。貴女の信仰は、そのまま私への忠誠。つまり、貴
女は私に逆らえない最高の玩具ってわけ。どう、理解しなさって？」

「——あつ……」

そんな息の抜けた声を同時に出したのは、オリオンとアタランテ。「アルテミス様の神核か……道理だ。色々と腑に落ちた」

「——えっ？ それだけ？」

すっとと抜け落ちた顔を浮かべるアタランテ。そのあまりにも淡泊すぎた反応に今度はメルトリリスが困惑した。

「えっと、私はアルテミス神なの。私は大理石の床で優雅に舞うプリマドンナ、貴女はそれに惜しめない拍手を送る信者なの。だから、なんかこう、もつと、『畏れ多い！』みたいな反応じゃないの？むしろ『バカな！ 信じられない！』とか言われた方がまだしっくりくるんだけど？」

「いや、汝——ああ、一応アルテミス様だから汝ではマズイか？」

「一応!?!」

——あれ、アタランテってアルテミスの従属じゃないの!?!

敬うべき存在、のはずなのだが。逆に親しみの込もった対応にいよいよメルトリリスは狼狽する。

「とにかく、貴女がアルテミス様の同一存在ということなら色々納得できる。どことなく漂うスイーツ感とか」

「スイーツ!?! 私が!?!」

アルテミスを信仰する者から語られる「アルテミスⅡスイーツ」方程式の衝撃にメルトリリスは崩れ落ちそうになる。プリマドンナを気取っていたらプリン扱いだった。

冷酷で、加虐で、要するにクールビューティを築いてきた自分とはあまりにも似つかわしくないフレーズだ。人形とかあいつが絡んだ場合も違うはず。きつと、多分、おそらく。

自己とスイーツをどうにか切り離そうと認識を改めているところ、視界の隅で小刻みに震えるオリオンが映った。

「どうしたのよオリベえ。プルプル震えて」

「——最悪だ！ サイツアクだ！ よりにもよって同じ過ち踏むとかバカか俺は!?!」

メルトリリスの言葉が聞こえてなかったのか、オリオンは頭を机にガンガンぶつけながら絶叫していた。その声にアタランテがヒョ

いつと顔を覗かせる。

「おや、そこにいるのはオリオンか」

「オ、オリオン？」

オリオン。現代では広義的な意味を持つが、原典を指す神代のオリオンとはギリシア神話に歌われる狩人の名。

海神ポセイドンの息子。稀代の弓術によるキオス島の獅子狩りを始めし、その時代に並ぶものなしとまで讃えられた狩人の天才。

そして好色を好む偉丈夫だった。幾多の恋に落ち、愛に走った。それが許される美男子だったのもまた事実。

——美男子。そう、美男子。

「やっべ、どうする……どうするよ俺！ あつ、でも同じ神核だったんならこれは浮気のうちに入らないんじゃないかね？」

ここにいてそれはどう見てもゆるキャラに近いクマ的な何かである。

人形を愛するメルトリリスでさえ愛玩としてならまだしも、これと情熱的な恋に発展する未来が全く想像できない。

「オリオンって、あのオリオン？」

「どのオリオンなのかそこまで聴くはないが、私の指すそれはギリシア一と名の知れ渡ったオリオンだ」

——オリオン要素とは。

今日一番で頭を抱える。アタランテが想像より遥かにドライな反応だったので少し傷ついた時とは別種の頭痛。色々と展開が予想外過ぎて脳が整理を受け付けない。

「オリオン殿。今日はお一人か？」

「なあ、アタランテちゃん。仮に浮気されるとして、その浮気相手が自分と同じ存在だったらアタランテちゃんのオツケー？」

「——なんの話か全く見えてこないが、同じ存在といつても浮気は浮気だろう。そも、アタランテ私にそれを問うのか？」

「やっぱりダメ？ じゃ、じゃあ俺はちよいと急用で——」

ところで、重ねて言及するがオリオンは女好きである。それはもう目につく美女に片っ端からコナかけにいくほどにナンパ好きだ。

そんなオリオンが「見た目だけで女を選ぶんじゃないぞ！」と後世のマスター、ひいては野郎どもに呼びかけてきた警告。

当然、オリオンにそれを痛感させた人物がいるわけで――

「ダーリンどこー?! ここねー!」

食堂が入り口が凄まじい突風と共に吹き飛ぶ。

「ヒエッ」

瞬間、飛び上がってアタランテの背後に隠れるクマ。

突然の展開に呆然と口を開くメルトリリスの視界へ、濛々と漂う煙から純白の衣装を纏った一人の美女がゆらりと現れた。

「ダーリン。どうして浮気するのー? 私、あれほど浮気はやめてっ
て言ったのに、なんで浮気しちゃうのー?」

「お、おとおおお落ちつけアルテミス!? これはほら、浮気とはまた違うから!」

「ハア!? ア、ア、アルテミス!」

オリオンの口から飛び出た驚愕の真名に、メルトリリスの頭はいよいよ噴火しそうな勢いだった。

アルテミス。ギリシア神話に伝わる女神であり、狩人と貞潔を司るもの。何よりメルトリリスを構成する核の一部を担うもの。

それがこうして目の前にいるのだ。瞳からハイライトを消しながらこちらにじり寄ってくる光景は、狩人の神と呼ばれるに相応しいと同時に貞潔どこいったと畏れを抱かずにはいられない。

「この子はな、お前の神核を持ってるんだよ。だから俺がこの子と話すのはお前と話してるのと同じことだ。だからこれは浮気じゃなくて、お前と会話してただけってことになるんだよ」

「んー? あら、ほんと。貴女、生意気にもいくつか持ってるみたいね」

じろりと見下ろされる女神の視線。同じ神核を有するはずのメルトリリスは、その視線に一瞬硬直する。

如何なる理由かは不明だが、サーヴァントの枠に収まって尚満ちる威光。神としての圧倒的な重圧。オリオンへの愛情――殺意?・

何より自身を威嚇する——双子の巨大山。

あざとい肉を削ぎ落とした美、と誇る自分を嘲笑うかのようなそのダイナマイトボディは、意識外のものとはいえメルトリリスの精神を圧迫するのに十分な存在感を放っていた。

「でも、そんなことは関係ないの！ 私はダーリンが他の人と話しているのが嫌だから探してただけだから！」

「お、同じ神核なら浮気じゃない理論は——」

「勿論否決ね」

「デスヨネー！」

——ああ、スイーツだこれ。

処女神とは何だったのかという色ボケ女神。これが自分に組み込まれた女神の一角と思うとますます頭痛が酷くなる。現状を把握することを放棄し、メルトリリスはクマが女神にしばかれる様を眺めることに達することにして——

「——その貴女」

無情。観客に回ることすら許さない新たな刺客が破壊された入り口に佇んでいた。

女性にしては高めの身長——を優に超える巨槍を片手に携えた、優艶とした雰囲気醸し出す女性。アルテミスとはまた違う幻想を内包する彼女の瞳は、一直線にメルトリリスへ向けられていた。

「な、何かしら」

ギギギと油の切れたブリキのようにゆっくりと振り向くメルトリリス。女性は妖艶な微笑みを絶やさなまま、嫺やかに歩みを近づけてきた。

「貴女、以前どこかでお会いしたことがありますか？」

「これが初対面、のはずだけど……」

「そう。そうですよね、私も初対面。知らない顔」

でも、と彼女は頬へ手を添える。

「どうしてかしら。貴女を見てると——こう、憎らしいような、愛らしいの。私の中の別の存在が、そう私に囁きかけてくるような」

悩ましげにため息を溢し、女性はメルトリリスの鼻先にまで歩んできた。

「見れば、片手の巨槍が先ほどに比べて明らかに大きくなっている。今にも天井を擦り、貫きかねんほどに巨大化していた。」

「だから、貴女のその潤んだ瞳で見つめられると——」

——ブリュンヒルデ。北欧神話に登場するワルキューレの一人。神罰によって一人の男を愛することになり、最期は燃え盛る焔の如く愛によって男を貫いた神代のサーヴァンツェント。

しかし、メルトリリスの前では別の意味合が生まれてくる。

ブリュンヒルデもまた、あるアルターエゴに組み込まれたサーヴァンツの一人であり——

「——私、困ります」

「ダーリン？ その子と何してたのか、色々と説明してね？」

そのアルターエゴは、メルトリリスに対して憎愛入り混じった感情を抱いていたことだった。

クラス：アルターエゴS

真名：メルトリリス

キャラクター紹介

いやがる相手を徹底的に蹴り倒せるなんて

正直、たまらないわ。

パラメーター

筋力：E

耐久：C

敏捷：A+

魔力：A

幸運：B

宝具：EX

小見出しマテリアル

カリギュラと一緒に置いておくと意外にも馬が合うらしい。

潜在的な何かがあるのかメドゥーサともよく話す。ワカメ死ね。だが妹属性が災いしてか上下姉様に目をつけられた。

同じような理由で「我の見惚れた女にコナをかけてきた男の親族のような気がする」などという訳の分からない因縁も吹っ掛けられた。ほとんど他人よねそれ。

逆にアルテミス本人に対しては苦手気味。長身、無駄肉、スイーツと自分の要素がどこにも感じられないとのこと。オリオンへは割と好意的。

複雑な関係からブリュンヒルデも避ける傾向にある。その節でジャンヌオルタとつながりができた。そして仲良く追いかけられる毎日。

旧アーチャー

英霊召喚システムで召喚される英霊は、有り体にいうと本物の英霊とは言い難い。世界の外側にあるとされる「英霊の座」に召し上げられた英雄達のコピー、と言い換えた方が正しいだろう。

サーヴァントというのは、そういう英雄達の一側面を抜き出し、決められた枠に当てはめた存在である。

例えば、ギリシャの大英雄ヘラクレス。現在ではバーサーカーとして現界している彼だが、その狂暴性はバーサーカーというカテゴリに当てはめられたことにより生前よりも増している。逆に三騎士のクラスで召喚されたとすれば、生前以上に高潔な精神が強調されて現界するだろう。

つまるところ、「いつ」、「どこで」、「なにをしていた」時の英霊を召喚するかは、召喚者側であるマスターの実力と運、加えて用意した触媒によって左右される。

「……………」

苦虫を噛み潰したかのような表情で互いに目を合わす騎士王アルトリア・ペンドラゴン、光の御子クー・フーリン。彼女らもまた、そういった別側面を多方に有する英雄の一角といえよう。

カルデア内を適当に歩き回るだけで一日一回は別側面の自分と出くわす。中には「IF」の世界からやってきた色物もいるが、それとしても鏡でもない自分を見るのはあまり良いものではない。

「フハハハ！ 実に痛快よな。あのハイエナランサーめが全身青タイツ。我が宿敵セイバーに至っては、此度の戦場ではか細き乙女ときた！ セイバーに纏わりついていたあの女も、このセイバーを前にして同じ態度をとれるのか試してみたくなるな」

響き通る高笑い。金髪紅眼。傲慢不敵を崩さない黄金のサーヴァント。

英雄王ギルガメッシュ。古代ウルクを収めた原初の王であり英雄。

そして聖杯戦争ではギルガメッシュ幾人かのサーヴァントと浅からぬ因縁を持つ厄介者。

———なのだが。

「……ランサー」

「……思うところはおなじだろうよ、セイバー。こう、なんだ？ 同じ顔がポンポン増えまくる俺らが言えた台詞じゃあねえんだが……」
片眉を吊り上げるクー・フリーン。ますます苦い顔を浮かべるアルトリア。

自然と、その口から漏れた言葉が重なった。

「———コイツ、本当にギルガメッシュか？」

姿形は確かにギルガメッシュと言える。彼の存在証明とも言える眩い黄金の鎧は、黒のライダージャケットを羽織っているため見受けられないが。

既にカルデアに滞在しているギルガメッシュと些か貌が違うところも許容はできる。色々と大人びた成長を遂げたアルトリアがいるあたり例外がないわけではない。

「世迷言を。我こそが最古の英雄、我こそが全てを統べし真の王。絶対強者たるギルガメッシュを名乗れる者など、最果てを探せど我以外におるまい！」

「……何だろう。この妙なテンションの高さは」

「ああ……。なんつーか、調子狂うな……」

唯我独尊がヒトガタになったような傲岸不遜の塊。この世全てを見下すような物言いがギルガメッシュ最大の特徴。傍観に徹し、先を知りながら語らず、自己の愉悦のためだけに活動する人類最古のジャイアニスト。

それが二人のよく知るギルガメッシュという人物像だった。

だが目の前ギルガメッシュはどうだ。相変わらず上からの言葉が目につくが、まるで別人かと疑うほどに知古のそれとかけ離れていた。

なんというか、暑苦しい。天上天下我以外格下な根本は変わらないものの、それ以上にグイグイ捲し立てる勢いが強い。

簡単に言えば、なんだかテンションが高いのだ。

「もとよりこの可能性上を視ていたが、しかして実物を眺めることの愉快さよ。この我とは無縁と毛ほども興味も抱いていなかったが、こうして見ると笑いが込み上げてたまらん！ フハハハハハ！」

「随分楽しそうに笑ってるなあ。笑い袋でも飲み込んだんじゃねえのか？」

「これが笑わずにいられるかランサー。あれより幾分、齢を重ねた故の趣向の変化かは知らぬが、そのピチピチ青タイツは反則だろう！

仮装大会なら一しきり笑い倒した後に突き落としてくれるところだ！」

「ほんとなら裸でいいんだよ裸で！ 色々アレな事情があったんだから仕方ねえだろ！」

アレな事情については深く言及することはない。そもそも裸でカエルデアをうろつこうものなら、即座にはっ倒されたうえで師匠に持ち帰りされる光景が容易に想像できる。

「ほう、中々話の分かる男ではないか。肉体こそ原初にして至高の武器。我も生前は地を駆け空を駆け、数多の怪物をこの拳で捻り潰した身だ。先も下半身をおおっ広げに晒した女とすれ違ったが……あれは置いておこう」

「こいつは意外だ。いつもは腕組んだまま宝具をバカスカ撃ってくるイケスカねえ戦法とってる割に、どうして粹な性格してるじゃねえか。度々重ねるがお前本当にギルガメッシュか？」

「くだい！ この我に一言を応えさせるな！」

「へいへい。そういうところは変わってねえな。むしろ安心したぜ」

太古の英霊同士通じ合うものがあつたのか、互いに不敵な笑みのまま睨み合う青と黄金のサーヴァント。

その感性が全く理解できないアルトリアから見れば、露出狂二人という認識のままに終わってしまうのだが。

すると、ギルガメッシュがふと思いついたかのように紅瞳の視線をクー・フリーンからアルトリアへと移す。

「ところでセイバーよ」

「何でしょう」

「——貴様、女が好きとかではないか？」

「ブフツ」

真顔のまま尋ねるギルガメツシュ。突然のあまり咽び、暫く咳き込んだ後、背中をクー・フリーンに摩られて持ち直したアルトリアが頬を真っ赤にしつつ猛反論した。

「な、な——何を馬鹿なことを言っているんですか貴方は！」

「いや何。我の知るセイバー『アーサー王』はしっかりと男であったのでな。生娘である貴様が同性を愛する性癖ならば、それが分岐点となり我の知るセイバーと別れたのかと明察したのだが」

「そんなわけないでしょう！ 私は、その……」

「んん？ ——ほほう」

一瞬間を置き、はっとしたギルガメツシュは瞳を細めてニヤニヤといやらしい笑みと変わる。

「な、何ですかその目つきは」

「我としたことが一瞬気付かなんだ。生娘というのは訂正しておく」

「……………ツ!!」

「落ち着けてセイバー！ こんなことでマスターの魔力吸い上げてちやキリねえだろ！」

「離してくださいランサー！ 多少違えども、やはり私はギルガメツシュとは相容れないんです！」

黄金の輝きを増し始めた聖剣を振り上げるアルトリアと、羽交い締めにしてどうにか宝具を抑え込むクー・フリーン。当のギルガメツシュはますます笑みを深めて喉の奥でくつくつと笑う。

「ククツ。激怒に駆られて我を睨むその姿もますますセイバーだ。そしてよく見れば見込みのある女でもある。彼女と出会うことになった我がいれば、貴様にも一声望むかもしれぬな」

「ギルガメツシュはお断りです」

「ハッ！ 強く出るではないかセイバー。それでこそ我が宿敵と認められた男の女よ！」

「その言い方はやめてください。微妙な気持ちになります」

「しつかしこのセイバーが男の世界ねえ。どんな奴だったんだ？」

「フツ。我に問いを投げかけるとはいい度胸だ。だがいいだろう！
此度は機嫌がいい」

クー・フリーンも——ひいてはカルデアの人々全員が「アーサー王は女性だった」という歴史とは違う事実を既に受け止めている。

流石にぼこじやか増えるアルトリアまでは計算外だったが、史実と違い実は女性だったという英霊はこのカルデアにおいて割と少ない事例だったりもする。中には例外の白百合の騎士などもいたりするのだが。

だが、この英雄王のいうところのセイバーとは、真に男性であるアルトリア——アーサー・ペンドラゴンであるらしい。

それが逆に新鮮な話だと、クー・フリーンはなんとも奇妙な感覚を抱いていた。

「何も難しい性格ではない。マスターに従順で誠実、気遣いができて時折毒舌をかます、むしろわかりやすいまでに少女漫画の主人公そのものだ」

「聞いている限りじゃたいして変わらねえ気もするな」

「マスターに付き従うその姿はまさに物語の騎士のような立ち位置だろうな。あやつの空気の読めぬ邪魔立てで何度空気を壊されたか……！ 思い返したらあやつへの怒りと彼女への愛情がぶり返してきたぞ！ この気持ち、まさしく愛だ！」

「うるせえ！ いきなり叫ぶなよ！」

アーサー、そしてそのマスターに思うところがあるのか途中からかかっていくエンジン。セイバーのマスターのことになるとどうもテンションが振り切れて一層面倒くさい。

長話をくどくど語られる前にいったん退散しようと二人が食堂の席を立った、その時だった。

「——先刻から耳障りな怪音を放つ不敬者は誰ぞ」

食堂入口から届いた底冷えした冷気を伴った一声。

アルトリアとクー・フリーンの顔が今日一番で苦々しく染まった。最悪だ。最悪すぎるだろう。直感スキルに頼らなくても非常に面倒な未来が見える。

「……やべえ。このタイミングで一番やべえのがきたぞ」

「ええ、あれとこれを会わせるのは非常にまずい。ランサー、貴方の奥義『ブーメランスアー』で時間稼ぎをお願いします」

「そんな奥義ねえよ！　つつかできても稼げるわけねえだろ！」

「どうした。何を狼狽している？　今から私の愛しき女について語るうというのに」

「その話はまた……ええ、いつか聞きますので。今はどこかに——」

だが時すでに遅し。コツ、と小気味よい足音が鳴る。

勢いよく食堂の扉が蹴り飛ばされ、その足音の持ち主が姿を現した。

三人の視界に飛び込んできたのは、紛うことなき黄金だった。

「誰の許可を得て私の耳にそれを聴かせた。その罪、本来であれば死をもって贖うべき大罪である！」

「——あつ」

——英雄王ギルガメッシュ。

一人だけでも多くの厄介事を振りまく愉悦極まりない超越者。

そんなギルガメッシュ同士が偶然の、万分の一にも満たない奇跡の確率をすり抜けて邂逅したのならば。

「——貴様！　その品のない鎧でギルガメッシュを語るとは迷惑千万！　私の気品に泥を塗る気か！　アヤカにでも知れ渡つたらどうしてくれる！」

「ええい、貴様こそ一人の雑種如きに現を抜かすとはギルガメッシュの名折れよ！　ギルガメッシュを騙るならばその思考を捨てて万物の観測者となるどころからやり直せ間抜けが！」

「愛に生きずに何が英雄か！ 観測者である前に我は英雄、そして一人の男。欲した女を求めて何が悪い！」

「そこは分かる。だが貴様は許せん！ 今ここで我が宝物庫の錆にしてくれる！」

その場に居合わせた———というか逃げ切れなかったアルトリアとクー・フリーンをも巻き込んだの四つ巴の争いが今まさに食堂で勃発するせんとした最中、レイシフトから帰ってきたマスターによってどうにか事なきを得た。

その後マスターが呟いた「英雄らしい振る舞いをした方が格好いいよね」という言葉により、二人の英雄王はどちらが真の英雄王らしいか見定めてもらうべく竜なり何なり狩り始めたそう。強制的にマスターを連行して。勿論ありがた迷惑である。

クラス：アーチャー

真名：ギルガメツシュ

キャラクター紹介

かつて世界の全てを収めた英雄王ギルガメツシュ。

アルトリアと対峙した彼とはまた違う別の存在。

もう一人の英雄王にして「原点」。

パラメーター

筋力：C

耐久：C

敏捷：B

魔力：A

幸運：B

宝具：EX

小見出しマテリアル

stay／night英雄王とは仲が悪い。品がない金ぴか鎧だけどどりあえず寄越せと剥ぎ取りにかかる。

子ギルからは「成長した本来の僕よりマシ」とさほど嫌われてない

模様。

AUOよりも好戦的な性格のためか、アキレウスや金時といった英雄色の強いサーヴァント達と波長が合う。

たまにトレーニンブルームにこもって手合わせしている。本人たちにとっては遊びの一環だが時折カルデアが揺れるのでクレーム殺到中。でも聞く耳持たない。

双剣、オカン属性とアーチャーエミヤとの相性自体は良い。ただエミヤ側が複雑な気分。というか第五次聖杯戦争参加者は皆複雑な気分。

赤のライダー

見渡す限り広がる荒れ果てた茶色の土地。狩れた草花、風化した骨々、生命の息吹の途絶えた不毛の土地。

砂煙が吹きすさぶ。その吹き方は、自然のそれにしては不自然な流れだった。

濛々と断続して立ち込める砂嵐。その発生源は、荒野を駆け抜ける一人の青年が巻き起こしていた。

駆ける。駆ける。駆ける。

一足ごとに地が削れ、一足ごとに煙が舞う。

地を這う彗星の如く疾走する青年は、内より溢れ出る闘争心を隠しもせず犬歯を？き出しにする。

右手に携えた一振りの槍を限界まで引き絞り、驚異的な加速度を存分に乘せて突き出した。

大岩さえも容易く砕いて見せるであろうそれは、しかし重厚な金属音と共に静止してしまう。

槍の進路上にそびえ立つ黄金の金属板。数多の傷を浮かび上げながら、それでも堅牢な砦を思わせるほどの存在感を放つ巨大な盾だった。

青年の一撃が止められた束の間、盾の内側から槍が伸び、返しの刺突が迫る。

誰が目にしてもそう読み取れる必殺の一撃。

それを呆気なく防御された青年は、しかし不敵な笑みのままに、俊足をもって一瞬で攻撃範囲から離脱してみせた。

「幾度となく打ち込めど、決して倒れるとは思えないその不屈。噂に違わぬ頑強さ、この身で味わえることに感謝しよう」

心の底から楽しそうに青年は語った。

強敵との対峙。血沸き肉躍る一戦。

英雄として大地に立つならば、これに心を震わせなくて何とする。「神域の槍裁き、臨機応変の体術。そして謳われる俊足さ。どれ一つ

とつても素晴らしい一撃！ 盾越しに、鍛え上げられた筋肉の重みを感じます！」

対して、フルフェイスの屈強な男も眼前の敵を称えた。

澆刺とする彼の心境を語るかのように、鉄兜の上部から噴き出す炎が一層燃焼する。

最高級の一撃を防いで尚、彼はその身を城塞としてより堅固に引き締める。

「護国の英雄つてのはまさにアンタみたいな男に相応しい呼び名だ。

——レオニダス」

「彼の大英雄に称賛されるとは誉れ高い限りです。——アキレウスさん」

瞬間、青年——アキレウスの足元が爆発する。

地面が碎ける勢いでの加速をつけ、突風となつてレオニダスに強襲を仕掛けた。

それをレオニダスは自身の盾で跳ね返そうと身を固め——

——直進してきた軌道が急速に捻じ曲がり、視界が追い付かないままに左から鉄槍が飛来した。

「むんぬうッ！」

視覚外からの一撃。思考よりも反射の行動で、レオニダスは盾を薙ぎ払った。

再び金属音が響く。

盾の向こう側から覗くアキレウスの表情は、ますます嬉しそうに輝いていた。

「これほどの俊足さも去ることながら、豹よりも柔軟な足捌きによる軌道修正力。筋肉だけではそれを会得できないことが誠にもどかしい……！」

「肉体だけで到達できるほど、^{アキレウス}駿足の名は軽くないンでな！」

槍を引き、盾を蹴り飛ばして離脱する。

その流れのまま一瞬で肉薄。距離をとったと思つた瞬間に至近距離まで詰め寄り、右側から槍を横薙いだ。

「ふんッ！」

認識阻害さえ引き起こす速さからの一撃を、レオニダスは手にした槍で迎え撃つ。薙ぎ払われる槍を己の槍で上に払い、盾のバツシュで追撃する。

重心をずらしてアキレウスはそれを躲し、バツシュによって僅かに開いた隙間を縫って蹴りを捻じ込む。

これにレオニダスは膝を蹴りあげて対応。アキレウスの蹴撃は向きを変えられ、屈強な横腹を掠める程度で終わった。

「隙あります！」

片足立ちとなったアキレウスへ、レオニダスのバツシュが再度繰り出される。

アキレウスの表情は、それでも揺るがない。

「隙なしだ！」

つま先に力を込め、片足立ちのままアキレウスが跳躍した。

押し寄せる盾を軽々と飛び越え、そのままレオニダスの頭上をも通過する。

曲芸染みた一つ跳び。しかしそれは、バツシュのために盾を前に突き出していたレオニダスにとって致命的な一手。

背後に回られるだけならば盾を薙ぎ払って対処できる。だが、その盾は今前面に伸びきったため次の動作に移るまで一瞬のタイムラグが生まれてしまう。槍ではそもそも防御に向かず、死角からの一撃とあつてはさらに不得手となってしまう。

そして何より、戦闘において生まれるその僅かな一瞬を、俊足の英雄が見逃す道理はない。

「もらったッ！」

背中に回り、一息も与えない突き。回避する暇も残さない。

防御面における全てが手を出せない背後の刺突。吸い込まれるように、鏃はレオニダスの背中へ伸びていく。

「まだまだあッ！」

雄たけびが上がった。

盾では間に合わず、槍では防ぎきれず、回避する時間もない。

ならば、とレオニダスは真紅のマントを握りしめて勢いよく一回転

した。

寸前まで背部に迫っていた槍は、そのままレオニダスのマントの回転に巻き込まれて絡めとられてしまう。

「おおッ!？」

槍を握っていたアキレウスも流れに引き寄せられてしまい、僅かによろけてしまった。

槍の回収はすぐさま諦め、槍から手放して態勢を立て直そうと地面を蹴る。

その直前、真横から巨大な金属板が唸りをあげて振るわれていた。

「ぬうええあッ!」

レオニダス自身が一回転したことにより、バツシユで前に伸ばされていた盾も回転する。

つまり、盾自体が硬質性の裏拳となつてアキレウスに牙を向いたのだ。

「——ッ!」

自慢の足をもつても離脱は間に合わないと判断し、救い上げるような旋風脚で盾の軌道を強引に逸らす。

空気を震わせる豪快なスイングは若草のような毛髪を数本削るだけとなった。

だが、波に乗ったレオニダスの猛攻はさらに加速していく。

「どっせいッ!」

高重量の盾が勢いよく回転したことにより遠心力が発生する。

生まれた遠心力をこれ幸いと力に変え、続けざまにそれを全て乗せたチャージを繰り出したのだ。

盾の一撃を払うために再び片足立ちとなったアキレウスに渾身の突進が迫りくる。はち切れんばかりの筋肉が生み出す脚力に盾からの遠心力が上乘せされたタツクルは、瞬間的な速度ではバツシユよりも遙かに重く、速い。

跳躍を選択肢から切り離し、即座に両腕を交差させて防御態勢に移る。ほぼ同時に、筋肉弾丸が交差した両腕に激突した。

「ぐおッ!」

「ぬうん！」

迫力に違わぬ一撃。ギリシャの戦場を駆け抜けた五体が骨まで痺れる衝撃。

吹っ飛びそうになる身体をアンカーのように降ろした両足で無理やり引き戻す。

木の葉のようにひらひらと舞うことなど、英雄の威信にかけて見せるわけにはいかない。

「うらあッー！」

鼻息が頬に当たるほど縮まったレオニダスの頭部へ頭突きで反撃する。

サーヴァントとなって硬質化した鉄兜越しで尚、レオニダスの視界が鈍痛と共にブレた。

「どうあー!？」

「いくぞオラァー！」

額から血を流していることなどおくびも気にせずアキレウスが左の一撃を脇腹へ叩き込んだ。

鋼鉄の鎧のさらに下に仕込まれる筋肉という鋼の肉体。二重の防壁をアキレウスの拳は容易に貫き、内臓にまで轟く一撃がレオニダスを襲った。

苦悶によるけるレオニダス。アキレウスは連続して右ストレートを鼻先へ叩き込もうと右腕を振りぬいた。

「ふんむッー！」

ぐらつく視界のまま負けじとレオニダスも頭突きで迎撃する。鋼鉄の硬さを貫く一撃が頭を襲うが、頭部の最も硬い箇所を鋼鉄越しに殴りつけたアキレウスも顔を歪める結果となる。

この距離で槍は具合が悪いと投げ捨て、丸太のような剛腕でアキレウスの腹部を殴打し返した。

あまりの威力にアキレウスの身体が宙に浮く。素手の攻撃でも威力が落ちていない。いや、もしかすれば素手の方が身体に重く残る一撃かもしれない。

胃の中のものが混ぜ繰り返される感覚。逆流する胃液。それらを

の広大な部屋だった。

「そこまで！ 双方共に健在。地に倒れる回数——双方ゼロ！
浴びせた攻撃の数——わからん！ とにかくこの手合わせ、引き分けッ！」

よく響く声でシミュレータールームに入ってきたのは片手に巨大なドリルの剣を担いだ偉丈夫——フェルグス・マック・ロイ。

豪快な笑い声をあげるフェルグスの言葉と同時に、拳を突き出して固まっていた二人はふらつきながら距離を離す。

「ぶふう……。実に心地よい一撃でした。これほどの重く速い拳、流石はアキレウぐふっ」

「へ、へへ……。ヘクトールのオツサンよりもよっぽど俺好みの男だぜアンタ。やっぱ闘いつてのはこうでなくっちゃな……」

おぼつかない足取りながらもフェルグスと合流する二人。その道中、アキレウスは地面に突き立てていた青銅の槍を力強く引き抜く。

「いえいえ。アキレウスさんの宙駆ける星の穂先がなければ、本来私など全く及ばない相手。それ込みでも鍛えられし力量と俊足さ、流石でございました」

宙駆ける星の穂先。それはアキレウスが本来保有するトネリコの槍をキーとする宝具。

足の速さに加えてアキレウスをギリシヤの大英雄に押し上げたもう一つの要因が、彼の母である女神テティスの寵愛による不死身の身体——勇者の不凋花である。

この宝具によりアキレウスは神性を帯びた攻撃以外では傷一つ負うことのない肉体を獲得している。

唯一、攻撃が通る部分としてアキレス腱の名の通り踵があるが、ドロマウス・コメテイス彗星走法によって戦場を高速で移動するアキレウスの踵を狙うことは、それこそ神業と呼ばれる技量と度胸が求められるだろう。

宙駆ける星の穂先は、アキレウスと対象者を特殊な空間に引き込んで「強制タイマン」を仕掛けられる代わりに、アンドレアス・アマラントス勇者の不凋花の効果をなくしてしまうのだ。

全てにおいて「平等」を強いられることとなるこの宝具の結界の中

では、アキレウス自身も神性を持たない攻撃で傷ついてしまう。しかし、そんなデメリットは英雄の鑑と称されるアキレウスにとって些細なものではない。

というより、こういう効果を持つ宝具を所持している時点で本人の気質が伺える。

「実戦ならともかく、せっかくの特訓に水差すようなもの持ち込みたくなかっただけさ。アンタとは正々堂々サシで闘り合いたいって思ってたしな。いつか、これを使わなくても俺の身体を貫いてくると信じてるぜ」

「それでもって、本当ならば時間も何もかも止まるといふ宝具をあの魔女に頼んでここのシミュレータと繋げるとはな。なんと豪快な男よ！ おかげでお前たちの熱き闘い、モニターを通してこのフェルグスがしかと見届けた。次は俺ともやらないか？」

「勿論だ。竜殺しジークフリート、施しの英雄カルナに授かりの英雄アルジュナ。狂戦士ベオウルフ、極東のサムライ佐々木小次郎。英雄王ギルガメッシュ……はどうも別人と聞いていたが。そして此度交えたスパルタ王レオニダス。皆、素晴らしき英傑だった。あのヘラクレスや呂布奉先がバーサーカーとして召喚されているのが実に口惜しい……」

列挙された名はいずれも大英雄と呼ばれるに相応しいサーヴァント達。彼ら一人で並のサーヴァント三人分の実力は兼ね備えている正真正銘の最強格の英霊。

一人農民がいるのはきつと気のせいだ。

「アルスターの大英雄クー・フリーン。まして、その剣術の師匠フェルグス・マック・ロイともなれば相手にとって不足なし！ ああ、借りてた特訓用の槍も拾わねえと」

「私も此度の闘いは良い経験になりました！ もっともつと筋肉を鍛えなくては……。そうだ！ これより三十分後、スパルタクスさんや金時さん達、そしてカルデアスタッフの方々と一緒にトレーニングを行う予定なのですが、よければお二人もご一緒にどうでしょうツツ！」

「いいねえ。三十分後と言わずに今すぐやりにいかないか？」

「なりません！ 優れた筋肉は優れた肉体に宿るもの。そして優れた肉体はしつかりとした休息を兼ね備えてこそ生まれるもの！ 私の計算では、これより十五分は身体を休めなくては質の良い筋肉はつきません」

「残りの十五分は？」

「もちろん、準備運動をかねての走り込みですツ！」

「ガツハツハツハツハ！ そいつはいいことを聞いた、杖持った方のクー・フリーンにでも聞かせてやろう。ところでレオニダス。盾を投げ捨てて殴り合いを始めた時は驚いたぞ。あれほど槍を捨てても盾は捨てるなど唄っていたらう」

「本来の戦場であれば無論。ですが、手合わせとはいえ今回は漢の闘いッ！ であれば、守るのではなくぶつけるものがあつたということです」

「ホントに最高だなアンタは！ ヘクトールのオツサンにタコできるくらい聞かせてやりたい台詞だ！」

肩を組み、高らかに笑いながらシミュレールームを去っていく男三人衆。

流した汗と交わした拳の分だけ深まる英雄の輪。着実と広がる筋肉の包囲網。

人理焼却が終わる時、果たしてマスターは筋肉包囲網から逃げ切ることができるのだろうか――。

クラス：ライダー

真名：アキレウス

キャラクター紹介

ヘラクレスと肩を並べるギリシャの大英雄。

「駿足のアキレウス」の名の通りの俊足、そして母である女神テティスの寵愛により不死身の肉体を持つ。

トロイア戦争においてアカイア側を勝利へと導いた。

しかし、友人を殺したヘクトールの遺体を引きずり回したことで彼

の弟パリスに踵と心臓を弓で射抜かれた。

パラメーター

筋力：B+

耐久：A

敏捷：A+

魔力：C

幸運：D

宝具：A+

小見出しマテリアル

良くも悪くも英雄らしい性格なので好き嫌いがはっきり分かれている。

英雄気質の強いサーヴァントとはだいたい相性がいい。逆に反英雄気質のサーヴァントとは気が合うことはないだろう。

特に酒吞童子や茨木童子といった「人間の敵」とは馴れ合うことはない。メドゥーサ、ゴルゴーンは複雑な事情なので何とも言えない。

文化人系サーヴァントともそりが合うことは難しい。マスターを戦わせて自分は部屋でピザ食べてたりする作家なんかは喝をいれなくなる。

英雄色を好む。なので結構女性サーヴァントや女性スタッフにコナをかけにいたり。

そして婦長や愛が重い（物理）などにちよっかいかけてひどい目にあったり。俊足の足に追いつく婦長マジ婦長。

キヤスター (Fake)

英霊に昇華される英雄達にもそれぞれ個人差というものがある。

英雄と称えられた人間ならば皆が高潔な精神、とは実際なかなかどうしてその通りにはならない。

サーヴァントの多くはその清い魂を宿す本物の英雄であることは確かだが、そうでない「人間らしい」英雄がいることもまた確か。

「ちい！ 駄目だ駄目だクソほども駄目だ！ これでは必要以上に読者へ『サイコレズ女』のイメージが付着してしまう！ 善人気取りの読者の自己満な庇護欲を引き出させるには、この殺人鬼の少女にもつと『可哀そう』を付加させなければ。だがしかし、『実は殺人鬼の少女はただ生まれた母を求めていただけだった』なんていう他人の手垢まみれの展開にするなど虫唾が走る！」

「おいおいおいおい。どうすりゃここから分裂させた百の人格をまとめあげりゃいいんだ？ ってかやっぱり百つて多すぎだろ！ ンなに役者がいたらストーリーにそぐわない行動する奴がボロボロ出てくるに決まってるじゃねえか！ あー面倒臭エ。無垢な幼女人格以外は殺し合つて、それでも世間の厳しさに耐え切れずに幼女人格も自殺つてラストじゃダメか？ —— 論外。とりあえずマスターに美味いもんでも頼むか」

「—— 哀れ、男は愚鈍で悔恨に満ちた罪を清算することもできず、しかし一人の少女のためと空っぽの丘を再び登る——。ふうむ、

この最後に観客は拍手を送るだろう。しかしそれは潤いのかけた義務的なもの。真に観客を男へ引き込ませるのには、このままではとても 味 気 ない。 『愚者は己を賢いと思うが、
but a wise man knows himself to be a fool.
賢者は己が愚かなことを知っている』両者が同一人物であるとするならば、彼らを繋ぐ鎖を一、いや二本ほど用意する必要があるですね」

サーヴァント各人にそれぞれ与えられるマイルーム。簡素の造りだが、一人用としては破格の広さを持つ一室。

今、その一室で三人の男たちが寄り集まって机に向かっていた。

床は投げ捨てられた原稿の海に沈み、各々が持参した資料や机が所狭しと設置された結果とんでもないすし詰め状態となってしまうているが、三人は露ほども気にしていない。

彼らの真名を知る者から見れば、乱雑に投げ捨てられた生原稿の一枚一枚が国宝級と評されてもおかしくないものなのに。

アンデルセン、シエイクスピア、そして——アレクサンドル・デュマ。

魔術師として現界した世界的に有名なこの作家たちこそ、まさに「英雄らしくない英霊」というカテゴリーに合致するサーヴァントだった。

武器の代わりに武器を持ち、武力ではなく文学で世界に変革をもたらしたその功績は新しい英雄の形であり、英霊として座に登録されても何らおかしいことはない。

ただ単に、彼らが前時代の英雄達とはあまりに価値観が違うというだけである。

高潔な精神なぞくそくらえ。紙とペンより重い物は辛い。肉体労働——断固反対。

「あ？ 男に用意する鎖なんて決まってるんだろ。女だよ、女。それも過去の女に縛られてる時の男ほど、愚かでわかりやすいつたらありやしない」

「それはあれか？ 生前に女共に溺れて猿のように過ごした経験からくるありがたいお言葉か？ 脳みその使い方もわからない阿呆共のように女に手を出してはこっぴどい目に合わされたそうじゃないか。経験者は語るとはこのことだな、骨身に染みるね」

「ハッ、童貞こじらせたシヨタ親父が何か言ってるぜ！ チェリーよりもおこちやまなミルクボーイくん。そんなんだからてめえの作品の女はメルヘン混じったトन्दる奴ばっかなんだよ！ そのくせどいつもメンタル脆くてポツクリ逝くところが実に生みの親譲りときた！」

「お静かに！ 各々の作品風刺を語り合うことは結構。しかし、我々には猶予が残されていません。『避ける』avoidedことができないものは、

抱擁してしまわなければならない』期限は今この瞬間にも迫り、そして必ず訪れる。であるならば、我々はそれを迎えるための用意を終えてなければいけないのです」

さて、そんな超々大物作家人たちが一室——具体的にはアンデルセンのマイルーム——にこぞって何故咆哮をあげていたか。

それは、デユマがカルデアに召喚されてからしばらく経った後のマスターの言動がきっかけだった。

『——作家人のサーヴァントの中で誰が一番人気なんだろう？』

変人・奇人・曲がり者ばかりが集う運命にある文化人サーヴァント。普段の言動からしてひねくれているので面倒だが、彼らには彼らなりのプライドというものがある。

自分の頭の中の妄想を文字に書き起こすばかりか、あまつさえそれを作品として世論に発表しているのだ。

当然その承認欲求は、常人のそれよりも遥かに強い。

そんな自己意識の高い彼らに競争をやらせた暁には——当然、強烈な皮肉やら風刺やら雑学やら入り混じった討論が三日三晩うんざりするほど続けられるわけである。

これではただの罵り合いにしかならないと思われたその時、ナーサリー・ライムの鶴の一声がそれを終わらせた。

『新しい物語を紡いで、マスターに読んでもらいましょう！』

この一言の結果、作家人サーヴァントによる頂上決戦の火蓋が切つて落とされた。

その割にはアンデルセンの部屋に残り二人が突撃していたり互いの原稿がそこら中に散乱して覗き見放題だったりするが。

もつとも、自分の魂を削って造り上げる半身とも呼べる作品に、他者の魂を混ぜ込むような愚行をとることはないだろう。

尚、あまりに文学的で難解なテーマの物語だとマスターの頭がパンクしてしまうので、三人はそれぞれ『カルデアに滞在しているマスターと契約したサーヴァント』を主軸にした物語を執筆している。

選出方法はくじ引きだった。誰が題材になったかはそれぞれ黙秘とする。

「ふん。こちとら締め切り一日前にならないと本気を出さない主義だぞ。というよりも、貴様らなぜ俺の部屋に乗り込んでくる！ それぞれ書斎があるだろバカ共！」

「来たくて来てるわけじゃねえよ。マスターには適当に強化した礼装でも押し付けてだらけてようとしてたのによ。突然聖女サマ二人が押し入ってきて、『何ですかこの部屋は！ 食べもののゴミやら紙束やらが散らかりすぎです！』なんてほざいて俺を叩き出しやがったんだ！」

「それはそれは。聖女——特にフランスの方は輪をかけて頭が固く、融通の利かないわりに行動は単純力押し。田舎娘らしい脳筋ぶりにさぞ苦勞されたことでしょう。ちなみに吾輩はアキレウス殿に質問を七回ほど問いかけたところキレさせてしまったので避難しております」

「よしわかった。やはり今すぐ出ていけ」

怪訝そうな表情でしっしつと退出を促すアンデルセン。対してデユマは紅と白で互い違いに染めた奇抜な歯をにったりと見せつけ、持ち込んだ資料の中から丁重に包装された紙袋を取り出した。

「ンなつれねえこといなよ。な？ ほれ、『モンテ・クリスト伯』の原稿の続き持ってきたからよ」

「……………そんなもの持参したところで何が変わると思っっているのか」

「ほう！ それがかの有名な『モンテ・クリスト伯』の生原稿ですか！ どれ、アンデルセンが興味ないと仰るならば吾輩めが——」

「おい、俺に提供される資料を横からかすめ取るつもりか。ええい、さっさとよこせ！」

ぬっと手を伸ばすシェイクスピアよりも早く、デユマからひったくるようにしてアンデルセンの小さな両腕が紙袋を抱え込む。

「ハハッ！ 落ち着けよ、発情して求めてくる女みたいにせがむなつて」

「言っておくが、俺は認めないからな！ 確かにこれは作品として読者を沸かせる傑作には違いないが、娯楽のために書いた娯楽なんぞ『書きたいもの』とはまた別の類だ！」

「そういう割にはしかと握りしめるその手の可愛いことよ！ おつといけね、シヨタ親父の手に可愛いなんて言っちゃまったよ。やべえ口が腐っちまう！ 俺の甘美な賞賛は楊貴妃やマリー・アントワネットみたいな愛でる女にしか向けちゃいけねえのに」

「なあに、口が腐っても脳と腕だけあれば我々作家は食っていけます。ところでデユマ、おひとつ質問してもよろしいですか」

「おつ、どうした？」

歯ぎしりしながら執筆活動に戻ったアンデルセンを無視し、物語に使えそうなことを片っ端から原稿に書きなぐっていたデユマが答える。

好奇で口元の吊り上がったシエイクスピアは、にんまりとした顔のまま尋ねた。

「モンテ・クリスト伯——いえ彼には既に会われましたかな？」

デユマの筆が、ピタリと止まった。

モンテ・クリスト伯。それは莫大な資産を有したイタリアの貴族。

だが、世間にはもう一つの真名と共に知れ渡っているだろう。

モンテ・クリスト
巖窟王エドモン・ダンテス。

無実の罪で捕らわれ、脱獄不可能の要塞と知られる監獄塔シャトー・ディフに収監された悲劇の男。決して挫けなかった鋼鉄の精神の末に脱獄し、自らを陥れた人たちの悉くを謀殺した復讐の権化。

恩讐の彼方を叫び、その半生を物語として後世に紡がれ、正当な復讐者と民衆から喝采された。

黒炎を宿し、世界を邪悪と侮蔑し、全てを捨て去りヒトですらなくなつた復讐鬼。故にあてがわれたクラスは例 エクストラクラス 外、アヴェンジャー 復讐者。

そんな彼も、紆余曲折を経てこのカルデアに召喚された。ぎこちない距離感ながら、彼は彼なりにマスターへの協力を惜しまない頼りになるサーヴァントに変わりはない。

そして、彼の物語の執筆者こそ、アレクサンドル・デユマだった。

「いいや、まだ会ってねえが？」

「それは偶然顔を合わせる機会がなかった、ということでしょうか？」
シエイクスピアの言葉にデユマの表情は変わらない。人を小ばかにしたような笑みのまま、にやにやとシエイクスピアを見返す。

「かくいう吾輩も、誠に光栄ながら元ネタの方々とお会いできてしまつた身でしてね。ええ、本当に。
『The worst is not, So long as we can say, This is the worst,』
『これが最悪だ』などと言えるうちは、まだ最悪ではない』とは申しましたが、いやはやあの時は肝が冷える心地でした」

「聖女サマだけならまだしも、弁舌デブやら古代パリコレ女とかもいたからな。あの時のアンタの弁明具合と言ったら滑稽そのものだった！ 胸のうちが空くという奴を経験したよ。あれをお題に一筆書きあげたら具合の良い二流コメディの出来上がりだ」

「吾輩まだ消滅したくなかったのでね！ さて話を戻しましょう。それで、デユマ。貴方が巖窟王に抱いた感想をお伺いしましょう」

「何でそんなこと聞くんだ？」

「無論！ 全ては物語のためです！」

そう、シエイクスピアとはこういう男なのだ。

作品こそが彼の全てであり、それ以外のものは彼にとって物語の舞台装置の一つに過ぎない。他人の心境など質の良い演出装置程度にしか考えられない楽天主義オプティミズムにして悲観主義ペシミズム。

他意があつて尋ねたのではない。「面白そう」だから尋ねたに過ぎないのである。

「——まあ、なんだ？ 確かに『巖窟王』は俺の著作だ。そう、俺のな」

ペンを置き、椅子ごと回って振り返ったデユマが口を開いた。

「ンでもって、善も悪もかなぐり捨てた復讐劇を読者に称えられ、ついには復讐の英雄？ なんつーのに昇華されてまで誕生したそいつもまた、紛れもなく巖窟王エドモン・ダンテスなんだろうよ。それはきつと間違いねえ」

言葉はそこで区切られる。

「だがな。その『巖窟王エドモン・ダンテス』って英霊は、俺が知って

るそれとはもう別人だろ。俺は作品を併合し書き直す————本物なんかより面白え贋作を生み出すことに関しちや、誰も右に行かせねえ自信がある。だが、そいつは贋作じゃねえ。であれば、俺とは何の関係もない存在だ。俺がわざわざ顔を見に行く必要があるか？」

『巖窟王』の物語は、実在したある男の一生だとも言われている。

あくまでそう言われているだけであって、実際にそのような人物が実在していたのかはデュマのみが知ることだ。そして彼が明確にそれを語ることはないだろう。

だが、仮にその男が実在していたとしたら。

デュマが知るその男は“A”であり、『巖窟王』の主役エドモン・ダンテスは“B”になる。

実在した人間と物語上の人間の関係など、どうあっても「A≠B」にしかない。

その“B”のさらに一部分だけを抽出し現界した英霊こそが「巖窟王エドモン・ダンテス」。それはデュマにとって“b”という認識でしかない。

デュマが英霊エドモンにかけてやる言葉などなかったのだ。彼は既に、作品という枠から飛び出した一体のサーヴァントなのだから。

「———それでも、礼ぐらいは言っちゃってやってもいいかねエ。お前のおかげで破滅した悪党なんかよりがっぽり稼げたってな！ ハハッ！」

「なるほど！ 非常に参考になります。吾輩も作品の題材にした者たちには、こき下ろしたことに多少の後ろめたさはあれどイコールで結びつくことはありません。聖女ジャンヌ・ダルクが如何に清廉な魂の持ち主だったとしても、吾輩の作品の中で彼女は魔女でしかないのです。そうでなければ作品が成り立ちませんからね！」

「参考も何も、お前はじめから分かつていて尋ねたんだろう？」

「当然ですアンデルセン。作家とはエンターテイナー。凡骨な民衆にもわかりやすく面白い、と実感できるものを書きあげる生き物。その作家が現実と幻想を一緒くたに捉えていては、演出も物語も中途半端なキメラしかありえないので！」

作品という新たな世界を創造し、そこへ観客を導いて一喜一憂を樂しませる。それが作家。

世界を創るなら、まずその設計図を仕上げなければならぬ。この人間はこの展開と、あらかじめ全てのものに要素を付加し、世界を構築する一つの歯車として組み込んでいく。

そうして形造られた役者たちは世界を構成する一部である以上、不変の存在でなければならぬ。与えられた役割を脱ぎ捨てて違う行動をとれば、エラーが起こって世界そのものが崩壊してしまうからだ。

故に、聖女ジャンヌ・ダルクが現実世界では如何に聖女であっても、「ヘンリー六世」という世界の中では永遠に魔女のままである。

「まあそれぬきでも顔を合わせたくはないな！ 俺はまだしも向こうが何言ってくるかわかったもんじゃねえからよ！」

「全くだ。人魚姫がサーヴァントとして召喚される日が来ないことを祈っておこう」

『It is a wise father that knows his own child.』
『父親というのは、自分の子どものことは分からないものだ』
貴女の理想の人魚姫とは全く違う人魚姫が召喚される日も近いかもしれませぬ！」

「勘弁してくれ。声無しなだけに実力行使で襲ってくる結末しか思い浮かばない」

エドモン・ダンテス以外にも史実とはズれた世界から召喚されたサーヴァントは少なからずいる。

自分たちと同じ複雑な心境に苦悩してほしいと、ガストン・ルルーがキャスタークラスで召喚されないか密かに楽しみにしている三人だった。

「——ああ！ ダメだ詰まった。よし、風呂にでも行くか。お前らはどうする？ まさかとは思うが断りなく入ってきておいて、主が部屋を開けようとして尚胡坐をかくつもりじゃないよな？」

「ああん？ お前がいなくなったらいびる奴いなくて退屈するに決まってるんだろ？ それに『巖窟王』の読者がいないと俺は寂しいなく！ ああ寂しい！」

「吾輩も一息つきたいところでした。この時間帯でしたら体育会系の方々は少ないはず。汗や筋肉にまみれることはないでしょう」

アンデルセンが椅子から立ち上がり、続くようにして二人も机から身体を離す。凝り固まった身体をほぐそうと思いいいに伸びをして、それぞれ原稿をまとめて紙袋に収納した。

「そうか。ではそんな諸君にこのアンデルセンが一ついい情報を提供してやろう。仕事が詰まった時はな、風呂上りに裸で散歩に限る。その清涼感といたら俺が人魚姫を書きあげた時の比ではないぞ」

「それは実に興味深い。爽快感に溢れていそうですな！

『How sweet the moonlight sleeps upon this bankなんてきれいに月明りがこの堤を照らしているんだろう！』熱気のことまった湯釜から解放され、この身一つで冷えた大氣を目一杯感じとることもまた一興です」

「おいおいそんなこと提案してもいいのか。多くの女を魅了してきた俺のオレが解放されちまったらカルデアで内乱が起こっちゃうぜ？

俺のベッドに潜り込みたい女サーヴァント達の姦しい争い勃発しちゃまうなあこりや！ 魅了スキルEXだからな、下のオレは！」

「……………その台詞を是非とも我ががマスターに聞かせてやりたいな。死んだ魚のような目でお前のことを憐れむに違いない……………いや、憐れむべきはあいつ自身か」

「ですな。特にあの三人組はいけない。小さな嘘も許されないとほ不便としか言い様がありませんな」

「嘘と言えば、デユマ。俺はまだ許していないからな！ 何がエイプリルフールだ。勝手に俺の名前騙ってツイートしやがって。おかげあの後トレンドに『アンデルセン』がランク入りしてきて無能のバカ共に突撃される始末だ！」

「別にいいじゃねえかよあれくらい！ つーかそれでもドロップキックはねえだろ!? 俺が足腰鍛えてなかったら普通に大怪我するつてーの！ お前の宝具もうドロップキックにしろよ！ おまけに当時トップシークレットだった俺の真名人質に取るとか卑怯！ じやなきやてめえなんかボッコボコにできたのによー！」

「ちなみにあの時アンデルセンに貴方の場所教えたのは吾輩です。面

白いことになりそうだったので！」

「シェイクスピアこの野郎……！」

互いに軽口減らず口を交わし続け、共に部屋を後にする作家陣三人衆。

ひどく曲がりくねった道ではあるが、彼らほど互いに互いを認めあう組み合わせはないのだろう。

この後本当に全裸でカルデアを散歩しようとしたところ、通路で偶然すれ違ったエミヤの「裸でうろつきなどすれば婦長に何されるか考えたのかね」という助言により断念せざるをえなかった。

クラス：キャスター

真名：アレクサンドル・デユマ

キャラクター紹介

大デユマとも。『三銃士』、『巖窟王』などを世に送り出した小説家。お調子者な性格でよく嘘やでたらめをつく。酒と女が好きで俗物まみれな「人間らしい」騒ぎの絶えない作家。

パラメーター（詳細不明）

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

小見出しマテリアル

文化人キャスターの例にもれず人付き合いは多くないが、他の作家二人とかと比べるとまだ世間に興味がある方。

それでも性格などが色々アレなのでやっぱり敬遠されがち。本人もわかってやっているので猶更質が悪い。

そのくせ『三銃士』など英雄譚が代表作のため変なのに好かれがち。「俺を英雄たちの王として称える物語を書け！」と迫られたりするが

船長なだけの英霊とかつまらないので却下だとか。

当然な話だが、美味しい飯が好き。口が寂しいといいもの書けないと屁理屈こねているが本当かどうか怪しいところ。

なので俵藤太を見かけるとよく集りにいく。藤太としては飯の美味さが分かるのはいいがピザとかは諦めてくれとのこと。

同じくらい女が好き。「ガワだけ見りや楽園だなここは！」の一言に全てが詰まっている。

番外：キャプテン・アルゴ

肌を突き刺す寒気と、死霧がロンドンを燦々と包み込む。

霧の都と名目こそ気品だが、その実態は新たなエネルギーに溺れた人間達への代償——石炭と二酸化硫黄にまみれたロンドンスモッグと呼ばれる殺人霧の蔓延だった。

時計塔の鐘が深夜を告げる。活気の消えた街中、硫黄の霧に隠された曇天。月明かりは埋もれ、申し訳程度に路道に設置された街灯が僅かに頼れる灯り。

その市民街中央から数キロ離れた先、一件の寂れた館がある。周辺には不自然なほどに何もなく、さりとて何故か違和感を感じさせない孤高の一件。

ロンドン市民が寝静まる最中、人の気配が消えたその廃館だけはいつもとは逆に物音を醸し出しているように思えた。

廃れた館の正体は、とある魔術師家系が管理していた巨大な実験場だった。

魔術の実験を館内で行い、その結果を記して次の実験へ移る。実験内容は多岐に渡ったようだが、魔術師特有の価値観からくる実験内容について語ることは後日とする。

そして何があったのかは不明だが、館の管理を行っていた魔術師家系の者達が突然消失した。

管理から外れた館は当然寂れ、廃れていった。多くの禁断の魔術実験資料を残しながら。

「——そっち、行ったよー！」

掛け声の後、破壊音が響く。

おおよそ日常とはかけ離れた異音。それは、この館内が既に日常ではなかったために鳴り響いたもの。

『目標、補足、近接攻撃、開始。「高速回転」起動』

無機的な音声と共に、巨大な本棚を蹴つて跳躍する機械人形。そのまま腰から上をコマのように回転させ、丸ノコで木材を切り落とすよ

うに上空から強襲をかける。

「あら、私の前で宙に飛び上がるなんて。それでは自ら照準に飛び込んだウミネコと同じですわ」

だが、相手が悪かった。それ以前に相手に対しての攻撃方法そのものが間違っていた。

乾いた発砲音が響く。

硝煙の匂いと共に、敵意剥き出しで襲ってきた機械人形オートマタは頭部の核を撃ち抜かれて床に転がった。

「アン、続けて二体。正面！」

白煙を吹き消し、自身の背丈ほどもあるマスケットを軽々と扱うグラマラスの女性。アン・ボニーと呼ばれる彼女に、さらなる追撃がふりかかる。

物言わぬ残骸と化したオートマタを踏み越え、同型の二機の爪がギリと光る。迫り来るオートマタ達にアンは手慣れた動作で銃口に弾丸を込め、照準を二機に合わせた。

再度、銃声。

だが、照準は二機のどちららに向けられていなかった。両者の中央、全くの虚空に合わせてしまったのだ。

これ幸いとオートマタは近接攻撃スキルを発動。そのままアンの柔肌を剥ごうと腕をしならせ――

女王に傳く僕の如く、アンの眼前でうつ伏せに事切れた。

「散弾をばい存知でなくて？ 私の扱う弾が一種類だけと思わないでくださいまし」

糸の切れた人形を睥睨し、次の弾丸を銃口に詰め込んで照準を覗き込む。

その彼女の死角で、一冊の厚い本がゆらりとはためく。ひとりでパラパラとページを展開し、内側に記された術式を展開。

そのままアンに対して炎の魔術を放とうと魔法陣を輝かせ――

背表紙から、真つ二つに両断されてしまった。

「アン。油断しないで、囲まれてる」

「カバーありがとう、メアリー」

意思を持つ魔本をカトラスで引き裂いた小柄の少女。アンの背中に並び立つ彼女はメアリー・リード。

アン&メアリーという最も有名な女海賊コンビが交戦している相手は、館の研究資料を侵入者から守るようにプログラミングされたオートマタの軍勢だった。

加えて、永年放置されたことにより術式が暴走した魔本からの妨害。都合二種類の敵エネミーに包囲され、背中合わせのまま二人は構える。

ダ・ヴィンチちゃんからの資材回収の任を受けて、マスターは十九世紀のロンドンにレイシフトしていた。その伴としてアン&メアリーの二人の他、マシユ・キリエライトを含め計体六機のサーヴァントが同行している。

彼女たちは資材回収のためにマスター達と別行動をとっていた。

そして書庫室へ足を延ばしたところ、運悪く館内の迎撃システムに引っかかってしまったようだ。

「メアリー、きますわ！」

赤色の魔本の群れが一斉に術式を展開する。

繰り出されたのは炎系の魔術。一冊一冊は一つの炎しか行使できないが、数が最初から多いのであれば話は別。膨大な量の魔本に比例した無数の火球が弾幕となって飛来する。

合図もなく二人は同時に散開。寸前まで二人がいた場所を炎の嵐が舐めとり、焼き焦がした。

カトラスが空を切り裂き、瞬く間に浮遊する魔本を切り捨てていく。背後からの援護射撃も合わさり、破竹の勢いで魔本とオートマタの軍勢の中を突き進む。

真横から爪を伸ばすオートマタを一閃。次なる得物へ目を光らせたと同時に、すつとんきような悲鳴が書庫室内に木霊した。

「うおうっ!? ほ、ほ、ほん!? 何しているんだお前ら! さっさとこいつらを全滅させないか!」

「……………あいつ、なんで来たんだろ」

「ほんと。まだ変態くろひげの方が戦えましてよ」

二人が一瞬視線を映した所に、一人の青年が複数体のオートマタに追われていた。

輝ける芒のような金髪。傲慢さがにじみ出る不遜な態度。

英雄間者イアソン。噂に名高いギリシャ神話『アルゴ号の冒険』物語に登場する英雄であり――

――単体の戦力としては驚くほど非力なサーヴァントだった。

◆◆◆◆◆

「くそう！ 相手がキャスタークラスだから私が赴いたというのに、いざ現地へ行けばあの機械人形の群ればかりじゃないか！ 観測室の奴らやマスターの目は節穴か!？」

「その声を荒げるでない。何事にも例外という事例はつきものだ。ギリシャという例外やら規格外やらに身を置いていたそなたなら、必然そうだったことには慣れていると思うが」

うってかわって食堂内。清廉さを纏う美貌を歪め、机に怒りをぶつけるイアソン。

激昂する彼を、偶々同席したカエサルがどうと窘める。

「それに肝心の資材の方は無事調達できたそうじゃないか。目的を達成できたのならばそれに越したことはないのかね」

「資材調達は結果でしかない。私が望んでいたのは過程の方だよカエサル。英霊イアソンが同行した、だからスムーズに任命を達成できた。こうでなければいけないんだ」

しかし、とイアソンは奥歯をかみ砕かんとばかりに歯ぎしりする。「ところがどうだ。現実には観測室のバカ達の解析漏れで想定以上の敵性エネミーが潜んでいたじゃないか。おまけにクラスはアサシンだぞ？ ライダーで固めていたら苦戦するに決まっているだろ！ しかも苦戦しただけでなく、想定通りしか回収できなかったんだ！ 私がいちたというのにこの結果だぞ!？」

実際イアソンがレイシフト先の館内でどのような戦果をあげたのかは、一緒にいた女海賊コンビに尋ねれば苦い顔をして教えてくれるだろう。

事前に彼女たちからその愚痴をぶつけられていたカエサルは、イアソンの怒りの丈に口をへの字の閉じておくことしかできない。弁舌の天才とて語らぬが吉という場合もある。

「第一、あんな野蛮な女共と組まされるところが前提として間違っている。弱い、弱すぎる。ヘラクレス級とまでは言わないが、もっと強力な英霊を私につけるのが定形と決まっているだろうに。エジプト朝のファラオあたりを連れて行けば楽に事も済んだはずと思うんだがな」

「あれの気難しさは天下一品故な。クレオパトラが崇めている分、私は複雑な心境だが」

エジプト出身の英霊達の気難しさは、アクの強さしかないサーヴァント達の中でも指折りと知られる。

ニトクリスやクレオパトラはそうでもないのだが、彼女たちの頂点に立つファラオ・オジマンディアスが特に顕著である。

英雄王ギルガメッシュ、賢王ギルガメッシュ、もう一人のギルガメッシュの三人と組んで黄金四天王——四人中三人が同一人物だが——と化した日にはやりたい放題。子ギルの白い目も気にしない。

まさに傍若無人な姿には言語の由来人たる荆軻も苦笑しかでないだろう。彼女自身、最近呂布やスパルタクスと妙な縁が絡んで苦労人気質もあるが。

「しかしてイアソン。そうであれば、そもそも今回の資材回収にわざわざ貴様が出向かうこともなかったと思うが？」

「そりゃあ、私もそう思っていたよ。だが、王となるべくしてなる者ならば、家臣の評定くらいはしかとつけておくものだろう？ 将来私に仕えるのだ。有象無象の雑多ではなく有能な人材でなければ私の家臣は務まらないからね」

「二理ある。道理である。だが一理あるが……それでもそなたが戦地

へ向かう理由には一手足りないように思えぬが」

自信過剰な性格だが、イアソンとて己が非力なサーヴァントだとうことくらいは自覚しているはずである。

それにもかかわらず戦いに挑む行為自体、よほどの理由がなければ行わないことは重々承知であった。

「まあね。家臣の有能さを判断するならば、やはり戦場が一番だ。癪だがこうして戦地に出向くことで、私自らが彼らの評価をチェックしている。それに、私自身が出向くことが時には重要な働き。結果は納得のいく形ではなかったが……。それもこれも全部あいつらが悪い！」

思い返していたところで激情がぶり返したのか、言葉尻が熱くなるイアソン。ぶつくさと文句を垂れ流し、自分の身を優先して守らなかつたアン&メアリーには特に怨恨を述べている。

肝心の威光が伝えられたのかはさておき、納得したカエサルは一つ大きくうなずいた。

「理解した。つまるところイアソン——そなたは人気欲しいのだな？」

したり顔で、カエサルはそう言った。

「であれば容易い話である。貴様は実に幸運だ。なぜなら今この場に私は来た、私は見た。ならば次は——」

「ちよつと待て何勘違いしている!？」　　というか誰がお前の口車にのるか!？」

赤かまくらの口上を遮り、イアソンが前のめりに拒否の意を示す。

「なぜだね! 私を見たまえ。このふくよかなボディ、艶やかな声、嫺やかな顔立ち! 私がこのカルデアで人気者になるのも当然の帰結である!」

「寝言は寝て言え! お前の姿を見かけただけで『やばいカエサルだ。何吹き込まれるかわからないしきつさと離れよう』という顔をしたサーヴァント達が何人いると思っっている!」

「私は彼らの悩みを解消してあげただけだ。引き換えとして多少の報酬をいただくのに罰が当たるはずがなかつた」

へらつとした態度でなんの悪びれもなくそう言い放つ。

クリスマス赤セイバー事件に関与していなかったエアソンだが、とりあえずこいつが原因で揉め事が頻発していることは容易に理解した。

眉先が苦悩と頭痛で吊り上がる。口を開けば詐欺に走る男である。

「———そうだ。人氣が欲しいのなら心臓と歯車と紙と人工ベビーをドロップするようにすればいい。そうすればトレンド入りも固いぞ」

「なるほ———待て待てそれはやばい気がする。具体的に何がとはわからんが、とてもひどい目に合わされるといふことだけはなんとなく分かるぞ!」

かつてないほどの悪寒がエアソンの全身を走った。具体的に言う、七百五十万人の獣欲に満ちた視線を一齐に向けられたような嫌悪感が彼を支配した。

賽の河原の向こう岸から手招きする白い柱の姿を幻視し、エアソンはカエサルの提案を速攻で棄却する。

「とにかく却下だ! お前の出すアイデアに乗れば悉く破滅にしか向かわない! むしろわざとやっているのか!」

「何を言う! 私はいつだって真剣に物事に取り組んでいるぞ! 次のバレンタインの時に備えて、怨嗟溢れるむさい野郎どもからチョコを餌に搾取する手立てを計画している最中だ!」

「さては貴様メディアだな?! オレのためにと純粹に働く結果が不幸しか呼び込まない一番最悪なタイプだな!」

「ちなみにそなたは計画のうちには入っていないから安心するがいい。そなたを一心に想う麗しき乙女が二人いるのでな。愛と憎のダブル克蘭チだが」

「おお。来年の三月をオレは迎えることができるのか……?」

そもそも人理焼却を阻止できなければ二千十六年をもって人理は完全に崩壊するのだが、恐怖と戦慄に飲み込まれたエアソンの頭からその事実はずっぽ抜けてしまったようだ。

数瞬絶望の光景に怯えた後、はつと我に帰ってエアソンはわざとら

しく咳払いした。

「とにもかくにも君の助力は気持ちだけで十分だ。その心意気は是非とも別の奴に与えてやるといいさ」

「そうか。まあ私も半ば気まぐれに提案しただけだ。プロデューサーならば、我が愛しのネロのようにみっちり腰を据えてだな――」

「それに、私は人気欲しいわけではない」

「――ほう？」

思いがけない言葉に今度はカエサルの眉が興味深く吊り上がる。

「人気なんてものは後からついてくるものだ。今の私が必死こいて人気を獲得したとしよう。だが所詮、仮初のもの。少し経てば、か細い松明のようにあっさりとは吹き消える」

その瞳はいつになく真剣さを帯びていた。

曲がりなりにもギリシャ神話という過激な時代を駆け抜けた英雄。どのような人間が好かれ、どのような人間が悪辣なのかを知りえているのだろう。

まして、彼の同期にはメディアアやケイローン、アタランテにメラアグロスにテセウス、そしてヘラクレスという全時代きつての英傑達が肩を並べていたのだ。大英雄たちが放つ威光を間近で刮目していた彼に、武勇においてその逸脱者たちを上回る才能など持ち合わせているのか。

故に、とイアソンは碧色の瞳を細める。

「オレが目指すのは理想の王だ。悶え足掻く民衆たちを導ける英雄となり、全ての人間の先導者として君臨する。イオルコス王位はその足掛けでしかなかった。武技や武勇がなくとも、民たちを安心させることのできる王になれるということを、オレは示さなくてはいけないのだ。人気なぞ、その後からいくらでもついて回るだろうよ」

「ほう。これはまた……」

難儀な輩が増えたものだ、と嘆いた。

英雄としての願望は、なるほど神代の英雄と伝えられるだけある。だがどうだろう。それにしても彼はあまりに歪みすぎている。

誰もが満足できる世界をつくることなどできるだろうか。平和で満たされる者と、悪逆で満たされる者の双方の願いを叶えることなどできるだろうか。

彼は幼く、世界を知らない。

他者を見下すがために、他者を見ようとしていない。

魂が幼いまま、ひどくねじ曲がってしまったているのだ。

そのような男が、果たして理想の王になど——

「——だがイアソンよ。その王道、やはり誰かが書き記さねば『英雄譚』とは呼べないだろう?」

なれるはずがない。イアソンが理想の王になるには、イアソンがイアソンでなくなる以外に方法はない。

だがその^{愛しさ}もがきを、^{美しさ}足掻きを、^{健気さ}嘆きを捨ておくにはあまりにも惜しかった。

イアソンという男はどうしようもなく無能で、無力で、小物で、クズである。

だがしかし、そんな彼にしか放つことのできない朧げな輝きをカエサルは見た。

ヘラクレスやアタランテらが秘める、眩いばかりの光とまた違う。路地裏の街灯のような、淡く雑多だが確かなる光があった。

であれば、小物な英雄が辿る道筋を記しておくことも文豪の責務というもの。

「喜ベイアソン。乱用するようだが言わせてもらおう。私は来た、私を見た。ならば次は勝つだけのこと。そしてその勝者とは私ではなく、そなただ」

「何に勝つ、というのだ?」

「当然——ヘラクレスにだ」

あまりにもあつげらかんと口にされた言葉に、イアソンは暫し茫然と呆けた。

次いで我が耳を疑い、最後にカエサルの口上を疑った。

「お前は馬鹿か!? 私が勝つだど!? あの、ヘラクレスに!? 誰もが挑み、誰もが憧れ、誰もが認めた大英雄だぞ! ふぎけるのも大概に

しろッ！」

「貴様こそ何かはき違えているようだな。武勇、技量、勇姿、戦績。貴様がそれらでかの大英雄に並び立つことなど、私の舌先といえど困難の極みだ。いや、あえて言おう。不可能だ」

十二の試練を突破し、それ以外にも数えきれない偉業を達成してきたヘラクレス。

対して、アルゴノーツを結成してイオルコスとコルキス間を航行したイアソン。

両者の武勇は天と地ほども差がある。世間的に広まっている英雄がヘラクレスということが何よりの証拠だろう。

「だが王としては？ 勇者としてではなく最王として語り継がれることがあるのなら、それはヘラクレスにできたことか？」

問いかけに、イアソンは閉口するしかなかった。

「いいや、できない。あれは根っからの武人。人の上に立つには猛りが強すぎる。力で他者を従えさせようとも、他者を導くことはできない」

ヘラクレスは確かに最強の英雄である。狩人として知恵も働く。しかし最賢ではない。

むしろ彼の生涯は勇猛と狂気に満ちていた。殴られたという理由で師の一人リノスを殴殺し、ヘラに吹き込まれて妻子の命を奪い、復讐に身を任せ大量虐殺した経歴がある。

激情家である彼が、民衆の上に立って統治を行うには難題が過ぎた。力ではどうしようもない、そもそも彼には全く向かない別ジャンルなのだ。

「……そうか。—— そうだとも。ヘラクレスは鉄砲玉として最強でも、先導者としては違う。その才ではこのイアソンが勝っている」
震える唇でたどたどしく言葉を紡ぎ、視線を下げていたイアソンの瞳に光が宿る。

「奴はヘラの威光を名乗るが、オレはヘラに加えてアテナ、アフロディテの三柱の加護を受けている。比べるまでもないじゃないか！ オレと奴では役割が違うだけなのだ！」

体育会系の人間にいきなり学校全ての管轄を任せたとところで、三日持つか怪しいところである。

ヘラクレスに勝るのは武勇に対してではない。知略のさらに先、知謀で勝ればいい話だった。

そして、ヘラクレスよりも統治に優れた理想の王として、これからイアソンの名が挙げがればいいのだ。

イアソンがヘラクレスを上回る英雄だということを、数多の人間に知らしめる。

そのために最も効率的な方法が、文字として後世に残し、文献として広め、物語として語り継がれること。

その点に至って、『ガリア戦記』を自ら著したカエサルほど適任はいない。

「そうと決まれば早速取り掛かろう！ だができればもう一人くらいは人材が欲しい。君の伝手にそういうのはいないかな？」

「ふうむ……。であるならば、知り合いというほどではないが一人いる。『三銃士』や『巖窟王』を執筆したキヤスタークラスがな。彼と私の作品となるならば、君の王道にはより輝かしい花道を添えられるだろう」

「そうか！ それは楽しみだ！ ハハハハ、ついに私の時代が来てしまふのだな！ ヘラクレスやメレアグロスの奴でもない、このイアソンの時代が！」

機嫌よく笑いながら食堂を後にする弁舌マン二人組。

だが、カエサルはイアソンの生きざまに驚嘆こそしたが共感はない。

その証拠に、カエサルは一度もイアソンが「理想の王に相応しい」と口にしていない。

如何に彼の物語を脚色しようと、彼は『アルゴ号の冒険』を超えることはできない。

それは最低限の活躍を保証された祝福であり、最低限の活躍しか保証されない呪い。

その概念の名は、女神の加護。

イアソンは、どれだけ頑張ろうとも「イアソン」なのだ。

「……………これで、少しは助力に精をだすとよいがな」

隣で響く高らかな笑いを耳にしながら、カエサルは脳内に書きとどめた新生英雄物語の表紙を閉じた。

クラス：ライダー

真名：イアソン

キャラクター紹介

ギリシヤ神話の物語『アルゴ号の冒険』に登場する英雄。

イオルコス王の息子だが叔父のペリアスに王位を奪われ、「コルキスの宝とされる金羊の皮を持ち帰れば王位を譲る」という約束に従いアルゴ号の船員をかき集めた。

アキレウスやヘラクレスに並ぶ大英雄とされるが、信じられないほどに本人は非力で無力。おまけに小物臭く、常に他人を見下すうえに計画通りに事が運ばないと周りに当たり散らす。

しかし、一癖も二癖もあるアルゴノーツをまとめあげたそのカリスマ性と弁舌は本物。

パラメーター（詳細不明）

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

小見出しマテリアル

金ぴか臭はするが所詮メッキ。輝ける黄金の古代王、Sとは根本的に合わない。

彼らからしたら道化もいいところなので放置案件。たまに見ると面白いのだとか。

他人の力を自分の力と勘違いする癖があり、強力で尚且つ言いくるめられそうな英霊がいるとちよつかいをかけにいく。

ジークフリートとかちよろいらしい。最近だと割り箸からエクスカリバーを出せるロツクな英霊がねらい目。

外面だけは良く女神の扱いも心得ている。ケツアルコアトルとかアルテミスくらいなら手玉にとる実力の持ち主。

メデイアリイは気が付くと背後にいる。魔女メデイアは気が付くと死ぬレベルの呪いをかけてくる。

そしてワカメ臭がするためメドゥーサ系統からも毛嫌いされる。それでもめげない。イアソンだから。

セイバー (Fake)

「邪魔するぜー。マスターいるかー？」

一声かけてマイルームから姿を見せたのは、気の強い顔立ちをした少女。

彼女こそ、ブリテンに語られる円卓の騎士の一員であり、その物語に終止符を打った騎士。叛逆者モードレッド。

が、今はそれらしい荘厳な鎧を纏っておらず、チューブトップの上から羽織るような深紅のレザージャケット、そしてホットパンツのみというラフで野性的な格好をとっていた。

「あ、モードレッドさん。こんにちは」

人類最後のマスターのマイルームにいたのは、マスターではなく桃髪の少女。

今では多くのサーヴァントと契約を交わしたマスターが、一番最初に契約した少女。マスターと共に幾度にわたってレイシフトを敢行し、もつとも多くの困難を共に歩んできた半身。

それが彼女、マシユ・キリエライト。

彼女も今は戦闘時の全身鎧ではなく、元々支給されていたカルデア職員の制服を着用している。

「おう、マシユか」

軽い笑みを見せて入室し、備え付けられているベッドへ座り込む。

マシユの手元にあるのは、カルデア職員に支給されている計測装置のようだ。あくまで一サーヴァントであるモードレッドには疎いところだが、計測装置を片手にとは中々穏やかな話ではない。

「何やってんだ？」

「はい。新年会の際、サーヴァントの方々が大暴れしたことによって歪や異常がないか計測して回っていたところですよ」

「ああー……ありゃあひどかったな」

特にめでたくもない日でも毎日酒盛りしている連中が定住するカルデア。

そこに本当にめでたい日が到来しようものなら、狂騒が瞬く間に拡散する様は容易に想像できるだろう。

食べて、飲んで、歌って、交わして、迫って、暴れて、暴れて、暴れて——

最終的にどう決着がついたのかは終ぞ定かではない。ただ、奔走する婦長の姿があつたことだけは誰しもが記憶していた。

「でもよ。あん時酒飲まさされてたお前、結構面白かったぜ。まさかマスターにあそこまで大胆に——」

「そ、それは！ その……」

「まあ気にすんなって。ところで、マスターどこ行つた？ ベグディヴィエールの奴に掃除に駆り出されそうでよー。適当にどつか行きてえんだけどさ」

「先輩でしたら、今は新年会の——」

「失礼する！」

マスターの所在を応えようとしたマシユの言葉を遮るように、快活な一声が響いた。

会話の間に入って声に顔をしかめ、モードレッドは扉に目を滑らす。

マイルーム入口に堂と立っていたのは、獣のように爛々と輝く瞳をした青年だった。

「あ？ 誰だお前」

「モードレッドさん、彼は——」

「これは失敬、名を名乗らずに訪問したこと、非礼する。俺はリチャード。リチャード一世だ」

自らをリチャード一世と名乗った赤毛交じりの金髪の青年は、立て続けに言葉を並べる。

「それで、ここにアーサー王はおられるか？」

「アーサー王だ？ てめえ、父上に何用だ」

燦然と輝く王剣を抜刀し、モードレッドは犬歯と敵意を剥き出しにリチャードにぶつける。

力はつて、そりやもう笑うしかねえだろ！」

父が憎い。父の全てを否定してやろう。

父が憎い。そうしなければ自分を見てくれない父が――。

何を胸中に秘めてアーサー王に反旗を翻したのか。それはこれからもこの先も彼女と、加えて彼女と親交を深めたマスターしか知りえない真実だろう。

だが、父に対して並々ならない激情があつた故の叛逆だということ
は確固たる事実である。

彼女の背後にあの毒婦の影がいようと、それ自体は小さな薪ではない。その薪を轟々と燃え上がらせる火種を得たからこそ、モードレットは叛逆の騎士となつたのだ。

そして、突如放り込まれた爆弾に今度はリチャードが愕然と口を大開きにする番だつた。

「モードレット――まさかモードレット卿!? あの、アーサー王伝説に登場する、円卓の騎士の一人の、ガウエイン卿を討ち取り、アーサー王物語の幕を閉じた――モードレット卿なのか!? いや、であられますか!？」

「あー腹痛えー! そうだよ、オレがモードレットだ。文句あるか。あと敬語はやめろ、お前はなんか似合わねえ」

脇腹を抑え、まだ引きつった口元のままぶつきらぼうに答える。

「文句というより、貴公はどう見ても女――」

瞬間、底冷えするような殺気に反射的に護剣を抜いていた。

気が付けば、鼻息がかかる距離にまで肉薄していたモードレットが、本能的に顔の前で防御においた護剣の峰を燦然と輝く王剣の剣先が貫いていた。

「今の失言はオレを笑わせたことで不問とする。だが、二度と口にするな」

「……失礼しまし、いえ、失礼した」

燦然と輝く王剣を鞘に戻して霊体化させ、ふんと鼻息を鳴らす。

一拍遅れて、小競り合いとはいえあの円卓の騎士に襲撃されたという事実が今更リチャードの全身を稲妻の如く駆け巡った。

一気に冷や汗があふれ出し、それでもうちに芽生えるのは恐怖ではなく歓喜であり、喜びに体が震えて咽び泣いている。

「あの、あまり先輩の部屋で争い事は……」

「悪い悪い。それで、何だっけ。ああそうか、父上に会いたいんだっけ」

万が一の時に備えていたのか、出現させていた盾を消してマシユが注意を促す。

それに軽い返事で応答し、リチャードが最初に言っていた言葉を思い返した。

「そ、そうだが。そんなに軽く言われると不思議な気分だな……」

「つってもなー。カルデアって狭いようで広いし、どこにいろのやら。まあせっかく出会ったよしみだ。父上探し、付き合ってやるよ」

「本当か!?! かのサー・モードレッドと歩みを伴できるとはなんと光栄なことだろう。しかもその目的がアーサー王を探すためとは……わかったわかった、落ち着くって」

「私も担当区域の計測を終えたら、後でお手伝いしますね」

「おつ、サンキュー。じゃあちよっくら父上探しといきますか」

肩にかけていたレーザージャケットをしっかりと羽織り直し、指を鳴らしながら索敵態勢に移るモードレッド。

おつと、とそこでモードレッドが思い出したかのように一つ付け加えた。

「ただし——マジでカルデアは広いからな？」



「お邪魔するぞ！ アーサー王はおられるか！」

「ついに来てしまったな。余の華やかなハイビジョンデビュー！ ほれその、もっと薔薇を撒けい！」

「承知した」

「ああ」

「赤と黒の二大英雄がバツクでひたすら薔薇の花卉を撒いてるぞ……」

「一応僕たちのアニメ化も決まったんだけどなあ」

「おかあさん！　おかあさんが動くよ！　あれ、でもこっちのおかあさんもおかあさんだよね？」

「どちらも貴女にとって大切な人ですよ。脱落させた私が言えた台詞ではないのですが……」

「ところで何名かおらぬようだが。天草、お主は知らぬか？」

「ええ。シェイクスピアは取材と出して出かけました。ケイローンはアニメで負けたヘラクレスを鍛えて参りますと嬉々として同じように。アヴィケブロンはいつもの通りです」

「ローマ皇帝、ネロ・クラウディウス。かの圧制者を討ち滅ぼした時こそ、我が叛逆の道は開かれる！」

「落ち着けバーサー……スパルタクス！　ええい、ブーデイカはいないか。これの鎮静方法を教えてほしい！」

「ウウ……ウ……」

「落ち着くがよいフランケンシュタイン。彼奴のそれは電撃ではなく飛び散る筋肉の圧だ。余の前であのような下賤な姿を晒すこと、実に不快である。だが此度は祝報に免じて不問としよう」

「……アーサー王はあれか？」

「間違っても間違うな。ちっ、あの毒婦もいやがる。次行くぞ」

「う、うむ」



「たのもーう！」

「あー郵便ですかー。それともマルタさんの押し付けデリバリー焼うどんですかー。どちらにせよ後にしてください今録画してたカル使

みてるんで」

「つーかそろそろ帝都もアニメ化していいじやろ？ HF、エクストラ、アポと来たら次はワシらよな？まさかここでどんでん返しのタイころとか来ないよネ!？」

「ふつーに考えて Fake じゃないですかねえ。完結まで何年後かはさておき」

「あの……。そろそろ姉様方の所に戻りたいのですが……」

「今のあなたはちやりん娘粹なのでこつちです」

「観念してぐだぐだ空間に飲み込まれるが良い。とりあえず、ほれ、飲め飲め」

「はあ……」

「ん、ん、んっ——ぷはあっ！ かーっ、羨ましいのーう。弁慶をランサー粹から追い出した上に当てつけかのような胸、胸、胸！ 巨乳のことが、そんなに好きかアーーーーッ！」

「オジマンディアス王呼んできます？」

「あとワカメはついにワカメスープになったの」

「それに関してはスツキリしました」

「あの少女、先程訪れた部屋の少女と同じ顔のような……」

「ははう……じゃなくて、あいつはあいつだ。顔が似てるなんて日常茶飯事だぞ、こーん」



「父上はこーかー!」

「またしても……。またしてもセイバーが増えてしまった！ セイバー顔じゃないことは百歩、いえ万歩譲って良しとしましょう。しかし、いけない。あれの魔性の胸部はいけない！ 私以外のセイバーを滅殺したところで、それを超える新たな勢力が生まれてしまうわけにはいかないのです!」

「ほう。ならばなぜ私に斬りかかるのかを尋ねようか？ 休暇中のサンタさんを襲うとは悪い子の風下にも置けない不届き者だな」

「いい質問ですね！ それはそれ、これはこれだからです！」

「よしいいだろう。私は良い子達が欲しがっている微妙にズレたプレゼントを、悪い子に關してはきつちりしつかりとしたお説教を届けるのがポリシーだ。クリスマスパワーこそ過ぎ去ったが、サンタさんを舐めるなよ宇宙人！」

「あの、真冬にこの格好は寒いとか以前に色々アレなのですが……。そのハイテクそうなジャージと帽子ください」

「お師匠さん！ 不肖このジャンヌ・オルタ・サンタ・リリイ・ランサー、助太刀いたします！」

「なんの！ X師匠の邪魔だては私が許しません！」

「くっ、ついには水着やロリセイバー顔まで……！ おのれたけう——」

「……………あれはアーサー王ではないよな？ そうだよな？」

「あ……………。次行こうぜ、次」



「ア、アーサー王はここにおられるか！」

「『嵐の王』なんて呼ばれてるけどさ。実際いるのは女ばっかだったってオチ、酒場でも大してウケないギャグだねえ。そこんことどうさね」

「——私は『嵐の王』という側面で現界していると同時に、敵対者へ一切の情けのない苛烈な王としての側面も併せ持っている。端的に言って、そこに性別の差異など不要だ」

「ワイルドハントは古くより妖精やら精霊などを従えて狩りを行うと言われているいますが……………その行為の真意は保護と、より聖槍に染まった私なら述べるでしょう」

「精霊ねえ。もし仮に、アタシがそういうことするんなら引き連れるのはあの馬鹿ども達だけどき。やっぱりあれかね、アンタらは噂の理想郷とやらにいる精霊従えてくのかい？」

「理想郷アツァロンの精霊たちをそんなことに使うなどマーリンが———と思いましたが、彼の場合だと『そうか。君はそういう選択をとるのだね。いいよ、君が為すべきと決めたことを、僕はここから見守っているよ』と承諾してしまいそうですね……」

「同感だ、陽の私。あの男は常に、自ら引いた線の向こう側の者というスタンスを崩さないからな」

「なあ。仲睦まじくお話しているところ悪いが、なぜ私はここに連れてこられているんだ？ 関係ないよな？ ギリシャ関係ないよな？」
「なあに。アタシらの時代より精霊とか神とか、そういうのが日常的だった先輩に話でも伺おうと思ってさ」

「じゃあ縛る必要ないよな!？」

「そうしなければ逃げるだろう。もっとも、逃げたところで我らが追いつけぬ道理はないが。この狭部屋の中ではご自慢のアルゴ号など出せまい」

「助けてヘラクレスー!」

「おいあれ! あれロンゴミニアドなのでは!? ドウ・スタリオンにラムレイなのでは!? でもなんでロンゴミニアドが二本あるのだ!？」
「立て続けに尋ねるな! あれは探してる父上じゃないなあ……」



「騎士王は……ここに……!」

「なあ、アンタ無限の剣使って本当か! すごいなカルデアは。まるで未知の市場だ。反則的な小次郎もいれば、女体化した遮那王がいるんだもん! よし、とりあえず死合おう!」

「お、落ち着きたまえ。厳密に言えば無限の剣使ではなく無限に剣

を生み出すだけであって、私自身が卓越した剣術を有しているというわけでは……」

「エミヤ殿！ 以前質問した件について数点疑問が浮かんだので再度参りました。まず、この素直になりきれない少女のことなのですが、確かこのカルデアにも外見が類似した女性がいたような……」

「取り込み中だ、後にしてくれ！」

「おい劇作家。先日提供した資料の返却がまだされていないんだが」

「——」

「……なんだお前。初めて見る顔だな。どうした、俺の顔なんか見ても面白いことなど——」

「——可愛いいいいい！ 何この美少年！ なんか声だけ渋いけど、これが最近流行りのギャップ萌えってやつ!?!」

「な、ちよ、離せ、待てこいつ力強いああああああ!!」

「アンデルセーン！」

「やつぱりいない。というか、カルデアに英霊いすぎでは!?!」

「つーかうるせえ！ とつとと次に——うん？」

「どうした。おや、誰か走って——どわっ!?!」

「——新免武蔵守はここかー！ 天下に轟きし二天一流の看板、この鬼武蔵がへし折りに参上した!」

「今度は何だ!?!」

「おや、その異名に聞き覚えがあるぞ？ 其方、戦国の世で羅刹の如き無双を誇ったという鬼武蔵——森長可か!」

「如何にも！ 我が人間無骨も飛竜や海魔の血は啜り飽きたと喚きおる。やはり武人の血肉こそ、愛槍に捧げる最上の供物よ!」

「誰かマスターを呼べ！ あのバカ武蔵が暴走した！ そうだ、シエイクスピア——っていない!?!」

「全く、カルデアはほんと飽きないところね！ 過去に没してしまつた武人とこうして刃を切り結べるなんて。ただ世界を放浪するだけ

では、決して巡り合うことのなかった邂逅に感謝を」

「御託はそこまで、そこから先は得物で語ろう」

「そうね。しからば」

「いざ尋常に——」

「いつつ……。あれほどの膂力、さぞ有名な騎士だったのだろう。しかし、このままでは争いに——サー・モードレッド?」

「あいつ、オレにぶつかりやがった上に謝りもしねえ! とつちめてどっちが上かっつてのを分からせてやる!」

「サー・モードレッド!? これ以上事態をややくしくするのは——」

「喧しい! 舐められっぱなしでこのモードレッドが黙ってると思っ
てんのか! 行くぞオラア!」

「おお、ついに円卓の騎士の実力を肉眼で垣間見れる時が来ようとは……! 生きててよかった! ——え? ああ、確かにこの身は英霊
だったな」



「いねえな……」

「いないな……」

回って、回って、回って。

だけど見つからなかった。どこを探してもアーサー王の姿は影も
形も——いた。

むしろ果てしなくアーサー王だらけだったのだが、そこは目をつ
むっておかないといけない。

彼らが捜しているのはあくまで騎士王アーサー・ペンドラゴン。

聖剣エクスカリバーを携え、幼い姿のままブリテンを収めたアー
サー王こそを求めている。

幼少期とか、水着とか、サンタとか、乳上とか、宇宙人とか、それは今は関係ない。関係ないったら関係ない。

「そこにいたか。探したぞ、モードレッド」

あちこち彷徨って精神疲労から項垂れる二人へ、不意に声がかける。

眉をひそめてモードレッドが顔を動かす。

そこには一人の男が直立していた。純白の鎧に身を包み、深蒼のマントをたなびかせた騎士がこちらを見下ろしている。

「あ、不貞野郎」

「ランスロットだー」

不躰な呼び名に即座に異議を申し立てる不貞野郎、改めランスロット。

唐突に繰り出されたその名前に、今度は頭を落としていたりチャードが瞬時に起き上がった。

「い、今——聞き間違いでなければ、ランスロットと仰られたか!?!」

「そうですが、貴殿は？ 申し訳ないが、私と貴殿は初めて顔を合わせたと思いますが」

「ただのファンだよ。適当に手でも振ってやれ」

湖の騎士。円卓最強の騎士。

ともすればアーサー王よりも卓越した剣術の持ち主と謳われる騎士。それがランスロット卿である。

多くの武勇を誇り、ある時はその場にあった木の枝だけで敵対者を撃退したと言われるほどの腕前を誇る。

モードレッドに出会うだけでも歳を忘れて歓喜していた彼の前に、それが突然こうして現れたのだ。

驚愕と歓喜が複雑に絡み合った感情が全身を支配し、その場で硬直してしまう。

「それより不貞野郎。オレを探してたつてのはどういうこった」

「不貞——まあいい。モードレッド。貴様、祝祭の片付けを呆け

るとは何事だ」

「だってよ、かったりいじやねえか。オレは身体動かしてえんだよ。ちやっちいゴミ拾いとかやってられっか」

「貴様という奴は本当に……。ガウエイン卿の三倍マッシュの刑を受けたいのか？」

「げえっ、それは嫌だな。あいつの料理、マッシュポテトなんて名ばかりの闇マッシュだろ。ぜってえ根菜以外も潰してるぜ、アレ」

当の本人からしてみれば、決して刑罰のつもりではなく純粋な食事として振る舞っているのだろう。

ただ、なんでも潰せばマッシュポテトというわけではない。適当にビネガーを振っても味はそんなにつかない。

彼が食卓で存分に腕を振るう光景を目にしたブーデイカ曰く「彼は野菜に何か恨みでもあるの？」とのこと。

尚、ガウエインは菜食主義者なので野菜には恨みどころか敬愛を評している。

「ガウエイン卿の根菜料理へのあの異様な自信はどこから……。いや、そんなことよりだ。貴様も円卓の騎士の一員であるならば、その名に恥じぬ働きをすべきだ。貴様にも、いや、貴様こそマスターへの義理というものがあろう」

「あー……。まあな。ロンドンであんな啖呵切った手前、キヤメロットじゃあ手ひどい仕打ちしたのは悪いと思ってるさ。父上がいたとはいえ、オレも騎士の端くれだ」

特異点ロンドンではマスターの味方として人理修復に手を貸し、特異点キヤメロットでは獅子王に忠誠を誓う難敵として人理修復に立ちただかったモードレッド。

曖昧ながらもそれらの記憶が残っているのか、彼女はばつの悪そうな顔で頭の後ろを搔く。

「モードレッドさーん、リチャードさーん」

その時、遠くから呼び声が届いてきた。

その声に振り返ると、見覚えのある桃髪と眼鏡をかけた少女が小走

りで駆け寄ってくる。

「あ？　なんだマシユか。どうしたよ」

「はい。あれから私もアルトリアさんの場所を尋ねて回っていたら、先輩と一緒に先日の新年会の後片付けを指揮してくれているとの話を耳にしたので。それを教えようと思って来ました」

「おー、サンキューマシユ。何だ、マスターも父上と一緒にいたのかよ。探す意味なかったな」

「新年会跡地……。そこにアーサー王がいるのだな！」

召喚されて間もないリチャードは、カルデアの地理にそこまで詳しくはない。

そのため変わらず案内が必要となる。モードレッドと、そこにマシユも加えれば迷うこともないだろう。

「ところで、先程もう一人誰かがいたように見えたのですけど」

「おお、そうなのだよミス・マシユ。彼こそは、名高き円卓の最強騎士である——」

そういつてリチャードが満面の笑みを浮かべ、意気揚々と語ろうと振り返った。

「——A r r r r r r r!!」

そして視界に映ったのは、先刻の人物とは似ても似つかない異形の騎士。

白亜の鎧はどす黒い煙によって漆黒に塗り替わり、清廉な顔立ちを覆う兜の内側から咆哮が鳴り響く。

「なっ!？」

そのあまりの変貌ぶりにリチャードが驚愕する。

その横で「何やってんだコイツ」と冷瞥の目を向けるモードレッド。刹那、黒騎士とマシユの視線が交差する。

「——u r r r——」

少しびくつとしながらも、黒騎士は変わらず唸り続ける。

目元が前髪に覆われ、影が落ちて表情の伺えないまま、マシユは黒

騎士に歩み寄った。

そして、並び立つ二人。

身長の差を感じさせない威圧感が黒騎士の全身を締め付けた。

伏目がちのまま、マシユはすうつと大きく息を吸い込むと――

「――ランスロットさん。こんにちは、どうかしましたか？」

「……………」

幼さの残る顔で、無垢な笑顔を浮かべて挨拶を交わすマシユ。

対して、狂気じみたセリフを断ち、悠然と立ちすくむ黒騎士。

その姿は狂っているようでありながら、どこか哀愁と切なさを醸し出していた。

傍にいたモードレッドは腹を抱えてピクピクと体を小刻みに揺らし、今にも決壊しそうな表情筋を堪えている。

「……………何が何だ？ え、あまり関わるべきではない？ そうなのかもしれないが……………うーむ？」

唯一、事情のできないリチャードだけが首を傾げてばかりだった。



マシユの言葉通り、カルデア施設内の多目的広場に到着した一向。

つい先日まで新年会によって地獄と化していたこの広場も、現在は数名のサーヴァント達の助力によって清潔で正常な広場へとほぼ復旧されている。

その入り口で一向を待ち構えていた人物に、モードレッドの表情が苦虫を噛み潰したようなものへと変わる。

「遅いですよ、ランスロット。放蕩者一人を連れ戻すのに時間をかけすぎです」

「うげ、さっそくおでましか……………」

「Sorryyyyyy」

「って、どうしたのですかその恰好。ふざけるのも大概にしてください」

「このバカはほっとけ。自業自得だ」

「こんにちは、サー・ガウエイン。片付けの手伝い、ありがとうございます」

「おや、こんにちはレディ・マシユ。なるほどそういうことですか……。全く、貴方という男は」

ガウエインが先ほど以上の軽薄な眼差しでランスロットを睨む。

鉄兜で表情こそ隠れているが、口のへの字に曲げて複雑な顔をしていることは間違いない。

なんとも残念な騎士の隣にいたりチャードはというと、マシユが自然に放った名前に息を詰まらせていた。

「サー・ガウエイン——ッ」

ガウエイン卿。

モードレッドやランスロットらと共に肩を並べた円卓の騎士として知られている。彼の妹であるガレスも同じ円卓の騎士である。

日の注ぐ日中の時間帯では無双を振るう太陽の騎士と語られ、アーサー王の持つエクスカリバーの姉妹剣「ガラティーン」を有する無双の騎士。

それが広場の入口で悠然と佇み、瞳を細めて今度はリチャードに視線を落とす。

「して、貴方は？ 新しいサーヴァントとお見受けしますが」

「は、はい。俺——いえ、私はリチャード一世と申します」

「んで、このオレを呼びつけてなにやらそうって腹なんだよ、ガウエイン」

苛立だしそうにモードレッドが割り込んでくる。それに反応したガウエインが細い眉を大きく吊り上げ、ますます眉間に皺をよせた。「腹も何も、貴方には貴方のツケを払っていただくだけのことです。具体的に言うと先日の新年会で、雰囲気酔いして備品を壊しまわりながらマスターに絡みに行った時の後始末です」

「けつ、口調だけはいつちよ前に借金取りみたいだな。それに、オレが動くのはお前に言われてからでも、そのツケを払うわけでもないぞ。過去は振り返らない主義だからな」

「……貴様の過去の執着具合もなかなかだと思うが」

「むつ、今ダメな方のランスロット卿の気配が」

「A a r r r r ! ……A a」

「そういつて踏み倒しなどさせませんよ。いくら卿といえど、ニツポンの極悪無法に身を落とさせるわけにはいきません」

「お前ニツポンになんの恨みもってんだ!？」

円卓の騎士。

それは後世に脈々と語り継がれる清廉で高貴なる騎士道精神の物語。

騎士王アーサーに確固たる忠誠を誓った、気高き十二の騎士たちが紡ぎだす英雄譚。

あらゆる騎士の出会いであり、目標であり、敵うことのない精鋭たちである。

「——っは！ すまないウイリアム。なんかこう、色々と連続で衝撃が訪れすぎて呆けてしまっていた」

アタランテシヨック再来。

蓋を開けてみれば、各々が勝手にブリテン漫才に走る円卓残念な強者の騎士の姿がそこにあった。

厳密に言えば、リチャードは彼らに対して微塵もイメージダウンを覚えていない。彼が円卓の騎士に抱く敬愛の深さは生涯そのものであり、そこからさらに上がることはあれど下がることは決してないだろう。

ただ、色々とインパクトが強すぎた。

それらを円卓の騎士の物語として熟読し、理解するための時間が必要なだけなのだ。

噛めば噛むほど味が出るスルメみたいなものである。スルメと比較される最高峰の騎士たちというのも実に残念な話だが。

「騒がしいぞ。卿らほどの騎士が、出入り口で口論するなど」

鈴のような一声が鳴る。

その言葉と同時に、揉め争っていた三騎士は即座に口を閉じ、片膝を立てて深く首を垂れた。

モードレッドですら口を固く閉じ、即座に全身鎧とシークレット・オブ・ベディグリー不貞隠しの兜を装着した「円卓の騎士モードレッド」に姿を変えている。

傍にいたマシユもまた、吊られるように一瞬傅きかけ、反射的な行いに気づいて慌てて体勢を戻す。

「申し訳ありません。我が王の前でこのような醜い争いを」

「いいや、私は怒ってなどいない。ただ、卿らがこうして言葉を交わしている日に遭遇できるだけで幸運に満ち足りている」

その一声一声を耳にしたりチャードの全身が粟立つ。

心臓音が鼓膜に直接鳴動しているかと錯覚するほど激しく鼓動する。

かつてない動悸の乱れ。このような乱れ方、生前「山の翁」と共同戦線を敷いて激突した大魔獣と相対した時でさえひどくはなかっただろう。

コツ、と金属質ながら軽やかな足音が響く。

赤毛交じりの金髪が風ぐ視界の中央に、彼の全てが顕現した。

「ただし、出入り口では慎むように。他のサーヴァント達の邪魔になつてはならない」

温和な笑みで語り掛けるその人は、少年とも、少女とも見える中性的な面立ちをしていた。

旋毛で丸めた黄金色の頭髪。凜とした佇まい。

腰に添えられた、網膜の裏に焼き付けるほど眺めてきた伝説の剣。

仕える騎士たちよりも圧倒的な小さな体躯ながら、その身から放つ王気は紛れもなく本物。

彼女こそ、アーサー——否、アルトリア・ペンドラゴン。

カルデアに最初に召喚された「アルトリア」であり、集いつつある円卓の騎士達の王。

そして——リチャードが何よりも尊敬し、敬愛し、崇拝した、理想の王だった。

「ガウエイン卿。日本への偏見は捨てるように。あれはとてもいい国です」

「——はっ」

「モードレッド卿。叛逆の汚名あれど貴公も円卓の騎士。私の顔を汚すのは構わないが、誉れある円卓の名を汚すほど貴公は落ちぶれてはいないだろう?」

「——はっ」

「ランスロット卿。今は許すが、いずれ己が罪と向き合うように」

「——はっ」

「マシユ嬢もいらっしやったのですか。マスターは向こうで作業中ですよ」

「はい。ありがとうございます、アルトリアさん」

一人一人に声をかけ、それぞれに適した言葉をかけて回る。

そこには厳しさがあり、優しさがあり、何より高潔だった。

それは王が騎士に言葉を投げかけるという次元を超越した、まるで天からの祝言を承る信仰者とも言える光景。

傳く三人と騎士王の在り方は、天才絵画がその生涯を燃やしてまで創造したそれよりも遥かに勝ると断言できる、美麗さと荘厳さを骨の髄まで感じさせる。

そして碧色の双瞳が、ついにリチャード一世に移される。

「貴方は、初めて見る方ですね」

故に、彼女は問う。

最初に口にした時からどれほど経つだろうか。

奇妙にも慣れ親しみ、常に投げかけてきたその問いを。

「問おう。貴方はマスターのサーヴァントか?」

リチャード一世にとって、彼が彼女であつても。

アーサー王がアルトリア王であつても。

そんなことは、最早些細なことに過ぎない。

彼は会えたのだ。理想の果てに。

聖杯に願うことすらおこがましいとしてきた、願望の先の夢想到に謁見することができたのだ。

「——応えます。我が身はマスターを守る剣。そして真名は——」

「——まあ結局のところ、このあとやる事は後片付けなんですからどね」

「王よ。向こうにケルト勢が飲みこぼした酒の跡が根強く付着しています。聖剣の使用許可を」

「サー・ガウエイン。貴公生前より短絡的になりましたか？」

「サー・ベディヴィエールの言う通りです。どうかそれよりも、貴方はまだ残っている根菜料理の処遇をどうするか決めるべきです」

「くっ、これもB四枚という処置のせいなのです……！ 私には、ゴリラなどではない……！」

「マスターはもう少し早く俺を召喚すべきだった！ そうすれば新年に相応しいロックンロール企画をプレゼンテーションできたのに！」
「いいじゃねえかロックンロール。常時^{オールウェイズ}常態で、日々^{エブリバディ}毎日にシヤレこもうじゃねえか！」

「その前に貴公方も手早く片づけを。特にサー・モードレッド、貴公は遊んでいたのですから人一倍働くように」

「……ベディヴィエールの野郎、なんか小姑っぽくなったな」

「えっ、サー・ベディヴィエール!? あの、アーサー王に最後まで忠実に仕え、聖剣の返却を二度躊躇ったとされる——」

「いちいちうるせえな！ あとその紹介の仕方は円卓の奴らのほとんどにクリーンヒットするからやめろ」

「……ランス。なぜ全身装備で片付けに勤しんでいるのでしょうか。そしてなぜ言語能力が退化しているのでしょうか。私は不思議です……」

「Sa a a d d d d d d！」

「ふむ……。なんだか分かりませんが、後で話ぐらいは何いますよ」

「あ、先輩！ あれ、先輩のところにも全身鎧をつけたランスロットさんが……」

「A r r r t h u r r r r r r r r r r！！」

「ア, A r r r t h u r r r r r r r r r r t t！！」

「さつきからうるさいですね！ マツシユの刑に処しますよ！」

「我が王よ。私の料理は刑罰ではないのですが……」

ブリテン神話。神聖円卓騎士、アーサー王物語。

彼らは伝承に語られる通り、崇高な精神と誇りある魂持ち合わせていたのだろう。

しかし彼らもまた人間であり——話してみれば、案外茶目つ気な一面を有しているのかもしれない。

「あ、やっぱり貴方はランスロット卿！ ランスロットのくせにお掃除お疲れ様です！」

「G a f f！！」

「私は悲しい……」

クラス：セイバー

真名：リチャード一世

キャラクター紹介

十二世紀にノルマンディーの君主となったイングランド王。

十字軍に参加し、聖地エルサレムの奪還を目指して戦場を駆けた。

王としてよりも英雄としての逸話が多い人物。その勇猛さからついた異名は「獅子心王」。

アーサー王伝説が大好きであり、自身の剣にエクスカリバーと名付けるほど尊敬している。

パラメーター（詳細不明）

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

小見出しマテリアル

史実の通りの円卓大好き人間。だけどモノホンはあまりに畏れ多いので、普段は一步距離を置いたうえで畏まる。

音楽好きであり、アマデウス作成の曲の数々に大興奮。ただ下ネタはいけないと思う。

過去に神聖ローマ帝国に囚われたこともあったが、それはそれと割り切っている。あの時は間に合わなかった己の過失とのこと。

戦闘に関しては頭の切れる男だが、政治関連となるとんでダメになる。王なのに学問にも疎い。「マックスウエルの数学？　なるほどわからん！」

過去に山の翁と面識がある。呪腕、百貌の先代に当たるハサンであるが、リチャード本人は何代目かのハサンかは分かっていない模様。そして彼が引き連れる従者の一人がロビンフッドの縁戚でもある。

帝都キャスター

人を誑かす者。

超常を操る者。

善を貶める者。

おおよそ全ての人間に忌み嫌われ、故にこれらはこう呼称される。

——悪魔。

いつの時代からか、彼らは常に人と共に存在し、その魔性の力で多くの人間を魅了してきた。

異端であると知りながら悪魔の力を求め、彼らと契約を交わした人間は歴史の影に必ず存在する。

悪魔あるところ。それは人類の変革の時であり、悪魔にとってもつとも都合よい時である。

変革の時。それは世界全てが転生する時。

転生の時。それには破格の激痛が伴う時。

激痛の時。それらが表すのは、生まれ変わるために流される膨大な血、血、血。

歴史の節目にこそ、必要不必要関わらず多くの血が流れた。概念の更新にこそ、強欲を肥やすための多くの悪逆が生まれた。

これを好まずとして何を悪魔と形容しよう。

人間の時代など、所詮は悪魔の苗床に過ぎない。

「——だからこそ、マスターには是非とも人理を救ってもらわねばなりません」

多目的広場。通称リラックスルームと呼ばれるここは、くつろぐのに十分な数のソファや机が置いてあるだけの休息の空間。

今はしんと冷え切った空気の中、ソファに腰かけてひとりそう零す金髪の青年。

目元はサングラスに隠されているが、剥き出しの口元には冷淡さを

感じさせる笑みが張り付いている。

加えて仕立ての良い白のスーツと、伝説や神話に語られし古代の英霊にしては、やけに近代的な衣装が異質さを引き立てていた。

「おやあ？　これはこれは、誰かと思えば貴方様でしたか」

静謐に包まれた彼一人の空間に、素つ頓狂な声で介入者が現れる。レンズ越しに瞳だけ滑らせ声の鳴る方へ視覚を向ける。そして、そこに映りこんだ奇怪な姿の人物に、笑顔の種類を柔らかなものへと変えた。

「こんにちは、メフィストさん。珍しいですね、貴方が白昼堂々と通路を闊歩するなんて」

サーカス団のピエロをひどく歪ませたような姿をしたサーヴァント——メフィストフェレスは、今しがた悪戯が成功して喜ぶ子供のような純真なスマイルを浮かべていた。

「珍しいですか？　そうですね。私ほど何の気兼ねもなくここを歩けるサーヴァントはいないと思いますよ？　なぜかって、そりや私罪悪感ありませんから」

「また誰かをからかってきた帰り、ということですか？」

「ピンポンピンポンピンポーン！　最近あのおチビ作家さんをからかうのが楽しくてしようがないんです。その方曰く『お前の声を聴いていると無性に腹が立つ！　アヒルが醜い時の白鳥の子を見ていた時の気分そのままだ！』だそうです。全くひどい、メツファイー泣いちやう」

「号泣するならどうぞ、ハンカチあります。それにしても声真似上手ですね」

「あ、どうも」

言つて、青年からハンカチを受け取るメフィスト。

今にも涙がこぼれそうなほどくしゃくしゃに顔を歪めていたメフィストは、受け取ったハンカチで気持ち良い音を出して鼻をかんだ。

「それで、アナタはここで何を？　ウサギでも捕まえるトラップ仕掛けてました？　マックススウエルさん」

複雑な笑顔でそれを見届けている青年に濡れたハンカチを返却し、うってかわって感傷など微塵も感じさせない澆刺とした笑みで青年——マックススウエルに尋ね返す。

「いえ、生物学は管轄外ですから。動物の思考回路を先読みとか、そんな非論理的なことできませんし」

自虐的に述べて、マックススウエルはメフィストが姿を見せた方角と反対側の通路を指さした。

「もうすぐマスターがレイシフト先から資源調達の任を終える頃です。奴隷らしく、珈琲の一つでも持つていこうかと思ひましてね」

机の上に置かれている、手の付けられていない珈琲。

マックススウエルが多目的広場に居座ってから十分ほど経っているが、濃度の高い茶色の水面は今まさに淹れたとばかりに湯気を放ち、挽き立て豆の香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。

「フフ、フフフフ。それは奴隷サーヴァントではなく執事バトラーの真似事では？　おまけにそんなこと一回もやったことないくせにい」

「それは貴方も同じことでは？」

「ところがどっこい、これでも私サーヴァント！　どのサーヴァントよりもサーヴァントであると自負しております故。執事の真似事程

度、生前で体験学習は済ませています」

「へえ、それは意外ですね。その時仕えていた主人は——尋ねるまでもありませんね」

疑問の途中で愉快そうに口の端を釣り上げたメフィストを見て、マックススウエルは苦笑して嘆息する。

「でも否定はしませんよ、ええ。そういう行動は『賢い』と評されるのが常ですから。主人の信頼を勝ち取るのに、悪魔的に言わせれば手段もくそもありません」

「おや、メフィストさん。そういう言葉はよろしくくないですよ？」

思わぬ注意を受け、不意を突かれたメフィストきよとんとした顔をする。

対してマックススウエルはカップの取っ手を掴み、ゆつくりと手で軽く回しながら微笑した。

『『賢い』という言葉。私は思うのです。この言葉にこそ、人間を人間たらしめるエッセンスが全て詰まっていると』

ゆつたりとかき混ぜられる珈琲。徐々に落ち着いてきたはずの香りと湯気が、再び熱を入れられたかのように温かみのある白気を醸し出し始める。

「なぜなら、『賢い』ということはAとBの知能を比べている時に発言するもの。比較対象が何であれ、最終的に『賢い』の定義でランク付けするのは誰でしょう？」

鳥賊イカと蝟タコでは、蝟タコの方が賢いと言われている。

蝟タコと鴉では、鴉の方が賢いと言われている。

鴉とイルカでは、イルカの方が賢いと言われている。

イルカとチンパンジーでは、チンパンジーの方が賢いと言われている。

この世の生命は大小あれど知能を有する。無論、知能が高いほど種として優秀であり、自然を生き抜くことに適している。

だが彼らはその生涯の中で、自身と他者のどちらが知能で勝っているかなどと考えることはない。

では、この知能指数を比較し、それを格付けしている裁定者は何者なのか。

「——そう、他ならぬ人間です」

鳥賊イカよりも、

蝮タコよりも、

鴉よりも、

イルカよりも、

チンパンジーよりも、

何者よりも知能で勝っていると自負している種族こそ、頼んだわけでもなく他者同士を比較して優劣を決めてしまう。

「すごいですよ。何かと何かを勝手に比較して、勝手にどっちが上かって決めつけてしまうんですから。そのくせ、『賢い』ランキングの最上位は自分たち人間だと信じて疑わない」

あの動物はなんと愚かなのだろう。その棒を使って餌を揺らせばとれるというのに。

あの動物はなんと愚かなのだろう。その台を持ってくれば餌に手が届くというのに。

あの動物はそれができない。自分たちはそれが思いつく。

自分達こそ最優の生命体である。

最優だからこそ、知識の更なる探求を開拓する権利がある。

「自分たちが一番上だということを絶対条件にして、世の中の智慧にあれこれ優劣を決めてるんです。それ——まるで神様みたいじゃないですか？」

何が違うだろうか。神の都合で人間の女が神の子を孕ませられるのと、より優れた種族を造るためにラットで交配実験を重ねる人間のと。

魔術の探求と称して他者の肉体を愚弄し、命を奪い、魂さえ穢すのと。

神は不条理で理不尽だ。しかし、それ以上に恩恵を世界にもたらす。

では人間が世界にもたらすのは——

「その過程で生まれたのが私、ひいては悪魔そのもの。強欲に知識を求め、より盤石なる絶対優位を保つため、人間より上位の存在がいるという概念を定義付けして我々をこの世に喚び込んだ。そして、その悪魔や神からさえ智慧という権能を根刮ぎ奪い取ろうとしてくる」

ああ恐ろしい、と言葉とは裏腹にマックスウエルは愉しそうに唇を歪めていた。

彼の生まれた経緯、そして拒絶された経緯。

自分勝手に「私」という概念理論を定義しておきながら、「私」を否定するために多くの学士が理論を述べ、そして——。

だが、人間のその身勝手さこそ、悪魔として定義された彼が愛すべきものである。

「——良いのではないですか？ 人間は私達を求め、私達も人間を求め。これまさに相思相愛！ ああ、なんと素敵なラブストーリー！ みんな幸せハッピーエンド、終幕まで3、2、1！」

Bannon、と掌で何かが爆発するジェスチャーをとり、メフィストは

嘲笑う。

メフィストとてそれは同じこと。人間が身勝手ということとは、とつ
くの昔に承知している。

だから彼は人間に従う。その傲慢さが隙を見せた時、最高の絶望と
墮落を肉体と魂に刻み付けるために。

それこそが愉悦の悪魔して、彼が求められているもの。

「そう考えると誠に皮肉な話ですね、彼らは。——いや、今の場合
だと彼ですかね？」

「うふふふ、本当に可哀そうな話でございます。人間に求められてこ
そ悪魔。しかし彼は求められなかった。求められる前に終劇おわってし
まった」

二人が脳裏に弾き出したのは、この壮大な異変の元凶。

七十億人を気付かれないまま殺し、人類が三千年積み上げてきた歴
史すら奪い去った魔術の祖——魔術王。

その魔術王に使役される、合計七十二柱の魔神。

味方につき、敵につき。各特異点で魔神柱と双方に関わったからこ
そ、メフィストは彼らを笑う。

「つまらな楽しさを知らず、あせつまらなさを知らず、求めることを恐れ、求められ
ることを願った！ 首輪の繋がれた飼犬でも、もう少し自分を慰め
る方法がありますでしょうに」

ケタケタと憐れむようにメフィストは笑い続ける。名だたる悪魔
の中でも最上位の知名度と権能を有する彼あつちの、その暴走と境遇に、で
はない。

一つの悪魔として、一つの「個」として存在が許されないからこそ
生じた「全能感」こそを彼は憐憫した。

故に、やはり彼は悪魔ではなく魔神と呼称するのが相応しい。

否、メフィスト以上に世界を、

そして人類を等しく憐憫する彼こそ——

「仕方のないことです。彼はそうあれと望まれて編まれ、組み込まれたもの。それに今なお従っている以上、彼も実に悪魔らしいと言えるでしょう」

「全くその通りでございます。メフィストクエスチョン問1、悪魔とは何か。実に簡単な問いかけです」

だらりと肩を垂らし、奇妙な体勢のまま脱力しながらメフィストは不気味に笑みを浮かべる。

「忠実であること。それが悪魔を悪魔たらしめる最も強力な楔に他ならないですからねエ」

続けてかっくりと壊れた人形のように首を傾け、仰々しくわざとらしい動作でメフィストは優雅に首を垂れる。

それは誰に向けての忠義の証か。

答えは、くつくつと顔を見せないまま何かを堪えるメフィストが明かしていく。

「ええ、ええ。私は忠実ですとも——プフツ。プフフフフ」

直後、弾けたように耳障りな大笑が通路を支配した。

オーバーアクションで大きくのけぞりながら壊れた笑い袋のように彼は奇笑をあげる。

ゲラゲラと甲高い雑音が響く。目頭を押さえ、舌が垂れるほどに爆笑する。

「ヒューツヒツヒツヒツヒツ！ そう、私は私自身にとっても忠実でございますー！ 私がやりたいと思っただけです。従いますよ、はい。私に！」

のけぞった体勢から瞬時に上体を起こし、メフィストはマックスウエルの鼻先に急接近した。

サングラス越しに、彼は業務的な笑顔のまま眉一つ動かさない。気にせずメフィストは続ける。

「そして私がつまらないと思ったら——どうなっちゃうと思います？ イヒツ」

奇怪な声できしりと歯を見せる。

問いかけの答えを暗示するかのように、メフィストはいつの間にか手にしていた鋏をこれ見よがしに見せつけた。

汚れも刃こぼれも、血の一つもない綺麗な両刃。

それだけに、ぎらりと反射する光がその清潔な刃の裏に潜む残忍さを、おくびも隠さずにあてつけてくるように見えた。

「さて、どうなるのでしょうか。どちらにせよ私には関係ない話。貴方は貴方で私は私、所詮はそういう仲でしょう」

あくまで冷ややかに。マックスウエルはそう返す。

すると、メフィストは途端につまらなそうに唇を尖らせて分かりやすく不貞くされた。

「ええ。そこはテンション上げてくのがノリじゃないですかあ？

人が頑張つてムードあげていくのに冷や水ぶっかけられるのはよくないと思います。あつ、私、人ではなくあくまでサーヴァントなのですが」

「頑張らなくても常テンションそれじゃないですか。結局のところ、何が言いたかったんです？」

途端、待つてましたとばかりにメフィストが姿勢を正し、大袈裟に

両手を広げて楽しそうに口を開いた。

本当に、心の底からその境遇を楽しんであげているかのように。

「つまるところ！ わたくしは彼が面白おかしくてたまりません。あまで歪んでおいて、尚悪魔らしく己にのみ忠実、忠誠、絶対！ なるほど、わたくし達よりもよっぽど悪魔らしい！」

「私の場合はデービルというよりはデーモンの類ですけども。あつ、心臓は落としませんのであしからず」

さてそろそろ、とマックスウエルは静かに立ち上がり、置いていたカップを片手にそのまま足を運ぶ。

当然のようにメフィストもそれに続き、二人は多目的広場を後にした。

二人は通路を肩を並べて歩いた。

マックスウエルは執事のバトラーのように規則正しく規律的に、メフィストは落ち着きがなくふらふらとした足取りで。

「何もあなたまでついてこなくても」

「いやはや、別段理由はございません。なんとなく愉しそうな匂いがあったもので」

「それはなんと悪魔らしい理由で。私たちに限っては生粋の悪魔と呼んでいいのか分かりませんが」

「何をおっしゃいますやら？ 私もあなたも人間に望まれ、このつまらない世界に刺激を与えるために生まれた者同士。人間はいつだって求めるものなのです。そう、悪魔を！ であるならば？ 私達も紛れもなく『メフィストフェレス』で『マックスウエル』でございます」
「そうですね。ええ、確かにその通りだ。我々は常に望まれる。『存在するな』という拒絶と、『存在してほしい』という懇願を同時に望まれる。そういう矛盾した存在が、歪められて悪魔を自称するのでしょうか」

何気ない軽口を交わしながら、二人は通路を歩き続ける。

二人が目指すのはマスターのマイルーム。

マックスウエルの見立てでは、レイシフト先での資源調達を終えて、自室でゆつくりと休息をとっている頃だろう。

そこへねぎらいを兼ねて珈琲を差し入れに行く。と、ついでに来たメフィストは、面白おかしくマスターをからかい倒すつもりなのだろう。

「ところでマックスウエルさん。貴方様、此度の召喚ではどんな具合になってます？」

とあって、懐から分厚い物理論の参考書を持ち出してケタケタと大笑する。

サングラスと浮ついた口元で固定したまま、マックスウエルは沈黙を貫く。

「うくん。ならばならば、この場で確かめてみましょうか」

それを勢いよく振りかぶったところで、マックスウエルから即座に降参の白旗が上がった。

「わかった、わかりましたって。そうですよ、それで殴られるのはキツイです。というかそんな広辞苑みたいな鈍器本でボカられたら普通に痛いですよ？ 下手したら死にますよね？」

「おっとそうでしたあ〜！ メッフィーてばお茶目さん！ どれどれ試しに一つ」

エイツと気の抜けた掛け声で、メフィストは振り上げた鈍器物理参考書を勢いよく脳天に叩き落した。

思わず目をそむけたくなるような重みと重音が鳴る。実際その悼たまれな光景に、マックスウエルは姿勢を正したまま首だけ逸らし

ていた。

「グツヘエ！ こりやあいいですね、疲れた体にシヤキツとドメが刺されます！ ああ衝撃で善と悪の私に別れてしまいそう！」

言動の割には愉快そうに早口でまくしたて、それでもやつぱり効いたのか地面に顔面から倒れ込むメフィスト。

だらしなく舌を垂らして白目を剥き、心なしか頭上にひよこなり星なりが回って見える。

言わんこつちやない、とマックスウエルは心配して倒れ伏す彼に近寄った。

その瞬間――

「――それで。先程の言葉は、そういうことでよろしいのでしょうか？」

僅かにサングラスがずり落ちる。にったりと、まるで痛みが効いていないようにケロツとしたメフィストとぼつちり目が合ってしまった。

物理参考書
元々サーヴァントの身である彼からすれば、何の神秘性も持たない鈍器の一撃など風に撫でられた程度の衝撃だったろう。

ひとえに彼のとち狂った、そして芝居がかった演技だからこそ、そういう風に見せられてしまった。

―― 一本取られましたか

マックスウエルは苦笑を浮かべ、サングラスを正してから彼の問いかけに同意を返した。

「ええ。その通りです。私は貴方の攻撃では倒されることはありません。ただ、その理論の正確差をぶつけられてしまえば、それこそ風

穴が空いてしまうでしょう。ぽっかりと」

悠々と、なんてことのないように、彼は自らの弱点を易々と語った。マックスウエルの悪魔。

それは一人の天才数学者が知識の果てに生み出した妄想の怪物。夢のような悪魔。

暖と冷を分けるのに必要なエネルギーがないとしたら——
そんな夢物語のような話から生まれ、しかし当時誰もが彼の存在を否定できず、逆説的に彼は存在することになってしまった。

しかし、1980年代に「マックスウエルの悪魔」と名付けられたこの法則は完全に「存在しない」と否定されてしまっている。2016年ともなれば、否定方法がその辺で販売されている物理の参考書に掲載されるくらい有名な話だ。

故に、「マックスウエルの悪魔」を否定できなかった1980年より前の英霊に、彼は決して滅ぼされることはない。

そして、「マックスウエルの悪魔」が否定されたそれ以降の英霊、ひいては彼のマスターや残存カルデア職員には素の能力ですら彼は劣るだろう。

「やっぱりあれですかね。ここがどこの時間軸とも切り離された隔離空間だからでしょうか。私としても変な気分ですよ、誰かと会うたび『あ、こいつに勝てるな』とか『あつダメだこれ死んじゃう』とか沸き起こるのは」

彼の強さは彼が呼ばれた年代にて変貌する。

ならば、それらすべてが焼却されたカルデアではどうなるのか。

その答えは、相対する者によって不死性が変化するというものだった。

例えば12世紀そこらのリチャード一世が彼と遭遇した場合、彼の不死性は絶対のものとなり滅ぼされることはない。ただし殴られると痛いし斬られると血が出る。沖田さんが既に証明済みである。

反対に、彼の存在が否定された現代社会においては、彼は一般的な理系学生にすら及ばないだろう。その法則を否定される式を突き付けられるだけで問答無用で消滅してしまう。

人理の焼却された現状、カルデアの時間軸は「2016年」でもあり「それ以外」でもある。

よって、時代を遡るごとに不死性が絶対的なものとなるマックスウエルの悪魔は、自分を認識する者が「証明前」か「証明後」によって目まぐるしくパワーバランスが変動するという曖昧な存在と化していた。

「キツヒツヒヒヒヒ！ ヒーハハハハハホホホホホホヴオ
フオエツ！」

今日一番の爆笑が周囲にこだまする。

あまりに笑いすぎたのか、激しく咳き込んだメフィストは必死に胸を叩いて呼吸を落ち着かせようとした。

「ゲホツ、ゲホツ、ン、ンンツ！ 面白い！ 面白いですねぇそれ！
なんですかそれ、人によって死ぬか死なないかわ変わるって。なんとア
ンバランス！ 理詰めが得意分野のあなた自身が非理論的で曖昧と
は！」

一しきり笑い飛ばした後、次第に落ち着いてきたのか少しずつ笑い
声が収まっていく。

それでも引き裂いた口元はこれ以上ない満面の笑みだった。

楽しそうに、実に楽しそうにメフィストは笑う、全てを笑い飛ばす。

「マックスウエルの悪魔。完全に否定された法則。究極なまでに論理的に拒絶された概念。それなのに、それが形となった悪魔が、『完全』
を理想とされた法則とは真逆の『変化』し続けるサーヴァント！ 学者
マックスウエルが聞いたら驚天動地極まれり！」

だから面白い！ とメフィストは一蹴する。

この変わり続ける世界を。悪魔さえ変えてしまう世界を。

その世界を支えていく人間を。その希望を、絶望さえも笑い飛ばす。

人理焼却に手を貸すのも、世界を救うなんて大それた思想の下ではない。

面白いから。

人理を使つて何かを企てる者も、それを阻もうとする僅かな人間たちの足掻きも。

その結果で世界が終わったとしてもメフィストフェレスは悲観しない。

この世界が瓦解していくその最期の瞬間まで、メフィストフェレスは全てを笑い続けるだろう。

「それはそうとして、マックスウエルさん。いい加減それが何なのか教えてくださってもよろしいのではく？」

ねつとりとした視線でメフィストが指し示すのは、マックスウエルがずっと片手に携えていたカップ。

中に注がれた珈琲は未だに湯気を上げている。

「これですか？ 見ての通り、珈琲でございますが」

メフィストの笑みが深まる。

その先を、と言外に急かしていた。

「はいはい。————メフィストさん。貴方は我らがマスターのこ
と、お気に召してますか？」

メフィストの表情は笑顔のまま。是とも否とも口には出さない。

それでも同じ無辜の悪魔同士。互いに伝わるものなどいくらでもある。

マックスウエルは返答を待たずに話を続ける。

「そうですか。そうでしよう。しかし悲しきかな、マスターは今を生きる人間。我々が関わりうとそうでなかりうと、いずれはその命を終える身。そのような逸材をこのまま失うのは実に惜しい」

「その心は？」

「——マスターには世継ぎをつくっていたただかないと」

愉悦に満ちた両者の笑みが、三日月のように大きく吊り上がった。

「心ある善意の魔術師の方から、そんな感情を呼び起こす薬品をちよいと垂らしまして。ええ、ちよいとですよ。ホントホント」

「心ある善意の魔術師さんですかあ。さぞかし善と悪の矛盾した思想を抱えている素晴らしい方なのでしょうね」

——良かれと思って。

強力な速攻作用を持つその霊薬を生成した天才錬金術師は、後日ルーラー警察に尋問された際にそう証言した、と語られている。

「さて、そういうわけで早速向かしましょう。疲れたマスターには心地よい珈琲を飲んでリラックスしていただかなければ」

「そうですその通りい。善は急げと言いますし……おや、あれは——」

意気揚々と善行を積み^{あくぎよう}に赴こうと足早になった二人。

その進行方向から、何者かが目にも止まらぬ速さで路道を疾走していた。

落ちかけた陽が照らす空のような艶やかな紫髪。

存在そのものが蠱惑的と言えるほどに瑞々しい肢体。最低限の箇

所だけを隠した衣装。

そしてある一族の長が代々被ってきた、不気味な骸骨の白面。

「これは静謐の翁さん。どうされまし——」

アサシンのサーヴァントとしてカルデアに召喚された英霊、ハサン・サツバーハ。

歴代十九人の長が全てこの名を受け継いでおり、彼女は便宜上「静謐のハサン」と呼称されている。

全身を毒に浸し、髪の本から分泌される体液までが致死量の猛毒。

そして何より、マスターラブ勢の強大な勢力の一員なのだ——

「◇#●★?・◎§@*〈ツ?!」

その彼女が、言語にしがたい素っ頓狂な悲鳴を上げて疾駆していた。

否、その走りは疾駆ではなく逃走のそれだった。

「……どうかしたのでしょいか」

「惜しいですねえ。ボイスレコーダーとかあればいいもの録れたのですが」

戦場や敵地からの帰還でなら理解できるが、ここはカルデア。

多少なりとも危険性の高い英霊は滞在しているが、全身猛毒の彼女が全力で逃走する相手など果たしていただろうか。

だが、次いで進路から現れた二体の英霊に今度こそ二人は目を見開くことになる。

「何なんですか、あれは……! あんなの反則です! ちーとという

奴です！ 静謐さんはいつの間にかいなくなっしまいましたすし……！

「くっ！ 我ら二人をもつてして撤退せざるを得ないとは……！ この頼光、武士として一生の恥！」

清姫。

源頼光。

どちらもカルデアに召喚された英霊。竜に変身できる力と魔を払う力を振るう二人は、カルデアの中でも強力な戦闘能力を誇ることは間違いないだろう。

しかしこの両者の名は、先の静謐のハサンと合わせて別の意味でカルデア内に知れ渡っている。

通称『マイルームの寢床に勝手に入り込んでくる』トリオ。命以外の別の物を奪われそう。

宇宙の根源的マイナス波動を感じる。というか匂いでマスターを探知する。

愛の力で溶岩の中を遊泳したという話はあまりにも有名。

そのような物の怪三人衆が退却しているのだ。

それはつまり、この先に彼女たちを退かせた張本人がいるということ。

「なあんだか面白そうなことになっているようですねえ、マックスウエルさん？」

「……嫌な予感しかしないのですが」

「——去れ、魔であることを強いられた者達」

室内の温度が、急激に冷えたような気がした。

いや、実際に待機中の温度が下がっていた。冷え切った山頂ではなにかと思えるほど凍える気温に床や壁が僅かに霜を帯びた。

マックスウエルがあれだけ保温していた珈琲でさえ、水面から瞬時

に凍り付き始めていたのだ。

「——ッ！」

姿も何もまだ見せていない。だが、二人は思わず首に手を伸ばしていた。

ともすればこの瞬間、自分の身体は既に首と永遠に分かたれていたのように錯覚したからだ。

「契約者は疲弊している。故に、契約者を守護することが我が使命哉」

がしやり、と金属がこすれ合う重厚な音が鳴り響く。

電灯で照らされていたはずの通路の奥が、竜の潜む巨大な洞穴の最奥に続いているかと錯覚するほどに、圧倒的な重圧が周囲を覆いつくした。

そして次の瞬間、それは闇を纏って通路奥から顕現した。

「なれば、それに仇名す愚か者共には鉄槌を下さねばならぬ。されど命までは剥奪せん。晩鐘が汝らの名を指し示すその刻まで——」

死が、歩いてきていた。

そう形容するしかないほど、濃密な死が騎士という形をもって迫ってきていた。

コツンと響く足音は、自らの命が絶たれるまでのカウントダウンだろうか。

遠方から此方を見据える青白い双瞳は、吹けば掻き消えるような己のか細い命の灯だろうか。

死神と呼ぶにはあまりに猛々しく。剣士と呼ぶにはあまりに絶望的だ。

少なくとも————悪魔程度の命なら容易く摘み取る暗殺者^{アサシン}のサーヴァントだった。

「——おやおや。おやおやおやおやおや。これ、ひよつとしてピンチなのではあッ！ マックスウエルさん、法則否定パラメーター的にはいかがです？ 今、不死つてます？」
「あく……。その、おそらく年代的には勝てますけど……。無理です、多分問答無用で斬られます」

「……………」
「……………」

「よし逃げましょーう！ イヒヒヒヒヒ！」

「撤退——！ 総員撤退——！」

人も、神も、怪物も、悪魔も、そして暗殺者も。

等しくカルデアは——人類最後のマスターは受け入れる。

なぜなら、生前彼らが何を成し、何を犯していたとしても。

マスターにとっては、偉大なる先人たちに変わりはないのだから——。

尚、最近寝つきがよくなったとマスター本人は語っている。

クラス：キャスター

真名：マックスウエルの悪魔

キャラクター紹介

とある数学者が根源を求め、その過程で生み出された妄想の悪魔。全人類が求める「無限のエネルギー」という欲望を血肉として降誕した。

パラメーター

筋力：—

耐久：—

敏捷：—

魔力：—

幸運：――

宝具：EX

小見出しマテリアル

沖田や信長とは敵対した者同士。

されど今回はマスターを共とするので意外と協力的。

相手する英霊によって強さが極端に変わる性質上、古い英霊であるほど余裕をもって対応できて落ち着くらしい。心のゆとり重要。

ただし、稀代の数学者アルキメデスや全能の科学者ダ・ヴィンチちゃんなどは、時代の壁を越えて彼を滅ぼし得る可能性を持っている。特に星の開拓者スキル持ちのダ・ヴィンチちゃんとは相性最悪。

同じく数学者のバベッジとも関係は良好。そのうち蒸気と無限エネルギーを組み合わせた合体ロボでも造り上げるのではないだろうか。

――なんてことを割と真面目に考えていたりするので、アヴィケブロンにも協力を仰いでいる。

人に歪められた英霊大先輩アンリマユともそれなりに話す。主に悪戯とかそういう話だが。

無所属のキャスター

天井を魚影が通過する。

一見して意味不明な現象。だが、それも此処では日常茶飯事。いちいち気にしてはきりが無い一つの現象に過ぎない。

壁、床、天井。それら全て、コバルトブルーに淡く輝く蒼光を放っていた。

空間全てに広がる海、海、海。先の先まで続く大海は、最果てを感じさせないほどの広大さを、雄大さを刻み付ける。

大自然そのものである幻想的な光景は、しかし実際はカルデアの一室という枠組みでしかなかった。

カルデア内にいくつか設けてあるシミュレータールーム。この大海は、記録されていた「海」という情報を展開させたホログラフに過ぎない。

事象電脳魔・ラプラスと提携しており、記録された情報を元に仮想空間を展開できる。情報さえ残されていれば各特異点の簡易的な復元さえ可能としていた。

本物さながらの迫力を生み出すシミュレータの精密性も去ることながら、真に驚くべきはこれを同時に複数作動させることのできるカルデアの電力だろう。

「うーむ。試作段階中の霊フォン。あれ、もう少しコスパを抑えられそうだな。今までは無間の歯車という希少素材の粗悪品を失敬していたが、最近増えたあの世系サーヴァント達から助力を得られれば……」

人間一人が通れるほどしか設けられていない通路に反響する声。あまりに大きい一声。しかし通路に映る影は一つ。馬鹿でかいだけの単なる独り言だった。

大柄な体躯。はち切れんばかりの浮き上がった筋肉。アメコミヒーローのような原色的な青いスーツ。

そして何よりも目を引くのが、雄々しく鬣を靡かせる猛々しい獅子

の頭だった。

異彩極まる風貌をした獅子頭の獣人。こんなナリながら、クラスは魔術師。^{キヤスター}

驚くなかれ、彼こそ偉大な発明家——トーマス・アルバ・エジソンその人である。

「ふむ。バビロニアに顕現していたという冥府の女神に協力を取り付けることができればなあ……。いや待てよ、それでは霊フォンの繋がりがバビロニアの冥府だけになってしまうのか？」

大声での独り言を止めず、ガツガツと足早に進む。

向かう先はこの特異な空間を生んだ張本人の住まう部屋。

カルデアに召喚されいながら、今まで直接的な一切の関与を絶っている風変わりなサーヴァント。

彼が召喚されて最初に取った行動が、シミュレーターシステムを起動させてその中に引きこもることだった。

実際に彼の姿を見たことがある者は、数多のサーヴァントの中でも数えるほどしかない。

「失礼するぞー！ 学士殿はおられるかー！」

扉をあけ放ち、よく通る声が部屋中に反響する。

廊下に広がっていた海とは打って変わって、そこは深海のような漆蒼の世界だった。

ともすれば泥とも見える暗黒の空間。僅かに差し込む光でほんのり青みを帯びて、やつとそこが同じ海の中だと認識することができるほどの黒。

その中央に一人、背を向けて座り込む者がいた。

後姿を見つけたエジソンは喜んでずかずか入室していく。

「おお、やはりおられたか！ ここまでたどり着くのに苦労したのなんの。シミュレーター内で何重と展開される仮想空間の中から君のいそうな場所をしらみつぶしに回って——」

「——それ以上近づくな」

拒絶を意味する嫌悪的な一声。思わずエジソンも足を止める。

旋毛を向けて座っていた男が、けだるそうにエジソンの足下を指さしていた。

「私は忙しい。実に忙しいうえに緻密な作業をしている。だからあまり私を怒らせないでください。怒ることは嫌悪すべき一つの無駄だからです」

男の向ける指先にエジソンは足下に目を落とす。

するとどうだろう。真つ暗で最初は気づかなかつたが、そこにはうつすらと白い線で何かの数式が書き込まれているように見えた。

いや、そこだけではない。

紙に、机に、床に、壁に、天井に。見渡す限り、夥しい数の方程式がびつしりと書き綴られていたのだ。

狂気。そうとしか言いようのない表現にエジソンはごくりとつばを飲み込む。

「ただ、ここに見つけたことは褒めてあげましょう。この場所はマスター含め、数人ほどしか知らない場所ですからね。それを自力で発見した報酬として、用件ぐらいなら聞いても構いませんが」

のそりと身を起こし、無造作に跳ね散らかった髪をかき上げて男はエジソンの方へ振り返った。

暗がりでも分かる厭世的な表情。無関心さをおくびにも隠さない瞳。

排他的な態度をここまで露骨にぶつけられた。にもかかわらず、エジソンはどこ吹く風と受け流して大いに喜んでいた。

「なるほど。まさに伝承の通りというわけか！ お会いできて光栄ですな、ミスター・アルキメデス！」

偉大なるシラクサの数学者。魔術の域にまで達した完全なる理論。

それがアルキメデス。ピタゴラスと並び、今の時代なら子供の頃から教わる稀代の数学者。

そう呼ばれた男ことアルキメデスは、無駄話はいいとばかりに話を急かさせた。

「そういうのはいらなから。ミスターも不要。それで、私の数

式証明の邪魔をしてまで尋ねたのです。さっさと話してください」

「おっと、それは失礼した。しかし安心してほしい。私はローマ兵ではないし武器も持っていない。ただの天才発明家である！」

アルキメデスの眉間にどんだん皺が寄っていく。

これはいけないとエジソンは早急に本題を持ちかけた。

「重ねて失礼。では単刀直入に。貴方の叡智を貸していただきたい」

「おかしなことを。貴方は自称するほどの天才なのでしょう？　ならば、己が頭脳に頼ることが自明の理では？」

痛いところをつかれ、エジソンの口元が下がる。

しかし引き下がらない。あくまでも胸を張り続け、エジソンは話を続けた。

「誠にその通り。だが私一人では成し遂げられないものもあるのだ。悔しいことにな」

「そうですか。ですがお断り申し上げます。先に言ったように私は忙しいので」

脈略無しの突然の却下。本当に聞く耳を持っていたのかと疑うほど、すつぱりと断られてエジソンも目を丸くした。

アルキメデスが煩わしそうに手を広げる。周囲に記された数式を見ろ、とのことだろう。

彼はここに召喚されて以降、不明瞭のまま解析されずに残された世界の謎を解き明かしていた。

ミレニウム懸賞問題と称される七大未証明問題は既に証明済み。

その他にも無限を求められるか否か、ゴールドバッハの予想、指数時間仮説と、現代の数学者では匙を投げる定礎を解析し、証明していた。

無論、その功績を公に公表するつもりもないし自分の手柄にするつもりはない。

困難と言われる解があるならそれを求める。登山家が言うところの、あくまでそこにあつたから追及しているだけなのだ。

それはそれで非常に興味深い、とエジソンは唸るが、どうにか交渉を続けようと頭を悩ませる。

その時ふと、今まで抱いていた疑念を何気なしにアルキメデスに質

問した。

「しかしてアルキメデスくん。これは純粋な興味からだ、この空間世界はなぜ海なのだね？」

「決まっています。海とは未知。そして未知とは、知識だ」

ここで初めて、今まで受動的な対応だったアルキメデスが能動的に口を開いた。

「私は不合理的が嫌いだ。合理的に、理論的に物事が運ぶ世界こそを私は望んでいる」

その思想には同意だとエジソンも首を縦に振る。それでも、この部屋は些か突出しすぎではないかと眉をひそめてしまう。

それも当然。アルキメデスは数学を愛したために、非数学的な現象を理解することを放棄した。

端的に言つて、数学以外に興味はないのだ。

例えば、理論上は確実にそうなるといえる作戦。だがそこに人の心情は考慮されない。

怒りという一時のくだらない感情で殺されたアルキメデスだからこそ、生前にも増してそういった不明確で不明瞭な概念に嫌悪感を示していた。

言つてしまえば究極の理系。それが、英霊として昇華された彼の正体。

「そして見たのだ。蜃気楼のように儚く残っている記憶に焼きついた『全知』を」

だからこそ、得たものがあつたのか。

蘇ったキリストを目撃したペテロのように。釈迦の掌で回った孫悟空のように。

心の底から崇拜する絶対の存在を謁見したような陶酔した瞳で、アルキメデスは強く語った。

「あれこそ私が仕えるに値する絶対の存在！ 遠い過去の記憶のように、それは既に磨耗してしまった。だが記憶の蓋の裏にこびり付いていたそれをイメージし、私はこの空間を作り上げた。閑静、洗練、無疵。これが、この空間こそが私の理想。私の主なのだ。人の下につく

など、不確定要素にあふれすぎて反吐が出る」

だが、と大量の苦虫を噛み潰したような表情で強く歯ぎしりする。「しかし失敗だ。実に失敗だった。まさかトリスメギストスを擬似的な知能体と定義づけることでこの私を誤認させるとは……。レオナルドめ、やってくれましたよ。まったく」

「その言い分だと、貴方は人の存在を否定しているように聞こえるが……」

「当然です。人間など滅んでも構わない。不明確、不理解、不可解。そんな奴等が蔓延った歴史など守る価値がありませんか。私自身を含め、数学的に正しい終わりを迎えることで初めて、私は人類という存在を好くことができるでしょうかね」

正しい終わり。

それはすなわち人間の、人類の終わり。

その過程が人理焼却か、それ以外の何かか。どちらにせよ、アルキメデスは最初から人理修復を望んでいなかったのだ。

この世に残るのは知性と明確さを兼ね備えた生命が残れば良い。そのためには一度世界が滅んだところで何も問題はないとまで思っていた。

ダ・ヴィンチちゃんが量子演算装置「トリスメギストス」に疑似人工知能プロテクトでカバーして偽装でもしない限り、彼はカルデアに召喚されることはなかっただろう。

そして召喚されて尚、彼はカルデアに手を貸すことをほとんどしなかった。この空間に一人こもっていることが何よりの証。

おおよそ人心から離れた思想。合理主義とは名前だけの、合理という概念だけを優先した歪な思想。

それを聴き受けたエジソンは、沈黙したまま固まってしまふ。

——これで諦めて帰るだろう。

そう確信したアルキメデスは、追及していた最終定理の計測に戻ろうと背中を見せて——

「——人類をそう否定的に見るものでもないぞ！」

「なっ！」

直後、浮遊感がアルキメデスを襲った。

いつの間にかアルキメデスの背後に移動していたエジソンが、彼を肩に担ぎあげていたのだ。

「ご丁寧に床に書きなぐられていた数式の空白地帯を歩いて、だ。

「さあ行こうアルキメデスくん！」

「何をする！ いい加減に諦めろライオンめが！ この、離せ！」

「ハッハッハ！ 断るより前に、まずはその目で確認していただかないとね！ なに、悪い話ではないはずだ！」

「ふぎけるな！ 第一、外界に出ること自体既に嫌な予感が——！」

反抗するアルキメデスの力も何のその。筋力ランクはほぼ同等だが質と体格ではエジソンが勝っている。

じたばたと暴れるアルキメデスを悠々と担ぎ、アメコミ風の高笑いをあげながらエジソンは大足でその場を後にした。



「これは……」

かつて人理焼却の折に生まれた一つの特異点。

独立戦争間際のアメリカ大陸で繰り広げられたのは、東西での争いではなく古代ケルト神話より顕現した神代の戦士たちだった。

本来の歴史よりあまりに外れた大陸と化した特異点。故についた作戦名は「北米神話大戦 イ・プルーリバス・ウナム」。

シミュレータールームで形成されていたこの空間は、まさにその異質な時間軸そのものだった。そしてアルキメデスが連行されたのは、第五特異点にてエジソンが根城にしていたデンバーの屋敷、その地下空間だった。

そこで視界に飛び込んできた光景に、驚愕に目を見開いてしまつて

いた。

灰色の壁と天井に覆われた大部屋に聳え立つ、見上げんばかりの巨大な塔。

いや、それは塔と見紛うほどの巨大なロボットだった。

「フフフ、だから言ったのだ。百聞は一見に如かず！ ただいま特許志願中だ」

円柱状の頭部。右腕には工業用重機に使われるような巨大なアームクロー。左腕は建設中のためかフレームだけの状態である。

全体的に星条旗をモチーフとしたカラーリングを施されており、節々からは待機状態を示すかのように蒸気を噴出していた。

「……目的や出来の良し悪しはひとまず置いておくとして、その純粋な努力は評価しよう。しかしこれほどの規模の建設。当然、貴方だけで行われたわけではなさそうだが」

「勿論である！ 心強い頼れる仲間たちがいたからこそ、我ら『直流鋼国機構』はこれほどの偉業に着手できているのだ」

腰に手を添えて高らかに笑う。自分一人の才覚に溺れず、優れた協力者がいることを誇りと捉える活気の良い笑いだった。

「ではイカしたメンバーを紹介しよう！」

そういつて彼が広げた手の先。つられてアルキメデスの視線が動く。

見れば、巨大ロボットの周りには他のサーヴァントの姿が見えた。エジソンとアルキメデスが見ていることに気が付いたのか、彼らは揃ってこちらに歩いてくる。

皆、初めてアルキメデスの姿を見たのだろう。複数の物珍しそうな視線に耐え切れず、アルキメデスはぼつの悪そうな表情で目をそらす。

「まずは快き直流の理解者——エミヤくん！」

「よろしくたの—— なっ、貴様は！ ……いや、今はつつこまないでおこう」

「直流たる我が友——ミスターバベッジ！」

「バベジンである。先輩にあたる貴殿の姿を拝見できて光栄である。

友好の証に我式ぶら下がり健康機を送ろう」

「直流の化身——マックスウエルくん！」

「勝手に私の根幹捻じ曲げないでください。貴方が有名なアルキメデスなんです。イメーシ通りというかなんというか」

「直流カバラの創設者——アヴィケブロンくん！」

「……………」

「以上が、我が『直流鋼国機構』の由緒あるメンバーである！ いかがかね、ミスター・アルキメデス」

センターにエジソンを据え、戦隊モノのヒーローよろしく綺麗に整列する自称『直流鋼国機構』の面々たち。

背後に爆発すら見えそうなほどのポージングに、アルキメデスは思わず一言こぼしてしまった。

「おお……控えめにいってバカの集まりかここは」

というかキャストークラス偏りすぎだ、と柄にもない冷静なツッコミまで加える。

そこで待ったの声がアヴィケブロンから掛けられた。

「勘違いしなくてもいいが、僕はそのなんとか機構のメンバーではない。事前に巨大ゴーレムの試作をできるといふ条件から技術を提供しているだけだ」

「我も同様である。友たる者の頼みを無下にする訳にもいかないのだが、私の悲願成就のために得られるもの有りとみて参列している。電気悔しい」

「私はあれです。面白そうな雰囲気につられて、つい」

「……私は、その、なんだ。ここに来て厨房に立つ機会が増えたのはいが、肝心の本職に中々携われなくてね。その、うむ。ちよつと疼くのだ。こういう大量生産の機会に関わるのが」

「だ、そうだが」

「ガーン！」

まさかの冷たい反応に大口を開けてあんどりと固まるエジソン。それを冷めた横目で眺めるアルキメデス。

嘆息し、割と本気でショックを受けていそうなエジソンに質問を投げた。

「それで、貴方はこれで何を目論んでいるのです？ 無理やり拉致してきたのだ、目的ぐらいは尋ねても問題はないはずですが」

「よくぞ尋ねてくれた！」

先程までの意気消沈ぶりを吹き飛ばすかのように、エジソンがこやかに微笑む。

「いくらサーヴァントが一騎当千、剛鬼無双の英霊達といえど、彼らにも限界というものは必ず訪れる。壮大な人理修復の旅の中、そのような危機的状況は幾度も遭遇した」

例えば、原初の大神が無尽蔵に生み出す新人類。

例えば、魔術の祖王より連なる七十二柱の魔神。

これら全て、僅か一体でも大抵のサーヴァントを超えるスペックを有していた。何より恐ろしいことは、一体でも強力なそれらは必ず大軍を成していたということだった。

実際、カルデアのサーヴァント達のみでそれを覆せるだろうか。

覆せるのかもしれない。困難を悉く跳ね返してきたからこそその英霊である。

けれど消耗するのはこちらばかりで、向こうは無限に湧き出るイタチごっこにしかない。

これでは状況を覆すどころか、魔力切れでカルデアのマスターが先に限界を迎えてしまうことは想像に難くない。

「それで、エジソンさんからこの企画を持ちかけられたんですよ。さっき言ったように、私は面白半分で協力してるだけなんですけどね」

「だが提案自体は道理である。我ら英霊の身に昇華されど、所詮は個という単位。太古の特異点の様な状況では、如何な我が空想の鎧とて塗り潰される他なかった」

時代を遡るにつれて、苛烈さを増していった特異点での戦い。

カルデアのマスターに仕えている以上、この先で待ち構える未来は

苦難と苦闘の道であることは違いない。

であれば、圧倒的な数の差を埋めるにはどうするか。

実に簡単な話だ。それ以上の性能を有する数を量産すればいいだけのこと。

「アルキメデス。貴様が私の知るアルキメデスと同一の英霊なのかはわからない。だが、合理主義だという点では変わらないはずだ。その点で見れば、数を数で巻き返すという発想は安直ながら間違っていないと思うのだが」

「ふむ」

肩眉を吊り上げ、アルキメデスは顎をさすりながら熟考に入る。

天才と称される頭脳をフル回転で働かせ、天才馬鹿達によるバカみ
たいな話の整合性、論理性の是非を脳内で仕分けていた。

正当性、是。理論性、やや是。遂行性、是。熱意、除外。安全性、保留。脅威性、否。敵対性、否。殲滅性、是。

暫しの沈黙。エジソンは固唾を飲んで見守り、他四人は割と気楽な態度でそれを眺めている。

やがて思考の海からアルキメデスが脱却した。

ぼさぼさの茶髪をかきあげて、そわそわと落ち着かない様子のエジソンに一つの疑問を投げかけた。

「つまるところ、これは数学というより算数のお話だ。一と二では二の方が有利、百万と二百万でも言わずもがな。その点において、貴方の話は……まあ、外れた解ではないということは認めよう」

「そ、そうだろうそうだろう！ 流石は稀代の数学者、話が分かる——」

「ただし」

安堵のため息をこぼしたエジソンの口を閉じさせるかのように、鋭い一撃がアルキメデスから放たれる。

「それは一に浪費するコストも考慮しての計算である。一を上回るために二を生産した。しかし二を生産するために必要な資源が五必要だ。これが続けていくとどうなるか？」

指を立ててそれを表していくアルキメデス。左手に一、右手に二を

示し、そこから右手の指を都合七つまで数えた。

「そう、単純に割に合わないのだ。これでは敵に倒されるか自ら破産するかという過程が違うだけだ。大量生産というスキルを持ち合わせている貴方ならそれぐらい分かっているはずだが、ここまで巨大な個体を作る必要はない。そのところ、説明いただきたいのだが」

淡々と、冷徹なまでに事実を疑問と突き付けてくる。アルキメデスに悪意があつての物言いではない。

彼が、どこまで行つても数学に生きた人間というだけなのだ。

「そもそもあれを製造するための必要な物資をどこから調達している？ 私には関係ないことだが、このカルデアはあんなものを製造できると物資に余裕がないと記憶していたが」

「ボルトやナットなどの簡単な部品であれば、私が投影で補っていた」
「素体は僕が作ったゴーレムだ。普段よりも上物を混ぜているから、ある程度の無茶にも耐えられるよう設計してある」

「動力源は私とバベツジさんでどうとでもなりますしねえ。あとはエジソンさんの電力でも賄えますし」

「然り。電気悔しい」

「そうではなく根幹などを形成する部品などだ。色黒の貴方だけではごまかしきれないもパーツも出てくるだろう」

「それは、いつもエジソンさんが持つてきているのだが……」

沈黙。

五人全員の視線がエジソンに向けられる。

そこには、そつぽを向いて空気の漏れるような口笛を吹いている獅子頭の姿があつた。

「……エジソンさん」

「な、何かなエミヤくん？」

「失礼ですが、いつも持つてくるあれらはどこから入手してますか？

そこまで頻繁にマスターとレイシフトしてなかったはずですけど」

「あ、ああ。あれか。あれはだな、その、なんというかな……」

「……………」

「……その、カルナくんやジークフリート殿はよくマスターに伴するだろう？ だから、ちよつと欲しいなアリストを渡して取ってきてもらったりして……」

「御使いですか！」

「名だたる大英雄に何させてるんだこの人……いや、ライオン？」

「……阿呆である」

普通ならカルデアの予備物資としてストックされていたであろう資材を、エジソンは二人に頼んで少しずつ提供させていたのだ。

これにはエジソンに協力していた面々からも次々に呆れた声がある。

「だって仕方ないじゃないか！ あのにつくきミスターすつとんきようと差をつけるにはこういつた偉大な発明を成し遂げる必要があつたんだもん！」

「……それが本当の目的だったか」

「あいや、マスターのためにと粉骨したのは本当だぞ!? 実際、数の暴力ほどわかりやすく苦戦する状況はない。それを打破するには、やはりこちらも数を揃えなくては同じ土俵には上がれない、という意気込みで始めたはずだったんだが……」

「開発を進めていく中での電気アーチャーへの対抗心が燃え始めた、という話か。どちらも同じ電気じゃないか」

「いいや違うぞ！ いいかアヴィケブロンくん。交流は人体に有害をもたらす危険な電流なのだ！ それをあのテスラめが……」

「電気悔しい」

「——くだらない。実にくだらない」

一気に瓦解した『直流鋼国機構』にアルキメデスは興味なさげの嘆息をこぼす。

「企画段階のまま推し進めていけば、良し悪しはどうあれ大量生産にはこぎつけただろうに。それを一時の感情に身を任せてプランの変更など。これだから人間は劣悪なのだ」

数学に挑み、数学を崇拜し、数学に全てを捧げた男。

完璧なる導きから弾き出される解。それを計算し終えた時が唯一にして最大の悦楽の瞬間。

そんな彼からしたら、感情に支配されて決まった解に向かわない人間など苦痛の対象以外の何物でもない。

どれだけ緻密に、完璧な計画を立てようとも、それを実行する人間の感情次第で自慢の作戦が崩れることが何より気に食わない。

無駄な時間を過ごした。

踵を返し、さっさと自らの閉鎖空間へと戻ろうと扉に手をかけ――

「そこまでですー！」

次の瞬間、轟音と熱風と衝撃が叩きつけられていた。

「なっ、何ぶほあぁ!？」

一瞬にして視界がぐちゃぐちゃにかき混ぜられ、奇妙な浮遊感が全身を包む。

自らが車に跳ねられていたと理解したのは、地面を転がった際に垣間見た四輪のタイヤと四肢に響く鈍痛に意識を失う間際だった。

「何事!？」

不問な言い争いをしていた面々も、突如鳴り響いた爆音と悲鳴に全員が臨戦態勢に移行する。

そして目にした光景に思わず反応が固まってしまった。

いつぞやの特異点でダ・ヴィンチちゃんや急ごしらえで制作したオーニソプター・スピックスに近い見た目のバギー車両が、背後に特撮染みた爆発を引き連れてアルキメデスを跳ね飛ばしながら乱入してきたのだ。なんとも珍妙すぎる惨状に呆然と立ち尽くすしかない。

というか十中八九、ダ・ヴィンチちゃん作の新型バギーだろう。フロントカバーにデザインされた似顔絵が雄弁にそれを物語っている。

安易に国宝文化財を増やさないでもらいたい。

「この地にて不審な行動ありとの通報を受け推参しました。主に資材横領や危険品の製造容疑が貴方たちにかかけられています」

凜とした涼やかな一声が広場に轟いた。

バギーの運転席から一人の女性が身を起こし、フロントカバーの上
に降り立って手にした旗を振りかざす。

「我らルーラー警察。オルレアン刑事ジャンヌです！ 今日啓示も
ビシバシ振りかざしますよ、刑事だけに！」

「島原刑事、天草四郎時貞。しかしまあ随分でかいの作ってましたね」
「エルサレム刑事マルタです。ぶん殴——罪を悔いて、一緒に改
めていきましょう」

驚くべきなのか、笑うべきなのか。

シリアスなのか、ギャグなのか。いやシリアスはない。

とにかくいろいろな感情や反応がごちゃ混ぜになり、どう切り返せば
いいのかわからずに狼狽する面々。

結局、全員共通しての観念をまとめあげたとするならば——

「——濃いー！」

この一言に言いたいこと全てが濃縮されていた。

「さて、主犯トーマス・アルバ・エジソン容疑者。そしてそれに連なる
『直流鋼国機構』の皆さま。今しがた述べた通り貴方方には、資材横領
および危険品の製造容疑がかかけられています」

ルーラー側もノリノリなようである。

特に先頭に構えるオルレアン刑事ジャンヌは、逮捕状をマルタにし
たためてもらってまで読み上げる雰囲気作りっぷり。

と、やりたいことやってどや顔かましているジャンヌに対してエジ

ソンが反論を述べた。

「ジャンヌ・ダルク嬢！ その取り締まり断固異議を申し立てる！ 資材横領については認めよう。しかし、あれは危険な代物ではない！ そもそもまだ開発段階で何かをできるといっわけではないぞー！」

「えっ、そうなのですか？ 匿名さんから伺った情報では、人体に影響を与える放電の危険性ありと聞いていたのですが……」

エジソンの予想外の猛抗議にジャンヌは首をかしげて巨大ロボットの注視する。

外見やカラーリングはさておくとして、エジソンの証言通り未だ開発段階であることは間違いないようである。

資材横領の件はそれで裁くとして、もう一つの容疑は確証薄いと判断してかまわないだろうか。

そこまで思考を張り巡らせていたところで、横から天草の声が割り込んでくる。

「おや、いけませんよ聖女さま。容疑者の反論が必ずしも正しいとは限りません。マルタ刑事、あらかじめリハしておいた空中回し蹴りを見せて威圧をかけるときです」

「そんな練習してませんけど!?!」

「ですが、エジソンさんの言う通りあれの危険性は実際に確認できていません。罪なき罪を裁くことは決して許されることはありません」

「ええ。でしたらば、まずは罪ある者を裁きましょう。もう一つの方は本人も認めているようですし」

「あつ！ つい言っちゃった」

思わず、といった感じで口元を抑える。同時に天草の口元が意地悪そうにつりあがった。

「しかし、ここは何重にも重ねて秘匿してきた空間。なぜこの場所が……」

そしてエジソンは疑問を抱いていた。

数あるシミュレータの中からいかにしてここをかぎつけ、しかも何が執り行われているのかを把握してまで乗り込むことができたのか。

イロモノ含めてこの場にはキャスタークラスが複数人いるのだ。
おまけにそのうちの一人は、ゴレム専門とはいえれつきとした魔術師アヴィケブロン。何らかの魔術探知をかけられれば、自分と彼の張った結界に引っかかるはずなのだ。

「フハハハハハハハハ!!」

唐突に、不穏な空気に似つかわしくない高笑いが反響する。
それを耳にしたエジソンの表情が、みるみるうちに驚愕から憤怒のものへと切り替わっていった。

「こ！この、練習してきたかのように腹から通り出る耳障りな高笑い
いはあ……!!」

「ハハハハ！ 貴様のような凡骨の浅はかな隠蔽工作など、真の天才の前には幼児の積み立てた積み木が如し！ 何か別の結界も混ぜていたが、それも良し！ ともかくこの瞬間、交流∠直流の方程式が証明された！」

「またも貴様か！ コラ・テスラア……ツ!!」

「ニコラ・テスラである！ コラなどではなく本物だ凡骨！」

後部座席から飛び上がり、空中でミニ交流階段を形成して華麗に降下する電流紳士。

叡智の学士。電氣神を引きずり下ろした碩学神の天才。ニコラ・テスラその人であった。

「おのれ！ さては私の発明に脅威を抱いてもみ消しに来たな！ 器の小さい男め！」

「貴様に言われる筋合いはない！ 私にかかればこのような大掛かりな施設を用意せずとも簡単に量産して見せよう。無論、交流ましましフルパワーでな！」

「ほぎくかテスラア……ツ！」

「ハハハ！　くるがいい御機嫌ようのライオン丸！　その毛皮を電気焼きにしてカーペットにしてくれよう！」

周囲の目もくれず、一瞬にして電気を浴びせ回る天才児二人。

最初こそ電気を投げ合っていたが、それすらもしなくなりお互い肉弾戦に移行した。発明家なのに。

電気を放出して右ストレートを打ち込み、電気をため込んで右ストレートを打ち返される。最早電気すら使っていない。発明家なのに。登場して数秒でバトった天才紳士の有様にマルタはやれやれとため息を吐いた。

「あーあ。やっぱり暴れたわね」

「こうなることは分かっていたので放っておきましょう。それより、今から貴方方に刑罰を下しますので」

「ま、待ってほしい。我々は物資が秘密裏に提供されていたものだと知らなかったのだが……」

「——エミヤさん」

免罪を取り計らおうとするエミヤに対し、天草は心よりの笑顔をもって応えた。

「無知であることは、罪の赦しにならないのですよ」

「わかっていた……ッ！　逃れられないことはわかっていたとも……」

「！　それに貴様、この状況を楽しんでいるな?！」

「さて、何のことやら。あんぱん食べますか?」

「いらん！」

「と、いうわけで観念してください。さあ準備は終わりましたよ、張り切っていつちやってください！」

世紀末電気大戦を勝手に進めている天才児二人を無視し、未だに閉まっていた後部座席にジャンヌが呼び掛ける。

まだ誰かいたのか、と眉をひそめるエミヤ達。

だが、扉を開けて現れたサーヴァントの姿を見て一瞬で戦慄した。今から執行されるといふ刑罰の内容を理解してしまったからだ。否、せざるをえなかった。

「ふーん。ここが新しいライブ会場？　なんだかけむ臭くて陰気なところ」

「ねえ見てよアタシ！　あれ演出とかで使えないかしら！　ステージ下からせりあがってくる土台みたいにい！」

「それよりもライブのサブライズイベントに使いましょうよ！　突如ステージに出現する巨大ロボット。あわや大ピンチとなった瞬間、華麗な剣捌きで迎撃するアタシ……いい！　これいけるわ！」

「ならぬ！　その役割は余こそが相応しい！　ポツとでのセイバーであるおぬしには任せられんな。何より主役はこの余であるぞ！」

「うむ、うむ。余の言う通りだ。そうだ、薔薇吹雪が舞う装置も取り付けよう。それをバックに余がマスターへの愛を歌う……完璧だな！」

ぞろぞろと、いったいどこに収まっていたのかオーニソプター改から出てくる五人ものサーヴァント。

その衣装はてんでバラバラで意見の食い違いばかりだが、一つだけはつきりと分かることがあった。

今より、この場はライブ会場と化す。

「ええ。ここをどう演出に扱うかは貴女方に一任します。どうぞ心行くまでご堪能ください。では、裏方は舞台袖に引っ込んでいますので」

そういつてそそくさと車内に戻る天草。フロントカバーに立ったままのジャンヌは、両耳に耳栓をしっかりと詰めて旗を振りかざしていた。

その横で腕を組み仁王立ちしているマルタも、前方にタラスクの甲羅だけ解放してあからさまな盾にしていた。

「あつ、あの聖女ズ宝具使ってません!?　ずるい！」

「外敵防衛システム起動。防音システム起動。空間音波遮断。聞こえない。何も聞こえない」

「その電気系二人！今は言い争っている場合か！アヴィケブロン、どうにかして——いない!? またこの展開か！」

「エミヤくん！これは私にとつて特許取得よりも優先的にケリをつけなければならぬ案件！手出しは……おや？」

「どうしたライオン・オブ・サバンナ！野生に染まりすぎて脳みそまで本能に回帰し——うお？」

「——う、ぐお。一体何が……」

その時、偶然にも一人の男が意識を取り戻す。

そう、ルーラー警察が殴り込みをかけてきた際に不運にも巻き込まれたアルキメデスだった。

肌にひやりと伝わる地面の感触に瞼を開けた。

脳が激しく揺れた影響でぐらつく視界も気にせず上体を無理やり起こす。

そこで初めて燃えるような激痛が全身を走っていることを自覚し、顔を歪めて動きを鈍らせた。

「——そうだ。私は何か奇妙な鉄の箱に激突されて……」

身体はボロボロに擦り切れていても頭脳はしっかりと働くらしい。意識を手放す寸前まで記憶していた光景がフラッシュバックし、自分が重傷を負う原因を顔だけ動かして散策する。

すると思いの外、簡単にそれは見つかった。あまり離れていない距離で静止していたそれは、フロントカバーの上に見覚えのある女性が佇んで旗のようなものを掲げている姿が飛び込んできた。

「あれは、ジャンヌ・ダルクか？彼女がなぜここに——」

瞬間、ジャンヌのはるか後方にちらりと紅髪が見えたような気がした。

それだけで炎の中に投げ込まれたように熱い全身が、南極の大海に裸で投げ込まれたかと錯覚するほどにさつと血の気が引いていくの

を彼は感じた。

やばい。何かやばい。なぜだかわからんが自分の天敵がいるような気がする。

感情を嫌悪し、抽象的な表現を避けるアルキメデスらしからぬ危険信号。

彼が最も嫌うであろう動物的本能が鳴らした警鐘は、視界の輪郭が鮮明になっていくにつれて次第に大きさを増していく。

そして見えた。はつきりと見えてしまった。

肩まで伸ばした紅の長髪。ゴスロリチックなドレス。決して見間違うことのない、竜の尾と悪魔の角を生やした少女。

霊基の奥底にまで深く刻みつけられた憎らしい「天敵」の姿がそこにあ——三人いた。

三人、いた。

「は？」

彼がこぼしたこの一言は、直後に開催されたジョイント・リサイタルの爆音と歓声、破壊音と反響音その他もろもろの破壊的な何かの中に掻き消えてしまうのだった。

クラス：キャスター

真名：アルキメデス

キャラクター紹介

紀元前、ギリシアのシラクサに実在した偉大な数学者。

アルキメデスの原理など、彼の名前がそのまま定義として使われているものもある。

てこの原理、黄金の王冠の逸話と、現代数学の基礎中の基礎を築き上げた碩学天才の一人。

また、数学以外にも天文学、工学にも長けていた。

パラメーター

筋力：E

耐久：D

敏捷：C

魔力：C

幸運：A

宝具：B

小見出しマテリアル

英霊でありながらその思想は非人間、否人類的。そのためカルデアにしていることは知っていても実際に関わったことのあるサーヴァントは少ない。

エリザベートのような感情に生きたタイプなどは普段の冷徹な姿勢が崩れるほどヒステリックに叫ぶほど嫌い。だけど身体だけ見れば数学的に理想の体型らしい。

逆説的に、玉藻の前やメイヴのような媚びるためだけの駄肉は嫌っている。あまりにも規格外の胸の持ち主に出くわした日には、それはもうとんでもない顔をしながら後ずさりしていくだろう。

最近増えつつある学者系サーヴァントの中では最も古い時代の先輩。しかしアルキメデス自身が危険思想すぎて共感してもらえないことは少ない。

もつとも、文科系キャスターに癖のない英霊など一人としていないのだが。

アルターエゴM

「もうすぐ、バレンタインです」

と、呑気な一言がカルデア食堂内を吹き抜ける。時刻は早朝。張つたわけでもないのに声がよく通ったのは、単に食堂内がガラリと空いていたからだ。

壁に備え付けられている大型モニター。その端つこに表示されているグレゴリア暦の日付カウンターは、二月の初月も過ぎている時刻を映していた。

この季節を象徴するものと言えば、その通りバレンタインだ。女性が気になる男性にチョコを渡すというアレ。近年ではその趣旨にも様々な派生があるらしいが、詳しい話は置いておくとしよう。

とにかく今年もバレンタインが迫ってきている。気の早い女性サーヴァントなんかは、既に計画を立ててチョコ作成に勤しんでいるに違いない。

「あー、もうそんな時期か。いいよね、こういうの。発祥はともかくとして、若い子とかが青春している姿とかお姉さんのゴチソウサマって感じ」

ニンジンやジャガイモを適当なサイズに切り分け、耐熱羊皮紙にくるんで容器に入れて電子レンジにセット。時間と熱量を指定してスイッチを入れる。その間少量のバターを鍋に溶かしながら、去年のバレンタインを懐かんで自然に笑みがこぼれてしまった。

マスターにチョコが欲しいとせがまれて、驚きながらも少し赤面して手渡したホールケーキ一個分のチョコ。それでもあの子は無邪気に、それでいて少し恥ずかしそうに喜んでくれた。

その後が続くサーヴァント達からの怒涛のチョコ嵐。装飾の凝った芸術品のような品から、拙いながらも愛情のこもった手作り品。それだけならまだ笑って終わったものだが、髑髏型チョコ、タスケテ、終いには自分を渡す暴挙に走ったサーヴァントが現れたり――

最終的に、男性サーヴァントや一般スタッフまで駆り出されて騒ぎ

の沈静に当たっていたところまで思い出し、苦笑しつつ溶けたバターを滑らせた。

あれから一年。女性サーヴァントもかなり増えた。

そして、よくよく考えると色々危険なサーヴァントも大分に増えているような。あれとか頼光これとか静謐。別の意味で彼女とか婦長。

マスターはいよいよ魂の一欠片さえも取り合いになりそうだ。今年こそ平穩に終息が付くことを女神アンドラストに祈っておこう。

「そうです、そうなんです。女の子が……好きな子にチョコを手渡す……。これって、すごく素敵なことだと思っんです」

そして、カウンター前でおっとりとする彼女もそんな部類な気がする。

真名をパッションリップという、何よりも大きな双房が印象の強いこのサーヴァント。

似たような風貌のサーヴァントも何名かカルデアに滞在しているが、とりわけ目を奪われるのがあの胸だろう。あそこまでいくとまるでミスイルだ。谷間に何か収納できるのではないか。

しかも上半身に纏っているのはサスペンダーみたいなものだけで、かろうじて隠されたところ以外がほぼ丸出しである。流石にあの衣装はどうなのだろう。

あれだけ大きいと重くて肩がこつたりして辛そうだ。これが終わったら肩を揉んであげようかね。

「だけど、私はどうにも、そういう家事全般は苦手で……。料理は、嫌いじゃないですけど。どうにも力加減が、分からないんです」

彼女の言う力加減とは、クリームをボウルの中でかき混ぜる加減という意味合いではない。

文字通り、力加減が分からないらしい。

それもそのはずだ。彼女の両手は、か弱そうな少女にはとても不釣り合いの異形の巨腕を有していた。ギラリと光らせた厳めしい黄金のかぎ爪では、ボウルは愚か材料さえ重みで圧碎してしまう。稀代の数学者の「殺戮技巧」スキルが付与されたマシンでさえ、この圧倒的な破壊力には及ぶまい。

さらに訊いた所によると、彼女にはそれが普通の人間の手に見えて
いるらしい。生前からの認識障害がスキルとして定着していたりす
るのだろうか。それでもあの外見と剥離した異形には、並々ならん
きな臭さを感じるが。

ともあれここはカルデア。既に一癖二癖抱えてまくった英霊で溢
れている。他ならぬ自分自身、普通とは言えないものを抱えているの
だ。無用な詮索はご法度ご法度。

「そうだなあ。君の場合は、まず上手く物を握る練習から始めるとこ
ろからね。それに、バレンタインの話振るってことは、やっぱりそ
ういうこと?」

「は、はい……」

消え入りそうにパッションリップが答える。やっぱり、英霊である
前に彼女も普通の女の子なのだ。

つまるところ、手作りチョコが作りたい。そのために料理が上手く
なりたい。

なんてことのないごく普通で、とても幸せな女の子らしい願いだ。
「つてことは、やっぱり君もマスターに贈るの? いやあ、あの子は倍
率高いよお? 去年に比べてますます増えたからね。その魅力はわ
かるけどさ」

「ああ、その……違います」

おや、と思わず軽く目を開く。

トントンと、刻みよくベーコンを切り分けていた包丁を止めて、思
わずパッションリップの方に顔を向けた。

「いえ……マスターにもあげますよ。私がこうして現界してられる
のも……マスターのおかげです。それに、マスターはこんな私にも優
しくしてくれます……困ってしまうほどに」

「と、いうことは」

これは驚いた。マスター以外の誰かに、彼女の本命がいるというこ
とだ。

確かに自分やアイリ、メイヴに玉藻ちゃん等はマスターにチョコを
渡していても、それとは別に待っていてくれる人がいる。

彼女はその丁寧な仕草と不安定な感情から清姫ちゃんパターンと勝手に思っていたが、彼女も別で想い人がいるらしい。いや、清姫ちゃんは特殊例だからあまり当てはまらないかもしれないけど。

となると誰か。英霊同士で恋仲になったという話は、ラーマちゃんとシータちゃんのような元から相愛の例を除くと、耳にした試しはない。

人である前に兵器。たとえここがカルデアであっても、それが我らサーヴァント。兵器同士での色恋沙汰などに現まわを抜かす余裕はないだろう。一部を除いて。

そうなるとカルデアスタッフの誰かになるが。と、そこまで考えていたところを、パッションリップが解答のように口を開いた。

「ここにはいません。マスターもどこことなく近い雰囲気ですけど……。私の想い人は、今も月の向こうで頑張っていますから」
月ときたか。それは分からないわけだ。

そうなると、パッションリップというサーヴァントがますますわからなくなってくる。いつもならこの辺りで切り上げるのだが、今日はもう少し踏み込んで話してみようか。

「月ってことは、リップちゃんは神話系の英霊なの？ 色々スケール大きいし」

「神話系……？ たぶん、そういうのとは、違うと思います」

パッションリップは自信なさげに視線を伏せる。

かすかな違和感に片眉を吊り上げつつも、それを飲み込んで他を並べていく。

「じゃあ、あたしみたいな偉人系？」

「それも、たぶん違います」

「えー。あつ、あれかな。エミヤくんとかみたいなの『抑止力』って奴」

「違います、たぶん」

「——たぶん、ね」

これはおかしい。大なり小なり、自身の経緯を断言できないサーヴァントなどいたのだろうか。

他ならぬ自分自身、決して褒められたものではない道を築き上げ、

しかし皮肉にも英霊なんか祀り上げられてしまった。サーヴァントになるということは、その生涯で成し遂げた功績が善も悪も関係なしに、人々に強く根付いているということだ。

言うなれば今の己を形成する根源。それを当の本人が忘れてしまふ、ないし憶測で語るといふのは普通に考えてもあり得ないことだ。

明瞭な返答を返さないパッションリップの口調に、何となく焦燥を覚えた。眉をひそめ、自分でもびっくりするほどの低い声で彼女に尋ね返す。

「リップちゃん。たぶんっていうのはおかしくないかな。自分の出生くらいははつきりと覚えているはずなんだけど」

「でも、でも……。本当に、違ふんです」

「じゃあなんで、たぶんなんて言葉をつけるの？ しつかりと否定してくれればいいじゃない。曖昧に返されてもあたしが困っちゃうよ」
「それは……。その時、違うことを考えていたから……。今日のご飯、なんだらうなあって」

思わず嘆息し、呆れてしまう。ここまでわかりやすい嘘も久しぶりだ。それで通せると思っただのだろうか。

誤魔化せると踏んでいるのか、目を逸らしてなよつとしているパッションリップ。

何だろう。無性に心が刺激される。女らしさは必要だが、こうまでいじいじしていると一発叩いてしゃきつと更生させたくなくなる。

特にあの胸とか。やっぱり大きすぎないかな!?

「君ねえ——」

内側から湧き出る衝動に駆られて、包丁をまな板の上に置く。

そして彼女のけしからん超乳でも揉んでやろうかと、カウンターから軽く身を乗り出して——

「——あ痛っ！」

天井につるして乾かしていたフライパンに気付かず、勢いよく額をぶつけてしまった。

倒れはしなかったものの、認識外からの一撃にたたらを踏んでよろけてしまう。ここが狭いキッチンじゃなかったら、近くの食器を巻き込んで派手に転倒していたくらい大きく仰け反っていた。

仮にも戦士として情けない一部始終を見ていたパッションリップが、おずおずと心配そうに声をかけてきた。

「あの……。大丈夫ですか？」

「いてて。ごめんごめん、心配させちゃったね。大丈夫だよ、お姉さん強いから」

鈍痛が残る額を軽くさすつて、照れ隠しの笑顔を浮かべる。

一度痛みで思考が遮られたが、はて。自分は先程まで何を躍起になつていたのだろうか。

これ以上、彼女の身の上話を探るのもやめておこう。恋バナとかはどしどし訊きたいところだが、複雑な本質も絡んできそうなので今は適切ではない。

再び包丁を手に取り、残っていたベーコンを手早く切り分ける。さつきバターを溶かして広げていた鍋にそれを投入し、ベーコンを炒めながら本題へと話を戻した。

「話がそれちゃったね。要するに、君はその好きな人にいつかチョコをあげたいから、ここで練習したいってことだね？」

「はい……。そして聞けば、ブーディカさんは他の人にも料理を教えたりできるほどお上手らしいので……」

「うん？ あたしに教わりたいの？ もちろんいいよ。そうだ、さつきのお詫びに夫の心を掴んだレシピとかも教えてあげちゃう」

今までもじもじと俯いていたパッションリップが、はつと顔を上げてキラキラと瞳を輝かせる。

こういう、何かに向けてひたむきに努力していく姿はいつ見ても胸が温かくなるものだ。甘酸っぱい青春の香りも合わさつて、お姉さんのにもとてもグー。

と、レンジから調理完了のアラームを鳴らした。中に入れていた野菜群を容器ごと取り出し、くるんでいた羊皮紙を取り払って中身の熱の通り具合を確認する。うん、これなら芯まで温まっていそうだ。

ベーコンを炒めていた鍋にそれらを追加し、さらにじっくり炒めていく。そろそろ小麦粉を加えてもいい頃合いかな。

そう思っただけでキッチン上の戸棚に手を駆けたその時、食堂の入口に人影が見えた。早朝なのに珍しい、と視線を向けてみると、誰が入ってきたのが遠目でも一発で分かった。

橙色の羽毛や、特徴的な色使いの布による装飾がふんだんにちりばめられた、アステカ衣装の似合う眩い女性——ケツアル・コアトル。彼女もこちらに気付いたらしく、輝いた表情で駆け寄ってきた。

「おはよう、ケツアル・コアトルさん」

「おはようゴザイマス！ うーん、とてもいい香りネー！ 何を作ってるのかしら？」

「クリームシチューって言うのよ。あとは小麦粉と牛乳を加えて、味付けしてから煮詰めるだけ。今は普通のシチューを仕上げていて、この後に菜食主義者の人たち用のシチューも作るつもり」

「ワオ、シチューー！ 私、初めて食べるネー！ 楽しみネー！」

そういつて、ケツアル・コアトルはキラキラと子供みたいに眩しい笑顔を放つ。大人のお姉さんみたいな包容力もあるくせに、こういう純粋な子供らしい一面もまた似合う不思議な女性だ。

「それと、何の話をしていたの？ 私のセンサーにピピッと反応来ちゃったデース」

「ええと……そんなに面白い話でもないですよ……」

「ここから、そんなこと言わないの。乙女の一大決心なんだから」

恥ずかしそうに指をすり合わせるパツシヨンリップ。あまり見慣れなかった異形の両手も、今はただの恋する少女の仕草にしか見えな

い。

興味深そうにパツシヨンリップの顔を覗き込むケツアル・コアトルに、これまでの話を要約して説明した。

「いいじゃナイー！ 月まで恋する乙女と王子。コヨルシャウキも気を利かせて応援してくれてるネー！」

「はい……。本当に、あの人は理想の王子様なんです……」

「その王子様を喜ばせるためにも頑張らなきゃネ。料理はしたことな

いけど、私もできることがあれば手伝いマース」

「えっ……。あなたまで手伝う必要は……」

「いいのいいの。誰かを好きになって、それを必死に伝えたいっていう気持ちは、独りだけだと暴走して変な方向へ行っちゃうのよ?」

ケツアル・コアトルの言葉を聞いてパッションリップの狼狽が一瞬止まった。

それを知ってか知らずか。いいや、きつと知っているのだろう。ケツアル・コアトルはカウンター席に座って、懐かしむように微笑を浮かべた。

「でもね。好きっていう気持ちは、決して間違っていない感情だわ。何かを好きになって、何を嫌いになって。それを繰り返して、初めて『心』は育っていく。それが人間なの」

パッションリップを見てみると、初めてカルデアで出会った頃のマシユを思い出させる。

何か後ろめたい事情があったのは雰囲気で察していた。それほどまでに、初めの頃のマシユは幼く、無垢で、純粹だった。パッションリップほど危険な香りこそなかったものの、本質的には「人と違う視点」で物事を見ていたことに違いはなかっただろう。

そのマシユも、自分がいたという第二特異点や、その先の人理修復の旅の中であんなにも大きくなっていった。精神的にも、人間的にも。

人の善行を喜んだ。人の悪行を悲しんだ。あらゆる時代の人に触れあつて、彼女の心は豊かになった。

淡泊で事務的な内容ばかりだった会話も、今はころころと表情を変えて楽しそうに話している。乱暴な言い方だと俗世に染まったという言葉になるが、それでも自分は今のマシユが好きと断言できる。

このパッションリップという娘。それに他のアルターエゴと呼ばれる特殊なクラスの娘たち。

彼女たちがサーヴァントとして座に登録されるまでの期間、何があったのかは追及はしない。それでも、座にいる本体に少しでも影響を及ぼせるくらい、彼女達にも幸せになる道を通ってほしいものだ。

「だから、何もかも一人で背負うことはしないでね。ここには、貴女の味方だっていっぱいいるんだから」

特に恋の応援はね、と可愛らしくウインクしてケツアル・コアトルがはにかんだ。

彼女の顔を見て清聴していたパッションリップは、彼女の言葉に聞き惚れていたのか呆つとしていた。やがてはっと我に帰ると、自らの巨大なかぎ爪に視線を落とした。

そして。

「あの……。私の手、握ってくれますか……?」

汐^{しお}らしく、可憐で愛おしい乙女の仕草で、断絶の凶爪を差し出した。

彼女が彼女たらしめていたであろう、異形の剛腕。それを認識できない彼女は、今まで純粋な好意からその手を差し出し、そして壊してきたのだろう。普通の女の子のように手を握って欲しかっただけに、現実は相手に破滅をもたらしていた。これほど残酷な話、ケルト系列の神話でも訊いたことがない。

期待するような。それでいてどこか諦観しているような曖昧な表情^{かお}を、パッションリップは張り付けていた。

だからこそ、だろう。

禍々しく軋むその爪を、ぎゅっと、ケツアル・コアトルに固く握られて、茫然と口を開けたのは。

「あっ……」

彼女の頬が、熟れた林檎のように赤らんだ。

ぎしりと鈍い金属音を立てて、巨爪がケツアル・コアトルの掌の柔肌に突き立てられていく。にも関わらず、瑞々しく健康的な褐色肌は少しもそれを通さず、しかと爪の先を繋いでいた。

十分に黄金の爪を握った後、何事もなかったようにパッと手を離してケツアル・コアトルが穏やかに笑う。

「はい。握ったわ。これで貴女と私は、お友達よ」

「ッ」

ああ。女神の慈愛という表現はこの時のために用意されていたのだろう。愛おしい我が子を見守り、その成長を喜ぶような。それほどまでに彼女の微笑みは母神に溢れ、安楽に満ちて、太陽のように暖かなものだった。

そう、どれだけあの爪が恐ろしい武器だろうと。まだ心が不完全だろうと。

彼女は、一人の女の子。どこにでもいる、まだまだ未熟な恋する乙女に違いはないのだ。

ここには沢山の英霊がいる。彼女のような特異なサーヴァントでも、一人孤立してしまうなんてことは絶対にならない。

彼女が触れて壊してしまうなら、強固さが売りの英霊に補助してもらえばいい。彼女が俯き悩んでいたなら、世話焼きの英霊に話し相手になってもらえばいい。

なぜならここはカルデア。既に、途方も無い旅の終着駅を目指している。その前には彼女のような普通^{異形}は、十分に解決可能な案件なのだ。

「ところでー」

言うが否や、ケツアル・コアトルが早足にキッチン内に侵入してきて、牛乳とコンソメをかき混ぜていた自分の肩に手を回してきた。真横から彼女のやけに筋肉質な笑顔が覗き込んでくる。あ、ヤバい。この笑顔はさっきのと違うやつだ。

「ブーディカちゃん？ 私の身を案じてくれるのは嬉しいけれど、こっそり宝具使うのズルいネー」

「あはは……ばれてた？」

小声で囁かれた指摘に、誤魔化すようにうなじを搔く。

通常のサーヴァントと同じ霊基とはいえ、ケツアル・コアトルは強力な神霊のサーヴァント。そのステータスは折り紙つきで、耐久力にもそれは言える話。

だけど、その彼女でもあの魔爪と手を交わしたらどうなるか。勿

論、問答無用で潰されることはないだろう。けれどそれを指を啜えて見ていられるほど、樂觀的な気持ちにはなれないものなのだ。

なので、気づかれぬ程度に彼女とパッションリップ、双方に女神アンドラスタの加護と約束チャリオット・オブ・ブディカされざる守護の車輪をかけてしまった。それがお気に召さなかったということだ。まあ、確かにお節介がすぎたと思う。

「当然デース。素のままでも耐えられると思ったのヨ？ それにアステカ系の神霊にケルト系の加護なんか与えたら、神聖ごちゃ混ぜになつちやいマース。闇鍋状態デース」

「いや、そうなんだけどさ。ていうか闇鍋は知ってるのね……」

——きゆうう。

突如、そんな可愛らしいおなかの虫が、自分とケツアル・コアトルの耳に届いた。

見れば、両爪を地面に下ろして、その場で座り込んでるパッションリップがいた。頬を赤らめ、妙に潤んだ赤い瞳であたしの顔を見上げている。

「——あの、その……」

——きゆうう。

先ほどよりも長く、深く、食堂内に小さな暴れん坊の叫びが響いた。当の本人が蒸気でも噴出しかねないくらい紅く染まり、声にならない言い訳をしどろもどろと漏らしていた。

肩を組まれた態勢のまま、ゆっくりと隣のケツアル・コアトルに視線を戻していく。彼女も同様に、何かを確認するように自分の瞳に視線を合わせていた。

「——ぶふっ」

堪え切れず小さく噴き出してしまった。ケツアル・コアトルも噴き出しこそしなかったが、によによと生温かい視線をパッションリップ

に注いでいる。

ついに言い訳も尽きたのか、パッションリップはうるうると瞳を潤わせて閉口してしまった。

「フフフ。よし、仕込みまで時間かかるし、もう一品何か作ろっか！」

「ハイハイ！ 私にもくだサーイ！」

「こちら、リップちゃんが優先だよ」

「あうう……」

ガレットなら空いた時間で作れるし——いや、そういえばさつき余ったジャガイモがあった。彼女にも食べやすいように、ベイクドポテトにするのがいいだろう。隣でハイテンションに騒ぐケツアル・コアトルの分も作ってあげないと、朝からうるさいと他のサーヴァントにどやされ兼ねない。

火を通して煮込むだけとなった鍋から手を放し、空腹に腹を鳴らす二人の女性を満たすべくしっかりと包丁を握りしめた。

「それで、具体的にはどんなチョコが作りたいの？」

「えつと……チョコを溶かして、鍋に入れてかき混ぜます」

「ふんふん。それで？」

「グシャつとします」

「グシャつと……え？」

「鍋ごとキューブ状にして完成です。包装は……布とかは切りますけど、ケツアル・コアトルさんにやってもらいたいなあ」

「……………」

それはそれとして、このモノグサ具合はやっぱり叩き直した方がいいかもしれない。

ギョツと力強く腕まくりをして、とりあえずお尻でも引つ叩いてやろうと握った包丁をまな板に戻した。

クラス：アルターエゴM

真名：パッションリップ

キャラクター紹介

もつと痛く……してください。

パラメーター

筋力：A+

耐久：A

敏捷：C

魔力：B

幸運：E

宝具：C

小見出しマテリアル

自らの最期に「好き」を知り、「嫌い」を知った。今はそれをより深く理解すべく、ママさんサーヴァントの下で目下アドバイスなどをもらっている。全てはあの人のことを理解するために。

被虐体質スキルの関係上、精神耐性の強いサーヴァントでない彼女のスキルにはまってしまう。その翌日、はまってしまったサーヴァントは彼女を責め立てていたと白い目で見られたりして不遇な思いをしたり。

それとは別に、大胆な格好と驚異の胸囲に惹かれる阿呆も少数。

後輩機にあたる他のアルターエゴには複雑な感情を抱いている模様。サクラポジション争いは人知れず行われているのだ。

創造主から受け継がれる由縁か、それとも個人的に鼻につくのか。ワカメの系譜に露骨な嫌悪感を示している。失敗していいようが成功していいようがワカメはワカメ。ワカメ殺すべし、慈悲はない。

旧ライダー

カルデアの外は基本的に変わり映えがしない。時間も空間も全て消えてしまっていたのだし、それを除いても標高の高い山脈に位置する以上、曇天と吹雪に包み込まれている。人間の積み立ててきた科学の現状や、季節による自然の移ろいをこの目で眺めることができないのはどうにも口惜しい。

この施設は最先端の科学や魔術で満ち溢れているが、僕が興味を惹かれるのはそこだけではない。普通の人たちが普通に接し、普通に扱うそれらにこそ別の価値がある。

貧富の差に左右されることなく、万人に等しく提供される碩学。それこそが真に発展した科学だ。

ミスター・エジソンの言うように、生産ラインの確保や安全性の保証があつてこそ、科学は初めて発展したと証言することができる。

十九世紀のイギリスでさえ、上流階級の人間とそれ以下の人間では使える物の質が違った。それ以前の歴史に遡れば、その格差は想像に難くない。

現代の人間が普段口に行っている菓子一つをとつても、古代では当時の王族のみが口にできるような超のつく高級品だったのだ。そのような資源が生産方法を確立し、大量に輸出できる環境になったのだから、つくづく人間の探求心には驚かされる。

菓子と言えば、今日はそれにまつわるイベントの日。浮足立ってお祭り感覚のようにはしゃぐ女性陣と、そわそわと落ち着かない男性陣の姿がちらほらと目に映る。分かりやすいものだ。

かくいう僕自身もまた、ちやつかり参加している身であるが。何度かお返しとして用意したライスボールを渡したが、スタッフの皆はあれで満足してくれただろうか。

そして、それをかぎつけた男性陣からの詰問が来たり、他のところの騒動に巻き込まれたり、色々と大変な目にあつた。何が大変かつていうと、それはもう――

“——ッ!?”

“——!!”

と、甘味と苦味に満ちた地獄を想起しかけた時、書齋の外が騒がしいことに気付いた。

また、誰が誰に渡したと学生気分でいじり倒しているのだろう。喧騒は日常茶飯事だが、今日は三割増しだ。これ以上巻き込まれたくない。

とはいえ、個人としては原因が気になるところ。大方ケルト系か悪魔系の仕業だと推測しつつ、走る音が響く廊下への扉に手を伸ばした。

その瞬間、扉が独りでに勢いよく開いた。

「おっと」

軽く仰け反り、扉に当たらないように数歩後退する。自動ドアなんてハイテクなシステムは搭載していないので、僕以外の誰かが開けたということになる。

事実、サーヴァントの気配が一つ、開いた扉から飛び込むようにして僕の書齋に転がり込んできた。

「ごめんよ。少し匿ってくれないかな?」

駆けつけ一言。しかし決して人を不快な気持ちにさせない爽やかさ。やや赤茶けたくせつけの髪と品のある顔立ちは、気さくに振る舞い人当たりの良い、朝の陽ざしのように温かな好青年を思わせた。

着込んでいる鈍色の金属鎧もまた、童話に登場する白馬の王子様を思い出させるような気品さを醸し出していた。その青年が着用しているからこそ、華麗な王子のようであり歴戦の英雄のようでもある、双方のイメージを無理なく調和させていた。

突然降って湧いた理想の王子様に、僕は口元に微笑を浮かべて扉を閉じた。

「誰かと思ったら貴方ですか。ミスター・ペルセウス」

ペルセウス。ギリシア神話に語られる大英雄。ゼウスとダナエーの息子であり、あのヘラクレスの曾祖父でもある。神々の寵愛を受け、怪物退治を始めとした数々の偉業は今尚語り継がれている。

そのような正真正銘の大英雄がいきなり自身の書齋に飛び込んできたのだ。通常なら多少は驚きこそしたが、先の騒動や彼の慌て様からなんとなく事態は察することができた。

「モテる男は辛いですね？」

「いやあ、ははは。君はどうなんだい、ジキルくん」

誤魔化すように髪をかき上げて、彼の視線が部屋奥の机に向けられる。山積みになされた資料や本の合間に、封の切つてある派手すぎない装飾の袋と、幾分か数の減ったチョコが見えた。

こういうことには鼻の利く人だ、と呆れつつも笑ってしまう。普通であれば何かと鼻につきそうな動きや言動なのに、彼の場合は全くそう感じさせないことが不思議で、何より自然だった。

「僕は違いますよ。彼女たちがくれるのは義理、労いをかけてのものですから。そのお返しがライスボールだけというのが、今更になつて足りないなど考えてしまいますけど」

「へえ、君が握ったの？」

「はい。僕でもできる精一杯のお返しは、今はこれぐらいしか」

僕たちサーヴァントが存在できるのはマスターのおかげだ。だが、そのマスターを支えているのは他でもない、このスタッフたちだ。

特異点観測はもちろんこと、レイシフト先でのマスターたちの存在証明、電力供給の負担計算や確認、シバでの施設内異常の確認、マスターやレディ・マシユのメデイカルチェック、現場に必要な資料の詮索や各種機材の調整などなど。

それらを随時確認し、統率してきたミスター・ロマンを筆頭に、彼らの助力なくはこの旅を続けることはできなかつただろう。過去の英霊ではできない、今に生きる人間だからこそできた偉業だ。

彼らにも感謝の意を示さなくてはならない。僕の中で最大限に想った結果が、今回のライスボールだった。手軽でありながらスタミナ回復も効率的みたいらしい。

「意外だね。君の出身国はサンドイッチとかが主流だと思ったけど」
「どのような形であれ、想い入れの詰まった品を振る舞った方が心がこもると思います。料理と言えるような代物でもないですけど」
「いいや、そんなことはないさ。君の想いは確かに伝わってるよ。君だって、マスターからの手作りなら何でも嬉しいものだろう。僕もそうだからね」

「ところで、ミスターが隠れるほどの事態とは？ 僕よりも英霊としての格が違う貴方でしたら、ある程度の揉め事にも対処できそうですね」

「ああ、そうだね。話を戻すけど、今日はバレンタインデーだ。恥ずかしながら僕も、何人かの女性からいただいたね」

ペルセウスほどの気風溢れる青年なら、そりゃあいただけじゃないはずがない。ルックス良し、性格良し、武勇良し。至れり尽くせりの最高物件だ。

渡されたチョコの中には、義理以外の感情がこもったものがあってもおかしくはないだろう。どこかの錬金術師にそそのかされて変な霊薬とか盛られていないといいが。

「それで、スタッフの女の子たちと色々話していたらね。その……あまり仲の良くない英霊とぼったり出くわしてしまっ……」

「ここまで逃げてきた、と」
そういうことか。ペルセウスが逃走を選択するほどの英霊など古今東西一人しかいない。

彼女も淑女の一人。誰に渡しに行ったのかはともかくとして、その道中に彼とぼったり出くわしてしまっ……という展開。それで、一廊下にてギリシャ神話の再現が成り立ってしまったのが先程の喧騒の真実というわけだ。

英雄王と神造兵器のトレーニング然り、ガチ殺し合施しの英雄と授かりの英雄エンドレスの競争然り、そう簡単に神話の再現を連発されると神秘性もへったくれもない。実に今更な話だが。

「ふふ。どうあれ、やはりモテる御方だ。流石は神々からも愛された英雄、といったところですよ」

「そうでもないさ。少なくとも、マスターの方がよっぽどだ。君はもうマスターのマイルームを覗いてみたかい？」

その問いに、僕は自身の口元が苦笑に変わるのを実感しつつ首を縦に振った。

その返答が嬉しかったのか、彼はうんうんと愉快そうに頷く。

「僕も何個か宝具を持つてるけど、あれには敵わないね。マスターが古代ギリシャに生まれなくて良かったよ」

でないとオリュンポスの神々が取り合いを始めそうだと冗談めいて彼は笑う。

いや、実際のところ冗談では済まされそうにない。現にオリュンポスの神の石柱に入られているし、今の時点で僕たちのマスターにかかる寵愛は半端なものではなかったからだ。それが今年のバレンタインデーでめでたく証明されてしまったというか。

少し戻って、数時間前の話になる。今年もマスターからもチョコをいただいたので、お返しのできるアイスボールとお茶を贈った。満面の笑みで喜んでくれたマスターにホッとしていると、マスターと一緒に食べようと誘ってくれたのだ。

自分の贈り物を食べるのは、と最初は断ったが、二人で食べたほうが美味しいと押し強い熱意に苦笑しつつ承諾。そうしてマスターのマイルームに入った瞬間、視界にぶち込まれた光景は今でも脳裏に焼き付いている。

部屋中に所狭しと並び立つ、綺麗に包装された箱の山。机の上、椅子の上、ベッドの上——とかく置けるところ全てにチョコというチョコが並んでいた。カルデアに滞在する女性サーヴァントやスタッフの総数を考えれば、これだけの量になることは容易に想像できる。実際、僕もここまでは想定していた。

問題はここから。フランス聖女の雑誌、よく磨き込まれた槍に杖、いくつか可愛らしいぬいぐるみ——ヒポグリフだったかのぬいぐるみは結構のサイズだったが——、その他小物類など。これらは十分にお返しだと理解できる。

壊れた枷や鉄の塊、皇帝ネロをかたどったと思わしき彫像、猫をモ

チーフにした車、何やら物々しい手紙、鮭。これもまだギリギリ許容範囲内だ。

言いしれぬ圧を放つ宝剣、そこにあるだけで大気を浄化しているたてがみのアクセサリ、太古の魔力が詰まったラピスラズリの首飾り、見ているだけで悪寒の走る赤いバンダナ、とてつもない神気を放つ矢、黄金と神気に満ちた耳飾り、部屋の隅で丸くなっている猫——

——と見せかけてスフィinks。しかも見るからに高位の奴。どれ一つとっても並のサーヴァントの宝具級アイテムがずらりと並んでいたのは流石にどうかと思う。控え目に言って心臓に悪い。これらを渡したであろう英霊たちが即座に思い浮かぶのと、全員悪意があつてのお返しでないということが猶更質が悪い。

この聖遺物まみれの部屋だけで大抵の魔術師ぐらいなら撃退できるだろう。うん、やっぱり馬鹿なんじゃないかな。特にスフィinksはよくない。

そんな逸物しかない戦略兵器庫と化した部屋でリラックスしていたマスターには、その底の深さを見て唾然と呆けてしまっていたわけだが。

少し話が逸れ過ぎた。一夜にして世界一物騒なマイルームと化した話はさておき、主題をペルセウスへと戻す。

「君の宝具というと、ギリシャの神々から与えられたという様々な武器のことかな」

「そうそう。今装着しているのだとこれかな」

そういつて、肩から羽織っていた黒色のマントをばさりと広げた。外見上ではただの薄生地のマントにしか見えないが、内から発せられるエーテルの圧力は紛れもなく貴き幻想ノール・ファンタズムのそれ。

深緑の外套を羽織るロビンフッドもまた、顔ノーフフェイス・メイキングのない王という透明になれる能力を有したマントを所持している。それと同系統の類だろうか。

「たぶん今、透明になれるマントかなって思っただろう？ その通り、それが能力その一」

「その一？」

つまり、その二もあるということだ。透明になれるだけでも十分強力な宝具だが、流星は神からの賜りもの。それだけでは終わらないらしい。

おもむろにペルセウスが肩からマントを外し、表裏とひっくり返して確認をとった。

「これ、どこからどう見てもマントだろう？　ところがね、これをこうして——」

慣れた手つきでマントを畳み、何かを形造るように織り込んでいく。それが第二の能力の発動キーのようだ。

やがて、兜のような形状にマント折り終えたペルセウスは、それをすっぽりと頭に被った。

その直後、目を疑うような出来事が起こった。マントで型どられただけの布製の兜が、一瞬にして金属質な光沢を帯びたのだ。材質も黒色のマントが元のはずなのに、いつの間にか鎧と同じ鈍色の金属のような重厚さを獲得していた。

「これは……」

「そう、畳めば身を護る防具へと早変わりというわけだ。どっちも視覚的に派手さのない地味な能力だけど、これはこれで結構使いやすいのさ」

見てみるかい、兜を取り外してこちらに差し出してきた。手にもつてみて、本当に金属製の兜に変化していると認識できた。掌から伝わるひやりとした感触や重厚感が何よりも物語っていた。

お茶らけているようでやはり英雄なのだ、と改めて目の前の青年を総評する。さっと出てくるものが鉄兜のあたり、伊達に死線をくぐり抜けてきたわけではないということか。

と、ここで一つ尋ねたい議題が閃いた。

しかし、ただ匿つてもらいにきただけの彼に突然質問するのはいかななものか。ああ、気になることがあると突き詰められずにはいられない科学者特融の悪癖が。

あれだ。部屋に匿つた分の借りを返してもらおうということを手を打つのはどうだろうか。うん、そうしよう。

「ミスター・ペルセウス。一つ、質問いいでしょうか」

「ん、どうかした？」

「貴方にとって、悪とは何でしょう」

その問いかけに彼の口元が下がる。

「これはまた難しいことを訊くね」

「はい。僕が生きていた時代と古代ギリシャでは、人間の善悪に対する概念を知りたくて。特に貴方なら鋭い意見を訊けそうですし」

椅子借りるよ、と尋ねてきたので二つ返事で了承する。

椅子を引いて座り込んだので、棚に残っていた珈琲豆に手を伸ばした。

丸めて筒状にしたろ紙に珈琲豆を入れ、お湯を適度に分けて注ぐ。急造ながら鼻腔をくすぐる香りに、我ながら中々の出来栄だと自負した。ライスボールもこれくらいできるように練習しなければ。

ドリップした珈琲と茶菓子の入ったバスケットをもって、ペルセウスの前に差し出す。感謝の言葉に謙遜を返しながら、反対側の席に腰かけた。

英雄ペルセウスの善悪への観念。一科学者として興味の出る題材だ。

やはり有名な逸話に絡めて、怪物は悪であるという話になるだろうか。そうしたら、僕も少しばかり楽になれる。

そう思っていた矢先、話題は意外な形で口火を切られることになる。

「実はね。僕は前に聖杯戦争に召喚されたことがあるんだ」

唐突に開け放たれたカミングアウトにぎよつと目が開いた。

ペルセウスがどこかで聖杯戦争に召喚されていた。それだけでも驚く事実だが、この一言には別の意味も含まれている。

「そして尚不思議なことに、その時の記憶もうつつすらとだけ覚えてる」

そう、彼は召喚されたという事実を記憶しているのだ。

聖杯戦争の記憶があること自体は、さして珍しい話ではない。他の英霊、例えばパッションリップというサーヴァントはカルデアに召喚

される前の記憶を明確に覚えている。逆にジャックのようにカルデア以外での召喚記録は覚えていないサーヴァントもいる。

それらが分かれたる明確な理由は未だに判明していない。また、記憶があっても程度の差があるようで、はつきり覚えているものもいれば他人ごとに近い感覚のものもいる。

僕の場合、多少の記憶の混濁と霊基の異常があるものの、比較的はつきりと召喚された聖杯戦争の日々を覚えている。

「その時のマスターはね。僕が召喚された時、既に死に体だった」

途端、今まで柔らかだった彼の瞳の色が、どろりと粘質なものに変わったような気がした。

「全身に機械をつけられて、無理やり延命させられていたのさ。手足も腐っていて、呼吸は虫のようにか細くて、顔は苦痛によって常に歪んでいた。おまけに彼の魔術回路は、おおよそ邪悪なもの全てを練り混ぜたかのような醜悪なものに侵食されていた」

聖杯からもたらされた知識に、それに関する情報も識らされていた。化学工業の発展した現代では、人体の一部を機械が代用できるとされている。例えば、失った大腸の代わりとして、体外に大腸の役割を果たす機械を取り付けるなどだ。

当然、有機物と無機物が完全に馴染むことはない。相応の苦痛や負担が装着者の身体に押し掛かることになる。何より人間離れしていく自身の姿に、装着者自身の精神がひどく蝕まれることだろう。自分が自分でなくなっていく恐怖は、僕がもっとも理解している。

加えて、魔術師の生命線である魔術回路まで異常をきたしていたという。魔術師としても人間としても尊厳を奪われ、侮辱と屈辱に満ちたであろう姿に憐れみの念を覚えざるを得ない。

「聖杯戦争のマスターということとは、その彼が望んだものは、やはり――」

紡いでいた唇に、ふっと指を添えられる。

僕が口を閉じたのを確認したペルセウスは、指を離して静かに笑った。

「彼が望んだもの。それは――世界の平和さ」

人当たりの良い笑顔とも、王子のように気品立つ笑顔でもない。かけがえのない友を賛美し、誇らしく胸を張る幸福な笑顔だった。

「彼は一言も不平不満を漏らさなかった。一度も怨恨憎悪を零さなかった。ただひたすらに、この世界がどれだけ温かなものかを、天使のように安らかな顔で語ってくれた」

ペルセウスの語った元マスターの惨状を想像すれば、世の全てに恨みを抱いていてもおかしくはないはずだ。否、抱くべきなのだ。そうでなければ、あまりにも——不幸にすぎる。

強制的に命をつなぎ留められ、しかも想像を絶する激痛が常に付きまとっていただろう。外側からも内側からも崩壊していく己の姿に、幾度となく絶望しただろう。にもかかわらず、そこから導き出される願いが世界の平和。

どれほど屈強な精神力なのだ。人格や精神面を抽出すれば、それこそ過去の聖人たちにも匹敵するのではないだろうか。

「そして僕を召喚したために、彼は死んだ。聖杯戦争が始まる直前に」
唐突に、現実が突き付けられる。

エーテル体であるサーヴァントの現界を維持するには、マスターから魔力の供給を受けなければならぬ。

そのような衰弱しきった身体では、サーヴァントを召喚すれば僅かな寿命を大幅に減らすことも承知だったはずだ。ましてや古代ギリシヤの英雄ペルセウス、その後の肉体維持にかかる魔力も馬鹿にならない。

それらを全て承知の上で、彼の元マスターは召喚に踏み切ったのか。あるいは何者かに強制させられたのか。いずれにせよ、文字通り命を賭してまで聖杯に願った理想が、自分のことを棚外に置いた世界の平和。

それではまるで——そう、それこそ『正義の味方』みたいじゃないか。

「生前の僕であれば、悪とは人に害成す怪物である、と答えたかもしれない。でも今は違う」

ペルセウスの表情が歪む。生前を幸福のまま終えた英雄がするよ

うなものではない、能面のように冷徹だった。

「悪とは、善なるものを救おうとしない全てだ。真に正しきものが潰され、欲にまみれた愚者が蔓延ることだ」

おぞましいほどの冷たさで彼は言い切った。

聖杯戦争を経験し、その記憶が偶然にも残ってしまったために、英雄ペルセウスの在り方は変わってしまったのかもしれない。自らが「悪」と定めたものに、彼はあの笑顔のまま容赦のない殺戮を振り撒くという確信があった。

その聖杯戦争でさえ、彼はマスターを失つてのスタートだった。性格上、他のマスターの下について優勝を狙うような行動はしないだろう。となれば必然、もう一つの方法で己のエーテル体を維持していかなければならない。

一般人から魔力——魂を強奪する、いわゆる「魂喰い」だ。魔力を限界まで搾り取られた人間は、魔力欠乏に陥ってしまい、そのまま放置されれば死に至る。無辜の民人に手を出すという英雄にあるまじき外道行為のために、それに手を染めるサーヴァントは人命に関心の薄い反英霊、もしくはそれを併せ持つ英霊であることが多い。

だが、ペルセウスは音に聞こえし大英雄。童話として語り継がれるほどの、神々に愛された英雄。

その彼が、言外に告げているのだ。英雄としての矜持をかなぐり捨てても元マスターの無念を晴らすと。

「だからこそ、僕はこの人理焼却の黒幕を許しはしない。蒔いた種から生まれる人理再編を認めはしない。そんな救いようなない人間たちを含めて、彼が愛していた世界を焼き払い、歪めた。いかなる事情があれど、生かすつもりはなかったよ」

冷ややかな面立ちのまま彼は語る。

世界を憎悪しながらも、彼が崇拜した元マスターの愛した世界を守ること。相反する願いの中を、今まで揺れ続けてきたのだろうか。

だとすれば、それはどれほど惨い話なのだろう。

「———すまないね。少し、熱くなり過ぎた。彼女も遠くの方へ行っただろうし、そろそろお暇するよ」

先程までの凍るような瞳は一瞬で鳴りをひそめ、清らかな笑顔に戻る。優雅にカップに手をかけるその顔は、女性スタツフからチョコをもらって得意げに鼻の下を伸ばす、いつもの英雄ペルセウスの表情^{かお}だ。

思いがけないものを見てしまったような気がした。普段は人当たりの良さそうに笑い、大勢に好かれるペルセウスの裏の——いや、新しい顔と呼ぶべきか。

このまま、彼を行かせてもいいのか。

一方的にコインの裏を見せてもらって、そのまま彼と別れていいのか。

いや、駄目だ。話さなければならぬ。僕のコインを、改めて裏返さねばならない。

なぜなら、訊いてしまったからだ。

彼がそのコインの裏を獲得する過程のものが、僕たちが何より求めた——

「……僕もです」

気付けば、思考の端から言葉が漏れてしまったようだ。

その声にペルセウスが視線を投げかける。口にしてしまったのだ。最後まで走り切るしかない。

息を吸い、短く吐く。騒がしく鳴動していた動悸と僕^俺を鎮め、真つすぐとペルセウスの視線を見返した。

「僕も、貴方と同じように記憶があるんだ。聖杯戦争で呼ばれた時の記憶が」

へえ、と吐息のように小さい一言が彼の口から零れた。

「以前の、いや以後かもしれない。聖杯戦争に召喚された時、僕のクラスはバーサーカーでした」

此度の現界ではアサシンクラスでの召喚となったが、もう一つ。バーサーカークラスの適性も併せ持っている。言うまでもなく、その理由は僕^{ハイド}だ。

「その時のマスターは、魔術の行使はおろか魔術の存在すら知らない少年だった。いや、その右目は一種の魔眼だったので完全な一般人と

は言ませんが」

詳しいメカニズムは不明だが、彼の右目に見られたものは動きが極低速状態に陥っていた。最早停止と言いつつ換えてもいいかもしれない。魔眼を有する神秘性と血統に僅かに残されていた魔力が奇跡的に絡み合い、聖杯戦争への参加権を得てしまったというわけだ。

「それで、僕は何も知らないその少年に、聖杯から与えられた知識を元に戦争の概要を説明した。それを訊いて彼は言ったんだ、『聖杯戦争を止めたい』と」

自分の住んでいる街を守るため。マスター同士の殺し合いなんてものを止めさせるため。

まっとうな魔術師であればとっくに捨て去っているであろう『正義』を彼は秘めていた。誰しもが一度は夢見たであろう『正義の味方』を彼は目指し、僕はそれに共感していた。

せめてもの魔力を得ようとライスポールを頬張っていた横顔が思い浮かび、自然と瞼を降ろす。

「そして僕は、彼と共に聖杯戦争を止めようと奔走し——敗れました」

瞼の裏に浮かぶのは、身を投じていた死闘の瞬間。

熱砂の閃光。黒い森を蹂躪する光の蛇。太陽を直に押し付けられるかのような灼熱と重圧。狂戦士バーサーカーに堕ちて獲得した強化肉体をもとめせずに、骨の一本まで灰燼に帰そうと唸りをあげていた。

振るった凶爪も、突き立てる鋭牙も、生者を捉える咆哮も無意味とばかりに灼き尽くされた。

心臓を不可視の剣で貫かれ、当時のランサーとアーチャーからの奇襲も受けていた。

とどめとばかりに、戦争の最中に突然マスターからの魔力供給も絶たれた。

つまりはそういうことだ。いっばしの使命感だけでは、魔術世界の闇にあえなく？まれてしまう運命でしかなかった。それをわかっていて尚、己は彼に賭けたのだ。

賭けて、望んで、手を伸ばして。

掴んだものは、悪であるのに高望みした愚考を清算するような天罰だった。

「彼の最期を僕は知らない。もしかしたら生きていたかもしれない。それでも、僕と彼が目指した『正義の味方』はあっけなく砕け散った」
狂った科学者に過ぎない己が身では、太古を生き抜いた英傑たちに挑むことすらおこがましかったのだ。

そして、その中で出会ってしまった。狂獣だった僕俺に対して、慈悲と誇りを与えてくれた蒼銀の騎士。狂った悪性ハイドと僅かに残された理性ジキルに刻み込まれた、眩いばかりの誇り高き騎士。

彼こそが、僕たちが目指した『正義の味方』そのもの。そう思わざるを得なかった。彼の成すことこそが正義であり、彼の剣先が向く方こそ悪であると思ひ知らされた。

では、僕たちが目指した『正義の味方』は間違っていたのか。身近な人たちを守りたい、住み慣れた街を守りたいというありふれた願いを抱いてはいけなかったのか。

「ミスター・ペルセウス。僕には、君の元マスターのような高潔な精神力なんてない。一目見て圧倒されるような善たる気風もない。人間の善性を信じたかっただけの、悪性に乗っ取られた科学者だ。そんな男は、正義の味方を目指したことさえ罪なのだろうか」

俯き、拳に力が入る。爪先が掌に食い込む鮮痛が脳に伝達される。所詮は過ぎたる望み。悪は悪らしくあれ。

善の英雄であるペルセウスなら、この未練を迷いなく断ち切ってくれるだろう。怪物退治で名の知られる彼ならば、怪物ハイドである僕を否定することにこの上ない英霊だ。

目指した正義自体は間違っていないはずだ。ただ、僕にその資格がなかっただけなのだ。

そう宣告してくれるだけで、気持ちが悪になれる。

「——正義の味方、か。少なくとも、僕にそれをどうこう言える立場ではないかな」

器から水滴がこぼれるような静かな声で、押し黙っていたペルセウスが口を開いた。

想定していたどの言葉でもなかったことに、思わず俯いていた顔をあげた。

「僕は幸福な英雄だった。幸福だということは、不幸を知らないということだ。困っている人を助けても、その人がどれだけ不幸だったのかは終ぞ知ることはなかったからね」

不幸を知らない人生。果たしてそれはどのようなものなのだろう。常に幸福に溢れ、眉をひそめることのない人生だろうか。いや、怪物退治の逸話や姫の救出の逸話を鑑みるに、相応の苦勞を背負っていることは間違いない。

想像がつかない。幸福しかない人生とは、見方によっては一種の呪いにも思えてきた。他者と真に通じ合えることのないという、巨大な祝福のろいではないのか。

「それに、死後もこうして手を汚しているんだ。それも一の幸福のために、多数の不幸を生み出して。そんな男が、正義の味方について語れる権利なんて持ち合わせているわけないだろう？」

己の両手に視線を落とし、ペルセウスが自嘲気味に笑う。

「それでも、伊勢三という幼い聖人は確かに存在していた。それを世界に刻み付けただけでも僕は満足なんだよ」

傲慢だろうか？、と彼は小さく笑う。

元マスターを救いたい一心。どこまでいっても、それが彼を突き動かしてた原動力のようだ。

そのマスターは実際に救われたのかどうか。それはこの際訊くのは野暮だろう。

どうあれ、確実に一人は救われたのだ。残酷な世界の中で笑った少年のために奔走した、ペルセウスという英霊が。

「それでも言えることはある。正義の味方とは何なのか。たぶん、それに行き詰まってしまった英雄は他にもいると思う。そして、それは今の僕たちのマスターにも言えることだ」

いきなりマスターが話題に組み込まれ、疑問に眉をひそめてしまう。

その反応にペルセウスは珈琲で唇をしめらせ、今までになく真剣な

まなごしを向けてきた。

「これまでの特異点の修復は、異なる歴史を辿った結果多くの不幸を生み出すようなものばかりだった。でも、その逆はまだ来ていない」その言葉にハッとさせられる。今まで渡り歩いてきた特異点では、何かしらの陰謀が蠢いていた。それは魔術王の直属である魔神柱が絡んでいたりと、或いは魔術王の仕掛けた聖杯に呼び出された英霊の暴走によって引き起こされたものばかりだった。

フランスは邪悪な聖女と邪竜が降誕した。

ローマは同じ名を持つ連合軍に攻め込まれた。

大航海時代は世界全てを海に呑まれた。

ロンドンには魔霧と殺戮機械の横行する死都となった。

アメリカは古代神話と有りえない邂逅を果たした。

中東は聖都と紀元前のエジプト庁が混ざり合った。

バビロニアは三女神と決戦を強いられた。

いずれも長く、辛く、切れかけのロープを渡り歩いていくかのようなギリギリの戦いだった。過酷な状況下の中でマスターは、いつだって人々の苦悶に喘ぐ声を救うために奮闘した。

では、その逆とは。

「特異点となった結果、本来の歴史と変わって幸福になった歴史……」
ぽつりとつぶやいた一言にペルセウスが相槌をうった。
「そうだね。そして、そういう可能性に成り得る歴史はいくらでもある」

歴史の闇は深い。それは人間の救われなさや愚かさを同時に示している。

例えば、奴隷格差社会。例えば、フランスの死刑問題。例えば、セイレムの魔女裁判。

少し掘り返すだけでも人間の悪性はすぐに現れる。

もし、これらの歴史が特異点となり、その結果として人々が幸せな世界を得ていたとしたら。

異端審問、無意味な戦争、略奪、貧富の差。本来の歴史では辿ってしまった血肉の道をなかつたことのできた世界。

そんな世界を修復——元の歴史に戻さなければならぬとしたら、マスターはどうするだろうか。

「この先の旅で、マスターはその壁に必ずぶつかる。すなわち、現地の人間をとるか、歴史全ての人間をとるか」

普通に考えればすぐに分かる話だ。多くを救うためには小を切り捨てなければならない。

その判断を即座に下せる人間もいる。心の芯まで冷え切った、壊れてしまった人間ならば、引き金に掛けられた指を簡単に引くだろう。

では、マスターはどうか。とても違う。弱きを助け悪しきに挑む、決して折れることのない精神。どことなく彼に似た、ひたむきに誠実な人間だ。

「マスターは優しい。実際に特異点に跳んで人々と触れ合えば、必ず葛藤するでしょうね」

「だからこそ、さ」

くせつけのある髪を再びかき上げ、ペルセウスは笑った。今日、最初に見せた時のような温かな笑顔で。

「その時は、しっかりと導いてあげよう。僕の正義と、きみの正義で。共に夢破れた残滓だけど、それは新たな正義を正しく育む標しるべになるじゃないか」

曇天とした暗闇に、一筋の光が差し込んだように思えた。

僕と彼の正義。ペルセウスの正義。それらは等しく世界に跳ね返され、無念にも押し通すことができなかった。

だけど、それは間違い方を示すことができた。次に正義を目指す者に、この道は行くなど誤ったルートを助言することができるのだ。

マスターの歩む道が真の正義か。それは分からない。きつとマスター自身、深く理解はできていないと思う。

だがそれでいいのだろう。正義を突き詰めてしまうと、待っているのは僕やペルセウスのような失敗への道。葛藤し、憤怒し、報われぬ悪道。

マスターの赴くままに。マスターが信じる正義のままに取捨選択していけばいい。ただし、僕らが通った道にだけは通さないように注

意しながら。

それでもその道を突き進むのなら、その時は――

「そうですね」

自然と笑みがこぼれた。マスターからチョコを渡された時のように朗らかな気持ちだが、正義と悪の狭間で溺れかけていた僕の心に染み渡った。

「もちろん、貴方も手伝うんですよ。幸福の英雄さん」

「当然さ。僕を誰だと思っている。オリュンポスの神々の寵愛を賜った英雄ペルセウスだ。マスターが望むなら、天馬のように駆け抜けるさ」

人は必ず善と悪を内包している。そして、どちらかの側面に偏り、形成された信念を正義とする。

それは誰しもが当てはまること。英霊も反英霊も、人も怪物も。けれど許されるのであれば。いつかマスターに訊いてもらいたい。悪性の想念でありながら、正義の味方を目指した愚か者の物語を。

クラス：ライダー

真名：ペルセウス

キャラクター紹介

ギリシヤ神話に語られる怪物退治の英雄。

主神ゼウスを父に持つ半神半人で、ヘラクレスの曾祖父に当たる。

神々からの祝福を受け、怪物に堕ちたゴルゴーンを討った。

パラメーター

筋力：D+

耐久：E+

敏捷：B+

魔力：B+

幸運：A+

宝具：A B C D E

小見出しマテリアル

ギリシヤ神話の中でも古株で、その性格も相まって後輩ギリシヤ英

雄との関係はおおむね良好。本人は「後輩ほど誇れる武勇もない」と謙遜しているが。

しかし、その温厚すぎる性格に不信を抱く者もわずかにいる。「奴は笑顔で人を殺す甘い毒のようなものだ」とある毒殺者は語った。

過去に新宿に召喚された記憶があり、現代の知識に優れる。英霊のくせにプリクラとか撮る。その時に召喚されていた他の英霊とも面識がある模様。

直接的な面識こそないがアルターエゴ——サクラファイブから一方的に距離を置かれている。系譜が悪いとしか言いようがない。

ゴルゴーン三姉妹との関係は複雑。討たれた当事者であるメドゥーサは、ペルセウス側にも神々の事情が絡んでいることを察しているので恨む気になれないらしい。対してゴルゴーンは、クラスの補正故かペルセウスへの憎悪が強い。槍メドゥーサは黙秘。上下姉妹は「駄妹を手にかけた男」と明確に嫌悪している。

特異な宝具ステータスは、彼が持つ六つの宝具それぞれのランクのもの。また、中にはメドゥーサと同じ騎英ベルレフオーンの手綱が含まれている。逸話の関係上、本来の持ち主はペルセウスだと思われる。

赤のアサシン

『第二会議室に集合』

シミュレーターから鍛錬を終えてマイルームに戻って見たら、やけに達筆な字体でそう書かれた紙が残されていた。

聖杯からもたらされた知識により、ギリシヤ生まれであるものの日本語を読むことはできる。ただ、読むことはできてもこれほど崩した書き方ができるかという、即答でノーだ。

日本人が筆記体で英語を綴る機会が少ないのと一緒に。線がブレて下手くそなだけの字と、意図的に崩された字とでは書けるか否かの差は大きい。

そういうわけで、これをしたためたのは日本語に長ける人物——
—即ち日系人のサーヴァントであり、その中で最も縁がある人物となると自ずと限られてくる。

そうして、書置きに従って指定された部屋の扉を開いた。

中は小綺麗に整頓されており、長方形上に組み合わされた長机を囲むように簡素な椅子が設置されている。

視線を回すと、同じように徴収をかけられたらしいサーヴァントの姿を発見した。

「こりゃあまた……」

集まったサーヴァントの面々を見て、嫌な予感が苦味となって喉元をせりあがってくる気分に襲われた。

あの男はまたもや権謀を張り巡らすつもりだろうか。ご丁寧に、あの時と同じ奸計を好む相棒バディもいる。

しかめた表情のまま席にどかかと腰を下ろし、深まった眉間の皺を軽く撫でる。

「随分とまた、懐かしい顔ぶれが揃ったものだ」

そう口を開いたのは、深緑のように晴瀾とした艶やかな長髪の美女。ピンと伸びた獣の耳と、嫺やかに揺れる尻尾が目を惹く狩人。アーチャー、アタランテ。

「そうだろうか。俺はそうは思わない」

彼女に言葉を返したのは、向かって真正面に腰かける黄金の青年。幽鬼のように青ざめた肌と、煌びやかな黄金を纏う神気の英雄。ランサー、カルナ。

「元より顔ぶれだけは揃っていましたからな。こうして皆さまだけと顔を突き合わせることは久方ですが」

舞台役者のようにオーバーに手を振るい、周囲の反応などまるで気にかけていない態度で振る舞う劇作家。自著の作品内の言葉を引用するほどのナルシスト。キャスター、シエイクスピア。

「そう、我らは等しく解放者である。サーヴァント^{従属する者}という枠にあてはめられた以上、压制者へと立ち向かう使命があるのだ」

同じく、会話をしているようで中身が成立していない大男。はち切れんばかりの筋肉に浮かび上がる無数の傷と、歯茎を剥き出した狂気の笑顔。バーサーカー、スパルタクス。

そして、最後に自分。真名はアキレウス。ライダークラスで召喚されたギリシヤの戦士。

誰もかれも、カルデアに召喚されてマスターと契約を結んだサーヴァントだ。

だが、ここに集められた英霊達にはそれとは別の繋がりがある。バーサーカーはともかくとして、その繋がりはある種の暗黙の了解として皆が口に出すことをしなかった。

無論、それは未だに姿を見せないセイバー、アサシン、そして一人のサーヴァントにも言えることだろう。

がらがらとアナログチックな音を立てて扉が開かれた。
「どうやら、お集まりいただいたようですね」

「やっぱりお前か」

赤い外套をはためかせて入室してきた青年は、険とした視線に微笑するだけで対応した。

シロウ・コトミネ。かつて自らをそう呼称していた、ルーラークラス
のサーヴァント。

すると、悠然とたなびく漆黒のドレスが、自分と彼の間で絡み合っ

ていた視線を断ち切った。

「相も変わらず御し難い男だ。あれから知能は一つも進歩していないと見える。やはり野蛮は野蛮のまま果てるのみか」

「それはお互い様だ。少しは毒気の抜けた女になるかと思ってたんだがな」

シロウの後に入室してきた女性に、自然と頬が苦虫を噛み潰したように引き攣った。

アツシリアに君臨した美虐の女帝。最古の毒殺者として伝わる通り、ひどく性根の曲がった女。暗殺者^{アサシン}というにはあまりに瀟洒なドレスを振る舞う美女——セミラミス。

どうしてこう、王族というのは揃いも揃って醜く変貌していくのか。

「我を誰と心得ての発言だ。このセミラミスから毒気を抜くだと？」

それは魂を引き？がされると同理よ」

「そいつは失礼した。変わらない女は飽きられるってことを覚えておきな」

「ご忠告痛み入る、褒美の品を与えよう。そうさな、貴様の師を苦しめた毒というのはどうだ？」

「……上等。よほど戦車にくくりつけられて引きずり回されてえようだな」

魂の底からこんこんと湧き上がってくる怒りに身を任せ、席から立ち上がった槍を取り出す。向こうは微笑を崩さないまま、優雅に手を振るって虚空から毒々しい鎖を召喚した。

お互い、一步でも踏み込めば即座にこの場は地獄へと変わる。そう頭では理解していても、内側から絶叫する怒りが闘争心と融合し、この上なく昂ぶっていった。

女帝の指がぴくりと揺れる。それを皮切りに、脱力していた両脚に力を込め——

「止めぬか」

「そこまです」

音速の世界に入りかけた眼前に、木製の弓が入り込んできた。たま

らず急制止をかけて視界を向けると、アタランテが呆れた表情で唇を尖らせていた。

同時にセミラミスにもシロウが制止をかけたようだ。彼女はひどく顔を歪め、小さく舌打ちを打った後、召喚した鎖をたちまちひっこめる。

「すまねえ、姐さん」

「気持ちには分かるがな。しかし今ではない。迂闊な行動でマスターを困らせる真似はやめろ」

槍を消して、素直に謝罪を告げる。やはりこの人にはどうにも頭があがらない。

直後に気付いた。座っていたはずのカルナがなぜか立ち上がっており、もう一度座りなおす素振りを見せていたのだ。おそらく、自分とセミラミスが万が一に衝突した場合を兼ねて、制止役を務めようとしたのだろう。

そうならば本当に地獄と化してしまうところだった。また一つ、教訓が出来てしまった。

「それで、此度集合をかけた目的は何じゃ」

「ええ」

気を取り直して、アタランテがシロウに直球で用件を尋ねた。

頷き、青年は指を立てる。

「皆さん、態ていの良いことにあの時の記憶がまだ残っているみたいなので、お互い親睦を深め合おうと思ひまして」

「何を言いたいのかさっぱりじゃが」

胡散臭そうにアタランテが目を細める。

親睦を深めるといふが、今更何を目的でそんなこと画策したのか。「これより共に戦う以上、連携をとっていく機会が何度もあると思われます。ですが、その際お互いに理解を深めていなければ呼吸を合わせられず、空中分解は必然。なので、キャスターと共に皆さんの一面を記録した映像集を作成しました」

あの時と違い私にもマスターがいますし、とシロウが付け加える。待て、今あの男は最後に何を作ったといった。

「映像集？」

ええ、と相槌をうつてシロウがシェイクスピアの方を促した。

見れば、劇作家の手元には長方形代の箱のような物が置かれている。後に分かった事なのだが、あれはカルデアの備品として保管されていた映写機と呼ばれるものだという。

嫌な予感しかしない。シロウ、シェイクスピア。そして一枚噛んでいると思わしきセミラミス。

あの三人が組んで作った映像集など、どれだけこっちの精神に多大な負荷をかけるか分かったものではない。

それに親睦を深め合うというのなら、致命的な欠陥が現在発生している。

「すまない。まだセイバーが来ていないようだが」

カルナの問いかけ通りだ。そう、この会議室に集まった人数はシロウを除いて六騎。

最優と称されるセイバークラスのサーヴァントが、未だ影も見せていないのだ。

「セイバー……モードレッドさんですが、一応便りを出しましたが出席することはないでしょう」

大戦時のこちら側のセイバー。名をモードレッド。円卓の騎士という集団の一員だったと記憶している。

以前の大戦で残された記憶では、一人単独行動をとって戦場をかき乱したジョーカー的存在だった。最優のクラスに選ばれる器なだけあり、遠巻きながら眺めていた戦闘能力には目を見張るものがあった。

そして彼女自身、先に単独行動をとるように自由奔放で我が道を突き進むタイプのサーヴァント。おまけに自分以上にセミラミスを嫌悪しているらしく、単独行動をとるようになったきっかけも初対面ですぐに劣悪な関係になったからと訊かされた。

それほど最悪な関係性ならば、この場に現れなくても不思議ではない。

「なので、代わりの方を連れてきました」

「代わりだと？」

だから、シロウが続けざまに放った言葉に思わず聞き返してしま
う。

この面々が揃い踏みの中、セイバーであったモードレッドの代役に
なる者などいないはずだ。

まさか“黒”のセイバーでも連れてきたのかと邪推していたその
時、派手な音を立てて扉が開けられた。

「おう、何だか呼ばれたんだけど」

軽々とした口調で部屋に入ってきた少女。黄金色の髪を後ろで一
束にまとめたポニーテールに、性格がにじみ出たような鋭い目つき。

忘れるはずもない。あの時は戦場の中、遠目で見つけたただけだった
が、彼女こそセイバー。

そう、セイバーなのだが。

「セイバー……：汝、そこまで開放的な服装だったかの」

狐に幻を見せられたようにアタランテが歯切れ悪く口を開く。

以前見かけた時やカルデアですれ違った時と、随分記憶と違う恰好
をしていたのだ。

小麦色の肌、身体のボディラインを強調するかのような白の制服。
おまけに脇に抱えている板状の物体。

どこからどう見てもセイバーには見えない。いや、弓矢すら持たな
い弓兵とかがざらにいるカルデアだが、剣を持たないセイバーがいる
という流石に訊いたことがない。

すると、疑問符でいっぱいになっている自分達へシロウから補足が
入った。

「このモードレッドさんは諸事情によって霊基が変化したサーヴァン
トです。クラスもライダーになっています。でもまあ、この際クラス
は関係なしに声をかけてみたのですが、まさか本当に来てくれると
は」

しれっと言つてのけた説明に些かあつけにとられた。

霊基が変わるといふことは、それは肉体改造とほぼ同じ意味合いを
示していた。現にセイバーとして召喚されたはずのモードレッドが

ライダーになつているといふ。己とクラス被りしたことに腹正しさを覚えてしまふが、そこは我慢。

ともあれ、並大抵の智慧では行使できぬ業。もしかすると、それを行えるサーヴァントは先生に匹敵する叡智の持ち主——いいや、それは認めない。

とにかく、心残りなのは彼女が我々の知るモードレッドと同一人物なのかどうか。

その疑問を晴らすかのように、モードレッドが追加で説明を加えた。

「暑苦しい方のオレとも記憶は幾分か共有しているけど、まあ来てやってもいいなと思っただけだ。テメエのことが気に食わねえのも一緒だぜ」

「ふん。小娘風情が粹がるなよ。その貧相な身体を人目に晒して恥ずかしくないのか」

「貧相じゃねえし！ 慎ましいだけだ馬鹿！」

確かに、隣にセミラミスが並べられると女としての成熟具合の差がありありと浮き出てしまう。

しかし、健康的な褐色肌。本人曰く慎ましいながらも強調されて張りのある胸。しなやかにくびれに、瑞々しい太もも。

うむ。

「……ちと薄いが、ありだな」

「テメエ！ 今どこを見て言いやがった!？」

「あれは虐げられし奴隷の姿だ！ 鎧や武器を剥ぎ取られ、身につける衣すら最低限のものしか残されていない、圧制者によって剣闘士を強いられた生前の私そのもの。さあ、今こそ私と圧制者を抱擁しに行こう！」

「落ち着かんかバーサーカー」

あれはあれでいいものだと思ふのだが。

本人も述べた通りの、自己主張が薄いながらもしっかりと存在するちようどいい大きさ。それを際立たせる衣服のぴっちり具合。ただでかいだけのものでは醸し出すことにできない、成長の可能性を想像

させる艶めかしさ。

やはりライダークラスに悪い奴はそういない。ほんのり焼けた肌と相まって実に――

「……………」

「いだだだー！」

肉を無理やり絞り切られるような痛烈な感覚が、左太ももから脳に伝達された。

悲鳴をあげて飛び上がったことに満足したのか、強烈に太ももを抓ってきた緑髪の美女はふんと鼻を鳴らして席に戻っていった。

「まあ、せっかく顔を合わせる機会に巡り合えたのです。あの時と違い、我らは同じマスターに集いし英霊。たまにはこうして、互いを理解し合う時間を設けても主は罰を与えませんよ」

一連の流れを懐かしむように見つめながら語るシロウに、今まで席を立っていた者達も顔を見合わせて静かに着席する。

確かに、あの時は大戦の真ただ中。目まぐるしく変化していった戦況の中、絆を深めていたとはいえ、真に互いを理解したことはついになかった。

皆が席に座ったことを確認したシロウが、シェイクスピアに合図をかけた。

「それではキャスター、お願いします」

「あい分かりました。それでは、赤の陣営同窓会記念の映像、開演！」
掛け声とともに映写機の再生ボタンが押され、スクリーンに映像が投影された。

そんなタイトルつけていたのか。少しこつ恥ずかしい気持ちになるのでやめてほしい。

とはいえ、半ば勢いに流されるままに始まった親睦会。始まってしまったものは仕方ないので、投影されたモニターに目を移す。

最初に映ったのは、雲一つない晴れ切った大空。やつかみジジイこと主神ゼウスの機嫌が良い時の天気こそっくりだ。

次いで地上に視点が移る。晴れやかな空模様に見劣りしない、青々とした草原が広がっていた。あの草葉の上で寝転がり、瞼を閉じてそ

よ風に身を預けたくなる衝動に駆られる。

“ マスターか。チョコレートを作ってみた ”

鈴のように凜とした声が鳴った。聞き違えようのない、アタランテのものだ。

チョコレート、というと先日騒動になったイベントを思い起こす。確かバレンタインといったか。

男女間で親しい友人や日頃の感謝、時には甘酸っぱい想いをチョコレートに乗せて手渡すイベント。自分もマスターやその他のスタッフなどからいただいた身である。

普段菓子作りに縁の薄い彼女である。するとこの映像は、ちょうどバレンタインの時に取ったのだろう。

「なっ、これは……！ キヤスター、汝どこでこれを！」

映像のものではない、この場にいる彼女が立ち上がってシエイクスピアを問い詰めた。興奮のためか、それとも他に何かあるのか、顔を真っ赤にしてきゅつと瞳孔が細ばっている。

「吾輩はその場に立ち会っていませんとも！ ただ、ちよつぴりマスターの衣服に小型の何某をくつつけただけでして」

「それで盗聴、盗撮を謀ったというか。汝、やじり鍔の錆になる準備はできているのだろうか」

「おや、あれが貴方のチョコレートで」

狼を思わせる獰猛な瞳に睨まれているにも関わらず、シエイクスピアは映像のアタランテが取り出した箱に興味を惹かれていたようだった。

その瞬間、怒りに形造られた彼女の顔色が急激に青ざめた。

“ リンゴを自分で作るとはいささか不思議な気分だが ”

彼女が懐から取り出した菓子。明るい茶色にコーティングされていて紅色ではないものの、外見はまさしくリンゴだった。上部には彼女がいつも矢筒に蓄えている矢が二本刺さっており、アクセントで飾り付けられたリボンは彼女の乙女らしさを損なわせていない。

森を跳び、獣を射抜き、肉を削いで腹を満たす狩人だった彼女。戦場の時であつても気高く在り、月光を浴びて神秘的に煌く横髪に思わ

ず見惚れていたものだ。

そうしてみると、このリンゴは彼女の中で最大限の装飾が施された至高の逸品だ。それを贈られたマスターに少なからず嫉妬してしまいうそになる。

「——リンゴ？」

口に出して、改めて数回その言葉を反覆した。

アタランテは純潔の狩人だった。同時に俊足で知られ、自分より足の俊い男としか契りを結ばないとルールを敷いていた。

だがある日、ヒツポネメスという一人の若者が彼女に駆けついで勝利した。しかし、ヒツポネメスは彼女より足が俊かったわけではない。

彼は、ある物を使ってアタランテの気を引いたのだ。

そのある物こそが——

「あ、ああああ……」

「……姐さん。マジで？」

青ざめた顔から一転、それこそ熟れたリンゴのように紅潮したまま彼女は口をぱくぱくさせていた。

シロウは微笑んだまま生暖かい目を彼女に送っていた。セミラミスはにたりと唇の端を吊り上げている。シエイクスピアの野郎は一心に紙にペンを走らせていた。

モードレッドは真意に至っていないのか、眉をひそめて疑問符を頭に浮かべているようだ。スパルタクスは除外。

「ふむ。金のリンゴとは珍しいものを使っている。マスターもさぞ喜んだだろう」

そして、容赦のないトドメの一撃がカルナによつて振り落とされた。

「うわあああああ！」

叫び。

恨み、嘆き、怒り、そして恥辱を多分にまぜてかき混ぜたような絶叫をあげながら、緑風が会議室の扉をぶち破って駆け抜けた。

「くくく。あれにもそのような情動があつたとはな。いっぱしの獣と

ばかり思っていたが、なかなかどうして三流の芝居くらいは楽しめたぞ」

くつくつと、毒の女王は歪んだ笑いを浮かべる。

この場に先程までの冷徹なアタランテがいたのであれば、勇猛に矢を番^{つが}えてセミラミスを鋭く睨んでいただろう。

しかし、こうまで暴露された彼女は、しばらくの間ただの乙女ではない。今頃、通路内をどんな感情で疾走しているのかを考えただけでゾツとする。シエイクスピア、お前は呑気に創作活動している場合か。

「アーチャーはそのうち帰ってくるでしょう。では次に、ランサーの記録映像です」

あくまで淡々と、シロウが司会進行を舵取る。

今のような衝撃映像が次々流されていくのか。どんな拷問だ。

すぐにでも席を立ちたい衝動に駆られる。しかし、ぎりぎりのところで踏みとどまった。

それでは自らの過去に背をそむけるも同じ。このアキレウス、過ぎたる過去に一切の恥無しと断ずる男でなければならぬ。それが英雄という生き物だ。

それに、なんだかんだで他のサーヴァント達の一側面に興味を持ち始めたところもある。

あのアタランテを壊滅的にノックアウトしたほどの代物だ。もしかすると、同じように狼狽するカルナの姿なんてものを見られるのかもしれない。

そんな一縷の望みを期待しつつ、ノイズをまき散らすモニターを注視している――

“へいよーかるでらつくす”

なんとも間延びした言葉に筋肉が弛緩してしまい、机に思いっきり額をぶつけてしまった。

「いってえー」

「その痛みこそ被虐の証。しかし大丈夫、如何なる時もその痛みが叛逆心を掻きたてる燃料となるのだ」

痛みに自動的に反応したスパルタクスを無視し、もう一度モニターに視線を戻す。

そこには、珍妙な挨拶をマスターと交わすマハーバーラタの大英雄が映っていた。

「何だよ今の挨拶。そのままマスターとハイタッチしてるし……」

「ずるいぞ！ オレもやり……んん、ん。羨ましくなんかねえな、全然」

「盾の子もぽかんとしてるな。そりやそうだ」

「ランサー。お主、何を考えているのだ？」

「ここでの挨拶だとマスターから訊かされた」

「あいつ……たまにわけの分からない行動を起こすよな」

「たまに、ですかね」

微苦笑するシロウのつぶやきに、全員が返す言葉もなかった。

たまにではないな。うちのマスター、結構な頻度で奇行をとる。

「で、これは何している時の映像なんだ？」

「ああ、売店にパンを買いに行くところだ」

“ ああ、売店にパンを買いに行くところだ ”

自分が投げかけた質問に、現実と映像のカルナが全く同じタイミンで返答した。

本人は合わせたつもりはないだろうに。というかパンって。

「カルナでもパンとか買いに行くんだな」

意外そうにモードレッドが目をぱちくりさせる。

“ いや、ドクター……、ロマンだったか？ 買ってくるよう頼まれたんだ ”

彼女の驚愕にカルナが返答するより早く、映像のカルナが先に答えを述べていた。

途端、自分はため息をついて首を振ってしまふ。あの男、真正正銘の大英雄に何を頼んでいたのだ。パン買って来いとか学校でもあるまいし。

似たような嘆息がそこかしこから上がる。

「……ちなみに、その後どうしたんだ。ちゃんとシメたか、あのもやし

野郎を」

「ああ、フランスヘレイシフトして盗賊団を撃破した」

「なぜそうなる……」

映像を見てもわからないものはわからない。そんな男の規格の違いを、ありありと見せつけられたような気がした。

その後、スパルタクスが湯船に浸かっている映像をひたすら流されたり、敵陣調査だと称して聖女とピンク髪のキャットファイト(?)シーンを見せられたり、シエイクスピアが撮影してきた映像の数々が紹介された。

途中、自分が先生の真似事をして海賊たちに戦術の手解きを仕込んでいる時や、マスターにサンオイルを塗ってもらって嬌声をあげるモードレッドの映像が流れた時は、その都度に嘲笑するセミラミスと一触即発の空気に陥ったりしたもの、いたって平和的に時間は流れていった。

◇

「……で、次は誰なんだ」

あまりに濃密な映像ばかりが出てくるもので、疲労からげんなりとした口調になってしまう。

モードレッドもリアクションに疲れたのか、背もたれに身体を預けて唸っていた。先のサンオイルの件はよっぽど堪えたらしい。

「さあさあ、そろそろ疲れてまじだりいと思っっている皆さま。吾輩、そこまで考慮して劇の流れを制作しておりますとも。次はお待ちかね、アサシン殿の秘蔵映像でございます!」

途端、眉をひそめて怒気を放ったのはセミラミスだ。

「シロウ。これは訊かされておらぬぞ。説明しろ」

どうやらセミラミスもあざかり知らない事柄だったようだ。肩眉を吊り上げ、不機嫌加減をおくびにも隠さずに隣に腰かけるシロウに説明を要求する。

「アサシン。我々だけ隠し通しては打ち解けるも何もあつた話で

はないです」

「我は女帝ぞ。なぜ下々と同じ立場に合わせねばならぬ」

「おお！ 見よ、あれこそが暴虐なる压制者の体現！ 弱者をくじき、自らは玉座の上で胡坐をかく。さあ立ち上がれ同胞たち。あれなる女帝に反旗を翻す時である！」

セミラミスの王族らしい傲慢な振る舞いが琴線に触れたらしい。剥き出しの笑顔のまま沈黙していたスパルタクスが、表情を変えぬまま怒号を上げて勢いよく立ち上がったのだ。

「落ち着け筋肉ダルマ！ ここで暴れたらむちやくちやになるだろうが！」

「ああもう、ほんと扱いづらいなこいつ！」

ただでさえ広くない会議室で、こんな大男に暴れられたらひとままりもない。たまらず、近くで座っていたモードレッドと二人がかりで暴れだすスパルタクスの制止にかかる。

「——と、このように。差別を許さぬ御仁がいらっしやいます故。貴女も正面からあれとやり合うのは面倒でしょう？」

「キヤスター、貴様……ッ」

アサシン 暗殺者とバーサーカー 狂戦士。真つ向からぶつかり合えば、どちらが有利なのか明白。

おまけにセミラミスは性質上、普通のアサシンよりも正面切つての戦闘能力は低い。狂化ボーナスで著しいステータスを誇るスパルタクスの前では、あの庭園内でもない限り簡単に捻り潰されかねない。「ふん。我に辱めなど通用せぬ。第一、そこにいる頭の中まで常夏馬鹿と違ってマスターに感情など傾けておらぬわ」

納得はしていない、と面白くなさそうに彼女が鼻を鳴らす。それに連動してか、どういう判断基準かは分からないもののスパルタクスも席に戻った。

なんだと！、とサーフボード片手に乗り込まんとするモードレッドもどうにかなだめ、渋々といった面立ちで着席させる。

ある程度の落ち着きが場をに戻ってから、シエイクスピアが映写機の再生ボタンを押した。

“——おや、貴女は”

映像が始まり、まず鼓膜を震わせたのは男の声。

それはこの場にいる男性サーヴァントのものではない。しかし、自分はこの声の持ち主を知っている。

“お主は、ギリシヤのペルセウスか”

続いたセミラミスのつぶやきがその答えだ。

英雄ペルセウス。自分が生まれるよりも昔に活躍し、怪物ゴルゴーンを討ち果たしたことで知られる大英雄。

あのヘラクレスの曾祖父とは思えない穏やかな気質の人で、最初に話したときなんかは「僕のこととは先輩とか思わなくてもいいよ」と気さくに話しかけてきたくらいだ。

セミラミスとペルセウス。本来であれば、決して巡り合うことのない両者。

それがこうしてカルデアの通路ですれ違ってしまふのだから、人生何が起きるか分かったものではない。いや、既に没した身ではあるが。

“その通り。かのアッシリアの女帝にお見知り頂いて光栄だ”

“ふん。ギリシヤの戦士は好かん。疾く失せよ”

ちらりと目線を彼女にやる。やはり、お前のことだと言わんばかりにセミラミスはこちらを睥睨していた。

当然こちらもほぼ同じ気持ちだ。傲慢で不遜で、王族というのはどいつもこいつも偉そうにふんぞり返る。勇気も力もないくせに権力だけでのさばるやつらの何が偉いのだ。

あの女はそういう王族と同じ類のものだ。複雑な縁もあって今は協力体制を築いているが、聖杯戦争で敵対したときには真っ先に殺しに向かう。それだけは確かだ。

“その手にあるのは、もしや貴女も?”

ペルセウスの言葉に思考を引き戻される。彼の指摘で気付いたが、映像内のセミラミスの手には瀟洒に飾り付けられた箱があった。

ペルセウスが両手に抱えている箱を含めて考量すると、どうもこの

映像はアタランテと同じくバレンタインデーの日に録画されたものようだ。

しかし、あのセミラミスが町娘のような清純さでこのイベントに臨むはずがない。事実、彼女は唇を淫靡に吊り上げ、妖艶に微笑んだ。

“ くく、毒殺者である我が手掛けた料理だぞ。毒があるか否か、それを食すか否か。疑心暗鬼に陥り、恐怖と疑惑で塗りつぶされていくマスターの顔が見てみたくな ”

“ 貴女も底意地が悪いというか、強情というか。まあ、どういう反応をするかは僕も楽しみに考えておくよ ”

彼女ほどの美貌の持ち主に微笑みかけられても、ペルセウスは柳のように受け流す。

そして、セミラミスの横を過ぎ去って少し歩いたと思うと、何かを思い出したのかくると顔を振り向かせた。

“ あっ、そうだ ”

“ 何だ。早く消えろと言ったのが伝わらぬ聴盲かお主は ”

“ 日本では、想い人に気持ちを伝えるときは手紙が一番いいらしいよ ”

ぴくりと、彼女の長耳が僅かに揺れたように見えた。

“ ……なぜそれを我に教える。まさか、我がマスターに同情をかけたとでも? ”

“ いいや。まあ、記憶の片隅にでも留めておいてよ ”

じゃあ、と光を散らばめたような玉っこい笑顔で青年は廊下の奥へ消えていった。だんだんと小さくなっていく背中さえ爽やかさを残していくあたりは、流石ペルセウスといったところか。

“ 何を言い出すかと思えば。これだからギリシャの男は ”
“ ひどく不快そうに眉を狭め、短くそう吐き捨てた。

映像越しでは彼女の表情こそ長髪に隠れているが、不機嫌に心を埋め尽くされたことは容易に理解できる。彼女のようなサーヴァントには、ペルセウスという英雄はあまりにそりが合わないだろう。

だが、声色こそ尻尾を踏まれた猫のように不機嫌に聴こえたが、それにしては彼女の反応が徐々に違うものを帯びていつているような

気がした。

さながら、諦めていたパズルの一ピースが思いもよらぬ形で見つかったみたいで――

“――手紙、か”

不意に、見せつけられた。

これまで一度も見せたことのない、蠱惑と奸計に満ちた女帝のものとは思えない笑顔。

退廃した荒れ地の影でひっそりと咲く花のような、いつそ寂しさすら思わせる可憐な笑顔が、大画面の悉くを埋め尽くしたのだ。

自然と、モニターからアサシンの方へと視線が集まる。困ったように笑うシロウの隣で、両手で壁を作って美貌を隠している乙女がそこにいた。

他者を睥睨し、妖しく嘲笑していた女帝の面影などどこにもない。茹で蛸のように赤く染まった、一途な女がいるだけだった。

「なるほど、それである時手紙を」

「もらったのか!? どんな内容だ!？」

「それ以上口を開いてみる、致死毒を流し込んでやろう……」

ぽつりとつぶやいたシロウに食い気味に質問したところで、表情をかお隠したままのアサシンから怨嗟の叫びが轟く。果たしてその暴言は自分に向けた言葉か、それともシロウのほうか。

「うむ。可愛らしいものだ」

「お主、アーチャー!? いつの間に」

「キヤスターに呼び戻されてな。アサシンの初心な一面を覗けると知らされて渋々戻って見たが、これは良いものを見せてもらった」

「喜劇にしろ悲劇にしろ、観客は大勢いてこそ華というものですからね! 『君を夏の日にたとえようか』一見して恐怖

と絶対を振る舞う女帝は、しかして

『That art more lovely and more temperateそれよりもずっと美しく、穏やかだ。』」

「……お主には後で我が玉座へ訪れる権利を与えてやろう」

「ハハハハハ！ それはご勘弁」

バレバレだったとはいえ、思わぬ女帝の素顔に面食らってしまった。

いつもああいう安寧な態度であつたら、それこそ自分だつてどきりとしてしまうかもしれない。

結局、どれだけ強情に振る舞おうと、冷酷に蔑もうとも、女帝セミラミスも一人の女でしかなかったということだ。

その一面をプッシュしていけばもう少し可愛げがあるというのに。いや、その面だけ見せられるとそれはそれで気持ち悪いのでやっぱりやめてほしい。一瞬浮かべた想像の中でも十分吐き気を覚えた。

後で先生から異性を墮とす恋文の書き方でも教えてもらおうか。そんなくだらないことを考えてしまうほど、朗らかな空気に満ち満ちた。

「では、最後にシロウ殿の映像をご覧いただきましょう！」

——全ての流れが裁断された。

よりもよって語り部を継いだのが、口を開くたびに誰かの不快指数を加算させるはた迷惑な脚本家、シェイクスピア。

「……シロウののだと？」

セミラミスの表情が僅かに和らぐ。

「ええ。先に挙げた通り、私だけ何もないというわけにもいかないでしょう。なので、キャスターにそれらしいものを用意していただくようお願いしました」

「シロウ殿の為人ひととなりが一発で分かるグッドなものを用意しましたとも！」

声高らかにシェイクスピアが謡う。

シロウの性格など、ある意味で全員が既に理解しているものではないだろうか。

その眼差し、心は聖人であり、全人類を救済を真に願う青年。願うあまり、救済という暴走に走った聖人くずれ。

赤の陣営に限らず、黒の陣営側のサーヴァントも彼の所業を痛感し

ている。今更深める事実など残されているのか。

大多数が疑問符で頭がいつぱいになっていいる中、劇作家の手によってかちりと映写機のボタンが押された。

“ ふふふ、誰かと問われて答えるものはおりますまい ”

モニターに映し出された景色は、一転して灰色の空とまばらに振り散る新雪。

その中で、不遜に笑うシロウの音声だけが流れた。

“ —— 我が名はサンタアイランドに住む謎のサーヴァント、サンタアイランド仮面！ ”

青年の声と全く同じ声色が、会議室内にしんと響き渡った。

モニターへ戻せば、そこにはソリに騎乗して空中を滑走するマスター達の前に立ちはだかる、修道服と赤色の外套を羽織った褐色肌の男の姿があった。

見間違えようがない。紛れもなく彼はシロウなのだろう。

その顔に、珍妙なマスクさえつけていなければ。

「——」
全員の視線が、同じ格好をしている男へと向けられる。セミラミスはおろか、スパルタクスもだ。

「……シロウ、なんじゃこれは」

平坦な声で女帝が問う。

「……さて、何のことでしょう」

「とぼけるのか？ あの仮面の男はなんじゃと問うておるのだ」

「彼はサンタアイランド仮面。サンタアイランドに住む謎のサーヴァントです」

「俺も初めて見た。世界にはこのようなサーヴァント体も存在するのか、勉強になる」

モニターを凝視したまま一度も目を合わさない東洋の聖人と、本当に関心を抱いている大英雄。

カルナは少し疑うということを覚えた方がいい。嘘偽りを見抜く

瞳をもっているとはいえ、時たま裏技のようにそれをすり抜けられると純粹に頷いてしまうところがある。

「随分、一緒に映っておる幼子たちと愉しそうにしておるな。そういう趣味嗜好でもあるのか？」

「彼女たちはクリスマスを心待ちにする純真な子供たちです。サンタアイランド仮面としては突っぱねた態度をとるはずがないのです」

“ ジャンヌ……ジャンヌよ……。プレゼントを拒まれた程度で、臆してはなりません ”

「ほほう。しかもそのうちの一人はあの聖女とはなあ。おまけにプレゼントを配る側らしいが？」

「子供がサンタに憧れて幸せを運ぶ。それはとても素晴らしいことじゃないですか」

“ サンタアイランド仮面さん……！ つまり、貴方は私にとってのお師匠でしょうか！ ”

“ ええと……では、そういうことで…… ”

「師匠。師匠と来たぞ？ かつては真つ向から敵対したやもしれぬ女と、今度は師弟関係を結んでいるようだぞ？」

「……………」

サンタアイランド仮面なる者と同じ声色の青年は押し黙り、目線がどンドン彼女と反対側の方へを向いていく。

何だろう。配役の豪勢な昼ドラを見せられている気分になる。しかも構成作家にシエイクスピアが関与しているという。

気になって他のサーヴァントの反応を見渡してみる。

モードレッドは腹を抱えてびくびくと震えており、アタランテは途中から登場した子供サーヴァントに見惚れていた。シエイクスピアは現状のおしどり夫婦の詰め問答に喜々としてペンを走らせている。カルナは純粹に映像を楽しんでいるようだ。スパルタクスは除外。

「……あの時も、こんくらい打ち解けてたら勝てたもんかねえ」

ふと零したつぶやきは、喧々騒々に発展しかけた若奥様の怒号の前に霞のごとくかき消されてしまった。

“ 少女の嘆き、少女の喜びを聞いたとき、駆けつけ三杯、寿司食

いねえ。サンタアイランド仮面、参上……！”

クラス：アサシン

真名：セミラミス

キャラクター紹介

世界最古の毒殺者。アッシリアに君臨した、美貌と叡智を誇る女帝。

魚の女神デルケットとシリア人の間に生まれた半神半人。

ニノス王を毒殺し、王位を継承。四十二年にわたる王政の後、鳩に変化して天に昇ったと語られている。

世界七不思議に数えられるバビロンの空中庭園を建造したとされている。

毒殺者として後世に知れ渡る以上、悪女のイメージが強いが……。

パラメーター

筋力：E

耐久：D

敏捷：D

魔力：A

幸運：A

宝具：B

小見出しマテリアル

二重召喚ダブルサモンというスキルにより暗殺者アサシンと魔術師キャスターの両クラスのスキル

を併せ持っている。

が、カルデアに広がる我が王やら歌姫やらの増殖具合を見て自分もその対象にならないか若干びびってる。

メデアとの意気投合の早さは異常。

同じ毒物を扱うサーヴァントであるロビンフッド、静謐のハサンともそれなりに打ち解けている模様。新種の毒を開発することに余念がない。こういう裏での頑張り屋なところが本性を隠せていない証。

反英雄に近い気質なため、武人色の強い英霊を見ると途端に嫌悪を示す。血の気の強いギリシヤや中華系の武人とはとことん相容れな

い。

また、ある人物を連想させるとモードレッドを始めとする一部の騎士からも警戒されている。そんな様子をまにまで見つめる花の魔術師。

巷では土木系アサシン（命名アキレウス）という異名を頂戴している。無論本人の前で言うとは速攻玉座行きなので禁句事項である。

番外：鉄の黒騎士

——本日、偉大なる我らが騎士王が来室された。

微小に発生した特異点の修正のため、レイシフトして原因を絶ってきたという。

世界が滅べば、ブリテンの栄光も無きものとされる。それだけは阻止せねばならない。

しかし、陛下ともあろう御方があのような成人にも満たない若者に付き従うなど。

陛下は寛容的だ。過ちを良しとし、罪を赦し、罰を免除する。それは完璧な王として、当然の振る舞い。

対して、あれはどう取り繕っても平凡。平均で、平民だ。

ただの民衆でしかないあれが勘違いし、陛下の対応につけあがった暁には、我が鎖の錆としてくれる。

思考にふける自分に水をかけるように、陛下が使命を下された。昨今、不足しがちな資材を的確に調達できる時代の見直し、ということだ。

カルデアにあらかじめ備蓄されていた資材も、イエローライン寸前だという。

資材の不足は兵士たちの士気に大きく影響する。これは、重要案件として最優先に処理すべきか。

その後、陛下へ提案するには不確定要素も多いが、今後の資材運営についていくつかの案を講じてみた。

実行に移すには構想の域を出ない。もう少し、確実性を練り上げておかねば。

◇

——本日、かの聖槍を携えた陛下が来室された。

自分は騎士王アーサー・ペンドラゴンに仕えた身。しかしながら、かの王もまたアーサー・ペンドラゴン。

ならば、忠節に尽くさない道理がない。

惜しむべきは、自分がかの陛下に仕えた自身と記憶を共有できていなかったことか。

気にするな、と王は笑う。だがこれでは、真の忠節を尽くせない。別の世界の自身の記憶程度、どうにか共有できないだろうか。

聖槍の陛下が課題を持つてこられた。内容は、異性から貢物をいただいた時の適切な礼節の振る舞い方、というものだ。

騎士王と違い、聖槍の陛下は誤魔化しきれない肉体。そうになると、それらしい振る舞いの一つや二つ、できて当然と解釈される。

勿論、陛下はある程度の知識や技術を身につけたうえで、私の実力に不足がないかを試しているに違いない。

臣下の能力を常に気にかけて、向上心を挫らせる陛下の御心は深い。心なしか陛下の頬が赤いように見えたものの、知識の限りを搾り、

王者の気風溢れる振る舞いの例をいくつか提案した。

もつと陛下に最適な助言を与えられるよう、知識を蓄えておかななくては。

◇

——本日、水上活動に適応された服装の陛下が来室された。

なんとというか、その、直視することがおこがましいほど輝いておられている。あまり肌をお焼きにならないようにクリームを手配しておく必要があるか。

そして失礼ながら、湖の精霊が作りし星の聖剣を水鉄砲にくくりつけてまで使うのはいかがなものだろう。

神秘性というか、色々と台無しに見えてしまう気がする。だが陛下はご満悦そうなので、それはそれで置いておく。

シミュレーターで構成した海辺での行動が多いためか、泳ぐ機会も多くなると陛下がおっしゃった。

王たるもの、泳ぎの一つも手本を見せられずしていられるか、ということで相談に参ったらしい。

陛下は精霊の加護を受けておられるので泳ぐ必要がないのでは、と返したが、それとこれとは話が別のようだ。

この場にケイ卿がないのは痛い。とはいっても、ケイ卿はケイ卿

であてにならない水泳方法を披露するので参考にならない類か。

後日、直接陛下の泳ぎを見て考慮することにしてその場はどうか収まった。

そのための時間や場所、それと円卓の騎士の誰かを呼びつけておかねばなるまい。次に空いている時間はいつだったか。

◇

——本日、無辜な民たちに正当な報酬を授ける姿の陛下が来室された。

クリスマスという祝祭の主催を担う人物。端的に言つて、サンタクロースの恰好をした陛下が現れた。しかも黒い。

そもそもサンタクロースは聖ニコラウスという人物がモデルであり、まかり間違つてもアーサー王と同一視されるような存在ではなかったはずだと記憶している。

まさか、単純にコスプレがしたかったのだろうか。いいや、陛下に限つてそれはあり得ない。それにしても、手足が冷えそうなお格好だ。

後から来日したくせにでかい顔をするハロウインをどうにかしろ、と申しつけられた。

異国の文化だったものが、さらに別の異国の文化としてなじんだものをどうにかしろとは、あの蛮族共を根絶させることくらいに匹敵する難題だ。

どうにかしろ、というのも陛下にしては随分と曖昧な表現である。文化が根付いた町村ごと根絶やしにする、という策も考えられるが、カルデアを根絶やしにするわけにもいかない。

流石に、この場ではすぐに解答できないと陛下に頭を下げる結果となつてしまった。

そうか、と陛下は気にする素振りを見せなかったが、内心では自分への評価を著しく下げてしまったに違いない。必ずや陛下のお役に立つ、と忠義を交わしたにも関わらず、己はなんと不甲斐ない。

また一つ、悩むべき課題を抱える形になった。

◇

——本日、黒く染まった陛下が——

◇ 「アグラヴェイン卿の様子がおかしい、ですか？」

自分でも間抜けに聞こえてしまうほど、口から滑り出てきた言葉はぽかんとしていた。

定期的に行われるメディカルチェックの帰り道。微かな特異点も確認されておらず、自分たちにとっては貴重な休日。

これといった予定も決めていなかったもので、先輩の部屋にお邪魔するかレオニダス一世の守護陣形特訓に勤しもうかと決めあぐねていたところ、ばったりと出くわしたヒロインX、アルトリア・リリイにそのような話題を持ちかけられた。

アグラヴェイン。

誉れある英雄譚、アーサー王伝説に登場する円卓の騎士の一員。そして、ある特異点で敵として立ちはだかった強敵。

アーサー王からの全幅の信頼を得るほどの忠義の騎士とも、魔女モルガンの手先で円卓を破滅に追い込んだ邪悪な騎士とも呼ばれている。

評判はさておき、色々な意味で常識を打ち破ってくる円卓の騎士の中でも常識人というのが自分の認識である。

だから、常識人たる彼が異様を示していると耳にして、思わず尋ね返した。

「はい。いつもの執務室を尋ねてみたら、いないんです」

「あのアグラヴェイン卿が執務室から……」

「しかもここ数日、毎日それが続いているんです」

「数日間もですか？」

亀が自分の甲羅を放り投げたのを見たかのように、奇妙な声のトーンになってしまった。

円卓の騎士の一角だけあって、アグラヴェインの戦闘能力は非常に優れている。

しかしもう一点。文官としての才も持ち合わせていた。

それを買われ、彼はもっぱら執務室で各種書類の対応を任されている。騎士王アルトリアから直々に下された命令を実行している、と言
い換えてもいい。

膨大な仕事量から、アグラヴェインが執務室から外出することは
めつたに起こらない。人間嫌いを自称していることも理由の一つに
なるか。

たまさか彼が執務室を出るときは、それほどの大事に対処している
可能性が高い。まして、一回では片がついていないということだ。

リリーの驚愕具合のほどがよく伝わってくる。自分が同じような
現場を目撃してしまつたら、すぐさま先輩に相談しに行つていた。

付け加えるように、ヒロインXがピンと指を立てる。

「ちなみに、机にこんもり乗つかつてた書類の束は全て処理されてま
した」

「流石、どこまでも抜かりありませんね……」

「なんとつてアツくんですので」

言つて、自分の事のように誇らしげに胸を張る。

あれほどの優秀な臣下なら、よそに自慢して回りたくなる気持ちも
充分理解できる。

ただ、貴方は一応騎士王とは別人の設定で通しているのではなかつ
ただろうか。そこら辺の判断基準がかなり緩いが、自分としては何も
口出しできない。

「他の円卓の騎士の方々にも話したのですか？」

「それが、今まさに師匠と相談していて、声をかけるべきか考えていた
ところなんです」

「うーん。だけど今のあれらが、果たしてまともに行動するかどうか」
口にして、三人でうんうんと唸つてみる。

カルデアボーイズコレクションに絶賛参加中の円卓の騎士たち。
どこで仕立てたのか煌びやかなスーツを着こなして、おかしな熱に浮
かされている光景が目に見えかんだ。

「うん、ないな」

「ないですね」

「ちよつと難しいかも……」

どう思考しても余計な方向へ転がっていく展開しか想像できない。おまけに今回は、ベディヴィエールまで向こう側に回ってしまっている。

似たような展開にしかならないと至ったのだろう。二人も同じく、苦々しげにかぶりを振っていた。

「今日も外出されているのでしょうか」

「いつもお昼前くらいに外出しているみたいです」

「食事、はとらないですよね。サーヴァントだから必要ないっておっしゃっていましたし」

「そういえば最近、ランスロット卿への当たりが強いような気がします」

「それはいつものことのような……」

アグラヴェインが手をこまねくような事態。ダ・ヴィンチちゃんやスタッフの方々から緊急の連絡も届いていないので、人理を揺るがすような致命的な話という線は薄い。

それでいて、たいいていの事態を彼は執務机の上で片付けてしまうので、アグラヴェイン自体にとってよほど急を要する事態となる。

散らばるパーツ。どうにかそれらを手繰り寄せ、なんとか頭を回転させて。

ふと、打ち上げ花火みたいに浮かんだ発想をぼつりとこぼした。

「——もしかして、アルトリアさんが多いから、とか——」

「詳しく」

光りのような速さで、格好の得物を見つけた猛獣よろしく瞳を光らせた宇宙人^{エイリアン}が割り込んできた。

「そうです。なんだかんだでおぎなりに流されてきました。私の本来の使命は私以外のセイバーを抹殺すること。それが臣下の悩みの種とあれば、公的な理由をつけて遂行できるといふことでは？」

「お、落ち着いてくださいX師匠」

ふんすと鼻息を鳴らして興奮する彼女を、少女がどうとたしなめる。私的な理由で動いていた自覚はあったらしい。

ひとまず、話を戻そうと二人に呼び掛ける。

「前にサンタオルタさんから伺った話なんですけど、アグラヴェイン卿はよくアルトリアさんからご相談を受けていたとか」

「アツくんは困ったときに頼りになりますからね。彼の提案する策はだいたい揉め事を解消してくれます。人間関係は別として」

ヒロインXも助け舟を出してもらったことが何度かあるらしい。

さりげなく危険な要因を含んでいるように訊こえるが、今は触れずに話に集中する。

「ですけど、カルデアにはアルトリアさんがたくさんいます。ということは、全てのアルトリアさんから一極に相談を受けていたりしたのではないのでしょうか」

「あく、あり得ますね。私もよく足を運んだ口です」

「実は私も……。直接的な面識はないのですが、何か困ればアグラヴェイン卿が解決してくれるとマーリンが教えてくれたんです」

「冠位的クズ……」

ぼそりと、ヒロインXが悪態をこぼす。

花のように咲き誇った笑顔で、華麗に面倒ごとを押し付けていく魔術師の幻が脳裏をよぎった。アグラヴェインのしわの一因が、また一つ分かった気がする。

ん、んん、とヒロインXがわざとらしく咳払いする。おぼろげに宙を漂っていた幻像が、波立った水面月のように一気に霧散した。

「つまりは、こういうことですね」

全てを悟ったと言わんばかりにヒロインXが断言した。

「私とリリィ以外のセイバーを合法的に抹殺すれば万事解決!」

「ダメです」

「むう」

即答での却下に頬をむくれさせて押し黙る。冗談ではなく、本気が入り混じったの提案だから油断できない。

あまり気にしないのか、ヒロインXはすぐさまふっ切れてアグラヴェインの現状をまとめはじめた。

「とはいえ、私以外のセイバー……もといアルトリアシリーズからの多種多様な相談。相も変わらずはっちゃけている円卓の騎士の後処理。いるだけでストレスのランスロット卿。カルデアスタッフから一任された書類整理。」

これら生前以上の高ストレス環境に耐え切れず、何かしらの奇行に走っているかも、と」

「可能性は高くないですけど、無しとも言い切れないです。それだけ、アグラヴェイン卿が引き受けている業務は多岐に渡ります」

他者との交流を断つことを望んだとはいえ、常に複数の仕事を抱えての生活はとんでもない重圧だ。

アグラヴェインがどれだけ有能な文官だとしても、その前に彼も一個の人間。抑えきれぬ精神にも限界は必ず訪れる。

ブリテン、聖都での仕事量がどれほどだったのかわからない。けれど、ここでの彼が忙殺されていることは間違いなかった。

すると、思いついたようにリリイが意見を出した。

「直接本人に訊くというのは？」

「アツくんは自分のことになると謙虚になるんですよ。それに私が訪ねても〝王のお耳に入れるようなことではございません〟と言って内に閉じたままにするのが目に見えますね」

「X師匠、声真似お上手です！」

眉間に深いしわを寄せたヒロインXが、バリトンの利かせた声で当人の口調を真似る。特徴をしっかりと捉えてのモノマネだからか、本人が王の前で発言している光景が容易に想像できた。

声色を、バリトンから正常に戻して彼女は続けた。

「ですので、訊くのではなく尾けましよう」

帽子をかぶった少女の表情は、初めて悪戯を仕掛ける子供のよう
に輝いてみえた。



執務室、とは言うが、カルデア内に設けられている執務室のことではない。

第六特異点で観測したデータを元に再構築、復元したシミュレーターーム。城塞聖都カメラロットの一室にある執務室こそ、アグラヴェインが拠点に据えている空間だった。

絢爛な白亜の城に相応しい、二頭の獅子が向かい合う紋様の扉が開かれた。

扉の隙間から現れたのは、厳めしい面構えをした騎士。騎士はきびきびとした動きで扉を閉め、肩から羽織ったマントをなびかせながら、通路の奥へと消えていった。

「——本当に、外出されましたね」

「ええ。これはいよいよ気になります」

柱の影でのびに、隣で壁に身を預けていた帽子の少女が頷く。

今しがた執務室から出てきた騎士こそ、問題のアグラヴェイン。決まった時間に外出するらしいという情報を頼りに、翌日になって自分たち三人は集合して、物陰で部屋を見張っていたのだ。

そして予想通り、アグラヴェインは部屋を後にした。時刻を確認すると、針はびったりと十一時を指している。

「部屋に鍵をかけた様子はありませんね」

「かけてもあまり意味ないですし。書類の整理といっても所詮は仕上げ作業みたいなもの、意図的な悪意があったところでせいぜい紙を散らかすぐらいしかやることないってアツくんが言ってました」

「そもそも、好きでアグラヴェイン卿の機嫌を損ねる方なんていらつしやいませんよ。怒らせると怖いお方ですから」

冗談交じりで、リリイがあめ玉のようにころりと笑う。

一部、視界に入るだけですごい形相にさせる憂いの騎士がいるが、彼女の言う通りである。わざわざアグラヴェインを敵に回すような者はいない。それだけ恐れられていて、それだけ他人と関わらないからだ。

柱越しに前方を確認していたヒロインXが、くいつと指でジェスチャーする。

「さき、後をつけますよ」

そう言って、しなやかな身のこなしで通路に躍り出た。流石は暗殺者のサーヴァントだ。

「私は生まれてこの方、永久不滅にセイバーですが」

「えっ、なんで考えていることが……」

「セイバー忍法・ヒラメキスターです。元祖直感持ちは伊達ではないのだ」

「流石師匠です！」

「うむ、もつと褒めるがいい！」

——深く考えても、どつぽにハマるだけな気がする。

どうでもいい思考はさっさと切り上げて、先行するヒロインXの背中を必死に追っていた。

豪華な柱が並び立つ通路を過ぎ、絵画のように煌びやかな広間を過ぎ。

気づけば、城の正面入り口まで移動していた。ずいぶん長い距離を渡ったためか、足に軽い疲労の蓄積を感じる。

他の二人は純サーヴァント体なためか、汗一つ流していない。

「むっ、二人ともストップ」

先頭を切っていたヒロインXが、片手を突き出して制止をかけた。

言われて足を止め、背中を壁につけて呼吸を消す。気配遮断スキルこそ獲得していないが、物陰に隠れて呼吸を止めて瞑想に浸ればどうにかなった前例を知っているので、形だけでも真似てみた。

自分の後についてきていたリイが、戸惑ったように表情を曇らせる。

「X師匠、どうかしましたか」

「アツくんの動きが止まりました。どうやら、正門で何かを待っている様子」

「待っている、ですか？」

壁越しから顔を出してみると、開け放たれた正門でアグラヴェインが佇んでいた。

地に足を埋め込んでいるのでは、というほどに真つすぐな立ち姿

は、そこに一つの鉄壁の塔が生えたのではないかと思わせる。

その時、アグラヴェインの正面の空間がぐにやりとねじ曲がった。おかしい表現になってしまうが、まるで見えない手が空間という紙を掴んで捻った、というぐらいに歪曲したのだ。

「な、なんですかあれは」

普通では見られない異常に、リリーの右手が柄へと伸びる。

次の瞬間、空間から出現したのは、緑の外套を身に着けた男だった。

「——あいよ、お待ちどうさまっ」と

ひょうきんとした若い男の声が届く。

その声には聞き覚えがあった。というよりも、自分は何度となく彼と顔を合わせていた。

「あれは、ロビンフッドさん？」

「ロビンフッド？ ああのニヒル野郎ですか」

煙たそうに、ヒロインXが口を尖らせる。

彼がロビンフッドであれば、先程の不可解な現象にも説明がついた。

彼の宝具『顔のない王』ノーフェイス・メイキングは、文字通り透明になれる能力をもった外套。それならば、あの空間が歪んだ状態も、ロビンフッドが宝具を解除したから発生したと納得できる。

それにしても、まさかこのタイミングで彼を見かけることになるとは思ってもしなかった。

柄に伸ばしていた手を収めたりリイが、不意を突かれたように目を丸くしてぼかんとしていた。

「なんとというか、ロビンフッドさんとアグラヴェイン卿って、一緒にいるイメージがないですね」

「全くです。あんな奴とアツくんに、つながりなんてあったかな」

柳のようにひょうひょうとしていたロビンフッドと、鋼鉄のように堅物めいたアグラヴェイン。

主観的だが、気が合う性格とは考えづらい。むしろ正反対に思える。

珍しい組み合わせに目を白黒させていた時、遠方からロビンフッド

の声が聞こえてきた。

「アンタの言ってた代物、調査してきましたよ」

ほら、と軽い口調で若者が手を差し出す。距離が離れているため、それが何なのかは認識できなかった。ただ、片手の平に収まるサイズということだけは推測できる。

岩のような顔をしたまま、アグラヴェインがそれを受け取った。

「――問題なさそうだ。毒薬に精通しているだけはある」

「お褒めに預かり光栄ですってね。しかしアンタ、いいのかい？ 今回の品、あの毒婦にも助力をいただいたんだけど。俺はさておき、あの女のことめっぼう嫌ってたじゃないの」

「信用に値すると判断したのなら、私は遠慮なく力を借りる。たとえそれが、自分を斬り殺した男の力だとしてもだ。そんなこと、貴様こそよく分かっているはずだが」

「まあ、そこはそれですから」

はぐらかすように緑の青年は笑う。鉄の表情の騎士は、それすら眉一つ動かさずに眺めていた。

「ほいじゃ、あとはそちらのお仕事つつうことで、俺あ帰らせていただきますぜ」

「ご苦労だった。そちらの報酬は然るべき時に」

「あいあい、了解です」

短く別れを済ませ、青年は透明色の筆で塗りつぶされたように掻き消える。一人残ったアグラヴェインは、受け渡された代物を改めて確認していた。

あらかじめ示し合わせていたかのように、三人して同時に顔を近づけた。

「あのアグラヴェイン卿に思わぬパイプがあったとは、思いもよりませんでした」

「マスターやマッシュュさんを除くと、円卓の騎士か、私が本来の歴史で成長したアーサー王、そして三蔵さん含めた一部のサーヴァントとしか知り合っていないとばかり」

「確かにそこも驚くべき点でした。けれど――」

アグラヴェインが毎日、決まった時間にこの場所に来ていた理由は、ロビンフッドと何か密約を交わしていたためだった。

では、なぜロビンフッドなのか。

なぜ、毒手の英霊と物流を執り行っているのか。

頭の中で稲妻が閃く。推理するまでもなく、いたって簡単に解答は導き出されてしまったからだ。

想像を絶する解答に、唇がかすかに震える。

「アグラヴェイン卿は、毒薬を入手するために暗躍していた……？」

まさか、と心のどこかで強い拒絶の悲鳴が響く。

しかし、ここまで揃えてきた言動が、容赦なく事実の裏打ちを縫い付けてきた。

「毒薬、ですか。私もからめ手で毒を織り交ぜたりしますが、アツくんの戦闘スタイル的に毒は合わない気がします。まして、他人製の毒薬なら尚のこと」

「そ、そうですね」

「ここはカルデアなんですし、アグラヴェイン卿がわざわざ毒薬で悪さを企むはずがないですよ」

リリイと一緒にあって、ほっと胸を撫でおろす。この中で一番アグラヴェインを理解している彼女が言うのだから、彼が毒薬を入手する動機がないことが断言されて安心した。

だが、徐々にヒロインXの眉間が狭まっていき、雲行きが怪しくなっていく。

「いや待てよ、自分用でないのなら誰かに盛るのか？　しかし、アグラヴェイン卿の交友関係を考慮すると、わざわざ毒を盛ってまで行動に移すような人物は――」

細い指を顎に添えて、探偵物の主役探偵のようにヒロインXが思考を張り巡らす。

いつになく真剣な目つきは、下手をすればセイバーを相手取った時よりも本領を発揮しているように見えた。口に出すとまず怒られるので、喉の奥で飲み込んでおくことにする。

突然、ヒロインXが至ったかのように声を漏らした。

「——まさかアツくん。ストレスのあまり、一番のストレスであるランスロット卿に毒を盛るつもりでは！」

「ええっ!？」

自らの師匠が弾き出した推測に、白百合の騎士が愕然とした。

「さ、流石にランスロット憎しのアグラヴェイン卿でも、そこまでは……」

「いいや、リリイくん。あの二人、本当に仲が悪いのだ。アグラヴェイン卿のストレスの半分はランスロット卿が占めているくらいに。」

とくに最近の卿の浮かれ具合、私でもちよつとイラつとするくらいです。これがランスロット専用復讐者^{アヴェンジャー}であるアグラヴェイン卿から見ればどう映るか……」

舐めてはいけないぞ、とヒロインXが念入りにリリイへと注意する。

最近というと、やはりスーツを着て瀟洒に着飾った写真が思い浮かぶ。

自身の生前の所業を憂いながら、平然とああいう振る舞いに出る神経が理解できない。もはや病気ではなからうか。

「それは同感です。けれど、卿がそんな冷静さを欠いた行動をとるとは思えないです」

「そうですよ師匠! 同じ円卓に集った仲間なんです。私は、アグラヴェイン卿がそんなひどいことをする人とは思えません」

自分の意見にリリイも同意を示した。

それでもヒロインXの表情は固い。

「しかし、現実に毒の名手から、秘密裏に何か受け取ってしまったのを見てしまうと……。最大のストレス源だけでも始末するくらい、冷徹なアツくんなら企んでもおかしくはないですからねえ」

「ですが——」

あれでもない、これでもない^{と三人で議論を交わし合う。}

アグラヴェインは尋問官としての顔も持ち合わせている。

尋問を担当する以上、人体をどこまで弱らせれば命を落とさないか、という判断にも精通していることになる。裏を返せば、命を奪う

毒薬の分量にも知識が及んでいるということだ。

しかし、だけど、けれど、それでも。

目の前で何かを受け取った彼を僅かに疑う自分。心のうちの何処かで、彼を信頼している自分。相反する胸中に揺り動かされていた。

その時、天井の光を遮り、暗がりから被さってきた。

「――何を、しておられるのですか」

低い声が、背後から浴びせかけられた。

三人して、油の切れたブリキ人形のようにさび付いた動きで振り返る。

思っていたよりもかなり近い距離に、仏頂面で不動に立つアグラヴェインの顔があった。

「どわあー」

誰の口から飛び出したのか、いつそ全員で言ったのかわからないらしいの素っ頓狂な悲鳴。反射的に、自分と他の二人はそろって飛び退いていた。

いつ接近したのか。それすら気付かなかった自分たちの揉め具合を省みるべきか、気取らせなかったアグラヴェインにおのの慄くべきか。

どちらにせよ、当人に見つかってしまった。

アグラヴェインの眉間の谷がますます深くなっていく。

「陛下……が、お二人。それと、マシユ・キリエライトか」

後半、嫌悪を微塵にも隠さない口調で自分の名を呼びあげる。

数瞬だけ、自分を見下ろしたアグラヴェインだが、まるで興味ないとばかりにすぐさま視界から外された。

「陛下、私に何用でしょう」

左胸に手を添えて、二人に向かってアグラヴェインが四角く傳いた。

自分よりもひと回り以上大柄な男性が、自分とほとんど変わらない背丈の少女たちに膝をつく姿には、言いしれぬ庄と確固たる意志を感じさせる。

「その、今、ロビンフッド殿から何かを受け取っていましたが……」

「――見ていられたのですか」

途端、空気が変わった。

「本来ならば、もう少し陛下には内密に事を進めたかったのですが」
まさか、と先程否定した言葉がよみがえる。

もう一度否定するかどうかさえ忘却してしまうほど、眼前に佇む男から有無を言わせない重圧が叩きつけられた。

怒気とも、殺意とも違う。アグラヴェインという男が積み上げてきた全てを、全身にぶつけられたかのような衝撃だった。

尻餅をつきそうになって、震える足になけなしの力を込める。ヒロインXも、リレイも、この圧の中で変わらず立っていた。

何より、彼女たちの前で、醜態を晒すわけにはいかないと霊基が叫んでいたからだ。

「——しかし、見つかってしまったならば仕方がない」

俯き、傳いた体勢からゆるりと起き上がる。

表情一つ変わっていないはずなのに、数瞬間とまるで印象が変貌したように見えた。

その瞳は氷より冷たく、その口元は岩よりも固く、その意志は鉄よりも重い。

自分たちが——否。マシユ・キリエライトが、このアグラヴェインの奸計を拝聴するに相応しい騎士か見定めているようだった。

やがて、懐からロビンフッドから受け取ったらしい小瓶を取り出す。中は青と緑の絵具がごちゃ混ぜになったような、得体の知れない液体で満たされていた。

手に取ったそれを、アグラヴェインはヒロインXに差し出した。

「これを」

「えっ、くれるんですか?」

不意を突かれたのか、ヒロインXは一瞬固まったものの素直に小瓶を受け取る。

少しの間、小瓶を揺らしてみたり覗いてみたり色々試しているようだった。

すると突然、何か思い当たる節があったのか、目じりを下げていたヒロインXがハツとなって尋ねた。

「アグラヴェイン卿。これって、もしかして」

「はい。先日陛下が、フグペインと称されている毒物の解毒剤を切らしていたと伺ったので、予備を準備しておきました」

そんな言葉が、目の前の騎士からさらりと放たれた。

思いもしなかった予想外の展開に、三人して呆気に取られてしまった。

こちらの反応を意に介さず、アグラヴェインは続けて楕円形の入れ物を取り出す。今度はそれをリレイへと差し出した。

「陛下にはこちらを」

「あの、アグラヴェイン卿。これは？」

「先日、調理場での火の扱いにまだ慣れないとおっしゃっていたので、万が一に備えて火傷に効く薬を揃えておきました」

鳩が豆鉄砲を食ったよう、とはまさにこういうことなのだろう。

白百合らしくない、間の抜けた顔でぼかんとするリレイをささておき、アグラヴェインは懐から次々と品物を取り出し始めた。

「こちらは筋肉の疲労を和らげる薬。こちらは過度な紫外線を遮断する塗り薬。これは低温環境でも足先が冷えないための末端を温める効能の錠剤。これは――」

「あ、アグラヴェイン卿？」

淡々と薬品が取り揃えていく中、勇気を振り絞ってアグラヴェインに声をかけた。

「何だ、マシユ・キリエライト」

打って変わって、鉛のように重く、冷たい瞳が向けられる。

一瞬にして、喉元が干上がったような気がした。それでも唾を飲み込み、僅かでも喉を潤して言葉を紡いだ。

「貴方は、いったい何を？」

「見てわからないか。陛下の要望に應えるため、薬を準備していたのだ」

何を馬鹿なことを、と不機嫌そうにアグラヴェインがぼやく。

薬、と言ったのか。思考の片隅にも引っかけていなかった言葉に、ますます面食らってしまう。それでは、毒を扱うロビンフードとは真

逆の代物ではないのか。

そこまで思い至って、ふと思考にふける。

「——あつ、そういうことだったのですね！」

「大方、貴様はあの男が渡したものを、毒薬だと思い違いしていたのだろう。無論、陛下がたに限ってそのようなことはあり得ません」

「そ、そうですね。流星はアグラヴェインだ、よくわかつていらつしやる」

虚空を見つめながら、固い笑いを浮かべる陛下その一。誤魔化し交じりに口笛を吹こうとしているが、慣れていないのかただの吐息が漏れ出すだけだった。

「つまり——毒を持って毒を制す、ということでしょうか」

純心に尋ね返す陛下その二。嫺やかな花卉のような唇が紡いだ疑問に、アグラヴェインが礼節をもつて訂正した。

「少し、違います。同じ極東のことわざで例えるなら、蛇の道は蛇、ということです。もしくは、薬も過ぎれば毒となる、でしょうか」

「——あつ、なるほどー」

その一言でリリイも真意にたどり着いたのだろう。ぱちんと手を合わせ、ようやく発芽した新芽のように初々しい面立ちをしていた。「つまり、過ぎなければ毒は薬になる。ポールスやパーシヴアルがいれば薬草探索に向かわせましたが、いないものは仕方がない。しかし、私自らが取りに行こうにも執務が片づくのに時間がかかってしまう。

さいわい、この施設には有数の毒薬使いがいました。なので、彼らに薬の調合を依頼していたのです」

ロビンフッドから入手した代物は、毒物などではなかった。

むしろ驚愕させられた。あれだけの激務でなお、アグラヴェインは陛下のために奔走していたのだ。僅かにでも、疑ってしまった自分を恥じてしまう。

だが、そうなるもまた新たな一つ疑問が浮かび上がってくる。

待った、とヒロインXが呼びかけ、自分が抱いた疑問を代わりに問いかけた。

「だけど、それでしたら有数の回復魔術の使い手とかいませんか？

ほら、そろそろ適齢期を気にして婚活考えていそうな魔女の魔女っ子とか、逆に幸せそうな新妻オーラ満載の露出服さんとか」

辛辣な物言いを混ぜた、遠回しな意見をヒロインXがあげる。おそらくメディア・リリイと、天の杯となったアイリスフィールのことを言っているのだろう。

彼女の言うように解毒や回復に関しては、彼女たちのような英霊が適任である。危険度の高いレイシフトを試みる場合などは、彼女たちがいるだけで継戦能力に大きな差が出てくる。

その疑問に、アグラヴェインは厳とした口調で断言した。

「我ら円卓の騎士に、魔術師を信用できる瞬間があつたでしょうか」「確かに」

ヒロインXも即答で頷いてしまっていた。

「ええ……」

「X師匠、即答ですか……」

「リリイは知らない方がいいのです……。ブリテン時代における、円卓絡みの魔術師のいざこざは」

生前のどろりとした闇色の政争を思い返していたのか、少女はひどく遠い目をしている。

伝承を振り返ってみれば、そこは同情せざるを得ない。アーサー王の姉モルガンは、事実上円卓を崩壊させた黒幕とされている。味方側についていたマーリンもまた、平時はご覧の有様。

面白半分で余計な手心を加えられるよりは、確実性のある調査された薬の方が信頼しやすいということか。

「しかし、アグラヴェイン。何もあなたがここまで手筈を整えなくても大丈夫だとわかっているでしょうに。あなたは頼りませんでした。盾子も言ったようにここには回復術に長けたサーヴァントがいるし。何より、マスターに魔力を回してもらえば多少のけが程度、どうにかかりますって」

「失礼ながら、陛下」

ヒロインXが話している最中に、珍しくアグラヴェイン卿が口を挟

んできた。

「そも、陛下をサーヴァントとして従えるという所業を犯しておきながら、陛下との騎士の誓いを交わさないあれをかばい立てする必要はありますか」

あれ、とは先輩のことだろう。多数のサーヴァントを契約を結んでいる先輩は、必然的に構う回数に偏りが生まれてしまう。

無論、自ら先輩に関与しないサーヴァントもいるし、それでなくても先輩に懸念を抱くような人柄な者はいない。善であろうと、悪であろうと、全てを受け入れてしまうのが先輩の何より尊敬するところだ。

だが、アグラヴェインはそれが気にならないらしい。

それは違う、と胸から込み上げる何かを反論と共に吐き出した。

「先輩は、決してアルトリアさんたちを蔑ろにしています。アグラヴェイン卿のおっしゃっているアルトリアさんがどのアルトリアさんを指すのかは不明ですけど、戦術にどのアルトリアさんが最適かを瞬時に見極めたり、カルデアの中でも時間を見つけては、各アルトリアさんの様子を伺ったりしています」

「だからこそ、だ」

強く、がんとして強く言い切った。

爬虫類のように煌々とぎらついた瞳が、一斉に自分へと向けられる。途端に胸が締め付けられ、呼吸が苦しくなった。それでも、真正面から受け止めようと意地でも動かなかった。

「私は、あれ個人での召喚ならば応じるつもりは毛頭なかった」

「それでは、なぜカルデアの召喚に応じたのですか？」

「愚問なことを」

一拍置き、鉄の黒騎士は言い放つ。

「陛下がおられたから、私はここに来たのだ。例え、仮初の主を得ることになったとしても、このアグラヴェインが真に仕えるのは我が王のみ。そして、私を召喚するのだから、あれも陛下に忠誠を示すことは当然の理だ」

マスターの呼び掛けではなく、生前付き従っていた王気を感じ

取ったから召喚された。

円卓の騎士は皆、死後もアルトリアを慕い、尊び、忠誠を誓っている。だが、アグラヴェインはどこか異質なものを感じた。

「いやいや、そんな重い感じでは言わなかったって」

「御冗談を、陛下。あなたに比べれば、私などまだまだです」

冗談めいて茶化した風のヒロインXに、本心からずしんと重い言葉を投げかけている。

それよりも、アグラヴェインが言い放った言葉に、強い不安を覚えた。

翻せば、アグラヴェインはマスターに忠誠を誓わない、或いは二の次ということになる。それは、先輩への叛逆の可能性を言外に伝えてきた。

叛逆の騎士や圧制の叛逆者、裏切りの魔女などが集うカルデアでは今更な話かもしれない。しかし、こうして面と向かってその可能性を示唆されてしまうと、心の中にいやな暗雲が再び立ち込めてしまう。

その時、ぽんぽん、と軽く肩を叩かれた。

「マッシュさん。アグラヴェイン卿は、たぶん大丈夫です」

「どうしてですか？」

ヒロインXと会話しているアグラヴェインに聞こえない声量で、後ろにいたりリイが囁いてきた。

思わず返した問いかけに、咲き乱れた楽園のような笑顔で彼女は微笑んだ。

「だって、少なくともアグラヴェイン卿は、アーサー王への忠誠騎士の誓いを示すことを許すくらいに、マスターを信頼しているということですよ」

——ああ、なるほど。

差し込んだ一筋の光が、心にかかりかけた暗雲を綺麗に取り除いた。

アルトリアのあらゆる側面が、先輩をマスターとして契約を結んでいる。

こうまでして崇拜するかの王が、先輩を信頼における人格や性格だ

と、彼は既に認めていたのだ。

先輩はアルトリアが認めた、高潔な精神の持ち主であると。

「ですが、アグラヴェイン卿には言わないでおきましょう。X師匠の通り、謙虚で頑固なお方ですので、この場では決して認めようといはずですから」

「———そうですね」

生まれが何であろうと、同じ騎士たちから嫌われようと。本人が、それを望んでいたとしても。

彼もまた紛れもなく、アーサー王に生涯を賭して尽くした騎士の一人だったことに変わりはない。

それが、鉄のアグラヴェイン。鋼鉄の身体と鋼鉄の意志を持つ、愚直なまでに忠実な男の正体だった。

「——とりあえず、アツくんが思い悩んでいないようでよかったよ。いや、てつきりランスロットに毒でも一杯盛るのかと思いましたがよ」

「おや、流石は陛下」

「えっ」

「最近、騎士としての矜持が揺らぎつつある円卓の騎士たちに、もう一度騎士としての高潔さを取り戻してほしいと思っております。少なくとも、自身の不貞を兜を被ってまで逃避する愚か者や、見知らぬ女などにうつつを抜かして滑空する馬鹿などの惨状は嘆かわしいことです」

「あの、たぶん元からです」

「ええ。ですので、バカにつける薬というものを用意しました。ご安心を、こちらは信用できない魔術師たちに依頼しておいたものなのです。また、トリスタンの伝承を考慮して、身体に害をなす毒物ではございません。あくまで薬です、あくまで」

「アツくん一旦休もうかやっぱりおかしいぞ君!?!」

背後で二人の騎士が何か騒いでいたようだったが、リリイと微笑み合っていた自分の耳には不覚にも届かなかった。

クラス：■ ■ ■

真名：アグラヴェイン

キャラクター紹介

円卓の騎士。アーサー王の姉、魔女モルガンの息子。

いかなる強敵と打ち合おうとも傷一つつかない姿から、『鉄』、『固い手』の異名を駆る。

ブリテンを存続させるために王に仕えたが、ギネヴィアとランスロットの不貞をモードレッドと共に暴き立て、ギネヴィアを侮辱したために激昂したランスロットに斬殺された。

パラメーター（詳細不明）

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

小見出しマテリアル

円卓の騎士の、本当の意味での後処理係。ベデイヴィエールさえ時折はつちやける同僚たちの身勝手さに、頭と胃へのダメージがたまるばかり。

あまりに過剰なストレスからか、二十代前半とは思えない老け顔に。どこか親近感を覚える、とは諸葛孔明の談。

この時はまだ、自分をマスターと呼び慕うアルトリアや男のアーサー王、なんて事態など想像すらできなかった。王よ、何があったのです。

面白みがない、魂までカッチカチ、と愉快痛快を求めるタイプのサーヴァントたちからは煙たがられる。

だが、冷酷ながら確実に勝利へとつながる采配を、方向性は違えど真理であると老人は褒め称える。それと彼の胃痛に同情する駄妹や無銘なども少数。

ちなみに所属は「アーサー王燃え派」。

帝都ランサー

——強さとは、何か。

サンタオルタ師匠の「今年に向けて必勝サンタテクニク——突進女はこうやって追い払え——」特訓を終え、マイルームに戻ろうと帰路についていた時に、そんなことがぱつと浮かんできた。

生まれたばかりだった頃の自分には、思い至る事すらなかったであろう疑問。

誰かの役に立つという使命に駆られるだけで、自分自身を見出せていなかった自分では、考えつかないことも当然だ。

つまり、今はそれだけ余裕が出てきたということだ。

「強くなる、かあ」

無意識に、唇からつぶやきがこぼれる。

強くなるとは、どういうことなのだろう。

筋トレ、走り込み、鍛錬。日々努力を積み重ねて、自分を鍛え上げていくことが一般的なイメージだ。

しかし自分はサーヴァント。筋トレをしても筋肉は増えないし、走り込んでも持久力は上がらない。

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイとして霊基を形成されたその瞬間から、全てのステータスは決まるのだ。

「おや、あれは」

自分には関係のないことだと割り切ったその時、通路の奥からこちらに走り込んでくる影が見えた。

その数は二つ。フリルをふんだんにあしらったドレス姿の少女と、対して布面積の少ない恰好をボロ布で隠した少女。

遠目でも分かるほど見慣れた少女二人に、軽く嘆息して呼び掛けた。

「こら、ジャックにナーサリー。廊下は走ってはダメと言っているでしょう」

自分の声が届いたのか、それとも目視でこちらを発見したからか。

元気よく疾走していた二人は動きを止め、自分に向けてぶんぶんと手を振っていた。

「あつ、ジャンヌだ！」

「こんにちは、ジャンヌ。今日もいいお茶会びよりね」

ナーサリーライム。ジャック・ザ・リッパー。

本来、全盛期の姿で召喚されるはずのサーヴァントでは珍しい子供の姿のサーヴァント。

というのも理由があつて、ナーサリーライムは「子供たちの英雄」として絵本が具現化した存在。ジャック・ザ・リッパーは墮胎で命を落とした水子たちが、「切り裂きジャック」という曖昧な概念の形を借りて生まれた存在だからだ。

それとは抜きに声だけ渋い絵本作家もいるが、とにかく子供の英霊というのは珍しい。

「ええ、こんにちは。でも、走ってはダメですよ。転んでけがでもしたら、ナイチンゲールさんが用意したアルコール風呂に肩まで浸からせられちゃいます」

「うええ。それはやだ。あの匂いきらい」

「絵本を水につけるなんて、ひどいのだわ！」

苦虫を噛み潰したようにジャックが舌を出す。ナーサリーも青ざめた顔で身体を震わせていた。

なかなか効果できめんのようだ。次から注意をするときはこの手法を使ってみよう。

それはともかく、彼女たちが走っていた理由が気になる。いつも以上に楽しそうに駆け回っていたので、何か琴線に触れる出来事があったのだろう。

「それで、いったいどうしたんですか？ なにかあったみたいですけど」

「そうだよスパムム！」

「スパムムじゃありません！ いい加減スパムから離れてください！」

脊髄で会話しているのではないかと思うほど反射的にしゃべる

ジャックに、呆れながらも話の続きを待つ。

「さつきね、さつきね。向こうでおじいちゃんにおもしろい動きをみせてもらったんだ」

「おじいちゃん？ おかあさん^マではなくて？」

「うん。おかあさんはおかあさんだよ？」

疑問を呈した言葉に、当然だよばかりに少女は小首を傾げる。

どうにも話がかみ合っていない。そもそも、カルデアにおじいちゃんと呼ばれるほど高齢の英霊などいただろうか。

——無論、実年齢ではなく歳月の話だ。これは今すぐ訂正しないと物騒なことになりそうな気がした。

おかあさん^マみたいなのに、ジャック特有の呼び方なのか。大きな疑問も残るが、少女二人はこちらに気もかけず次々と話題をあげていく。

「なんていったかしら。たしか、えーと、ホツキョクケン？」

「なんかさむそう。ちがうよ、ナットーケンだよ！」

「えー、納豆!? いやだわ、ねばねばするしくさいわ！」

「くさいのはいや。くさいもん」

「ねー」

「ねー」

変な意気投合をして、けたけたとはしやぎまわる子供二人組。

というか、どちらもまるで初耳だ。大方、面白い動きとやらの夢中になりすぎて話をろくに訊いていなかったのだろう。

このまま放っておくとどんどん脱線していつて、よく分からないうちにどうでもよくなってしまふのがこの二人あるあるだ。

元の話に戻せなくなる前に、強引に話を引き戻す。

「私にも見せてください。もしかしたら、名前が分かるかもしれない」

「いいよー。どんなんだっけ？」

快諾したジャックが、速攻でナーサリーに尋ねる。

問われた方も眉をしかめて、どういう動きだったかを懸命に思い出していた。

すると、閃いたのかナーサリーは右腕を引きしぼり、ぎこちないな

がらもドレスを揺らめかせて、身体を軽く右に捻る。

「たしか、こう？」

くいつと、引き絞った右ひじを掬い上げるに虚空へ突きだした。

若い少女がやるには、あまりに似合わない動き。もし虚空ではなく人間に向かつて繰り出したら、ちょうど顎の部分を突き上げた肘が砕いているように思えた。

そこから導き出される推測は、対人を意識した技の動き。そして、先程二人が適当に上げていた名前のニユアンスからして東洋、それも中国系の武術。

刹那、脳裏に光明が走った。

「……もしかして、八極拳？」

口から出たつぶやきに、待機していた少女二人から大喝采が巻き起こった。

「そうだー！ ハツキョクケンだ、ハツキョクケン！」

「ジャンヌすごい！ よくわかったわね！」

「えへへ、当然です。サンタたるもの、頭が良くなかつちやあいけませんからね！」

「さすがサンタさん！」

惜しみない賞賛を贈られ、つい胸を張ってしまった。

実は、ついさつき受けてきた師匠の特訓の中に“極東のツインテ少女も八極拳を修める時代だぞ”とよく分からない理論を告げられて知識を叩き込まれたばかりだったのだが、それは心のうちに止めておく。

「ハツキョクケン、ハツキョクケン。うん、覚えた」

ジャックが指を立てて、再度忘れないように数回復唱している。

今度こそ頭に叩き込んだようで、満足げに笑顔を浮かべた。

「おかあさんにも見せてくるー！」

「じゃあね、ジャンヌ。あとでお茶会をひらくから、その時いっしょにあそびましょ？」

「はい。その時はぜひとも呼んでください」

ナーサリーが開くお茶会は、甘いお菓子にいい匂いの紅茶が出てき

て本当に楽しいひと時だ。特訓のあとに良い楽しみができた。

互いにさよならの手をしばらく振った後、二人は出会った時と同じように驚くほどの速さで通路を駆け抜けていった。

いきなり現れて空気をかき乱し、満足したらさっそうと吹き去っていく。さながら突風のような二人組だ。

「……って、走っちゃダメっていったそばから」

思わず不満がこぼれるが、今はつばと共に呑み込んでおく。

近い将来、本当にアルコール漬けの風呂桶に放り込まれないといいが。何分先駆者がいるようなので、冗談と笑い飛ばすこともできないのが恐ろしい。

二割増しで疲れがたまったのを身体で感じつつ、ずっと引つかかっていた語句をもう一度口に出してみた。

「おじいちゃん、八極拳……」

カルデアで八極拳となると、思い当たる人物はほぼ限られてくる。確かに、雰囲気や口調は老年を匂わせる人だ。しかし、おじいちゃんと呼ばれるほど老いた見た目はしていなかったはずだ。

一度気にかかった疑問が、髪にひつついたクモの巣のようにまとわりついてくる。

「……ジャックとナーサリーは、向こうから来たんでしたよね」

つぶやきと同時に視線を向けた先には、道中に設けられた休憩所があったはずだ。



時間にして数分。そんなに遠くない距離に休憩所があった。

十人くらいが休める程度の椅子や机が対照的に設置されており、近くには水やお湯が出る給湯器も設置されている。

しかし、平時もそれほどにぎわっているわけではないこの場所だが、この時間は見渡す限り人の姿などどこにもなかった。

「あれ、誰もいませんね」

覗き込んでみたところ、天井に設置された蛍光灯が空しく広場を照

らしているだけだった。

シミュレータールームを利用してはいるサーヴァントが多い関係上、カルデア本来の通路を利用するサーヴァントというのはそれほど多いわけではない。だいたいはスタツフか文系の英霊、もしくは誰かが逃げ回る時によく利用される経路の一つというのが自分の認識だ。

通路を使う人間が少ない以上、こういう各所に設置してある休憩所に居座る英霊も少ない。

ただ、今回はジャックとナーサリーの言う人物がここにいると踏んで訪れてみたのだが、既にもぬけの殻のようだ。

「もう帰っちゃいましたか」

独り言が空気に吸い込まれるほど、あたりはしんと静まり返っている。

徒労だったと思つて踵を返しかけたその時、一つの机に湯呑が置いてあるのを偶然発見した。

「コップ……いや、湯呑茶碗でしたっけ。戻し忘れですかね」

気になったので、近寄つて確認してみる。すると、どうも飲み終わつて片付け忘れたわけではないらしい。

なぜなら、その湯呑にはまだお茶が半分ほど残っているからだ。

顔を近づけてみると、鼻頭をほのかに湯気がくすぐる。淹れてからそれほど時間も経っていないようだ。

「どこかに行つちやっただんでしようか」

自然、独り言が多くなる。

まさかお茶を半分だけ飲んで帰ることはしないはずだ。突然オラオラ系の英霊に乱入されて逃げ出したということもあるが、とくに騒ぎもなかったのでその線は薄い。

直後、思っていたよりも近い距離でしわがれた声が響いた。

「——行くも何も、ここにいるのだがな」

意識外からの呼び掛けに、反射的に声の方角へ目線を向けてしまう。

そこで待ち構えていたのは、刻まれたようにしわの深い顔をした男の顔だった。

カミソリのような細く鋭い双瞳が、目と鼻の先でこちらを見下ろしていたのだ。

「どわあっ!？」

外見や突然呼び掛けられたことよりも、想像以上に近い距離に驚いて後ずさってしまおう。

いつの間にか、お茶の置いてあった席に老人が腰かけていた。

色素の抜け落ちた白髪を短く刈り上げ、近代風の黒いコートを肩にかけるように羽織っている。

いや、それよりも。この黒いコートの老人が近づくと気配を全く感じ取れなかった。

ともすれば、はじめからそこ^{………}にいたのではないかと思うほど突然現れたのだ。

こちらの悲鳴にも特に反応せず、老人は置かれていた湯呑を手に取ってかさついた唇を湿らせる。

「顔を見るなり悲鳴とは、儂も随分と怯えられたものよ」

「い、いつの間^{………}にここに?」

「先ほども言っただろう。儂はずっとここにいた。単にお主が儂の気配に気付けんかっただけだ」

湯呑を机に置いて、さも当然という風に老人は語る。

ずっといたとなると、休憩所を覗いた時からこの席に座っていたということなのか。

だが、サーヴァント特有の反応がつい今しがたまで感じ取ることができなかった。まさか、わざわざ宝具を使つてまで自分から身を隠していたというわけでもあるまい。

ただし、それに当てはまるクラスが一つ存在する。

「あ、あなたはアサシンのサーヴァントですか?」

「うむ? まあ、一応そうなるか」

やや歯切れの悪い口調で老人は答えた。

アサシントクラスのサーヴァントなら、クラススキルにある『気配遮断』によって他者から気配を察知されにくくなる能力が付与される。

だが、この老人は気配遮断どころではない。まるで透明になったと

言い換えてもいいほどに、全く気付くことができなかつたのだ。

やはり宝具を使ったのか、それとも『気配遮断』を上回るスキルを有しているのか。いずれにせよ、多大な疑問が次々と湧いて溢れてくる。

まず、何よりこの老人は何者なのか。

「あなたはいったい、誰ですか？」

「なに、しがない老骨だ」

肩で一度笑い、男はうそぶいた。

いったい、どこの世界に完璧に気配を消せる老人がいるというのか。

「まさか、ジャックやナーサリーが言っていたおじいちゃんっていうのは……」

「さつきまでいた子らのことか。子どもの英霊までいるのは流石に驚かされたぞ。しかし先の者といいお主といい、最近の児童はませた服装を好んで着るのか」

「ま、ませてませんから！ 健全、健全です！」

やや呆れ気味に老人は嘆息していた。反論を返すが、訊いているのかいなのか。

しかし、やはり彼がそうらしい。確かにこの外見なら、ジャックの「おじいちゃん」呼びは至極当然と言える。

師匠曰く『高ストレス下が長く続くと人は若くして老け顔になるぞ。アツくんのように』とのことだが、これは緩やかに歳をとっていった老け方の人間だ。

それでも、この老人が結局何者なのかまでは分からない。最近トナカイ^{マスター}さんに召喚された英霊だろうか。

おそらく東洋人で八極拳の使い手、というところまでは想像できる。ただ、自分の中では厳めしい面構えの青年を思い描いていたので、とても意表をつかれた気分だ。

意図せず、思考が口から漏れてしまう。

「八極拳といったら書文さんだと思っていたのですが、まさか違う方だったなんて」

「ほう。お主、よく知っておるな」

意外そうに老人が軽く目を見開いた。

微妙な会話のかみ合い方に、思わず尋ね返してしまう。

「えっ、なんのことですか？」

「名前だ。まだ名乗っていないはずなのだが。儂を李書文と知ったうえで尋ねてきたのなら、その心意気は評価しよう」

さらりと自らの真名を明かし、老人は深くうなずいた。

だが、突然告げられた真名に、ほつれた糸がさらにこんがらがってしまったように整理が追い付かなくなってきた。

「えっ、ええっ？」

混乱の波が怒涛の勢いで押し寄せてくる。

目の前の老人は李書文と名乗った。だが、自分の知っている李書文とは全く違う姿をしているのだ。

そもそも、李書文は既にカルデアにサーヴァントとして召喚され——これは特例がありすぎるので除外しよう。

他にも大小さまざまが疑問が現れてくる。ここでその時、一つの可能性が思い浮かんだ。

「あっ、もしかしてそういう薬を飲んでしまったんですね？」

「儂は薬など飲まん」

一転して、老人の目つきが殺意を帯びたものに変化した。

途端、足が生まれたての小鹿のように震え、背中につららを突っ込まれたような気分になった。蛇に睨まれた蛙、ということわざはこの場面で使うのが最適解、などどうでもいいことが脳裏をかすめる。

殺される。

純粹に、単純に、その一言だけが感想だった。

その直後、ふつとどすぐろい気概が老人から抜け落ちた。

「ああ、すまぬな。我ながら子供相手に大人げない」

同時に、殺気が霧散する。

全身を圧迫していた何かから、急激に解放されたかのような気だるさが心身を襲った。

息苦しいと思ったら、本当に息を止めてしまったらしい。止めてい

た分を取り戻そうと、勝手に呼吸が荒くなる。

老人の琴線に触れてしまったことを詫びようとしたが、唇は未だにわなわなと震えて思う通りに動いてくれない。

「あ、あの……その……」

「いや、無理にしゃべらんでもよい。儂も変に怯えさせてすまなかつたな。だが、儂は自分で淹れたお茶しか飲まん。これだけは覚えておくといい」

言って、老人は再び湯呑を傾ける。

自分という自己の確立は、元の自分がキング・ギルガメッシュに誤って提供された薬を服用したことで生まれた。

本来の自分のあり得ない可能性の、さらにあり得なかつた過去の存在。それが己、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリーの由来。

で、あるならば、この李書文と名乗る老人もまた、若返りとは逆効果をもたらす薬を服用して生まれた存在だと推測したのだ。

ところが、話はどうも違うらしい。

「えーと、もしもの可能性の世界からとか、イベント特有とか、どこか別の宇宙から来たとかでもないんですよね」

「なんだそれは」

わけがわからんと男はしわだらけの眉間をひそめる。分かり切っていたことだが、そんな可能性も捨てきれないのがカルデアの召喚基準のおかしなところだ。

つまり、この老人は真正正銘、正史に残された李書文そのものということなのか。

だが、それはおかしい。『もしも』でも何でもない英霊だとしたら、大きな矛盾が生じるからだ。

「でも、書文さんは既にいらつしやったはずですよ。クラスはランサーでしたけど」

そう、李書文という英霊は既に召喚されている。

外見も白髪の老人などではなく、燃え盛る焔のような赤髪を後ろで一本に束ね、近づくと者すべてに喧嘩を吹っ掛けに行くくらい危なっかしい、暴走マシンのような青年だ。

第一、サーヴァントの身体は生涯のなかでの全盛期の姿で召喚される。自分やジャック、あとはナーサリーのような概念に近い存在や、もしくは創作のなかの人物などは当てはまらないが、伝承や歴史に語られる人間ならば若いころの姿がもつとも輝いていた時代だろう。

ランサーの李書文も、実際に若い姿で召喚された。ならば、あの姿が李書文という人間の全盛期。

目の前の老人は、存在そのものが矛盾してしまうのだ。

「なに、ここには若いころの儂もおるのか？」

すると、興味深そうに李書文が質問してきた。

「あつ、はい。今、どこにいらつしやるかまでは分かりませんが、あの人のことですから誰かに勝負でも挑んでいると思いますよ」

相手はケルト系の武勇伝大好き英霊かギリシヤの喧嘩っ早い英霊か。どちらにせよ、彼らに槍一本で勝負を仕掛けている光景は想像に難くない。

返答を訊いた李書文は少しの間固まっていたかと思うと、何かを悟ったのか深々とかぶりを振った。

「そうか。此度の状況、そういうこともあり得るのか。いやはや、老いぼれとなったこの身になって、これほど血が湧き立つことはない。聖杯にかける願望などなきしものであったが、この巡りあわせに聖杯が関わっておるといふのなら、不謹慎ながら感謝しかない」

謝々、と短く呟き、両手を合わせて虚空へと軽く頭を下げる。

彼が何を閃き、何に対して感謝しているのかは分からない。おそらく、この先ずつと分かることもないと思う。

けれど今この瞬間、周囲すべてに闘気をぶつける猛々しい李書文の姿が、ようやく老人と重なって見えたような気がした。

「あの、私からも質問があるのでですけど、いいですか？」

「構わんが」

短く李書文が承諾する。

「あなたが李書文だとすると、私の知っている書文さんは何者なんでしょう。まさか双子の弟とか、生き写しの息子とかですか？」

「儂には弟などおらんかった。子もそれほど似た顔とは呼べんなあ」

懐かしむように李書文が遠く何処かに目を向ける。

その後、ふっと視線をこちらに戻してはつきりと断言した。

「しかし安心せい。お主の知っている李書文も、間違いなく儂である」
「ですが、それだとおかしいんです」

「何がだ？」

と、李書文が口元を下げて疑問を呈する。

そんな彼に、サーヴァントは全盛期の姿で召喚されること、そして若い李書文が召喚されているということは、全盛期ではない姿で召喚されることがおかしいという最大の疑問を説明した。

しかし、全てを訊き終えた彼が最初に取った行動は、それを軽く笑い飛ばすことだった。

「何じゃ、そんなことか」

と、彼は簡単に納得してしまう。

どれだけおかしいことを事細かに説明したのに、まるで何でもない風に受け流してしまったのだ。

あまりにそつけない当事者の反応に、思わずむっと頬が膨らんでしまう。

「そんなことか、ではありません！ 論理的に考えてあり得ませんもん！ 特別な事情なくして、全盛期の姿で呼ばれないなんてことは、英霊召喚の論理に合いません！」

「^かか^か。まあ落ち着け。ほれ、茶でも飲め」

まくし立ててしまった自分に、くつくつと笑い声あげながら老人は茶を差し出してきた。

いつの間に自分の分を用意してくれたのか。言いたいことはまだまだあったのだが、出された好意を無下にすることもできず、黙したまま受け取る。

そして、煮え切らない気持ちを発散させようと、湯呑の中身を一気に喉へ流し込んだ。

「あちやちやちや!?!」

瞬間、熱を持った身体をさらに過熱させるような熱湯が、口内から勢いよく喉元を焼き尽くしていった。

反射的に両手を開き、口元を抑えて身体をばたつかせてしまう。

——自分が湯呑を持っていたことに気づいた時には、既に中空を陶器が舞っていた。

「あっ！」

その時、どこからかぬつと手が伸びてきて、落とされた湯呑を綺麗に片手で受け止めた。

「虚け者。そうやって茶を飲むからじゃ。落ち着けと言っておろうに」

手にした湯呑を机に戻し、老人がおしぼりを差し出してきた。

触れてみると、ひんやりとした感触が肌を伝う。すぐさま受け取って、唇に押し当てた。

地獄のような灼熱から、天国のような涼しさへ。脳まで冴えるような冷やし具合に、乱れた動悸が急速に落ち着いていく。

こちらの容態が安定したのを見計らったのか、李書文が話を本筋へと戻した。

「さて。それで、儂がこの姿で呼ばれるのはおかしい、じやつたか」

「ふあ、ふあい。正確には、ふあかい頃のひよ文しやんが全盛期だから、です」

おしぼりを当てながら喋ってしまったせいか、自分でもよく分からない言葉になってしまった。

対して老人は、喉元で低く鳴らす独特な笑い声を再びあげる。

「^かか。儂にとって、若々しい肉体の頃は最高だった。無謀と呼ばれる修行にも心身は応え、重なる連戦にも涼しい顔をして耐え抜いた。そういう意味で、お主の言う全盛期は確かにその時期を指すのだから」

「でしたら——」

「だがな。儂にとって、真に六合大槍を修めた時期はそこではない。それこそ晩年に差し掛かうという頃であったか」

一瞬、彼が何を言っているのか判断に困った。

栄華を極めた青年期の李書文は、真の意味で全盛期ではなかったということなのか。

生前を思い返すように、ポツリポツリと老人は語る。

「若いころの儂はな、そりやあ血気が多かった。武術の道を極めんとひたすら鍛錬に打ち込み、練習だろうと容赦なく相手を殴り倒した。加減を違えて殺したことも幾度かあったな」

さらりと殺すという言葉が混ぜられ、またも背中に冷たいものが走る。

しかし、今度はそれを堪えて老人の話に耳を傾けた。

「昼も夜も時間を忘れて修行に明け暮れた。いつしか弟子を持ち、妻子を持ち、それでも鍛錬を続けた。その果てに、ついに六合大槍を完成させた。だが、その頃になって肉体は既に老いぼれていたことによりやく気が付いた」

そう言つて、木の幹のようにしわくちやな手の平を彼は視線を落とす。

ひどく傷だらけで、指や掌も歪に曲がっているように見える。生前負った骨折などの手傷が、英霊の身に昇華されて尚呪いのように残されていた。

己が犯してきた所業を、生涯を、決して忘れさせまいとばかりに。「そんなに長い間、あなたは修行していらしたんですね」

いつしか、老人が放つ気概に圧倒されていた。

つまるところ、この李書文は「武」の頂に達した李書文の姿であるというのか。老いてさらに全盛期を迎えたという例は初めてだ。李書文の享年は七十とされている。そして、彼は幼少期の頃からその姿になるまで、ひたすらに武術に打ち込んでいたという。

クリスマスに生まれ、まだ一年にも満たない歳月しか過ごしていない自分には、スケールが大きすぎて想像すらできない。

目的に向けて修行を繰り返すのは、単純かつとても論理的だ。だが、その時間までを考慮してしまうと、最早狂気とすら思えてしまう。「でも、めでたく目的の武術は修得できたんですね」

「ああ、修めたとも。するとどうだ、今度は死が目前にまで迫っていることを自覚してしまった」

自嘲気味に老人は鼻で笑った。

「せつかく一つの道を修めただけだというのに、もう終わりとはどういうことかと嘆いたものだ。死を超えてみせようと足掻いたものの、結局は寿命ではなく一服盛られるという、我ながらあっけない最期だった」

ひどく他人事のように締めくくり、彼は湯呑に口つけた。

自分にとってその物語は、思うように生きていくことができなかつた悲しい話にしか思えない。しかし、老人にとっては既に終わった仕事であるかのように、俯瞰した目をしていた。

故に、一つの素朴な疑問が心の中に残された。

「どうして、そこまで強くなりたかつたんですか？」

その言葉に、彼の動きが一瞬止まったような気がした。

ゆつくりと腕を組み、己の積み上げてきた生涯を掘り返すように熟考している。

「そうさな」

低く、眠れる獣のように老人は唸る。

もうしばらく唸ってみたと思ったら、唐突に彼は顔を上げた。

「幼き頃のことなど、当に忘れてしまった」

果物ナイフのようにすっぱりとした返答。あまりに潔く返されたため、こちらが思わずぽかんとしてしまった。

考えてみればそれもそうだ。数か月程度の歳月しか過ぎしていない自分でさえ、一週間以上前に食べた夕ご飯のこともほとんど覚えていない。

それが数十年以上前の記憶ともなれば、摩耗してしまつて当然である。

しかし、彼の言葉には続きがあつた。

「——だが、これだけは言える。儂は、童わっばであつた時から武術が好きだつた、とな」

若い頃の彼にも負けないくらい爛々と輝く瞳で、穏やかに笑いながら断言した。

その瞬間、確信した。これこそが、李書文という男の原動力なのだと。

使命でも、義務でもない。単純に強さに憧れ、武術が好きだからこそ続いた、七十年の日々だったのだ。

思わず、期待してしまふ。

自分には関係のないことだと割り切った僅かな欲。とことん強さを追い求めたこの老人を見てみると、押し込めたはずのそれが奥底から盛り上がってくる。

「――私も」

「うむ？」

無意識に発せられた声色は震えていた。

こんな自分でも、望んでいいのだろうか。大きな不安とほんの少しの希望が、緊張となつて喉元を干上がらせる。

ぐつと生唾を呑み込み、鈍長な声帯を絞りあげ、燻っていた感情を目いっぱいに乗せて絶叫した。

「私も！ あなたみたいにな、強くなれますか！」

疲弊した身体から出たとは思えない音量だった。李書文も目を丸くしている。

今まで自分には縁のないことだと、どこかで諦めている気持ちがあった。けれど、強くなりたいかと訊かれたら、そんなのイエスに決まってる。

なぜなら、恩返しがしたいから。

強くなって、他のカルデアの英霊の方々やトナカイス^マさんの役に立ちたいから。理由など、まとめてしまえばこんなものだ。

男の瞳が、孫娘を見るような老人のものから凶拳李へと切り替わつたように思った。

「……ふむ」

こちらを見透かすような鋭い眼光が、つま先から頭までを観察する。

一瞬の沈黙後に、李書文は断言した。

「――残念だが、お主では無理だ」

袈裟懸けに切り捨てるがごときの言い方だった。

あつけなく光が砕かれ、青白く染まっていくな自分の顔色をよそに、

彼はさらに壁を突き立てていくかのように根拠をあげていく。

「お主は、核となった聖女の反転オルタがおる。そも、ジャンヌ・ダルクという少女は一騎当千の武勇を誇った英雄というわけでもなし。英霊に昇華され、要塞のような堅牢さや空母のような火力を得ようとも、根本的に功夫が足りんのだ」

残酷に、しかし正確に、老人は一人の聖女の生涯を語る。

史実で記される通り、成長した自分ジャンヌ・ダルクは剣をとって道を切り開くのではなく、旗をなして道しるべとなることを選んだ。

軍を導く希望の御旗であり続けたのだ。

だがしかし、実際に戦場で切り結んだことのないジャンヌ・ダルクは近接戦闘に長ける筈もない。

不屈の精神や憎悪の炎を纏ったところで、本人の体術は一般兵のそれとどっこい上回るくらいだ。

となれば、そんな彼女を霊核の基盤に据えた己がどう奮闘したところで、彼女を超える身体能力が身につくことはない。

目が覚めてみれば、なんとも簡単なことだった。

「そう、ですよね——」

まぶたの裏に、塩辛い水分が溜まる。意図せず、血が出そうなくらいに唇をかみしめていた。

バックボーンが違い過ぎた。所詮、自分には泡沫うたかたの夢に過ぎなかった。

考えてみれば、こんな小さな体躯で何ができるといえるのか。これではマスターの盾になることすらできやしない。

今にも爆発してしまいそうな激情を抑え込み、ぺこりと李書文に頭を下げた。

「すみません。やっぱり忘れてください。私には、過ぎた夢でし——」

謝罪の言葉は、しわがれた声に遮られた。

「だがな。無理、というのは、儂のような強さを目指した場合になる」
口を開けたまま、ぽかんと固まってしまふ。激情に蓋するのに躍起になっていたせいも、言っている意味に理解が追いつかなかった。

空になつていた湯呑を片手に乗せ、李書文はそれを眼前に持つていった。

「お主が真に目指すべき強さ。それは、儂ではない。儂は確かに強くなったのかもしれない。だが思い返せば、過程で命を殺めすぎた。どれだけこの拳が重みを増しても、そこについて回る異名は“殺人拳”これ三文字」

びきりと嫌な亀裂音が走った。

次の瞬間、彼が手にしていた湯呑は水風船を握りつぶしたかのように木っ端みじんに吹き飛んでしまった。

力任せに潰したようには見えなかった。ツボをおすかのように、湯呑に指を突き立てながら握ったことで破裂したのだ。

あつけにとられる自分に、凶拳は元の好々爺のような微笑みを浮かべる。

「お主の強さは、また別にあり。儂でもなく、聖女でもなく。お主だけの強さを手に入れるべし」

ぽんと、ごつごつしたものが頭の上に乗せられた。

それが自分の頭を撫でつける李書文の手のひらだと理解した瞬間、ようやく脳が覚醒して瞬時に頬を染めにかかった。

「ちよ、ちよつと書文さん!? 子どもじゃないんですから!」

「何言つておるか。子供じゃ子供」

呵々々かかかと唸るように笑う。

やがて満足したのか、もしくはささやかな抵抗を受け入れたのか。すつと手を放し、老人は静かに立ち上がった。

「さて、行くか」

コートコートを羽織り直し、短くぼやく。

「行くつて、どこへですか?」

その質問に、彼は心の底から愉快そうに答えた。

「——年寄りの、小さな楽しみを満喫しにな」

それきり彼は歩き出し、一度もこちらを振り返ることなく通路の奥へと消えていった。

黒い背中が見えなくなっても、ずつとその方角を見つめていた。

一分、五分。いや、もつと短かったかもしれない。

縛り付けられたように固定していた視線を泳がし、そして小さく復唱した。

「私だけの、強さ——」

正直、その意味は未だによく分からない。

分からないが、心の奥底で固まっていた鐘に響くものだった。錆が剥がれ、新たな自分として新生した気分さえなっていく。

——私にも、こんなに強くなる理由ができてしまった。

カルデアのサーヴァントたちのために。トナカイ^マさんの^{ター}ために。

そして、こんな自分にも可能性を見出してくれた、一人の武人のために。

クラス：ランサー（此度の現界ではアサシン）

真名：李書文

キャラクター紹介

アサシンとして召喚された、武術が全盛期の李書文。

「神槍」の名に恥じない卓越した槍捌きに加えて、李氏八極拳の創設者としても知られるほどの八極拳の達人。

得物を失おうとも、生涯を通して磨き上げた武術は美しいとさえ評されるほどに合理的、かつ殺人的。

パラメーター

筋力：C

耐久：D

敏捷：A

魔力：E

幸運：D

宝具：—

小見出しマテリアル

若いころに比べて落ち着きがまし、穏やかな性格になってとつつきやすくなっている。（当社比）

ただし、そのうちに秘めた闘争心は健在。スカサハを始め、名だた

る英雄たち相手には隙あらばと拳を握りしめる。

とある聖杯戦争絡みで沖田、信長、マックスウェルなどと面識がある。面識があるだけで仲が良いわけではない。とくに信長には恨みこそなかれ不満はある様子。

中国武術を極めたが、異文化の格闘術への興味も尽きない。古代の大英雄、アキレウスなどが披露した格闘術の師にも興味を抱いている。

そして、このような現状でなければ絶対に経験できない戦いであるとして、若いころの自分との一戦という望みを見つけた。

黒のアーチャー

「――嘘」

その小さなつぶやきは、まだ幼き少女にとっての最後の一線の境だった。

日の落ちた夜空に溶け込むような黒い髪。このまま歳を重ねれば、誰もが振り返る相貌に成長することが確約された端正な顔立ち。

ただし今、その美貌からは表情というものがごっそりと抜け落ちて
いる。

薔薇の花弁みたいに深紅の瞳が、あり得ないものを覗き見るかのよう
にこちらの姿を映していた。

「嘘ではありません」

真冬の夜中よりも冷ややかな言葉が、唇から零れ落ちる。

あまりに無垢、あまりに純真。

才能を考慮すれば、この少女は将来魔術師として大成するに違いない。
い。

その才を同じ魔術師として尊び、愛しい学び子として祝福しよう。
だが、いけない。

自分を慕ってくれたこの少女が、まだ魔術師として完成する前のこの少女の時期に出会ってしまったことが、何よりもいけない。

懇願するように、少女の言葉尻がわなわたと震えだす。

「だって、ヴァン・ホーエンハイム、貴方は……」

「良いですか、小さなお嬢さん」

歩み寄り、茫然と魂が抜け落ちた少女の耳へそつと口寄せた。

白百合を彷彿とさせるドレスの胸元を紅く染めた、鉄臭い匂いが鼻

腔をくすぐる。

この若く、幼い王に。せめて、魔術師われわれがどういう生き物なのかを改めて認識してもらおう。

それが、短い日を共に過ごした自分に行える最大限の譲歩だろう。

「過去も、そうでした」

あらゆる苦悶と絶望に満ち、白目を剥いたまま彫像のように動かない少女元マスタの父親の軀の横で。

「現代も、変わらない」

自分の、我ら魔術師最大の悲願のため、一切の感情を消し去り。

「——魔術師に、真の意味での友人などいませんよ」

ゆつくりと、確実に、彼女の心に薄氷の刃を深々と突き立てた。



「——で、あるからして、叶わぬ恋と彼女たちが諦めてしまう前に、その夢は叶うのだよと教えてあげることが私の役目だと思いついたわけだ」

非現実めいた戯言が、微睡みの泥に沈みかけていた思考を引き戻した。

知らず伏していた目線をあげると、黄金色の芒野のような長髪の男が得意気に頷いている。

つんと鼻をつく薬品の匂い。つられて視線を滑らせれば、もはや見慣れた錬金工房の壁が映る。

紛れもなく、ここはカルデア。決して、薄暗く染まった庭を無垢なる月明かりが照らしていた、かの館の庭ではない。

それを自覚できた途端、心身を侵食しようと蠢くおぞましいものが溜飲していくような気がした。

すると、金髪の青年はこちらの様子を伺うように顔色を覗き込んでくる。

「おや、どうされたかな。ハハハ、私の溢れ出る美しさに心酔してしまつたのならば、申し訳ないな。確かに君は女性的な顔立ちではあるが、私にそつちの趣味はなくてね」

「いえ、心配には及びません。どうかお気になさらず」

「美しい金髪」の名に相応しい髪束を優雅にたなびかせる彼に、短く区切って訂正した。

ケルト神話に語られる、病を治す力や水を司るとも言われる戦神ヌアザの末裔。それが目の前のランサー、真名フィン・マックールという男の生い立ち。

軟派な口調だが、その実力と戦歴は大英雄の名に恥じない折り紙つき。

魔猪や冥界の馬、果ては自身の祖先である戦神ヌアザすらも打ち負かしたと言われている。ランサークラスで現界したため扱う武器は槍一振りだが、マスターからも信頼される実力者に変わりはない。

何度も言うが、お茶らけた口調でさえなければ、得をした人生もいくらかあつただろう。

そのような大英雄が、しがない錬金術師である自分の工房に顔を見せた理由もまた、冗談のような相談をこの青年が持ち掛けてきたからだ。

「話を戻しましょう。それで、先程の話なのですが」

「おっと、そうだった。今はデイルムッドもないのに、いつものツツコミ待ちの流れになつてしまつた。水を操る、私だけに！」

などと、清廉な表情で笑う青年。

素体は整っているだけに様にはなつてはいるのだが、どうも一ピースが足りない。いや、むしろ多いようにも思える。

「いけないな、またはや脱線しかけてしまつた。して、いかがかな錬金術師。この私の願いを聞き届けてくれるだろうか」

再び話の腰を折りかけたことに気付いたフィンが、誤魔化すように頭を掻く。

彼が提案した計画を訊いた時から、答えは既に決まっていた。三度話流れないうちに、決定していた答えをすぐさま彼に提示した。

「私のようなものでよければ、栄光あるファイオナ騎士団の長であるあなたの願いは是非とも承諾したいところです」

「おお、それでは——」

「はい」

歡喜の声をあげるフィンに、続けて返答を述べた。

「——流石に、カルデアに滞在する女性全員分の『賢者の石』を用意するのは困難です」

ばつさりと、笑顔を浮かべる彼の表情ごと切り捨てた。

「なに!? ダメなのか!?!」

「ただの魔力を帯びた宝石、というのでしたらお安い御用なのですが」

まさか断られるとはむべにも思っていなかったという顔のフィンへ、簡潔に理由をまとめる。

「カルデアに所在する女性の数につき、最低一つの『賢者の石』を生成するコスト、およびリスク&リターンが釣り合っているように見えませんので」

現在、マスターに召喚された英霊の数は百を優に超える。真実とは面白いもので、歴史では男性とされている人物が、実際は女性であったというケースがここでは少なくない。

そういつた理由で、カルデアには女性の英霊も相当数在籍している。僅かに残された当施設スタッフを含めれば五十でも効かない数になる。

少しは替えがきく代物とはいえ、資材状況が芳しくない中で『賢者の石』の量産は割に合わないということだ。

「そうか、ダメか。彼女たちが閉じ込めているであろう淡い熱を冷まさせないためには、かの錬金術師殿のものが適切であると踏んだのだが……」

どうしたものかと、弱った顔で彼は親指をかむ。

これは思い違いであればいいのだが、先程から彼は「であろう」といった仮定、未定形の単語を多用しているように聞こえる。

というよりも、全女性がフィン・マツクールに羨望ないしは劣情を抱いているという噂は一度も耳にしたことがない。

どちらかといえば、我がマスターの方が当てはまりそうなものだ。今この瞬間にも、誰かに付け狙われているに違いない。

疑念や懸念はいっしょくたにまとめておき、このまま帰らせるのも無情と判断したので代案を持ちかけてみる。

「でしたら、こういうのはどうでしょう。錬成する宝石に、少しばかり愛情に傾きやすくなる霊薬を混ぜ加えるというものは」

「いいや、その気遣いは無用だ」

意外にも、フィンは断固とした声色で提案を却下した。

同じ案を緑髪の娘は狂喜乱舞して薙刀を振り回し、壊れたように首を振っていたものだというのに。その際生命の危機に瀕していたことは置いておく。

少し予想外の返答に目を丸くしていると、彼は真剣な顔つきで自らの胸に手を当てた。

「なぜなら、私は既に華麗な身。ただでさえ罪深いこの肉体に、一時とはいえさらに私を輝かせてしまう宝石を身につけてしまったりすれば、私の罪はとどまるところを知らなくなってしまう……!」

世界崩壊の危機を本気で訴えかける、狂信者のように迫真の顔でフィンはそう語った。

なるほど、これは救いようがない。己ではどうしようもできない案件だった。聖女あたりにでも引き渡した方が手早く解決してくれそうだ。

どうにかして、この金髪に面白いものを押し付けられないかと思考を巡らせていたその時、扉の方から別の男の声が届いた。

「おお、フィン殿。ここにいたでござるか」

入口から姿を見せた男は、わざとらしいほどに古臭い口調でフィンに呼び掛ける。

その声に反応して振り返ったフィンが、男の姿を目にした途端に顔

を綻ばせた。

「ミスター・サムライ！ わざわざ来てくれるとは」「うむ。別件で近くに立ち寄りがてら、ここにしていると耳にしてな。しかし、マルタ殿は気恥ずかしいところが実に惜しい。必ずや目を見張るものがあると睨んでいるのだが、なかなか隙を見せてくれない」

珍しい出で立ちをした男——極東の国で和服というらしい——は、そう言つて残念そうに顔をしかめる。

自らを、佐々木小次郎と名乗る男。

彼が尋ねてきた理由にフィンは思い当たる節があつたらしく、談笑もほどほどにしてフィンが目つきを変える。

「きみが来たということは、もう準備ができたのだな？」

「如何にも。たまたま出くわした俵殿の助力もあり、シミュレーターの設定は万全でござる」

フィンの問いに、男は一束にまとめた紫の長髪を揺らして不敵に笑う。

シミュレーターという単語から、彼ら二人はシミュレータームを起動して何かしらに使うつもりらしい。

純粹に少し興味がわいてきたので、なんとなしにこちらも尋ねてみる。

「お二人は、シミュレータームで何かされるのですか」

「その通り。このサムライは腕が立つという話を、かねてから耳にしているな。腕に自信有りの英霊がいるならば、確かめたくなるが英雄の性というものよ。若々しくなった肉体に引っ張られ気味なのもあるかな？」

ちらりと目線を流し、再度和服の男を見やる。

莫大なエーテルの奔流を感じるわけでもなく、「佐々木小次郎」という英霊に強力な知名度補正がかかっているとも思えない。

ところが、武勇に猛る英霊たちの口から、しばしば彼の名が出てくる。実際に目撃した機会は少ないが、素人目に見ても彼の剣技が並外れた代物だということだけは承知していた。

戦いに明け暮れた英霊には、よく磨かれた宝石よりも眩く映るらし

い。

「拙者としても、遙か異国の英雄とやり合えることに至上の喜びを感じている次第。神をも降したとされる槍技に、拙者の技がどこまで迫れるのか。確かめざるをえないが、剣に狂った者の性よ」

腰に下げた刀の鞘に指を滑らせ、早くも男は瞳の内に炎を灯す。

受けて立とうとばかりに、フィンは正面から視線を交差させた。

すると、落としていた記憶を偶然見つけたかのようにフィンが手のひらを打った。

「そうだ、ミスター・サムライ。後々、あの炎門の守護者も手合せを望んでいるとのことだ。マッシュ嬢に守護の何たるかを教えた後になる、とのことらしいが」

「レオニダス殿でござるか。かの御仁の、鋼にも勝る堅牢さには以前から心惹かれていた。あの鉄壁を前にしたとき、拙者の技に新たな息吹が流れ込むことは間違いない」

新しくあがった名前の人物も、己とは正反対の類の英霊だ。

そのくせ理知的であり、時折こちらを驚かせるような緻密な計画を披露する時もある。肉体に無理をきかせた強引な計画もそれ以上に多いのだが。

「すまない、パラケルスス。この通り、私は先約の用意ができたのでここで失礼させてもらう。今回は断られてしまったが、次も尋ねるのでどうか検討してほしい」

「その口ぶり。フラれたでござるか」

「ハハハ。女性を射止めることはできても、男はそもそも上手いかないようだ。では学士殿、また会おう！」

先の件をあきらめきれないらしい金髪の青年は、爽やかに別れを告げると小次郎と肩を並べて部屋を後にした。

騒がしい二人組から消え去り、薬品が泡立つ音だけが僅かになる平常の静けさを取り戻す。

次に扉を叩いた時も答えは変わらないというのに、なんと押しの強い性格か。

いや、それでもなければ英雄などやっついていられないだろう。

フラスコの中に浮かぶ、拳大の原石。話題の渦中であつたためか、無意味に視界に焼き付いてくる。

「理由はどうあれ、賢しいものを求めることは人間の性ですか」

つぶやき、台に乗せていたフラスコをつまみ取る。

最初にそれを『賢者の石』と名付けたのは誰だったか。自分だったかすら、もはや覚えていない。

実に名前負けている、と常々思い返す。人間の欲望を掻き立てるだけの愚物を、賢者と称するのはなんと皮肉だろう。

愛し子たちを救うことすら叶わず、一人の少年の肉体を愚弄することしかできなかった石の塊。

人はそれを世紀の発明と称賛したが、それは根源に近づける一歩となりえたか。

結局、魔術師とはそういう生き物だ。今も昔も、それは変わるまい。そして、己の性もまた――

その時、空気が弾ける音に混じって奇妙な足音が響いた。

思考の海から引き上がり、足音に耳を澄ませてみる。

通路の床を打ち鳴らす固い音。それが壁一枚向こうで規則正しく、しかし決定的に異常な音を立てていた。

かつんと響くものではなく、かつかつと四脚で響かせているような異質な足音。

何より、普通の人間なら絶対に鳴らさなはずの音が、ますます正体を訝しませた。

――蹄？

通路から響くそれは、馬の蹄が鳴らす快音によく似ていた。

ただの人間であれば、絶対に鳴らせるはずのない爪音。

その足音の持ち主が、工房の扉の前でぴたりと止んだ。

記憶にない、そもそも人間かすら怪しい来訪者。自然、懐に忍ばせたアゾット剣に手がかかる。

すると、固く閉ざしてある扉が三回叩かれる。

少なくとも、知性や礼儀は備わっているらしい。衣の内側に伸ばした手を引っ込め、外にいる何者かに呼び掛ける。

「どうぞ」

「失礼します」

若く、しかし力強い返事と共に扉が開かれる。
床を叩く蹄の音。

戸の隙間から姿を覗かせたそれを視認した瞬間、薄々分かり始めていた正体への疑念が確信に変わった。

普通の人間であれば鳴らせない蹄音。

で、あれば、解答は至極単純。それが蹄を鳴らす足を有していただけのこと。

「あなたが、後の世で稀代の錬金術師と称されたパラケルススですね？」

決して大きくはない扉をくぐるようにして入ってきた、大自然の清冽さを思わせる柔らかな青年。

エーテルの流れから、彼もマスターと契約したサーヴァントであることは明白。

何より目を惹かれるべきは、彼の身体を支える下半身。引き締まった筋肉が皮膚の上からでも分かるくらいに躍動し、四つの脚で床を踏みしめて蹄鉄を響かせる。

その名はケンタウロス。

ギリシヤ神話を始め、空想上の物語に登場する半人半馬の生物。

性格は暴れ馬のごとく気性が激しいとされており、実際に特異点で遭遇した彼らは例外なく襲い掛かってきた。

ところが青年は全く逆、礼節と高潔に溢れた気質を醸し出している。

そも、ケンタウロスで英霊として召喚——座に登録——される者など、歴史に刻まれた中で一人しか該当しない。

「ええ。私も、お目にかかれて光栄です。数多の英雄たちの師、ケイローン」

礼節をもって下げられた頭に、こちらも同じ心持で頭を下げる。

アキレウス、ヘラクレスを始めとしたギリシヤ神話の英雄達。

豪傑無双を誇る彼らの師とされている人物こそが、目の前で穏やか

に微笑む青年——『大賢者』ケイローン。

「光荣などとは畏れ多い。後の世に何も残せなかった私に、誉れる資格なんてありませんよ」

頬をかき、彼は照れくさそうに笑う。

あのケイローンに自嘲されては、立つ瀬のない英霊で座が溢れてしまふことは想像に難くない。

加えて、彼は英雄としてあまりに英雄らしい像ヴィジョン。そのような人物に英雄らしい振る舞いを否定されるのは、黒い霧が僅かにかかるような心地よくないものがある。

「そう、謙遜なさらなくてください。あなたの教えがあつたからこそ、あなたの弟子たちは世界を切り開き、そして現在があるのです」

自身がかけた純粋な賞賛に、ケイローンが一瞬キョトンとした顔になる。

不意をつかれたように少しの間固まっていたが、清らかに微笑んだ。

「あなたは、優しい人ですね」

瞬間、温もりに包まれた慈悲の槍を心臓に突き立てられた気分になる。

向こうに他意はない。純粋に称えた台詞なのだと理解できる。

それでも、心の内に抑え込んだはずの何か、息を吹き返してざわめき立った。

けれど顔には出さず、大英雄からの賞賛を素直に受け止める。

「かの大賢者に褒められるとは畏れ多い。して、その方が私の工房なぞに、どのような用で参つたのでしょうか」

名だたるギリシャの大英雄達の、武勇の根源。英雄としての格は己と比較にならない。

そのような英霊が、果たしてこの工房に何用で現れたのか。

すると、ケイローンも本題に移ろうと談笑の空気を切り替える。

「そうですね。高名な錬金術師であるあなたに頼むようなものではない、とは思っているのですが、お話だけでも訊いていただけますか？」
違う種類の笑み。温かみのある好青年のものから、交渉に長ける賢

者が浮かべるそれ。

ケイローンの本質の一端が垣間見える。師であり、穏やかな人格者であると同時に、驚天動地の古代ギリシヤを生き抜いた英雄としての気迫に、肯定の言葉も否定の言葉も出てこない。

無言を肯定と受け止めたのか、彼はそのまま続ける。

「ヘラクレスを知っていますか」

問いかけに対し、首を縦に振って応じる。

脈絡もなしにあげられた大英雄の名。その名を知らぬ者など、英霊には存在しないだろう。

英雄の完成形とも比喻される、大英雄ヘラクレス。残念なことに、カルデアには正気を失った類の彼しかいないが、それでいて尚圧倒的な破壊をもたらす主力の一角に数えられる。

ヘラクレスがどうしたのかと模索している最中、ケイローンから答えが提示された。

「知っての通り、今の彼は正気でない状態です。生前に培ったそれらを脱ぎ捨てさせられた故に、幾分かの冷静さが欠けてしまっています」

彼の言う通り、カルデアに召喚されたヘラクレスは狂ってしまったている。

元々高潔の魂を宿しているものの、いつか暴走してマスターにも牙を剥く可能性は捨てきれない。そういう意味では、非常に強力な地雷とも言える。

なので、とケイローンは指を立てた。

「そこで、彼に少しばかり稽古をつけようと思うのです。そのために、高硬度な鉱石をいくつか見繕ってもらえれば、と足を運んだ次第です」

「高硬度な鉱石、ですか。差し支えなければ、どのように使用するのか教えてくださいませんか？」

ヘラクレスの師が、今再び彼を鍛えると宣言した。

武人でなくとも、興味のそそられる話題である。いかにして、あのような逸物達が誕生したのか。

かくして、青年は涼し気な笑みで答えた。

「投げつけます」

「……今、なんと?」

単語の知識と理解が結びつかず、思わず尋ね返す。

「投げつけます」

同じ表情のまま、一字一句同じ返答が返ってくるだけだった。

おそらく表情のない顔で固まっているであろう自分を見てか、彼はさらに説明を加える。

「正しくは、鉱石をヘラクレスに投擲して回避してもらい、そのまま私に殴り掛かってきてもらおうという算段です。単純な動作のため今の彼でも十分対応できるはず。狙いとしては、内側から溢れ出る狂気を発散させると同時に、少しでもその身に染み付いた身体の技を思い出してもらえればと」

淡々と、既に理解の範疇を超えた策を解説する。

要は、自身を囿にしてヘラクレスに実戦形式の稽古をつけよう言うのだ。

あの岩のような巨体相手に、真つ向から対峙することを想像しただけで心臓が握りつぶされそうになる。

それを事なげもなく言い切れるのだから、つくづくギリシヤの英霊はリミッターが違うと実感させられた。

「もし、ヘラクレスが鉱石を回避できなければどうするおつもりでしょうか」

「もちろん。回避するまで続けますよ」

端麗な笑顔のまま、彼ははつきりと断言する。

これが、身体に障害を抱えた少女を導く、というものであったならば、きつと彼は全く違う手腕を振るって少女の運命を変革させるだろう。

今のケイローンは「英雄気質な側面」が強く出ている表れとみるべきか。

教師ではなく、英雄としてケイローンを見た場合、種族由来の機動力に加えて弓による遠隔射撃が何よりの脅威。狩猟女神アルテミスから直々に教えを受けたという弓術は、星座として召し上げられるほ

どに超越的な腕前と推測できる。

それにしても、かなり荒療治だというのが率直な感想だ。

裏を返せば、ヘラクレスならば耐えきれるとの算段と信頼からくる荒療治なのだろう。ヘラクレスを詳しく知る男が、他ならぬケイローン自身であるがゆえに。

「あなたは、教え子を愛しているのですね」

「ええ。皆、大望を胸の奥に宿した子たちでした。荒くれものや捻くれもの。どれも手間のかかるものたちでしたが、全員が私の誇れる教え子です」

我がことのようにケイローンは胸を張って笑う。

ヘラクレスに限らず、彼に教えを請いた者達は須らく大成している。

彼の元で弟ポリュデウケースと活躍し、死後ふたご座へと昇ったカストール。

医学においてメキメキと頭角を現し、不死の薬を開発してついには神にまで昇りつめたアスクレピオス。

そんな彼らが在籍していた、英雄軍アルゴノーツを率いるという異常なカリスマ性を持つイアソン。

名前を列挙していてもきりがなほほどに、彼の教え子たちは一人一人が英雄だった。

彼らに才能が眠っていたことも、英雄足り得た理由の一つには違いない。だが、才を限界以上に引き出させたケイローンの鑑識眼あつてこそのものであることも確かだ。

故に、彼らは一心同体とも呼ぶべき存在。

自分では、一生築くことのできない人間関係。

だからだろうか。

思ってもいないことが、突然口から滑り出てきたのは。

「勝手ついでに、もう一つお尋ねします」

「何でしょう」

人の好い笑顔で彼は受け応える。

その笑顔を踏みにじるような一言が、躊躇いもなしに喉の奥から飛

び出してきた。

「あなたは、自らの教え子を手にかける必要があれば、躊躇なくその弦を離すことができますか？」

一瞬にして、彼の表情に雲がかかった。

嫉妬で問いかけたわけではない。そんな無意味な問で、心に巣くった黒い影が晴れるわけでもない。

否定してほしい、というのが正直なところの本音だ。

彼は英雄であり、魔術師ではない。だからこそ、魔術師の思想私に共感しないでほしい。

自分でもひどく捻じ曲がった思考と自覚している。それでも、英雄である彼に否定されれば、私が目指す理想は穢されることのない不変のものとなる。

そう思った矢先。

曇りがかった空の隙間から差し込む光のように、彼は短く言い切った。

「できますよ」

吹き抜ける風よりも清涼とした一声。

その調子のままに、英雄たちの師は弟子たちに手をかけると解答した。

あつけにとられて何かを口に出す前に、ケイローンが続ける。

「ヘラクレス、アキレウス、イアソン、アスクレピオス、さらに数名。私と彼らのいずれか、或いは全員が通常の聖杯戦争で呼び出され、使役されたとします」

再三列挙される偉大な英雄の名前。どれもが彼の教え子で、誰もが彼の意志を継いだもの。

息子にも等しい存在であるはずの彼らを想起しているだろうに、一切の情を見せない瞳がこちらを見据える。

「その場合、私は彼らの師である前に、一体のサーヴァントとしてマスターに付き従いましょう。かつての弟子を手にかける運命にあるというのなら、私は容赦なく彼らを斃します」

優しく、鬨気を灯した双瞳でそう告げた。

それは、サーヴァントとして当然の責務を果たすという意志か。それとも、英雄ケイローンとしての矜持か。

「彼らは、既に私の元から飛び立ちました。与えられるだけだった雛鳥の時期は過ぎ、彼らもまた親鳥となって与える側に回った。一人前の英雄として、尊敬に値すべき人間として、私は彼らの敵にもなりましょう」

嘘偽りのない本心からの言葉なのだと、理屈も証拠もなく納得させられた。

彼はそういう男だった。時に愛し、時に慈しみ、そして時に弦を引き絞る。

世界の優しさと厳しさを、等しく内包した青年。それこそがケイローンの生き様であり、信念なのだと。

「……それは、とても素晴らしいことでしょう。あなたは常に、教え子たちの道しるべであり続ける。理想の教師と呼ぶにふさわしいお方だ」

「いえ。私ではなく、彼らが偉大なのです。私は道を示して、そつと背中を押しただけ。その道を進むか否かは、彼らが決めたこと。賞賛すべきは、苦難の道を歩み切った彼らにこそかけてください」

先程までの闘志はどこへやら、ケイローンは謙虚に振る舞う。

つくづく、自分とは正反対の者であると痛感させられた。

己が望みを——根源を求めたがために悪逆に屈しただけの自分とは違うのだと。

安心感が生まれる。同時に、胸に巣くう黒い何かが蠢いたような気分になった。

たった一度出会っただけだというのに、瞼の裏に鮮烈に焼き付いて離れない、可憐を装う一人の少女の姿をした何か、内側でくすくすと囁く。

——今は、関係ない。

耳をふさぎ、瞼を閉じ、意識を目の前の青年に集中させた。

「さて、些か脱線が過ぎてしまいました。本題の鉱石の件ですが、喜んでお引き受けいたしましたでしょう。あなたのような崇高な方のお話をお

聞きできたことですし、少しおまけも追加しますよ」

「それはありがたい。ストックは多いほど安心できます。いくつかは壊れると思いますからね」

からからと笑うケイローンだが、実に物騒な内容だ。頑丈な鉞石の錬成を注文しておいて、それを使いつぶす前提の特訓を弟子に仕掛けるというのだから。

これもある意味ギリシヤのしきたりなのか。あるいは彼独自の趣向なのか。

「しかし、実は似たような注文を既に先客の方にも依頼されておりまして。何でも、同じく修行で使うそうですが、そこは割愛させてもらいます」

突然扉を叩いてきて、槍で突いても拳を打ち付けても碎けない石が欲しいと言ってきた老人を思い出す。

「なので明日、またお越しいただいてもよろしいですか。材料を確保しておくのと、一定数用意するための時間をいただきたいのです」

土の元素塊を圧縮、生成することで希望通りの硬さを保持した鉞石を生み出すことは容易い。

ただ、前述したように数が不足している。加えてヘラクレス相手に通用するほどの硬度となると、念には念を押した硬さでも不安点が残る。

すると、彼は二つ返事で了承してくれた。

「いえいえ、お時間はいつでも大丈夫です。こちらこそ、急に押しかけて我がままなことを引き受けてくださり、本当にありがとうございます。何か助力できることがあれば、私に言ってください」

「ええ。その時はこちらからご連絡します」

最後にもう一度、深々と礼をしてケイローンは踵を返す。

狂った弟子一人のためにこうも駆け回っている姿を眺めていると、自分が思っている以上に面倒見のいい男なのだろう。特訓の内容自体は易しいとは口が裂けても言えないが。

と、その時、何かを思い出したかのように蹄の音が止んだ。

「ああ。それと、これはおせっかいかもしれませんが」

扉の取っ手に手をかけたまま、ケイローンが振り返る。

「——かつての経緯はともかく、今のマスターはそのままのあなたを好んでいるんですよ」

最後に微笑み、今度こそ半人半馬の英霊は去っていった。

僅かな言葉に含まれる意味に、思わず苦味のある笑いが込み上げてくる。

ケイローンの去り際の一言は、こちらの意図を明白に理解していたうえで、の言動だった。

「見透かされていましたか」

再び訪れた静寂な空間の中、己のか細い声だけが反響する。

いつの間にか彼に誘導されて、自分もケイローンの教えを受けてしまっていたようだ。

英雄^{理想}に焦がれる自分と、魔術師^{切望}を求めめる自分。

その答えを、今は知るべきではないと。未回答のままの自分を受け入れてくれる、変わった物好きがいるのだから。

「——美沙夜」

瞳を閉じる。

連動するかのように、あの日の情景が瞼裏に鮮明に投影される。

冷やかな月夜の下で、感情の消えた瞳でこちらを見上げていた少女の幻影が刻々とよみがえった。

「あなたはきっと、私を許しはしないのでしょうか」

幼いながらも、王の気質を備えていた少女。

あの大战を生き残り、順当に成長していれば。今頃は美と才を兼ね備え、冷たい血の通う女帝として君臨しているだろう。

面影など、きつと残ってしまい。他ならぬ自分が砕いたのだから。「ならば、どこかでこの私の姿を見る機会があったなら、どうか嗤っていてほしい」

正義の味方のそばにつき、正義の英雄に正されて、正義の味方になりたかった哀れな人間の所業を。

一度悪逆に堕ちたその手で、救おうともがく愚者の道化ぶりを。

彼女に嘲笑われることがあるのなら、きつとそれこそが贖罪になる

のだと信じて、己は正義の味方を張り続けよう。

クラス：アーチャー

真名：ケイローン

キャラクター紹介

ギリシャ神話に登場する、数多くの大英雄たちを幼い頃から導いた英雄の師匠。

半人半馬の大賢者。また、父クロノスの血も継いでおり半神でもある。かつては不死性も会得していた。

女神アルテミスから直々に弓術を教わっており、その腕前は闇夜を切り裂く弓矢を打ち落とすほど正確無比。

弟子であるヘラクレスが泥酔して暴れた際にヒュドラの毒矢が刺さってしまった、文字通り生と死の境を行き来した。

不死性故に死ぬこともできずもがき苦しみ、最期は神に不死性を還して死亡した。その後、射手座としてケイローン自身も召し上げられる。

パラメーター（記載ステータスは人間に変化して大幅に下がった時のデータのため、これに上方補正が乗せられる）

筋力：B

耐久：B

敏捷：A+

魔力：B

幸運：C

宝具：A

小見出しマテリアル

通常の聖杯戦争であれば、特異な外見を隠すためにステータスを犠牲にして人間の姿を取ることも可能。

先生。教えることが大好き。子供たちの英霊には進んで教鞭を振るっていて、概ね好評。たまに発明のヒントを得ようと二名ほど混ざりこむがそこは気にしない。

ただし、体育の時間になるとギリシャ基準のT A I I K Uになる。

目指せ第二のヘラクレス。

その弓の腕前目当てに勝負を吹っ掛けられることもままある。肝心の弓の教わり相手については微笑みで誤魔化された。

誠実な性格なために、裏切りには憤りを示す。ただし、それを悔いているのであれば共に歩もうと手を差し出すだろう。

かつての教え子たちには、今も厳しく優しく接している。

教えを忘れた卑屈者でも、歪曲し復讐者に堕ちた者でも、彼の愛は枯れることはない。

真アーチャー (fake)

瞼が重い。

ふくれあがる豊かな木々の香りが、微睡みの中にいた鼻腔をいたずらにくすぐった。

鉛のような瞼を根性で開く。ちようどその瞬間、ざわざわとした葉音がそこかしこで囁かれた。

上体を起こし、霧がかかった脳のまま周囲に視線を向けてみる。

……。

端的に言つて、そこは森だった。

明るめの若い緑色をした葉をつけた数々の枝が、それぞれの自由を象徴するかのように思い思いに空へ身を伸ばしている。

強いて普通の森と違う点をあげるなら、伸ばされた先に広がる空模様が、パレットの上でいろんな色の絵具をごちゃごちゃにかき混ぜたような不気味さを放っていることか。

……。

空模様についてはこの際置いておくとして。目覚める前の記憶を、もう一度思い返してみる。

昨夜は夜襲をかけてきた三人組に加え、最近過激側に足を踏み入れたりつつある玉藻ちゃんサマーも丁重に追い返したところで、疲労からか意識を奪われたように自室のベッドへ倒れ込んだところまでは覚えてる。

それなのに、頬を撫でるのは自然的な柔風。

意識を刈り取りにかかってくるくらい柔らかなベッドはなく、代わりにごつごつと固く冷たい大地が尻下に押し当てられていた。

今まさに、この身は異常事態にあるという事実をありありと知らされた。

———？

実は夢遊病を患っていたという衝撃の事実がないのなら、寝ていたはずの自分はレイシフトなしでこの地に訪れたことになってしまう。

しかし、「監獄塔」のように魂へ干渉してくるものだという可能性もある。絶対にありえないという言葉は、この旅の中でまやかしの拠り所にもならないものだと言ばされた。

……。

第一に、カルデアとの通信を試みる。やはりというか、呼びかけに応じる気配はない。

契約した英霊達との魔力経路は途絶えていないので、完全に繋がりが絶たれたわけでもなさそうだ。

ひとまず、周囲を確認してみるほかはない。何かないものかと首を回してみる。

するとここで初めて、後方に洋風の城らしき建造物があることに気付いた。

――。

思わずあつけにとられてしまうくらい、遠目からでも分かるほどの巨城。庶民感覚の抜けない自分ですら、途方もない費用と資材をふんだんに盛り込まれた豪華絢爛ぶりだと理解できる。

ただの森の中で孤島のように佇むそれは、異質に揺らめく空も相まって、まるでファンタジーの物語から挿絵を抜き出して張り付けたかのように、どこか非現実めいたものを感じさせた。

と、呆けて感心していたその時だった。

“■■■■■■ー！”

地の底から鳴り響くような怒号が、静かに戯れていた森林を揺るがせた。

次いで、隕石でも落下したかと思うくらい地盤の碎ける音が巨城から轟く。

鳥のような生き物が、巣を叩いた虫のように枝の影から一斉に飛び立っていった。見せかけだけでも静謐に包まれていた空間が、にわか喧騒に染まっていく。

そして何より今しがた木霊した、凜猛な野獣よりも恐ろしい咆哮の主を自分は知っていた。

――ヘラクレス！

古代ギリシヤ神話に語られる、最大最強の大英雄。

同時に、焼却された人理を取り戻す旅の狭間で相対し、後に心強い味方となってくれた狂戦士のサーヴァント。

今の咆哮は、高レベルの狂化スキルによって言語を封じられた彼のものに違いなかった。

魔力の繋がりを感ずるため、そこにいるヘラクレスは間違いなく味方側のはず。しかし、前述した狂化スキルで理性が失われており、状況次第では巻き込まれる可能性も高い。

——だが、怯えてうずくまっても状況は好転しないことも事実。

……行ってみよう。

四肢に力を込めて立ち上がり、ぼやけていた思考に喝を入れる。

寝た時に装着したままだった魔術礼装の調子を確認し、濛々と不穏な煙が立ち上る巨城の眼下へと視線を移した。

◇

森は迷いやすいと言われているが、それは周囲すべてが同じ景色ばかりで方向感覚を狂わされるためらしい。

現に、目印である巨城がなければ、自分もこの森の迷い人になっていったという確信があった。

徐々に破壊音が近づいてくる。

一步踏み出すごとに、自分が死地へ赴いていくのを実感させられる。

“■■■■ー！！”

幾度目かの咆哮が森林をざわめかせた。

周囲にいた生物は、既に鳴き声すら消え失せていた。

……。

強張っていく足を奮い立たせ、無惨になぎ倒された大樹を横切っていく。

音の元へ向かうほど、ここだけ突発的に嵐が襲来したのかと勘違い

するほどに、大量の木々がへし折られていた。

例えば半分から断ち切られて、あるいは根元から力任せに引き抜かれて、あるいは大砲を受けたかのように大きな穴を穿たれて。

妙な違和感が芽生える。ヘラクレスにしても、ここまで破壊の爪痕を振り撒くことなどそうそうない。

——ッ。

焦る気持ちからか、自然と足は早まっていた。

べきべきと乾いた音の悲鳴が、すぐそこで鳴り響く。一心に走り続けていたが、ここまで近づいているとは思わなかった。

もう一度、幹が砕けていく様子が音の波となって押し寄せてくる。それも想像以上に、一瞬で縮まった距離の先で。

——まさか、と嫌な汗が背中を伝ったのと、薄暗い森影に鉛色の物体が浮かび上がったのはほとんど同時だった。

“■■■■■■——！！”

圧倒的な比重をもった物体が、理性をかなぐり捨てた咆哮と共に、突然真横を掠めていった。

——ッ！

伴われた突風が身体中を叩き、重心をもつていかれないように踏みとどまる。ちり、とした痛みが僅かに掠った右耳に走った。

しかし、さらに驚愕の事実によって痛みはすぐにかき消された。

何本もの大樹を粉碎し、ひときわ大きな樹木に激突してようやく停止した、巨岩のような大男に見覚えがあったからだ。

こちらが何かを叫ぶよりも早く、大樹へ身体を預けるように沈んでいた巨人が、何事もなかったように身を起こした。

“■■■■■■——！！”

石柱からそのままくり抜いたような巨大な斧剣を片手に、巨人は白い息を吐きだし猛々しく吼えた。

見上げるような巨軀を誇るあの巨人こそが、オリュンポス最強の称号を授かった大英雄。

狂戦士、ヘラクレス。

しかし様子がおかしい。

見間違えでなければ今、ヘラクレスは吹き飛ばされてきたのではないだろうか。

“■■■■ー”

ヘラクレスが自分に気付いたらしく、獅子より鋭い輝きを宿す瞳と目線が交差した。

その目に映る狂気は薄い。どうやら、若干の理性までは呑み込まれていないようだ。

と、安心からか、恐怖と緊張で強張っていた筋肉が緩む。肩を下ろし、深く嘆息した。

ふと、木の葉がにわか騒ぎ立つ。

なんとなしに顔をそちらへ向けて――

「死」が、音よりも早く迫ってきていた。

“■■■■ー！！”

身の丈以上もある大剣が、「死」を虹彩から覆い隠す。

刹那、目と鼻の先に落雷が直撃したような轟音と閃光。

――!?

視界を遮られたにも関わらず、途方もない爆音と光が五感が残らず奪っていく。

衝撃波が細い肉体を叩き、たまらず後退してしまう。

やがて、雷鳴は収まった。石柱のような斧剣が離れ、ヘラクレスが怒り交じりに叫ぶ。

よく見れば大剣の側面に、先ほどまでなかった青銅の矢が深々と突き刺さっていた。

つまり、雷撃かと思われる一撃は、第三者によるただの一射でしかなかったのだ。

そしてその一射が、寸分違わず自分の命を奪い去ろうとしていたという事実には、今更になって思い至った。

……………ッ。

思い出したかのように身体がどっぴりと汗を拭きだす。血管を流れる血液が、瞬間凍結したみたいに全てが冷え切った。

もし、ヘラクレスがいなかったら、自分は風が吹くようにあっけな

く命を散らしていたのだ。

そのへんの木に成っていた果実を、矢で撃ち落とす感覚で。

数々の特異点を経験していてこの様では、この先は命がいくつあっても足りはしない。

今すぐ逃げ出しそうな足を抑え、せめてヘラクレスがカバーできる距離へ移動する。

巨人は、得物にそびえ立った矢を憎々し気に見下ろしていた。

“■■■■ー”

尋常ならざる威力を生み出した矢を大剣から引き抜き、ベきりと半分からへし折った。

形状崩壊を起こしたためか、破損した部分から粒子となって矢は消滅してしまう。

……。

はつきりと分かったことが二つある。一つは、ヘラクレスは何者かと敵対しているということ。

そして、もう一つ。その何者かは、オリュンポスの大英雄に比肩する強さを有しているということ。

ヘラクレスに並び立つ英霊はそういない。さらにその中で、弓矢を扱う人物となるとかなり絞られてくる。

それが自分の知る英霊か、まだ見ぬ強敵かまでは今のところ分からない。

けれど、ずっと鳴りやまない本能の警鐘が、覚悟を決める要因になった。

その時、ヘラクレスが遠方を強く睨んだ。

――！

彼が視線を向けた先――すなわち、洋風の巨城。

刹那、何かを反射したような光が、巨城の最上部の塔の頂上で煌いた。

それを目撃した途端、指一つで潰されるノミのような、不断の危機に再び曝されていると危険信号が絶叫した。

“■■■■ー！！”

瞬きもできない須臾の狭間。

かろうじて認識できたのは、森林を大気ごと切り裂き、額を貫かんと迫る斬撃の風。それが己の肩間上に届く前に、巨体から想像もつかない超反射で矢を切り飛ばした大英雄の背中。

文字通り、あつという間の、瞬く間。

刹那的な時間に自分は一度死に、生き残った。

……。

二度目のためか、滝のような冷汗はもう吹き出ない。だが、自分の耐久力をはるかに上回る一撃が連続で押し寄せる重圧に、吐き気が込み上げてくる。

しかし、一呼吸も置かせないと言わんばかりに、巨城の頂上が再び光を反射した。

もはや弓での狙撃とは思えない、レーザーのような推進力をもった矢が連続で飛来する。

それを、大壁のように自分の前に仁王立ちしたヘラクレスが、虫を叩き落すかのごとく次々と切り伏せ、切り捨て、切り落としていった。

“■■■■■■——”

自らが介入することすらおこがましい、強者と強者のぶつかり合い。

だが、謎の相手——仮にアーチャーとして——が遠方から狙撃している一方、ヘラクレスは自分を庇うために防戦へ回るしかなく、消耗するばかりになってしまう。

このまま立ち尽くしているだけでは、自分はただの足手まとい。マスターとして、それだけは避けなければ。

そう思ったその時、立て続けに響き渡っていた剣戟がぴたりと止んだ。

……？

見れば、最後の一本を防いだヘラクレスが白い息を吐きだしている。

こちらの粘り強さに相手がしびれを切らしたのか。であれば、今のうちに撤退し、カルデアからの応答や救援を待った方がいいだろう。

か。

束の間、僅かに込みあがった希望は、瞬時に絶望へ塗り替えられた。

“■■■■ー”

ヘラクレスが犬歯を剥き出しにして空を見上げた。

つられて顔をあげる。

そして、あまりの光景に戦慄して声も出なかった。

――！

捻じ曲がった歪な空を、幾つもの流星が流れていく。

流星は次第に数を増やし、十、二十と、サイケデリックな空を一呼
吸のうちにみるみる覆っていく。

彼方で僅かに反射して煌く流星の一つ一つ。

星光のように輝き、群れ成す光。

それら光は全て、奇怪色な空で尚目立つ青銅色に尾を引いていた。

――。

脊椎の合間につららを差し込まれるよりもひどい寒気が、毛細血管
の先々まで染み渡っていった。

大砲よりも遥かに疾く、鋭い一撃。それが青銅の曇天となって空を
覆い、あまりある殺意の雨が今にも降りだそうとしているではない
か。

これほどの妙技、並大抵のアーチャーでは不可能だ。

無論、一つでも掠っただけで自分の肉体なんかは消し飛ばされる。

どうにかして、あれを打開しなくては。

だが……逃げ道なんてどこに？

押しつぶされそうな重圧の中で思考を張り巡らしていた時、ひよ
いと身体がいきなり軽くなった。

“■■■■ツ”

否。ヘラクレスに襟元をつままれていた。

いきなり何を、と抗議をあげるより早く、巨人は岩肌のような左肩
にすんと自分を乗せたのだ。

――ヘラクレス？

自分の問いに、ヘラクレスは当然答えない。

だがその瞳が、吐息が、大剣が、迫りくる殺陣豪雨を前にして悠然と物語っていた。

——己なら、あれら全てを墜としてみせよう。

言外に、そう言っているように思えた。

いや、この男なら本当にやっつてのけると言い切れる。

なぜなら、男こそ音に聞こえし大英雄。全ての英雄の頂点に近い存在であり——ヘラクレスなのだから。

——いこう、ヘラクレス！

“■■■■——！”

上空より殺気ひしめく雨空の下。

振り絞って出したなけなしの空元気を、力強く勇気づけるような雄たけびが鳴り響いた。

◇

走る。

走る。

走る。

豹よりも速く、風よりも速く、音さえ置き去りにするほどに、薄暗の森を巨軀が躍動する。

北東の枝葉が騒ぎ出した。

騒乱をねじ伏せるように鏝の雨が降り注ぎ、枝ごと切り裂いて大地を砕いていく。

“■■■■——！”

それを巨人は躲し、間に合わないなら防ぎ、地面をえぐり飛ばしながら突き進んでいく。

通算、三度目の矢雨。自分たちが通り過ぎた大地は全て、針山のように突き立った矢で覆いつくされていった。

いくらヘラクレスといえど、大量の矢群を三度もかいくぐれば消耗は無視できない。

直撃こそまぬがれているが、アーチャーの放つ神気を宿した一射

は、想像以上にヘラクレスの体力を奪っていった。

このままでは罅が明かない。

その時、一際異質な気配が空気を一変させる。

その変化にいち早く気付いたのは、やはりヘラクレスであった。

“■■■■ツ！”

四度目の、数十本の矢が彼方から飛来する。

だが、その軌道は先刻までの「面」を蹂躪していくようなものではないと思いきらされる。

突如として、矢の一本一本がぐによりと大きく歪曲したのだ。

——!?

矢羽は尾っぽに、箆^はは翼を生やし、鏃^はは嘴へ。

降り注ぐ矢雨だったものは金属の鳥の大群と変貌し、餌を啄むようにして一斉に襲い掛かってきた。

群がる怪鳥たちを、ヘラクレスは驚愕もせず力任せに粉碎していく。

ところが、今まで直進的だった矢とは違い、仮初とはいえ意思をもった青銅鳥は、ひゆるりと舞うように風に乗り巨人を翻弄する。

瞬間、豪撃の合間を縫って、幾つもの金属の嘴が鉛色の肌を突き破りだした。

“■■■■■■——！”

痛みのためか、ヘラクレスは大銅鑼のように喉を震わせ、一撃を加速度的に増していく。

しかし、それに比例して金属鳥たちの飛行速度も上昇していった。捌ききれない数が少しずつ増えていき、鋼の肉体は徐々に傷が増えていく。

不意に、頬を何かが掠めた。

生温かい、どろりとした粘液が右頬を伝い、鉄臭い匂いが鼻腔に届く。

——ッ！

今の一刺しで命の危機を感じたのか。

結局のところ分からないが、人間、死を間近に感じれば、どうにか

生き延びようと体のスペックが上昇するらしい。

いわゆる火事場の力とやらが働いたのか、脳の引き出しが慌ただしく動き出した。

青銅の羽をもつ奇怪な巨鳥。

かつて、興味本位で博識の誰かに教えてもらったその名が、急速に脳の中から喉元へと運ばれてきた。

——ステュムパリデスの鳥！

叫びに、大英雄が呼応した。

“■■■■■■ー！”

前進から一転、ヘラクレスは踵を返す。

困んでくる怪鳥を強引に薙ぎ払う。

彼の瞳孔は既に怪鳥ではなく、地面を凄惨に装飾していた無数の矢に向いていた。

“■■■■ツ！”

絨毯のように敷き詰められていたそれらを岩盤ごと引き抜く。

そして、拳いっぱいに掴んだ矢束を、怪力にものをいわせて怪鳥の群れへと次々に投擲したのだ。

すると驚くことに、矢は糸で結ばれているかのごとく怪鳥たちへと吸い込まれていく。

程なくして、全ての怪鳥は金属の胸板を紙のように貫かれ、鳴き声一つもあげずに鉄くずとなった。

“■■■■■■ー！”

がしやりと軋む音をあげ、最後の一匹が地に墜ちると同時に勝利の雄たけびが轟く。

無意識にその太い首にしがみついていた自分も、急に体の力が抜けて安堵のため息が漏れた。

……た、助かった。

安心感に満たされたためか、頬の切り傷が熱を帯びて痛みを訴えかけてくる。

それを意図的に無視し、既に魔力残滓となって消滅しつつある金属の鳥だったものに視線を落とした。

ステュムパリデスの鳥。軍神アレスのペットとして知られているとか。

古代ギリシャ神話の中に登場する怪鳥の名前であり、ステュムパロスという鳥に住むことからその名がつけられたらしい。

伝承の姿は、青銅の翼で飛行する鳥の群れ。

誰に教えられたものだったか。記憶の一局から無我夢中で叫んだ名前だったが、改めて考えると見事に合致している。

偶然か。それとも――

“■■■■ー”

咆哮に意識を引き戻された。

肌をびりびりと波打つ、これまで以上に膨れ上がった殺気。

肺を直接握られたような重圧に、思わず息が苦しくなる。

視線を上げる。気付けば、あれほど遠いと思っていた巨城が、既に見上げるくらいに接近していた。

そして、近づいて分かったことに巨城にも破壊の跡が目立った。あの城でヘラクレスはアーチャーと戦い、そして吹き飛ばされてきたのかもしれない。

つまり、目標はあの城内に潜んでいる確率が高い。

……

邂逅は近い。正体不明の弓兵の放つ殺気が、これまで以上に動悸を乱してくることが何よりの証。

ヘラクレスが、肩に乗せている自分へと目を向ける。巖のような顔には、理性がないために怯えや恐怖はない。

仮に理性があつたとして、彼くらいになればこの程度の苦境など日常茶飯事だったのだろう。

いつか余裕ができれば、きちんとした理性ある彼と話してみたいものだ。

余談はここまで。このまま棒立ちしては、射抜いてくださいと宣言しているに等しい。

覚悟を決め、すぐ横にある顔に語りかけた。

――いこう。

返事はない。

代わりに聴こえたのは、足元に散らばった青銅の欠片を踏みつづす足音だった。

◇

存外、すんなりと城の中に入ることができた。

というのも、クレーターだらけの庭園を越えた先。豪華な大扉が解放されていたからだ。

漂う圧迫感からか、開け放たれた大扉が、怪物がこちらを呑み込まんと大口を開けているのではないかという錯覚すら覚えさせる。

だからといって、ここで引き返す選択肢などない。
……。

粘り気のある生唾を飲み込む。

怪物の口へと飛び込み、かつては瀟洒を誇っていたであろう大廊下を進んでいく。

現在はヘラクレスから降り、先行して進む彼がカバーできる距離を保っていた。というのも城内に侵入してから、アーチャーによる苛烈な攻撃が静まったのだ。

あれほどの威力を生み出す射撃だが、遮蔽物の多い建物内では流石に分が悪いと見たようだ。

しかし、城内に充満する吐き気を催すような殺気はまるで薄まらない。狙撃ポイントを変えるために、ここを離れるようなことはしないのか。

……。

怒涛の連撃が降り止み、一息つけるようになったところで改めて思い出す。

想起するのは、青銅の身体を持った怪鳥。

射程、速度、連射、破壊力。規格外ではあるものの、極論を言えば「矢」でしかなかっただけの射撃と、あの怪鳥たちの顕現は明らかに違っていた。

スキル、あるいは宝具による効果と考えるのが妥当か。

そして、青銅の鳥というフレーズで真つ先に合致するものが一つ。

——ステュムパリデスの鳥。

もう一度、怪鳥の名前を思い出す。

ステュムパリデスの鳥に関係してくる英霊は、伝承に残されてる限りただの一人しかない。

その一人こそがヘラクレス。彼が成し遂げたという前人未到の試練、十二の難行の一つとして含まれているのだ。

だが、当人は目の前で黙々と突き進んでいる。

そうになると、考えられる可能性は——

……!

空気の密度が変わった。

いつの間にか大廊下を抜け、繋がっていた先の大広間に出ていたようだ。

栄華に満ちていた内装は、やはり破壊の爪痕が生々しく刻まれてひどい有様になってしまっている。

何より、広間に出た瞬間、じつとこちらをねめつける視線が感じられた。

同様の気配をヘラクレスも感じ取っているようで、唸りながら一歩、確かめるような歩行に切り替わっている。

散乱した瓦礫の山。一歩踏み出すたびに、細かく砕け散った塵芥がじやりじやりと感触の悪い音を上げる。

……。

草陰に隠れる獅子が、獲物を狩る時の空気に似た静けさに包まれる。

こういう時に、どうしてか一般人とは足を引っ張るものである。

極限状態の中、必死に周囲ばかりを警戒していたために、下側にまで気が回っていなかった。

ぱきりと、足元にあった瓦礫の欠片を踏み抜く。

一際高い音が大広間に反響した。

“■■■■——!”

静寂を吹き飛ばす地響きが巨城を揺らす。

大広間の最奥。暗闇に閉ざされた空間から、神気を帯びた矢が亜音速で飛来する。

それだけではない。

矢に纏わせていた神気がみるみる膨れ上がっていき、猛々しい牡牛の姿を形成したのだ。

青銅の鳥とは違う、純粹な神気で構成された牡牛の幻影が、矢の速度を上回る勢いで猛進してくる。

直線状にある瓦礫の山を悉く薙ぎ飛ばし、その勢いのままにヘラクレスへと衝突した。

“ ■■■■■ー！ ”

対するヘラクレスは大剣を投げ捨て、突進してきた幻影の双角を素手で掴んで食い止めた。

突進を止められた牡牛は怒りで蹄を激しく鳴らし、ヘラクレスを一刺しにしようと脚に力を込める。

組み合わせ、均衡状態の両者。

だが長くは続かなかつた。少しずつ、牡牛の右脚が地面から浮き始める。

“ ■■■■■ー！ ”

双角を捕らえていた剛腕に血管が浮かび上がった。

身体が傾き始めた幻影が暴れもがくも、それをヘラクレスは力尽くでねじ伏せていく。

怪力に有無を言わせて抵抗していた牡牛の身体が、完全に左に傾けられた。

“ ■■■■■ー！ ”

ハンドルを勢いよく切るようにして、ヘラクレスは幻影を地に屈服させた。

実体ではないはずなのに地響きをたてて、巨大な牡牛が床の上に倒れ伏す。

牡牛の幻影はしばらくその場で足掻く。だが抵抗空しく、その身を形造っていた魔力は霧散していった。

魔力の粒子に還元され、牡牛の姿をした怪物は影も形も残らず消滅した。

……今のは？

たちまち繰り広げられた剛力同士の激突。

迫力に吞まれていた意識を取り戻し、ようやく言葉をひねり出す。

脳裏には、城外の森で強襲をかけてきた青銅の怪鳥がよぎっていた。

同じく矢を媒介としていたあたり、仕組みが一緒であることは間違いない。

真新しくできたクレーターを見下ろして、何気ない気持ちで視線を最奥に広がる闇に移す。

瞬間、身体が凍り付いた。

闇の中から、こちらを覗き込む影がいた。

黙し、闇と同化したように、いつの間にか男の姿が出現していた。

“ ■■■ ツ ”

鉛色の巨人が、放り投げた大剣を回収する。その間、彼の視線は闇より這い出た男から片時も離されなかった。

男は、おおよそ二メートルはあるかという長身の巨軀だった。

赤黒い肌の表面を、白い染料か何かで紋様を刻んでおり、一目見て常人とはかけ離れた存在だと理解させられる。

背丈の割に削げ落ちた筋肉も合わさって、冥界を彷徨う幽鬼を連想させた。

表情はうかがえない。というより、頭頂部から獣の皮をなめした布をかけており、全面と後面に被さって顔そのものが隠されているのだ。

木製の大弓を携えた、異様な風貌のアーチャー。男の放つ禍々しい瘴気が広間を侵食していく。

言葉が出てこない。

アーチャーの異様な迫力に、ただただ圧倒されてしまった。

天地がひっくり返っても、自分は決してあの男には勝てない。生命

としての格が違いすぎる。

この場にヘラクレスが同伴していなければ、瞬く間に己の心臓は鼓動を止めていただろう。

ひたひたと足音を鳴らしていたアーチャーが、崩れた階段で足を止める。

階段の上からこちらを睥睨し、男は布の奥でふんと鼻を鳴らした。

“■■■■！”

爆音、閃光。

自分が知覚できる許容量を超えた何かが起こった、としか思考が追いつかない。

幾度となく繰り返された狙撃が、またしても自分を貫こうとした。

いつの間にか大弓を構えていたアーチャーと、大剣を振りぬいたヘラクレスを見て、そうだろうと推測することしか自分にはできなかった。

“■■■■■■——！！”

広間全体を揺るがす咆哮。

自分の指示がなくとも、ヘラクレスは今にも起爆しそうな爆破物のようにすぐにとびかかるだろう。

鼓膜を振るわせる咆哮の前に、アーチャーは動じない。

否。布越しに、顔のないアーチャーの感情が——胃液が込み上げてきそうになるくらい濃厚な「負」の感情が、これでもかと思えるほどに伝わってくる。

初めて、男が口を開いた。

「——醜い」

か細く、かすれた低い声。

軽蔑するかのように、男は短く吐き捨てた。

「暴君共に隷属した肩書きでは飽き足らず、理性を捨ててついにには獣に身を墮とすか。不快、不愉快だ。貴様という概念が存在すること自体、背を毒虫が這い回るよりもおぞましい」

そういつて、アーチャーは冷淡に切り捨てる。

だがその手は、隠し切れない激憤で大弓を壊しかねないくらいに握

りしめられていた。

アーチャーの言葉に狂戦士バーサーカーは獣のように唸る。

布に覆われたアーチャーの頭が、ヘラクレスから地面に転がった青銅の矢に移った。

「やはり、貴様には効かぬ代物か」

賞賛ではない。それは侮蔑だった。

わかり切っていたことを再確認したように、消え入りそうな声でアーチャーは言葉を続ける。

「それもそうだ。ステュムパリデスの鳥も、ミノスの牡牛も、貴様は既に突破している」

認めたくない事実とばかりに、アーチャーは最大限の嫌悪をヘラクレスに向ける。

それよりも、アーチャーが出した名前に意識がひかれていた。

ステュムパリデスの鳥に続いて、ミノスの牡牛。

ヘラクレスの代名詞である『十二の試練』で課せられた難題。

そう——ヘラクレスしか成し遂げられなかった栄光なのだ。

その難行を模した技を行使する謎のアーチャー。

そんな、と心臓の鼓動が高く波打った。

頭が真っ白になる。アーチャーへの恐怖に、ではない。

辿り着いてしまった真相が、あまりにも惨たらしい現実ではないかという絶望からである。

——あなたは。

震える唇で、アーチャーに問いかけた。

初めて、やせぎすの大男は視線をこちらに投げる。

「——
」
あなたは、もしかして——

「黙れ」

続く言葉は、男の一言に絶たれる。

広間の空気が目に見えて凍り付いた。

男が発していた憎悪がみるみる増大し、広間中に拡散していく。空気が濃く、重く、コールドタールのようにねばねばと皮膚にまといつく。

皮布の奥に潜む視線が、釘で縫い付けられたように自分に注がれる。

蛇に睨まれた蛙、どころではない。獅子に喉元に噛みつかれた野ウサギのような、絶対の「死」で心が支配されそうになった。

怨讐を振り撒き、男がぽつぽつと言葉を続ける。

「我が前で、あの神に成り下がった愚者の忌み名を口にするな」

冷淡に、男は憤怒をぶちまけた。全身の白い紋様が蟲のようにざわめき、男の肌と同じ赤黒い影がわなわなと蠢く。

手にした弓が構えられ、機械的な動作で弦に矢が添えられた。

矢先は、自分の胸。

“■■■■■■ー”

乾いた音をたてて、男の手から矢が射出された。

何度も襲来した死の点は、しかし同じようにヘラクレスに弾き飛ばされる。

だが、布の隙間から垣間見えた男の口元は、邪悪に歪んでいた。

「そうだ。それこそが貴様の愚かさよ」

弾かれることを厭わず、男は立て続けに矢を放つ。

大英雄もまた、狂気に墜ちたとは思えない反射神経で打ち落としていく。

「英雄と担ぎ上げられ、貴様は人間を超越した。災厄と混乱しかもたらさない無能共に組入りし、貴様は地上の衣を脱ぎ捨てた」

撃ち、

弾かれ、

撃ち、

弾かれ、

撃ち、

弾かれ、

終わりの見えない攻防。ピッチングマシンから投げられる球を永遠に撃ち続けるよう。

だが男はピッチングマシンではなく、投げられる球も弾くのがやつと。

射撃が、だんだんと威力を増していく。

「故に貴様は押し込めた。人の性を、人の業を」

より速く、より重い一撃がヘラクレスを襲う。

少しずつ、巨体が僅かに後退し始めた。

「見よ。貴様はまだ人を守る。それは何からだ？ かつて、貴様は何から人を守っていた？」

男の矢が纏っていた神気は、今や別のものへと変貌していた。

泥のように粘っこい、濃い澱みの魔力。見るだけで吐き気を催しそうな魔力が、ヘラクレスを通じて自分の肉体にも僅かに流れ込んだ。

途端、胸やけよりもひどい悪寒が、全身を蝕んだ。

—— ツツ?!

めまいがする。頭が重い。胸の奥が燃えるように熱い。

何だこれは。こんなものが、この世に存在しているのか。

こんな魔力を纏い続ける男は、その身をどれほどの憎悪に墮として
いるのだ。

男の魔力がさらに噴き出す。

「それすらも忘れた神の傀儡が、英雄として讃えられるなど吐き気が
する！」

激高、渾身の一射が放たれた。

同じようにヘラクレスが受け止めるも、桁違いの威力に三百キロを
超える巨体が大きく後退する。

“ ■■■ ツッ! ”

白い息を蒸気のように吐き出し、ヘラクレスが呼吸を整える。
冷めた目で、男は見下ろしていた。

「足掻くか。だが想定内だ。貴様に相応しい末路を用意してある」

仁王立ちで弓を放っていた男の体勢が脱力した。

憤りを立ち昇らせる闘気とは裏腹に、余分な力の抜けた自然体に近
い構えをとる。

「貴様は——貴様自身の栄光に沈む。繰り返し、それだけだ」

男が矢筒から、一本の矢を取り出す。

原因は、もはや言うまでもない。

男が番えた一本の矢。

鏃から漏れ出す瘴気に、肉体が反応したのだ。

……ッ！

彼の言葉をそのまま信じるならば、あの矢に秘められた能力は――

毒。

それも、ギリシャ最強のヘラクレスや、彼の師と言われる人物を屠ったという最大最悪の猛毒。

――ヒュドラの、毒!?

ギリシャに登場する、九つの頭を持った毒の蛇。その蛇が内包する、圧倒的な致死性を誇る猛毒。

男が彼であるならば、鏃に塗られたものはそれしかない。

……ッ！

肉体の悲鳴が次第に大きくなっていく。

あれが存在する空間と同じ空気を吸っているだけで、体の内側から炙られる痛みが伝達されていく。

ヘラクレスが警戒するのも無理はない。

これだけ距離が空いていて、焼けるような痛みが全身を駆けずりまわっているのだ。

もし、あれを直接体内に打ち込まれれば――想像する過程で死んでしまいそうになる。

硬直していた巨人が吼えた。

“■■■■ッ!!”

床を蹴り、大型トラックよりもすさまじい迫力で巨漢が激震していき。

自分という枷を降ろしたヘラクレスは、とてつもなく速かった。

ひたすらに、真つすぐに、構えたままの男へ爆進する。

彼のスキル『心眼（偽）』であれば、初撃は躲せると踏んでの突撃だろう。

安心感から、つい見落としていた。

向けられていた矢先は、ヘラクレスが動いた今も

全く動いていなかったことに。

ニイ、と男の唇が歪に吊り上がった。

「——濁った瞳で見るといい。地上の衣を捨てさせた毒牙が、再び人を奪う様を」

ぱすん、と乾燥した音が小さく鳴った。

あらゆる生命を悶死させる毒が凝縮され、一点の絶対な「死」となつて空を切り裂く。

大剣を構えるヘラクレス。

さながら狡猾な蛇のように、必殺の一撃をもって大英雄に毒牙を剥き——。

——牙が、巨体の横をすり抜けていった。

“ ■■■ ツ!! ”

——えっ？

「死」。自分でも視認できるくらい、それは肉薄していた。

振り返るヘラクレス。腕を伸ばして掴もうとしたが、掴んだものは空だった。

音もなく「死」が運ばれてくる。世界の時間がやけに遅く感じる。

思えば最初から不思議だったのだ。

男は、最初から自分だけを狙っていた。ヘラクレスという存在を憎んでいるにも関わらずだ。

マスターである自分を消せば、間接的にヘラクレスを消滅させられるから、と今まで思い込んでいたが、違った。

愉悦に笑う男の顔を見てようやく理解できた。

男は——ヘラクレスから全てを奪ったうえで、彼を抹消するつもりだったのだ。

“ ■■■ ! ”

大英雄が叫ぶ。

声にならない音に込められた意味は、もしかしたら「避ける」と言ってくれたのか。

けれど現実。どうあがいても躲せない距離まで、毒矢は接近していた。

……ああ、死ぬのかな。

結局、ここがどこなのか分からないまま、あの悲しい男に何も言えないまま自分は死んでいくのか。

悔しい。他でもない、自分の非力さに。

脳裏に、自分を先輩と慕ってくれる影が思い浮かぶ。

“——先輩！”

彼女の知らないところで、自分はヒュドラの毒に侵されて死ぬ。

いや、あの威力であれば、当たるだけで身体が消し飛び、痛覚も何も残らないだろう。

それはそれで、最期に与えられた慈悲なのかもしれない。

逃れられない「死」。思わず、まぶたを閉じてしまう。

矢が刺さる音が、大広間に反響した。

——？

痛みはなかった。

本当に痛覚ごと消し飛んでしまったのか。だとすれば、楽に逝けたということか。

しかし、あの世にしては空気が悪いままだ。もしや、ここは地獄だろうか。

「いえ、ここは地獄ではありませんよ」

唐突に、若い男の声が鼓膜をくすぐった。

狂気の咆哮でも、怨嗟に埋もれた呻きでもない。まるで草原に吹く風のような、爽やかで清廉な響きだった。

閉じたまぶたを開く。胸元に視線を落としてみると、あるはずの毒矢は刺さっていないかった。

さらに視線を下に向けてみる。そこで、己の生命を蝕んでいたはずの矢が足元に転がっていることに気付いた。

それも、箆の部分を別の矢で射抜かれたように折られた状態で。

「——なぜ、貴様がここにいる」

「負」以外の感情を根こそぎ奪われたような男が、はじめて驚愕を口にした。

ヘラクレスも同じく、虚を突かれたように静止したまま立ち尽くしている。

問われた言葉に、入口の方向から青年の声が届いた。

「決まっているでしょう」

かつん、と蹄の硬い足音が聴こえる。

「苦しむ弟子の姿があれば、導いてあげるのが教師の役目です。違いますか？」

言つて姿を見せた人影は、人影をしていなかった。

優しげな表情を浮かべて現れたのは一人の青年。対して下半身は、雄々しく力強い馬の下半身をしていた。

一言で言うならば、ケンタウロス。

手にした弓も合わさり、まるで「いて座」が具現化したような男。当然だ。彼はまさしく、「いて座」そのものなのだから。

——ケイローンさん！

自然と呼び掛けてしまった青年——ケイローンが、こちらを見て柔らかに微笑んだ。

「今まで、よく頑張りました」

馬脚を鳴らし、ケイローンが駆け寄ってくる。

そして、教え子を見守る教師のような表情で、そっと自分の頭に手を添えた。

「もう、大丈夫です」

かけられた一言。

それだけで、張り詰めた緊張の糸が一気に緩んだ。いや、張り詰めすぎて切れかけていた糸が、危うく切れずに済んだ。

絶え間なく纏わりついてきた「死」が離れたような開放感。気が付けば、腰が抜けてその場に座り込んでいた。

もう少し気を抜けば、意識を手放してしまいそうなほど身体が疲弊している。

気絶を提案する脳に反対し、決して気を失わないように歯を食いしばった。

自分の頭から手を放し、ケイローンが改めて男に向き直る。

「構えは上々、ですが弓速にあそびを持たせ過ぎです。あれでは落とすしてくれと言っているようなものです」

「……私の矢を撃ちおとせるものなど、貴様ぐらいだろう」

「そうでもありませんよ。今のあなたの矢は、獲物をいたぶって愉しむ獣の爪に等しい。で、あるならば、私でなくとも落とせるものはいますとも」

轟、と殺気が爆発した。

男の表面に刻まれた白の紋様が、苦痛にも代える怨霊のように蠢く。

「これは私の悲願だ。貴様は、弟子の願いが成就する様を見届けるものだろう」

「その通りです。貴方も立派な教え子だ、そこに変わりはない。私には、貴方を討つ資格などありません」

「……………」

ケイローンの返答に、男は閉口する。

「これはあくまで、貴方の問題。どちらが正しいのか、それは私が決めるのではなく、貴方が決めること。私はただ、そこに余計なものを混ぜない、向かわせないための弁の役割をするだけです」

ちらりとこちらに視線を下ろし、ケイローンは続けた。

ふん、と男は短く鼻を鳴らす。

そのまま、だらりと下げていた腕を持ち上げ、再び射撃体勢に入る。狙いは自分ではなく、ヘラクレス。

「ヘラクレス」

ケイローンが一声をかけると、狂戦士は瞳だけで反応する。

「見ての通り、マスターは私に任せなさい。そして、答えを見つけてきなさい。あれもまた、貴方の解答の一つなのですから」

……………ニイツ。

岩よりも固い巨人の口元が吊り上がった。

狂気による破壊衝動からではない。本来の理性、高潔な精神と謳われる英雄の笑みだった。

それも一瞬。表情は狂化に侵され、野獣のような咆哮をあげる。爆進が再開される。一瞬で詰められる距離。弓兵アーチャーとしてなら、致命的な間合い。

それでも、男は全くの焦りを見せなかった。

「我は貴様という存在忌み名を消し去るもの。貴様の中の影法師。思い出せ、取り繕うな。貴様は、あつてならないものだ」

弓を握る力が目に見えて強くなる。

今まで一本ずつ番えていた矢。それを、男は九本同時に番えた。

男の魔力が急速に高まっていく。これまでは前座だと分からせるような、圧倒的な魔力の上昇量。

間違いない。男は宝具を使用するのだ。

“ ■■■■■ー！ ”

同じくして、怒号をあげたヘラクレスの腕がぶれた。

一本の大剣が、一瞬にして九つに分かれて見えるほど高速の一振り。

九つの斬撃が、まるで一つに重なっていくように唸りを上げる。その剣先が、至近距離にまで接近した男めがけて振るわれる。

刹那。

ナインライブズ
射殺す百頭！！

■■■■■！！

◇

目が覚めた後、そこはいつもの天井だった。

跳び起き、軽く身支度を済ませてから、急いでヘラクレスとケイローンを探す。

ほどなく、ケイローンはすぐに見つかった。

説明を求めると彼はすんなりと承諾し、事の顛末について語ってくれた。

「あそこは、ヘラクレスの“精神世界”です」

「はい。どこで見たのまではともかく、あの森も、あの巨城も、ヘラクレスの記憶にあったもの。肝心の本人が狂化スキルで喋れなかったために、最後までそれが分からなかったのも無理はありません」

「そしてあの男については——既に、マスターも察しているとは思いますが」

「そうです。彼は、ヘラクレスが僅かに備えていた別側面^{オルタナティブ}」

「いずれかの世界で、何らかの方法で、彼の在り方が捻じ曲げられたのでしょうか。彼の精神を歪めるとは、いかほどの外法を用いれば……話が逸れましたね」

「そうして、復讐者^{アヴェンジャー}に歪曲された彼という存在は、そのままヘラクレスという英雄の一部として刻み込まれる」

「未だ人理が不安定な現状。ふとしたきっかけがあつたのか、ヘラクレスの中に潜んでいた彼が突然暴走してしまった。そして、ヘラクレスが精神力でそれを抑え込んでいたところに、眠りについていたマスターの精神が魔力経路^{パス}を通じて迷い込んでしまった。これが事の顛末です」

「え？ 私がヘラクレスの“精神世界”に來られた理由ですか？」

「そこは、あの夢魔がいたことが幸いでしたね。彼の協力と、私自身『精神干渉』のスキルをとっさに習得したこともあって、無事に彼の“精神世界”に入ることができました。あとであの夢魔から、何を要求されるのか分かったものではありませんが」

「……ヘラクレスは大丈夫か、ですか？」

「はい。今は元通り……と言つていいのかわかりませんが、いつものようにバーサーカークラスの彼です。今は精神修行が足りないと思つて、オケアノスに放り投げて泳がせている最中です。あと六時間すれば戻ってきますよ」

「……あの男はなんと呼ばばよかつたか、ですか」

「そうですね。彼は神々を嫌悪し、憎悪し、復讐を謳っていました。自らの名前さえ……いえ、それこそがもつとも消し去りたかつた忌み名だったのでしよう」

「なので、彼のことはこう呼んであげてください。『神の栄光』^{ヘラクレス}という名を持つ前の、彼が人間だった時代の名前」

「——アルケイデス、と」

クラス：アヴェンジャー／アーチャー

真名：アルケイデス

キャラクター紹介

かつて、英雄は「神の栄光」という名を与えられ、最後には人の肉体を脱いで神の座へと召し上げられた。

だが、そこに至るまでに英雄は人間に触れすぎた。超人は、常人には真に理解されるものではなかった。

また、神々の気まぐれで己が運命を狂わされ続けてきた。くだらぬ神の感情で、時には妻子さえ失った。

いつしか、英雄の内側には極少なながらある感情が宿る。

どういう因果か、高潔な武人である彼の魂——在り方を根本から歪曲することができたなら、かの英雄は「復讐者」としての一面をさらけ出すだろう。

傲慢なる神々に復讐するために。そして「神の栄光」と名付けられた名を消し去るために。

パラメーター

筋力：A

耐久：B

敏捷：A

魔力：A

幸運：B

宝具：A++

小見出しマテリアル

神様絶対殺すマン。異教の神？よし殺そう。

とりあえず神性もってる奴はだいたい敵。目安としてはBランク以上がねらい目だとか。

魔法少女？関係ない、とばかりに子どもも平気で手をかけるような外道っぷりだが、一応理由なしで襲うことはしない。

子供を襲うという考えを抱くこと自体、彼とヘラクレスの違いを感じさせる。

ひどくやさぐれてしまった彼ではあるが、完全に変わってしまったわけではない。

武人としての精神は若干残っており、強さを認めた相手には敬意をもって殲滅にかかる。

彼がこんな感じになってしまった理由の一つである最弱英霊曰く「いやいやそこまで責任もてませんから。人の排出物で勝手に遊んでるだけっしょ」とのこと。